

秋田県文化財調査報告書第78集

# 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ

——居熊井遺跡・湯瀬館遺跡・大地平遺跡・上山田遺跡・堂の上遺跡・上葛岡Ⅲ遺跡——

1981・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

# 序

十和田湖の南玄関口である鹿角市に東北縦貫自動車道の建設計画が立てられ、現在工事進行中であります。

この道路通過地（八幡平・十和田錦木間）に埋蔵文化財包蔵地が32ヶ所あることが判明し、秋田県教育委員会は日本道路公団の委託を受け、昭和54年度から発掘調査を実施しております。昭和54年度の発掘調査は土地問題等でスムーズに進展できなかった面もありましたが、同年度実施した6遺跡の発掘調査は無事終了し、報告書として刊行することとなりました。

本報告書は今まで不明であった鹿角地方の歴史解明に役立つものと考えられ、広く永く活用されることを望むものであります。

最後に発掘調査から報告書刊行までに顧問、専門指導員、日本道路公団、鹿角市、同教育委員会ははじめ関係各位から多大の協力を得ましたことについて心から感謝の意を表すものであります。

昭和56年3月

秋田県教育委員会

教育長 畠山芳郎



# 例

# 言

1. 本書は、東北縦貫自動車道路線内に位置する遺跡の、昭和54年度発掘調査報告書である。
2. 遺跡については、現地説明会など機会を見て発表してきたが、本報告書を正式のものとする。
3. 発掘調査遺跡の記載は、岩手県境から付した遺跡番号順による。
4. 報告遺跡の発掘調査においては、次の各氏から助言、ご教示をえた。

東京都立大学助教授	町田洋
岩手県教育庁文化課主任文化財主査	島千秋
岩手県埋蔵文化財センター調査課長	瀬川司男
岩手県埋蔵文化財センター技師	本沢慎輔
岩手県埋蔵文化財センター技師	高橋文雄
岩手県埋蔵文化財センター技師	四ッ井謙吉
秋田県鹿角市立花輪小学校長	安村二郎
秋田県立秋田高等学校教諭	塩谷順耳
秋田県立十和田高等学校教諭	大里勝蔵
秋田県鹿角市大日堂別当	安倍良行

5. 本書 II の 1 「地形・地質」は、秋田県立大館工業高等学校教諭藤本幸雄氏の執筆によるものである。
6. 古陶磁器類の鑑定は、金沢大学法文学部助教授佐々木達夫氏によるものである。
7. 石器の石質鑑定は、秋田県立博物館学芸主事渡部 晟氏によるものである。
8. <sup>14</sup>C年代測定は、日本アイソトープ協会にお願いした。
9. 報告書に使用した地形図は、建設省国土地理院発行5万分の1、2万5千分の1、日本道路公団作成の千分の1の地形図である。
10. 遺跡の土層、遺物の色調記載は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修「新版 標準土色帖」を使用した。
11. 遺物の細部観察には、オリンパス二眼筒式実体顕微鏡VMを使用した。

12. 発掘調査は7遺跡であったが、歌内遺跡は二カ年継続調査のため、成果は来年度刊行となる。

13. 本書は調査員、補佐員が協議して執筆担当者を決め、作成した。

I、IIの2 岩見 誠夫

居熊井遺跡 小玉 準、高橋 忠彦、柴田陽一郎、桜田 隆、小林 克

藤井 安正、山崎 文幸

湯瀬館遺跡 桜田 隆、関 直、山崎 文幸

上山田遺跡 岩見 誠夫、栗沢 光男

大地平遺跡 小玉 準、小林 克

堂の上遺跡 高橋 忠彦、藤井 安正

上葛岡Ⅲ遺跡 柴田陽一郎、栗沢 光男

なお、遺物の実測、採拓、トレース、整理には、上記執筆者のほかに、次の者があたった。

三ヶ田俊明、樽沢 昌孝、畠山 義孝、松岡 忠仁、小田島幸二、佐藤 幸夫

児玉 佳孝、豊田 憲雄、佐藤 順子、金沢万里子、忍 麗子、初沢 永子

川又 悦子、田中 良子、高橋 祐子、苗代沢ノブ、安村 英子、柳沢 照子

# 目 次

## 序 例 言

I	はじめに	1
1	発掘調査に至るまでの経過	1
2	発掘調査経過	2
3	調査の組織と構成	3
4	調査の方法	5
II	遺跡の立地と環境	7
1	地形・地質	7
2	環境と周辺の遺跡	13

## 居熊井遺跡

1	遺跡の概観	23
2	調査の方法	23
3	調査経過	23
4	遺跡の層位	26
5	遺構と遺物	27
6	まとめ	100

## 湯瀬館遺跡

1	遺跡の概観	141
2	調査の方法	147
3	調査経過	150
4	遺構と遺物	152
5	まとめ	170
	付編	171



## 上山田遺跡

1	遺跡の概観	187
2	調査の方法	187
3	調査経過	187
4	遺跡の層位	187
5	遺構と遺物	189
6	まとめ	191

## 大地平遺跡

1	遺跡の概観	195
2	調査の方法	195
3	調査経過	195
4	遺跡の層位	195
5	遺構と遺物	197
6	まとめ	207

## 堂の上遺跡

1	遺跡の概観	215
2	調査の方法	215
3	調査経過	215
4	遺跡の層位	215
5	遺構と遺物	215
6	まとめ	221

## 上葛岡Ⅲ遺跡

1	遺跡の概観	225
2	調査の方法	225
3	調査経過	225
4	遺跡の層位	227
5	遺構と遺物	227
6	まとめ	228

# 挿 図 目 次

第1図	地形分類図	8
第2図	露頭柱状図	10
第3図	重鉱物組成	12
第4図	周辺遺跡分布図	14
第5図	秋田県鹿角市における東北縦貫自動車道路線上の遺跡分布図	17・18
第6図	グリッド配置図	24
第7図	遺構配置図	25
第8図	土層柱状図	26
第9図	石器形態分類	29
第10図	石器計測規準	30
第11図	S I 001住居跡	32
第12図	S I 001住居跡炉	33
第13図	サブトレンチ設定状況図	34
第14図	遺物出土状況図	35
第15図	遺物接合状況図	36
第16図	S I 001住居跡出土土器（1）	38
第17図	S I 001住居跡出土土器（2）	39
第18図	S I 001住居跡出土石器	41
第19図	S K 001・002土壌	42
第20図	S K 003・004土壌	43
第21図	S K 005・006土壌	44
第22図	S K 007土壌	45
第23図	土壌出土土器（1）	46
第24図	土壌出土土器（2）	47
第25図	土壌出土石器	48
第26図	S X（U）001土器埋設遺構	49
第27図	埋設土器	49
第28図	S X（R）捨場土層断面図	52
第29図	S X（R）001捨場遺物水平分布図	53・54
第30図	S X（R）捨場遺物垂直分布図（1）	55

第31図	S X ( R ) 001	捨場遺物垂直分布図 ( 2 )	56
第32図	S X ( R ) 001	捨場遺物出土状態	57・58
第33図	S X ( R ) 001	捨場精粗別土器破片分布図	59
第34図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 1 )	66
第35図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 2 )	67
第36図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 3 )	68
第37図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 4 )	69
第38図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 5 )	70
第39図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 6 )	71
第40図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 7 )	72
第41図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 8 )	73
第42図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 9 )	74
第43図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 10 )	75
第44図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 11 )	76
第45図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 12 )	77
第46図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 13 )	78
第47図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 14 )	79
第48図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 15 )	80
第49図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 16 )	81
第50図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 17 )	82
第51図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 18 )	83
第52図	S X ( R ) 001	捨場出土土器 ( 19 )	85
第53図	S X ( R ) 001	捨場出土小形土器及び土製品	85
第54図	S X ( R ) 001	捨場出土石器 ( 1 )	87
第55図	S X ( R ) 001	捨場出土石器 ( 2 )	88
第56図	S X ( R ) 001	捨場出土石器 ( 3 )	89
第57図	S X ( R ) 001	捨場出土石器 ( 4 )	90
第58図	S X ( R ) 001	捨場出土石器 ( 5 )	91
第59図		遺構外出土土器 ( 1 )	94
第60図		遺構外出土土器 ( 2 )	95
第61図		遺構外出土土器 ( 3 )	96
第62図		遺構外出土土器 ( 4 )	97



第63図	遺構外出土石器（1）	98
第64図	遺構外出土石器（2）	99
第65図	遺構外出土石器（3）	99
第66図	地形図	143
第67図	グリッド及びトレンチ配置図	149
第68図	遺構配置図（I）	151
第69図	遺構配置図（II）	153
第70図	S B 001実測図	154
第71図	礎石配列建物跡実測図	155
第72図	館コ上面空堀土層断面図	157
第73図	ピット群（S A 001）実測図（I）	158
第74図	ピット群実測図（II）	158
第75図	ピット群実測図（III）	159
第76図	出土土器拓影図	162
第77図	出土陶磁器等実測図	165
第78図	出土金属器実測図	166
第79図	出土銅銭拓影図	167
第80図	出土石製品実測図	168
第81図	グリッド配置図	188
第82図	土層柱状図	189
第83図	土器拓影図	190
第84図	グリッド配置図	196
第85図	土層柱状図	197
第86図	土器拓影図（1）	200
第87図	土器拓影図（2）	201
第88図	土器拓影図（3）	202
第89図	土器実測図（1）	203
第90図	土器実測図（2）	204
第91図	石器実測図（1）	205
第92図	石器実測図（2）	206
第93図	グリッド配置	216
第94図	土層柱状図	217

第95図	土器拓影図	218
第96図	石器実測図	220
第97図	浮石堆積図	222
第98図	グリッド配置図	226
第99図	土層柱状図	227
第100図	土器拓影図	229

## 表 目 次

第1表	重鉾物組成	11
第2表	周辺遺跡一覧	15
第3表	S I 001住居跡出土土器観察表	108
第4表	S K土壇出土土器観察表	110
第5表	S X (R) 001 捨場出土土器(拓影図)観察表	112
第6表	S X (R) 001 捨場出土土器(実測図)観察表	119
第7表	遺構外出土土器観察表	126
第8表	S I 001住居跡出土石器観察表	130
第9表	S K土壇出土石器観察表	131
第10表	S X (R) 001 捨場出土石器観察表	132
第11表	遺構外出土石器観察表	135
第12表	S B 001柱穴計測表	155
第13表	館コ上面空堀土層註記表	156
第14表	ピット群計測表	160
第15表	出土土器観察表	163
第16表	出土金属器一覧表	166
第17表	出土銅銭一覧表	167
第18表	鹿角地方の館の分布一覧表	171
第19表	四氏別の館・所領の分類	176
第20表	「鹿角郡由来記」「鹿角由来集」にみる館主の変遷	176
第21表	「鹿角郡由来記」「鹿角由来集」 「曾我貞光申状」における館主の変遷	177

第22表	「鹿角郡由来記」「鹿角由来集」と 「津軽郡中名字」との相違する事項、一致する事項	177
第23表	鹿角地方の板碑	178
第24表	年表	179
第25表	土器観察表	208
第26表	石器観察表	211
第27表	土器観察表	219
第28表	土器観察表	230

## 図 版 目 次

図版 1	居熊井遺跡遠景	235
図版 2	S I 001住居跡	236
図版 3	S K 001～003土壇	237
図版 4	S K 004・005土壇	238
図版 5	S K 006・007土壇	239
図版 6	S X (U) 001土器埋設遺構	240
図版 7	(上) S X (R) 001捨場サブトレンチ設定状況 (下) S X (R) 001捨場遺物出土状況	241
図版 8	S X (R) 001捨場5-Aグリッド遺物出土状態	242
図版 9	S X (R) 001捨場遺物出土状態	243
図版10	S X (R) 001捨場全景	244
図版11	遺物出土状態	245
図版12	(上) 12-Dグリッド土層断面 (下) 遺跡全景	246
図版13	S I 001住居跡出土土器	247
図版14	土壇出土土器(1)・土器埋設遺構出土土器	248
図版15	土壇出土土器(2)	249
図版16	S X (R) 001捨場出土土器(1)	250
図版17	S X (R) 001捨場出土土器(2)	251
図版18	S X (R) 001捨場出土土器(3)	252
図版19	S X (R) 001捨場出土土器(4)	253



図版20	S X (R) 001 捨場出土土器 (5)	254
図版21	S X (R) 001 捨場出土土器 (6)	255
図版22	S X (R) 001 捨場出土土器 (7)	256
図版23	S X (R) 001 捨場出土土器 (8)	257
図版24	S X (R) 001 捨場出土土器 (9)	258
図版25	S X (R) 001 捨場出土土器 (10)	259
図版26	S X (R) 001 捨場出土土器 (11)	260
図版27	S X (R) 001 捨場出土土器 (12)	261
図版28	S X (R) 001 捨場出土土器 (13)	262
図版29	S X (R) 001 捨場出土土器 (14)	263
図版30	S X (R) 001 捨場出土土器 (15)	264
図版31	S X (R) 001 捨場出土土器 (16)	265
図版32	S X (R) 001 捨場出土土器 (17)	266
図版33	S X (R) 001 捨場出土土器 (18)	267
図版34	S X (R) 001 捨場出土土器 (19)	268
図版35	S X (R) 001 捨場出土土器 (20)	269
図版36	遺構外出土土器 (1)	270
図版37	遺構外出土土器 (2)	271
図版38	遺構外出土土器 (3)	272
図版39	S I 001 住居跡・S K 004, 005 土壙・S X (R) 001 捨場出土石器	273
図版40	S X (R) 001 捨場・遺構外出土石器	274
図版41	遺構外出土石器	275
図版42	湯瀬館遺跡全景	276
図版43	館コ全景 (上) 調査前 (下) 調査終了時	277
図版44	館コ全景	278
図版45	館コ調査風景	279
図版46	館コ下方濠 (上) 北側 (下) 西側	280
図版47	S B 001 各住穴	281
図版48	S B 001 各住穴	282
図版49	上面空堀内 S K (P) 081	283
図版50	礎石配列建物跡	284
図版51	上面空堀土層堆積状態	285

図版52	土器	286
図版53	石製品	287
図版54	金属器・銅銭	288
図版55	(上) 上山田遺跡遠景 (下) 遺跡発掘状況	289
図版56	(上) 遺物出土状態 (下) 土器	290
図版57	(上) 大地平遺跡遠景 (下) 平坦面調査状況	291
図版58	(上) 斜面調査状況 (下) 遺物出土状態	292
図版59	土器 (1)	293
図版60	土器 (2)	294
図版61	土器 (3)	295
図版62	土器 (4) ・石器 (1)	296
図版63	石器 (2)	297
図版64	(上) 堂の上遺跡全景 (下) 浮石層	298
図版65	土器・石器	299
図版66	(上) 上葛岡Ⅲ遺跡全景 (上) 調査前 (下) 調査終了時	300
図版67	土器	301

付 図

S X (R) 001 捨場土器個別接合関係

鹿角地方の館分布図

# I は じ め に

## 1. 発掘調査に至るまで

秋田県の北東部、鹿角市と鹿角郡小坂町を通過する東北縦貫自動車道の建設計画は、昭和40年11月公表の鹿角市・青森市間、同42年11月公表の盛岡市・鹿角市間の基本計画がその魁をなす。次いで昭和43年4月の鹿角市・青森市間約81kmの第2次施行命令、同46年6月の岩手県二戸郡安代町・鹿角市間約37kmの第5次施行命令によって、その通過予定区域が知られ、これを受けて同47年11月27日に、鹿角市十和田錦木・小坂町小坂間の路線発表があって、ようやくその具体的な姿を県民に現わしたのである。

このため、秋田県教育委員会では、文化庁と日本道路公団が交わした覚書に基づき、昭和44年8月、鹿角市十和田地区から鹿角郡小坂町の青森県境まで、幅4km、延長25kmにわたって遺跡の分布調査を行い、67遺跡を確認し、その成果を公表した。<sup>(註1)</sup>昭和48年8月には、鹿角市八幡平、尾去沢、花輪地区で、幅4km、延長20kmの遺跡分布調査と試掘を実施して、46ヶ所の遺跡を確認した。<sup>(註2)</sup>

昭和51年2月12日になると、昭和48年8月実施の鹿角市内遺跡分布調査結果をふまえて、日本道路公団から鹿角市八幡平から同市十和田錦木に到る延長約21.1kmの路線の発表があり、測量が実施されるに及んだ。

秋田県教育委員会では、日本道路公団仙台建設局鹿角工事事務所の依頼により、昭和52年10月にこの路線上の遺跡分布調査を行い、縄文時代17、古代10、中世5の合計32遺跡の存在を確認した。<sup>(註3)</sup>

その後、遺跡の処理や調査方針について、日本道路公団仙台建設局との間に協議が持たれ、最終的に遺跡は記録保存が決定した。昭和54年2月に発掘調査の依頼があり、秋田県教育委員会と日本道路公団仙台建設局との間に、昭和54年度鹿角市八幡平地区10遺跡の発掘調査委託契約が結ばれ、同年4月から調査が実施される運びとなったのである。

註1 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第20集 1970年

註2 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第24集 1972年

註3 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書（八幡平～十和田錦木）』秋田県文化財調査報告書第56集 1978年



## 2. 発掘調査経過

鹿角市八幡平地区における、東北縦貫自動車道路線内の発掘調査は、昭和54年5月11日から同年12月14日まで行われた。発掘調査全般についての経過は、大略下記のとおりである。

4月25日から4日間、調査員、補佐員は鹿角市花輪に止宿し、発掘調査予定10遺跡の現状視察を行う。発掘予定地の山林は伐採されておらず、畑は耕起され上物があり、調査に入れないことが判明。

5月1日発掘調査事務所が花輪字古館に完成し、調査員、補佐員は勤務を開始。5月8日畑上物の解決した居熊井遺跡のグリッド設定をはじめめる。5月10日事務所で補助員と作業員を対象に、発掘作業の内容、手順などの説明会を開く。翌11日湯瀬の居熊井遺跡の発掘作業を開始。発掘調査は遺跡をA・B・C・D4区に大別し、これを4つの調査班が担当。立木、畑上物の解決しない遺跡が多く、年間スケジュールの確立しないままの発掘スタートとなった。発掘作業に従事する者の通勤には、秋北バスを貸切って使用。5月15日鳥山県教育長来所し、事務所の開所式を行う。居熊井遺跡は表土が薄く、出土遺物は縄文土器片、米代川河畔に近いA・B区が密である。

6月に入ると、大地平遺跡と湯瀬館遺跡斜面の立木伐採が開始。6月5日調査員は湯瀬館遺跡を視察し、伐採木の下枝、下草の処理や、遺跡までの通路の開設が必要と判断、翌6日から桜田班の作業員を調査区に入れ、環境整備やグリッド設定にとりかかる。6月19日NHK取材に来跡。21日館上部平坦面の畑地から発掘作業を開始。腰郭確認のため斜面3カ所にもトレンチ設定。館の地山はシラス土壌のため、降雨のたびにトレンチ崩壊がひどい。館上面の畑地から建物の礎石と考えられる川原石を検出、永楽通室の発見もある。居熊井遺跡A・B区で、土器捨場と見られる延長20m、弧状の溝を検出。斜面と溝底に多量の後期土器片が堆積している。6月25日溝の実測も完了し、54日間の発掘調査を終了す。

7月1日大地平遺跡の松林伐採、抜根が完了したので、小玉班が2日から立木下枝の処理と抜根の後始末、11日グリッド設定作業にとりかかり、完了した16日から発掘作業を開始。この遺跡も表土が薄く、礫が多く、発掘用具の損傷が著しい。出土遺物は縄文後期土器、弥生土器片である。

大地平遺跡調査と前後する7月1日に、堂の上遺跡の畑上物の解決がつき、2日高橋班が調査に入る。調査区は遺跡の縁辺に当り、土壌と縄文土器片が出土す。7月16日に発掘作業を完了し、大地平遺跡調査に合流する。

8月27日文化庁阿部義平調査官発掘調査視察。8月29日湯瀬館現地説明会開催、地元の方々

多数参加、8月30日大地平遺跡の発掘調査が完了。

9月1日小玉、高橋班は歌内遺跡調査の準備にとりかかる。歌内遺跡は林道を中軸に南北に広がる遺跡で、本年度の発掘調査は南側約6,000㎡である。収穫の済んだ煙草畑にグリッドを設定し調査に入る。調査区の3分の1に、10月収穫予定の陸稲、11月収穫予定のりんごの樹木と神社、神木が残る。煙草畑は表土が薄く、地山の遺構確認面から平安期の竪穴住居跡の検出が相次ぐ。湯瀬館遺跡では上部平坦面より、館上部を二分する幅9m、深さ5mの空濠が検出される。上山田遺跡については用地の関係で、9月上旬と11月上旬の2次にわたる調査要請が道路公団からあり、岩見、栗沢、山崎が9月5日～14日と11月5日～12日に調査を実施す。遺跡は水田造成のため削平、土層の攪乱がはなはだしく、遺構の検出はない。9月20日から10月25日まで、上葛岡Ⅲ遺跡の煙草畑、小豆畑の収穫が終わったので、柴田班が発掘調査を行う。縄文土器、弥生土器の出土だけで、遺構の検出はない。25日以後30日までは、来年度調査区の試掘を実施す。遺構、遺物なし。

歌内遺跡は11月に入ると陸稲の畑と、果樹部の発掘調査を開始。斜面下部の陸稲の畑は黒色土が厚く、11月20日から1週間、バックホー、キャトラのコンビで、黒色表土除去を行う。11月28日～12月12日まで、来年度発掘調査予定遺跡、駒林、鳥居平、飛鳥平、北の林Ⅰ、同Ⅱ、上葛岡Ⅰ、同Ⅱ遺跡の範囲確認調査を行う。歌内遺跡についての発掘調査は、12月に入っても除雪、シートなどを活用しながら竪穴住居跡の実測を継続し、14日に調査を終了する。

### 3. 調査の組織と構成

遺跡名	居熊井遺跡
遺跡所在地	鹿角市八幡平字居熊井27番地1号他
	湯瀬館遺跡
	秋田県鹿角市八幡平字湯瀬古館62番地他
	上山田遺跡
	秋田県鹿角市八幡平字上山田1番地2号他
	大地平遺跡
	秋田県鹿角市八幡平字大地平9番地1号他
	堂の上遺跡
	秋田県鹿角市八幡平字堂の上37番地2号他

遺跡名	歌内遺跡	
遺跡所在地	秋田県鹿角市八幡平字歌内 上葛岡Ⅲ遺跡 秋田県鹿角市八幡平字上葛岡301番地他	
調査期間	昭和54年5月11日～同年12月14日	
調査対象面積	29.048m <sup>2</sup>	
発掘調査面積	23.110m <sup>2</sup>	
調査主体	秋田県教育委員会	
調査顧問	坪井 清足	奈良国立文化財研究所長
	芹沢 長介	東北大学教授
調査専門指導員	小林 達雄	国学院大学助教授
	林 謙作	北海道大学助教授
	桑原 滋郎	多賀城跡調査研究所第一科長
	藤沼 邦彦	東北歴史資料館考古研究科長
	須藤 隆	東北大学助教授
調査担当者	岩見 誠夫	秋田県教育庁文化課
	桜田 隆	秋田県教育庁文化課
	柴田陽一郎	秋田県教育庁文化課
	小玉 準	秋田県教育庁文化課
	高橋 忠彦	秋田県教育庁文化課
	小林 克	秋田県教育庁文化課
調査補佐員	栗沢 光男、藤井 安正、関 直、山崎 文幸	
調査補助員	三ヶ田俊明、樽沢 昌孝、畠山 義孝、松岡 忠仁、小田島幸二 児玉 佳孝、佐藤 幸夫、豊田 憲雄	
事務補助員	佐藤 順子、金沢万里子	
調査協力機関	鹿角市教育委員会 東北縦貫自動車道対策事務所 鹿角市建設部建設課高速道路対策室	

## 4. 調査の方法

### (1) 発掘区の設定

東北縦貫自動車道の調査では、路線内の遺跡地に5 m×5 mのグリッドを設定して発掘を行う。グリッド設定基準線は、歴史時代の遺跡は方位に合わせ、他は日本道路公団の設置した任意二本の中心杭を結ぶ線を設定基準線とし、路線の進行方向に沿わせる。

### (2) 測量と実測

地形や遺構状況に応じて、遣り方測量、平板測量、航空写真測量の方法をとる。遺構の実測の縮尺は $\frac{1}{20}$ 、遺構配置図は $\frac{1}{200}$ 。竪穴住居跡のカマド、石囲炉などの平面図、断面図、土層断面図は $\frac{1}{10}$ を原則とするが、必要に応じて任意の縮尺も活用する。

### (3) 遺構発掘と遺物のとりあげ

遺構の発掘は4分割法を原則とし、平面、断面、層序、レベル、遺物の実測は県統一のセクショントレスターに記入し、水系高は標高を記入する。

遺物の取りあげは、1点1袋、1括1袋とし、遺跡名、グリッド名、遺物の種類、層位、出土年月日の記入された遺物カードを同封する。

遺構・遺物記号は、平城京発掘調査で実施しているものを参考に定めたものを使用する。

記号	遺構	記号	遺構	記号	遺物	記号	遺構・遺物
SA	柵列・柱列	SK	土 壙	RC	炭 化 物	RW	木・竹製品
SB	建 物 跡	SK(F)	フラスコ状ピット	RM	金 属 製 品	SX(F)	焼土遺構
SC	廊	SK(I)	竪穴状遺構	RN	自 然 遺 物	SX(R)	捨 場
SD	溝・堀・濠	SK(P)	ピ ッ ト	RO	骨 角 製 品	SX(S)	配石 <small>(集石・立石・組立 ストーンサークル)</small>
SE	井 戸 跡	SK(S)	墓	RP	土 製 品	SX(U)	土器埋設遺構
SF	築地・土塁	SK(T)	トラップピット	RQ	石 製 品	RY	そ の 他
SG	苑 池	SL	河 川	RT	貝 製 品		
SH	広 場	SM	道路・橋・階段	RU	人 骨		
SI	住 居 跡	SX	そ の 他	RV	紙・布製品		

#### (4) 写真撮影

実測と同様記録保存の要である写真撮影には、35mm判小型カメラ2台（ニコンFE）と6×9判の大型カメラ（ホースマンプレス）とボラロイドカメラを使用する。

35mm判カメラは、モノクロとカラーリバーサル用に使い分け、大判カメラは特に重要な遺構、遺物の検出記録に、フィルムバックを交換し、モノクロ、カラーの撮影をする。撮影は遺構、出土遺物とも1方向三枚撮影を原則とする。また、ボラロイドカメラを日誌や遺構の検討、打合せに活用する。

#### (5) 遺物整理と実測

- ① 出土遺物は遺物台帳に記入し、写真や実測図とのスムーズな活用をはかる。
- ② 土器の内面実測が必要と思われるものは、4分割方法を取り、左 $\frac{1}{2}$ に外面、右 $\frac{1}{2}$ に内面および断面を記載する。実測図には輪積巻上げ痕、文様、調整痕を主として記載する。
- ③ 大破片の実測は、土器の中心線を算出し180度回転して作図する。
- ④ 破片の拓本は、土器の外面を左に置き、中央に断面、右に内面図を表す方法をとる。
- ⑤ 石器の実測図は、第三投影図法とし、計測の実際については、居熊井遺跡の「遺構と遺物」の項に記載する。

## II 遺跡の立地と還境

### 1. 地形と地質

#### (1) 地形・地質の概要

本地域の地形は大きく見て東西の山地、盆地内の段丘地形、沖積地の三つに区別される。これらについて、秋田県（1973）、内藤（1970）等を参考にして地形と地質の概要をまとめると次のようになる。

山地は東側が800～1,100 mほどの標高で、満壮年期のけわしい地形を示し、特に皮投岳（1122.4 m）、五の宮嶽（1115.0 m）などを中心とした起伏量の大きい山塊が南部に連なり、米代川は先行谷を形成して東西に流れている。

地質は主として新第三紀中新世の火山砕屑岩類からなるが、それらを一貫して石英安山岩や安山岩も分布している。また、谷内付近や湯瀬南方には粘板岩を主とする古生層が露出している。

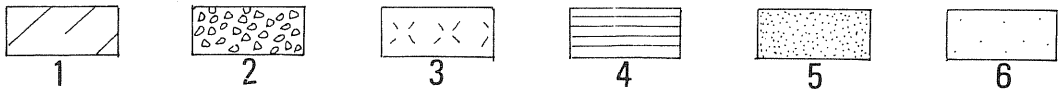
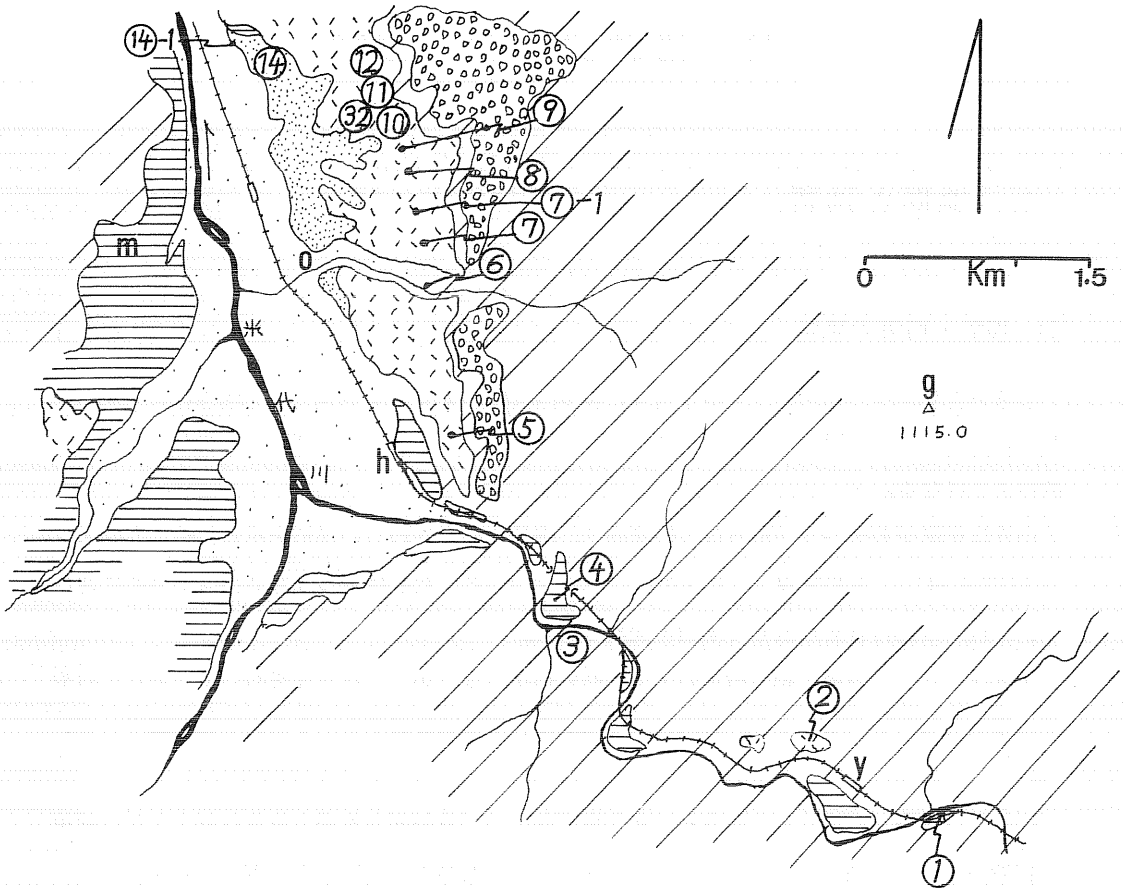
山列はほぼ南北に連なっているが、北北東方向にのびる斜面や水系もみられる。これは新第三紀層の走向に大略一致するほか、貫入岩類の方向や断層系の方向とも一致している。

一方、西側の山地は400～600 mほどの標高で山容も東側ほどのけわしさは見られない。地質は東側山地同様に新第三紀中新世の火山砕屑岩を主とするが、大葛層、大滝層などで砂岩、泥岩など砕屑岩がよく発達している。これらの走行は南北方向のものが多い。

盆地内の段丘地形は4段が識別される。最高位の面は浦志内川や歌内川等が盆地に注ぐ付近に扇状地状にみられる面で、標高330 mから270 mまで外方への傾斜が比較的顕著であり、かなり解析されている。構成層は主として河成の亜角礫～角礫からなり、風化が著しい。これは内藤（1970）の高位段丘に相当する。

次に180～250 m面が分布するが、これは南部で厚い河床堆積物様の礫層をもち、扇状地様の形状を残すものの大里以北では厚い火砕流堆積物におおわれ、火砕流台地としての形態を示している。この面は秋田県（1973）によれば関上面あるいは鳥越面であり、分布は盆地内全域にわたり、湯瀬や田山付近にまで点々と分布している。

3段目、4段目の段丘は内藤（1970）で低位段丘群と一括されたものである。前者は主として米代川左岸に沿い尾去から松館、荒町にかけて広く分布し、標高は160～170 mで夜明島川、



1. 山地・斜面 2. 高位段丘 3. 中位段丘で火山碎屑物を構成層とする 4. 松館面  
 5. 大里面 6. 沖積低地 h. 八幡平 m. 松館 o. 大里 y. 湯瀬 g. 五の宮嶽

第1図 地形分類図

黒沢川等による扇状地の解析された段丘面と考えられる。これを松館面と呼ぶ。

次に後者は米代川右岩沿いに大里付近まで分布する面で標高が150～155mと低平であり、構成層も上部は田泥質の砂礫層を主としている。しかし、下部の成層した、固結度のよい円磨礫を含む砂礫粘土層は、上部の堆積物と一括するには問題があり、段丘基盤の更新統の一部である可能性が強い。この面を大里面と呼ぶ。

沖積地は主として砂礫層よりなる。

ところで、この地域の第四紀地質と地形を特徴づけるものに花輪断層と十和田火山起源の火

山砕屑物層があげられる。

前者はほぼ直線的に米代川沿いに北上しており、東西における山地の起伏量、山容のちがいや段丘の非対称的分布等は東側山地を含む断層の東部地塊が第四紀を通じて上昇傾向が強かったことを物語っており、注目に値する。一方後者については内藤（1966，1970）、中川ほか（1972）等によりくわしく知られており、古い方から高市軽石質火山灰層（25,850 ± 1,360）、鳥越軽石質火山灰層（12,000 ± 250）申ヶ野軽石質火山灰層（8,600 ± 250）、大湯軽石質火山礫層（3,680 ± 130）、毛馬内軽石質火山灰層（1,280 ± 90）に区分されている。このうち大湯軽石質火山礫層と毛馬内軽石質火山灰層については同一の火山活動にともなう降下堆積物、火砕流堆積物であることが知られている（大池，1974；藤本，1980）。

## (2) 発掘地点とその地質

地形分類と発掘位置を第1図に示す。この図は、段丘堆積物が地形面と対応して異なることから第四紀層に関する地質図という意味あいもっている。前述の地質の概要に関連させれば、①、④は松館面の砂礫層上にあり、②⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬等はいずれも中位段丘の火砕流堆積物の上にある。また、⑭は大里面の田泥質砂礫層の中にある。次に各地点ごとに、発掘で得られた露頭断面を中心に地質を記述するが、火山灰層の対比は後述の結果によった。

①：褐灰色の砂質土の中に10cm～30cmの垂円～垂角礫を含む礫層で厚さは4 mほどである。

②：乳灰色の厚い軽石質火山灰層からなり、地形面を作る。これは鳥越軽石質火山灰層とみられる。

④：上部から茶黒褐色の腐植質土が約25～30cmほどあり、その下に凹所で厚みをます大湯軽石質火山灰層が1～10cmで分布し、それより下位は10～20cmの垂角礫を多く含む茶黒褐色の砂礫層になる。この砂礫層の厚さは7 m以上はありそうである。

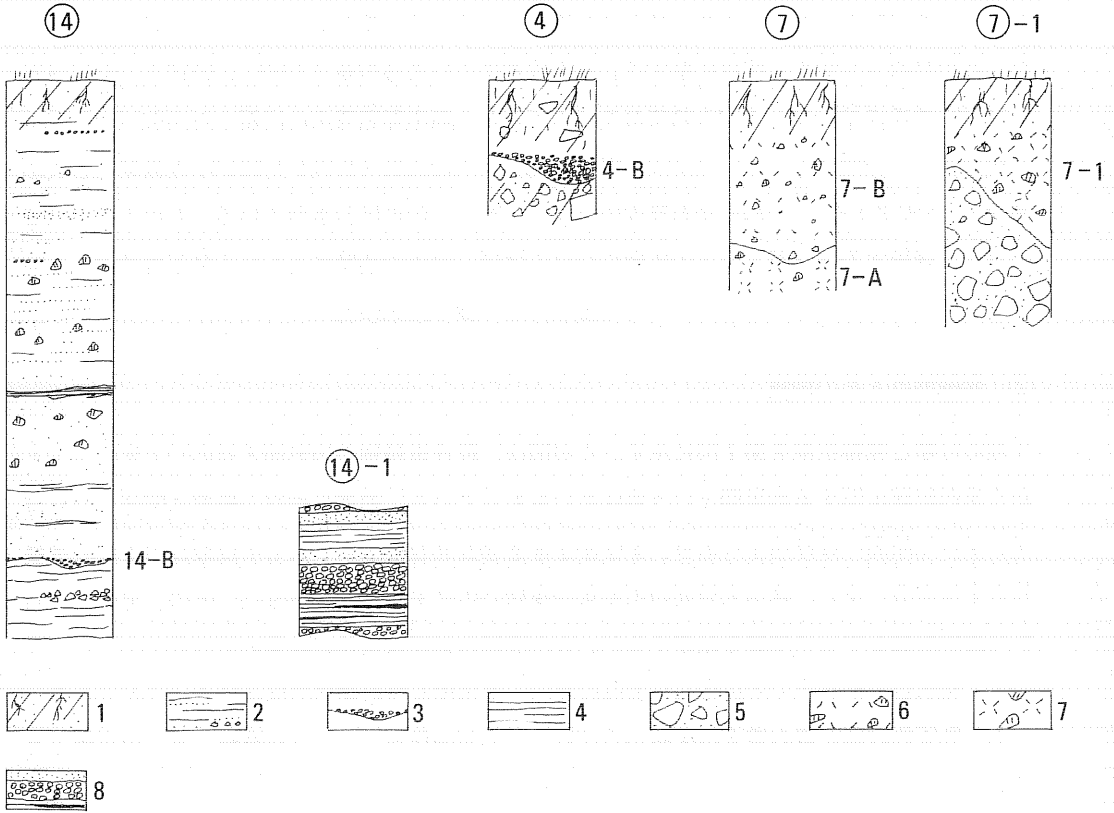
⑤：オレンジ色の円みがかった軽石を含む火山灰層が分布する。厚さは不明。

⑦：上部から約20cmほど黒色腐植土層があり、その下に40cmほどで安山岩質角礫（0.5～3 cm）と、円みがかった軽石（径0.5～2 cm）に富んだ火山灰層があり、さらに黄褐色軽石を含む灰分の多い火山灰層に急変する。

⑦-1：上部から約20cmほど黒色腐植土層があり、その下は15～40cmでオレンジ色の軽石を含む火山灰層に漸移する。さらに下は凹凸面で垂円～垂角礫を含んだ砂礫層へ急変する。

⑧⑨⑩⑬：いずれも上部から20～50cmで黒色腐植土層があり、その中で上面から20cm位のところに大湯軽石質火山礫層が膨縮しながらみられる。更に下位は7～15cmの軽石が散在する褐灰色軽石質火山灰層で、これは鳥越軽石質火山灰層である。





1. 黒色腐植土 2. 灰茶褐色粘土質砂礫 3. 降下軽石粗粒火山灰 4. 暗茶褐色粘土  
 5. 亜角～亜円礫 6. 軽石質火山灰(岩片多い) 7. 軽石質火山灰(灰分が多い) 8. 砂礫粘土層

第2図 露頭柱状図

⑪⑫：上部から20～30cmで黒色腐植土層があり、その中に大湯軽石質火山礫層がうすく見られるのは同様であるが、それ以下はオレンジ色の軽石質火山灰層に変る。これは⑦、⑦-1と同様、申ヶ野軽石質火山灰層と考えられる。

⑭：山側ほど田泥質の砂礫層が厚いが、その下に大湯軽石質火山礫層があり、さらに下部は亜角礫を含む砂礫層になる。田泥質砂礫層中には5cm以上の軽石片が散在する（第1表の⑭-A、⑭-C）が、これは鳥越軽石質火山灰層起源のものである。

ところで大里面の構成層のうち下部のものは砂礫層、粘土層の互層であり、成層状態がよく、しまっていてかたい（第2図⑭-1）。これと同質の砂礫層は⑭の西端の段丘崖においても見られる。⑭-1において、露頭上部と大里面上面のあいだは約5 m位あり、上述の田泥質砂礫層との直接の関係は不明であるが、層相が極めて異なることからすでに述べたように一連の構成層として一括するには疑問が残る。盆地内の更新統の一部と考えられる。

### (3) 火山灰層の重鉱物組成と対比

第1図の各地点から火山灰と軽石を採取してその一部について重鉱物分析を行った。この際粒位は0.105～0.24 mmにそろえ、重液はブロムホルムを使用し、偏光顕微鏡下で4～5視野について各鉱物数を数えて個数%を求めた。結果を第1表に示す。

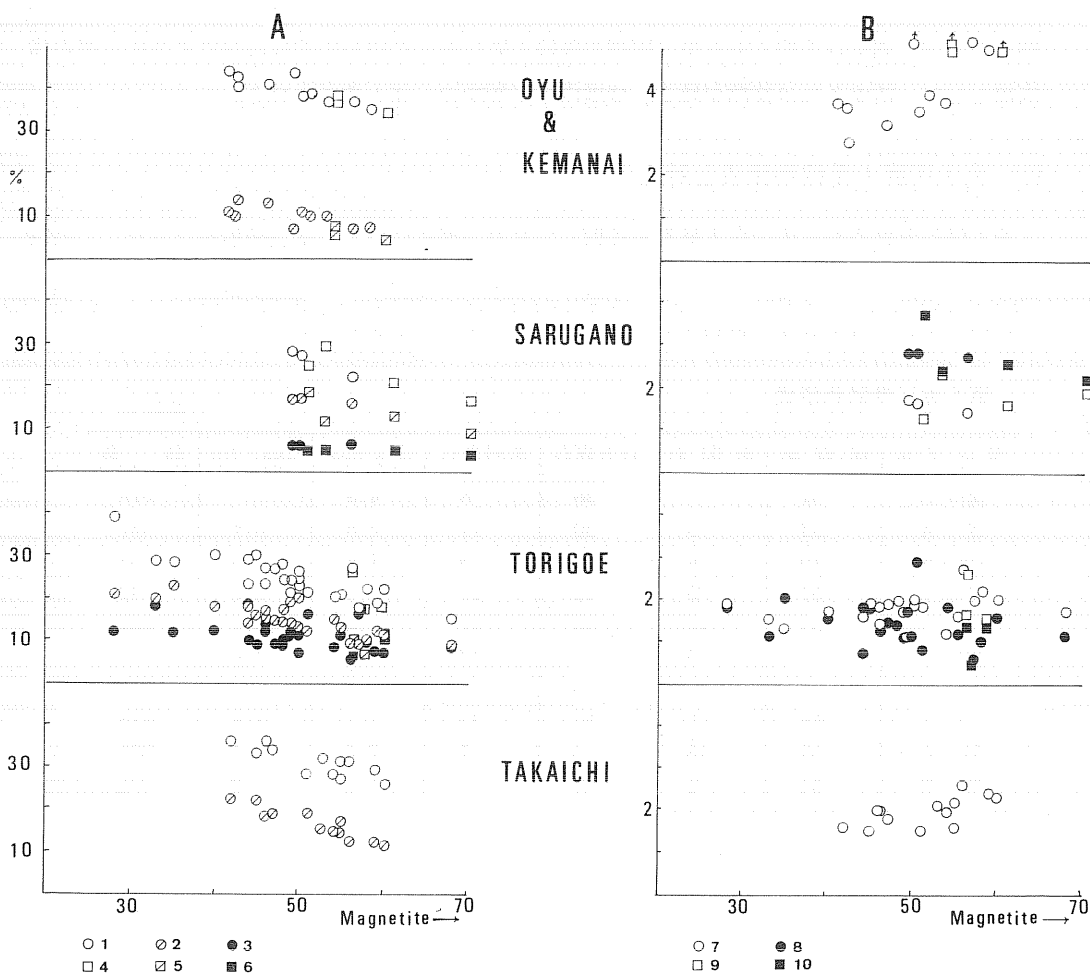
第1表 重鉱物組成

サンプル							個数%
	磁鉄鉱	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	Opx/cpx	Cpx/Ho	個数
④-B	54		38	8	4.8		319
⑦-A	53	5	30	12	2.5	2.4	322
⑦-B	70	4	17	9	1.9	2.3	288
⑦-I	51	5	25	19	1.3	3.8	443
⑧	59	12	18	11	1.6	0.9	381
⑪	61	5	21	13	1.6	2.6	310
⑭-B	60		35	5	7.0		332
⑭-A	56	7	27	10	2.7	1.4	418
⑭-C	57	18	18	7	2.6	0.4	332
⑭-B'	54	1	39	6	6.5	6.0	335

この表から⑭-B、⑭-B'、④-Bはいずれも角閃石をほとんど含まず、斜方輝石が単斜輝石にくらべてかなり多い大湯軽石質火山礫層と一致した組成を示し、産状、層相からみてもこれに対比し得る。一方、⑭-A、⑭-C及び⑧等は角閃石を比較的多く含み、鳥越軽石質火山灰層もしくはそれに由来する軽石とみられる。

次に⑦-A、⑦-I、⑪等はいずれも黒色腐植土層の真下にあり、角閃石が少なく、Cpx/Ho値が高いなどから鳥越軽石質火山灰層とはやや異なっている。花輪盆地内の鳥越面、関上面の上部の構成層としては申ヶ野軽石質火山灰層の分布することが多いことや、今まで得られた申ヶ野軽石質火山灰層に組成上一致することから申ヶ野軽石質火山灰層に対比できるものと考えられる。なお⑦-Bは安山岩の角礫(径0.5～3 cm)を含むほか軽石もやや多く灰分が少ないなどから、二次的に水流による洗いだしをうけた部分と考えられる。

以上の組成値を今まで得られた各火山灰層の値とともにプロットしたのが第3図である。図中の正方形は今回のデータを表わすが、この図からも上述の組成の特徴が明らかに示される。



1と4 斜方輝石(OpX) 2と5 単斜輝石(CpX) 3と6 角閃石 7と9 OpX/CpX  
8と10 CpX/HO 円は既存のデータ、四角は今回のデータ

第3図 重鉱物組成

## 参考文献

- 内藤博夫「秋田県米代川流域の第四紀火山碎屑物と段丘地形」『地理学評論』  
第39巻第7号 1966年
- 内藤博夫「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」『地理学評論』  
第43巻第10号 1970年
- 中川久夫・他「十和田火山発達史概要」『東北大地質古生物研報』  
第73号 1972年
- 大池昭二「十和田火山は生きている」『国土と教育』 第26号 1972年
- 秋田県『秋田県総合地質図幅, 花輪』 1973年
- 藤本幸雄「十和田火山起源の火山灰層の重鉱物組成(その1) 大館、花輪盆地におけ  
る火山灰層」『昭和54年度大館工業高校研究紀要』 1980年

## 2. 環境と周辺の遺跡

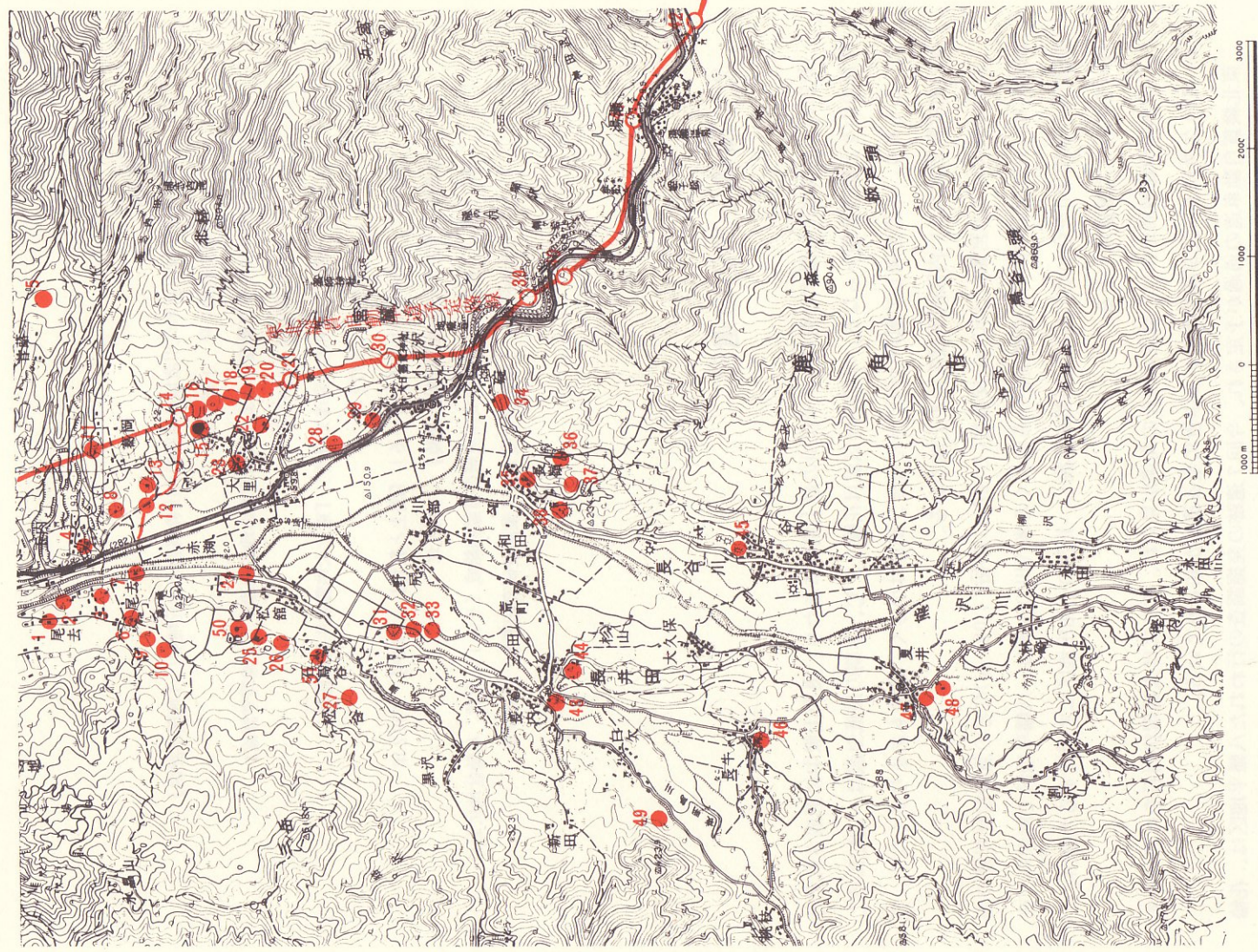
秋田県の北東部に位置する鹿角は、米代川の最上流部にあたり、奥羽山脈中に形成された壮年期の山々と断層盆地からなる。年間平均気温は花輪 9.8℃、冬期の最低気温は-22℃に達したこともあり、年間を通じて風向は西にかたむき、風速は小さく、積雪もあまり多くなく、昼夜の温度較差の大きい内陸的気候を示す土地である。

盆地の東には五の宮嶽(1,150 m)、皮投岳(1,122 m)、中岳(1,024 m)などの急峻な壮年期の山波があり、盆地南東の出口、湯瀬溪谷から流れくる米代川の本流は、八幡平地区で熊沢川、夜明島川、浦志内川を合わせて盆地の西部を北流し、北西の十和田地区にて西流する大湯川、小坂川を入れて大館盆地へ去る。

この水系や盆地周辺には、数段の段丘の発達が見られ、そこには大湯環状列石をはじめとする、450ヶ所以上に及ぶ縄文時代から中世に至る遺跡が知られている。

東北縦貫自動車道の通過が予定され、今回7遺跡の発掘調査の行われた八幡平地区は、花輪盆地の南東部を占め、米代川水系の宮麓地区(湯瀬、小豆沢、大里、玉内)、熊沢川水系の長谷川地区(谷内、長嶺、川部など)、夜明島川水系の長井田地区(夏井、長牛、三ヶ田など)





第4図 周辺遺跡分布図

○ 昭和54年度発掘調査遺跡



## 第2表 周辺遺跡一覽

番号	遺跡名(所在地)	時代・時期	遺構・遺物
1	六角平(六角平)	縄文・後期	縄文土器(大湯式)、磨製石斧、石槍
2	三光塚2号(東在家)	平安	硝子玉
3	三光塚1号(東在家)	平安	勾玉
4	玉内(玉内)	縄文・晩期	縄文土器(大洞B C、C <sub>1</sub> 、C <sub>2</sub> )、石匙、石皿
5	甘露(甘露)	縄文	縄文土器
6	東在家(東在家)	縄文・晩期	縄文土器(大洞B C、C <sub>1</sub> )土偶、岩面、岩版、石槍、石鏃、磨製石斧
7	尾去(尾去)	縄文	縄文土器
8	清水向(清水向)	縄文	竪穴住居跡、縄文土器(円筒下層c、d式、大木6式、円筒上層a、b式) 石鏃、磨製石斧
9	尾去A(尾去)	縄文	縄文土器
10	尾去館(尾去)	中世	
11	上葛岡Ⅳ(上葛岡)	縄文・平安	縄文土器、土師器
12	駒林(駒林)	縄文・平安	縄文土器、土師器
13	下館(下館)	中世	
14	上葛岡Ⅲ(上葛岡)	縄文	縄文土器、弥生土器
15	上葛岡Ⅱ(上葛岡)	縄文	縄文土器
16	上葛岡Ⅰ(上葛岡)	縄文	縄文土器
17	北の林Ⅰ(北の林)	縄文・平安	平安竪穴住居跡、縄文土器、土師器
18	北の林Ⅱ(北の林)	縄文・平安	平安竪穴住居跡、縄文土器
19	飛鳥平(飛鳥平)	縄文・平安	縄文土器
20	鳥居平(鳥居平)	縄文・平安	縄文土器、土師器
21	歌内(歌内)	縄文・平安	フラスコ状ビット、縄文土器(大木9式)、平安竪穴住居跡、土師器、須恵器
22	大里(大里)	縄文	縄文土器(大木9式)
23	大里館(大里・堀合)	中世	
24	岩淵(岩淵)	縄文	縄文土器、石器
25	後口田Ⅱ(後口田)	縄文	縄文土器、石器
26	後口田Ⅰ(後口田)	平安	土師器
27	石鳥谷(竹鼻)	縄文・中期	縄文土器(円筒上層a、b式)
28	下鷲の巣(下鷲の巣)	縄文・中後期縄	縄文土器、石器
29	小豆沢館(小豆沢・鷲の巣)	縄文・中世	縄文土器
30	堂の上(堂の上)	縄文・前、中、晩期	縄文土器、石器
31	下モ和志賀(下モ和志賀)		土器
32	田中館	中世	土器
33	二ツ森(二ツ森)	縄文・晩期	縄文土器、石鏃、石棒
34	長畑(長畑)	縄文	縄文土器
35	新城B(新城)	縄文	縄文土器
36	長峰(東館・西館)	縄文・前、中、後期	縄文土器(円筒下層b、d式、円筒上層a、b式、大木7a、7b式、大湯式) 石鏃、石匙、磨製石斧、石皿
37	新城A(新城)	縄文	縄文土器
38	大館(東館)	中世	
39	大地平(大地平)	縄文・早、後、晩、弥生	縄文土器、弥生土器、石匙
40	上山田(上山田)	縄文・前期	縄文土器
41	湯瀬館(古館)	縄文・弥生・中世	縄文土器、弥生土器、建物跡、空凌
42	居熊井(居熊井)	縄文・前、中、後期	縄文土器、竪穴住居跡、溝状遺構
43	三ヶ田(三ヶ田)	縄文・前、中、後期	縄文土器(円筒下層a~c式、円筒上層a、b式、大木7a、7b式、大湯式) 石鏃、石槍、独鈷石、石錐
44	三ヶ田館(長根・浦田)	中世	
45	谷内館(笠町)	中世	
46	長牛館(長牛)	中世	
47	夏井館(夏井)	中世	
48	大館(上沢)	縄文・前期	縄文土器(円筒下層a、b式)
49	白欠館(白砂館)	中世	
50	松館(天神館)	中世	
51	石鳥谷館(石鳥谷)	中世	

黒沢川水系の松谷地区（石鳥谷、松館など）の4小区に大別できる。この地区と、隣りの尾去地区の遺跡分布状況は、現在の所「秋田県遺跡地図」と鹿角市教育委員会の「鹿角市遺跡地図」に見られるように、51ヶ所以上である。旧石器時代の遺跡はなく、縄文時代と歴史時代の遺跡が大多数を占める。そして、遺跡は宮麓地区に発達の見られる標高180～250mの段丘上と、松谷地区と隣りの尾去地区に広がる、いわゆる松館面と呼ばれる標高160～170mの二つの段丘上に多い。

縄文時代の遺跡は、今回発掘調査の行われた大地平遺跡の早期末からはじまり、前期・中期とも円筒土器を出土する遺跡が多い。清水向遺跡、三ヶ田遺跡、長峰遺跡が良く知られており、いずれも前期から中・後期にかけての複合遺跡である。清水向遺跡は昭和29年に発掘調査が行われ、秋田県で最初に前期の竪穴住居跡が報告された。三ヶ田遺跡と長峰遺跡は、前期から後期にわたる遺跡で、前期円筒下層式土器、中期円筒上層式土器、大木7式土器、後期大湯式土器を出土している。晩期の遺跡としては、前半の配石遺構を伴う玉内遺跡と、米代川対岸尾去地区の東在家遺跡がある。

弥生時代の遺跡は、今回発掘調査の行われた、少量の撚糸文土器を出土する大地平、湯瀬館上葛岡Ⅲ遺跡があり、奈良・平安期の遺跡としては、県内で墳丘の残っている唯一の古墳、尾去地区の三光塚古墳がある。

環状列石と終末期の古墳群のほかに、鹿角の特色ある遺跡を求めるとすれば、中世の館跡群があげられよう。42館、もしくは48館と称される城館が、せまい盆地周辺に群在する。

鎌倉時代後期に関東から移住した成田、安保、秋元、奈良の4氏に始まるとされるこの中世の館跡は、大里館、長牛館、小豆沢館、三ヶ田館、尾去館などの名で現在も村落に残る。就中、大里館は鎌倉時代以来安保一族の惣領の本拠で、史料の初見は南北朝にさかのぼる。すなわち、建武3年と4年に、陸奥国北朝党のため攻撃された記録（南部文書）がそれである。

館は大里村落の一角にあり、八幡館、あぶみ館、へいぞう館などの郭が並び、空濠が縦横に通じている大規模なものである。大里館以外の館は、戦国期における南部氏と安東氏の確執の記録に散見するが、創建期など不明の部分が多い。

註1. 秋田県教育研究所『秋田県地誌』 研究No.104 1969年

註2. 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』 1977年

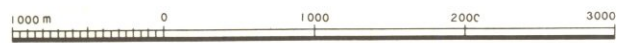
註3. 昭和54年7月に鹿角市教育委員会の行った「埋蔵文化財の保護と開発に関する説明会」の資料による。





1. 居熊井
2. 湯瀬館
3. 上山田
4. 大地平
5. 堂の上
6. 歌内
7. 鳥居平
8. 飛鳥平
9. 北の林 I
10. 北の林 II
11. 上葛岡 I
12. 上葛岡 III
13. 上葛岡 IV
14. 駒林
15. 柏木森
16. 中の崎
17. 孫右工門館
18. 案内 I
19. 案内 II
20. 猿ヶ平 I
21. 猿ヶ平 II
22. 妻の神 I
23. 妻の神 II
24. 妻の神 III
25. 乳牛平
26. 乳牛
27. 西町 I
28. 西町 II
29. 室田
31. 明堂長根
32. 上葛岡 II

1 : 50,000



第5図 秋田県鹿角市における東北縦貫自動車道路線上の遺跡分布図



- 註4. 藤本幸雄氏の(1)、「地形・地質の概要」による。
- 註5. 大和久震平・奈良修介『秋田県史考古編』 1960年  
奈良修介・豊島 昂『秋田県の考古学』 1967年
- 註6. 同 上
- 註7. 沼館愛三著・盛田 稔編『津軽諸城の研究』（草稿） 青森県文化財保護協会  
1977年  
塩谷順耳「鹿角の館」『秋田県立博物館研究報告』 第3号 1978年

# 居 熊 井 遺 跡

遺 跡 番 号	No. 1
所 在 地	鹿角市八幡平字居熊井27番地 1 号他
調 査 期 間	昭和54年 5 月11日～ 6 月25日
発掘調査予定面積	3,584m <sup>2</sup>
発掘調査面積	3,075m <sup>2</sup>

## 1. 遺跡の概観

居熊井（おらくまい）遺跡は鹿角市八幡平字居熊井27番地1号他にあり、国鉄花輪線湯瀬駅から南東600 mの所に位置する。奥羽山脈を西流する米代川に沿って走る国道282号線を、花輪側から東へ進むと、湯瀬温泉を過ぎるころから道路右手に狭小な平坦地を見ることができる。ここが遺跡地である。

遺跡地の北側には米代川が流れ、西側から居熊井沢がこれに流入する。標高1,150 mの五ノ宮嶽、904 mの八森などの急峻な山々に囲まれた猫の額ほどの平坦面で、発掘区中央部では標高225 mを測り、西側になだらかに傾斜してその東端では低い舌状台地の様になっている。現状は畑と水田で、発掘区の中を国鉄花輪線が走っている。東約2 kmで岩手県境に達する。

## 2. 調査の方法

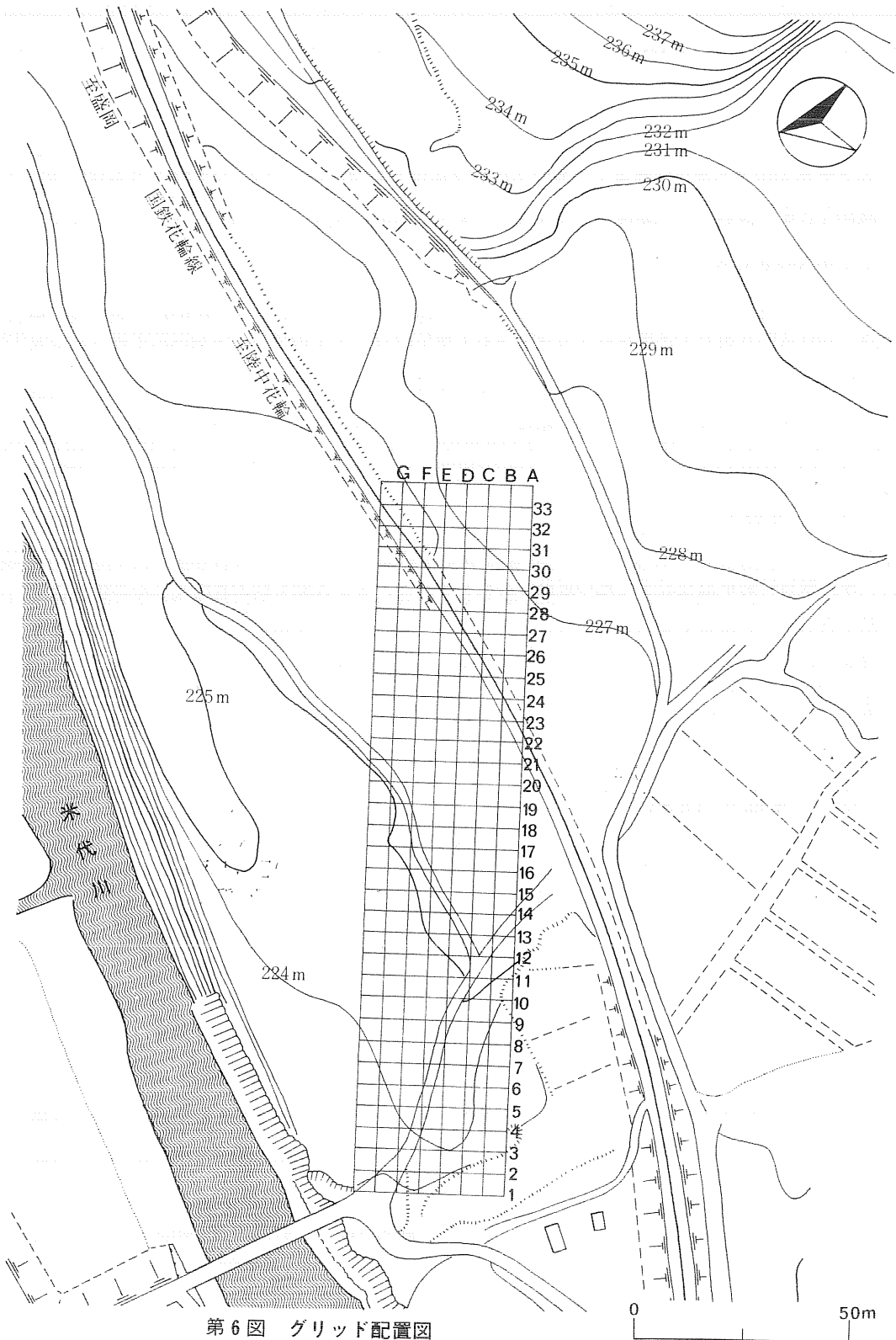
東北縦貫自動車道建設予定地の道路中心杭S T A 32、S T A 33を結ぶ直線及びその延長線を基準とし、これに直交する直線を設け、5 m × 5 mのグリッドを組んだ。グリッドの呼称は東西軸を西端よりアラビア数字で1～33、南北軸は南よりアルファベットでA～Gまでとし、両者の組合せて呼んだ。

## 3. 調査の経過

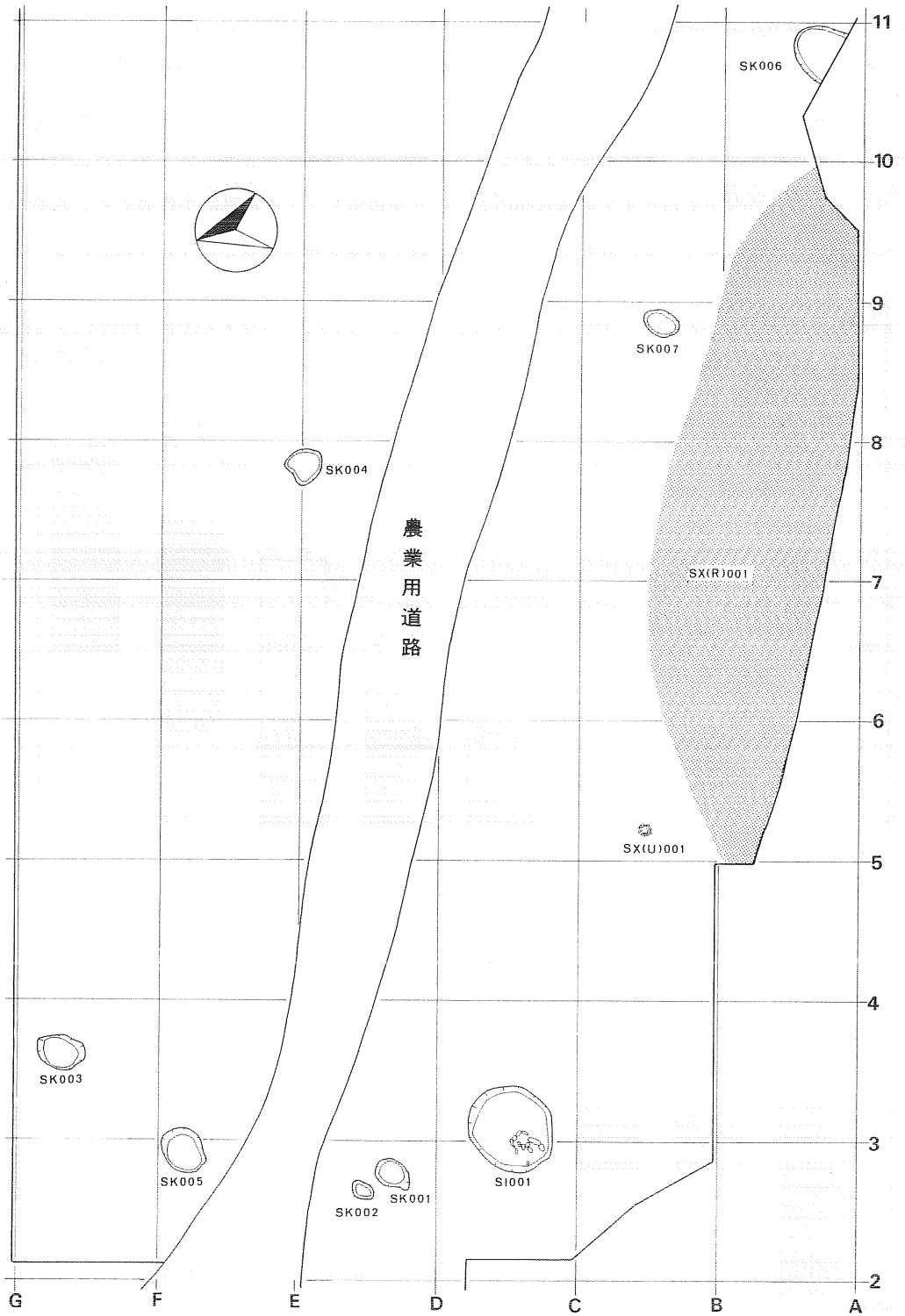
本遺跡の調査は昭和54年5月11日から、遺跡のほぼ全面にわたって開始した。分布調査の段階では、その地形から発掘区東部にも遺構の存在が予想されたのであるが、発掘開始直後、12ライン以東には遺物の出土がほとんどなく、遺構も存在しないことが確認された。

主として遺跡西側にて、住居跡、埋設土器、土壇等の遺構が確認されたので、土層観察用トレンチ掘削及びその土層断面図作成作業と併行して、これら遺構の調査に全力を注いだ。

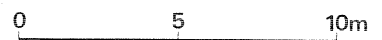
5-A～10-Aグリッド内の傾斜面に、遺物を包含する黒褐色土層が現出したので、その範囲と土層堆積状態を観察するために5本の放射状サブトレンチを設定した。結果、これが遺物を多量に出土する捨て場と判断されたので、6月15日までにこの捨て場を精査、遺物出土状態の写真撮影をした。6月19日にはこれに遣り方を設定して、遺物出土状況図、原地形図等を作成した。これら作業が終了したのは7月3日で、発掘面積は3,075 m<sup>2</sup>、調査期間は62日間であった。



第6図 グリッド配置図

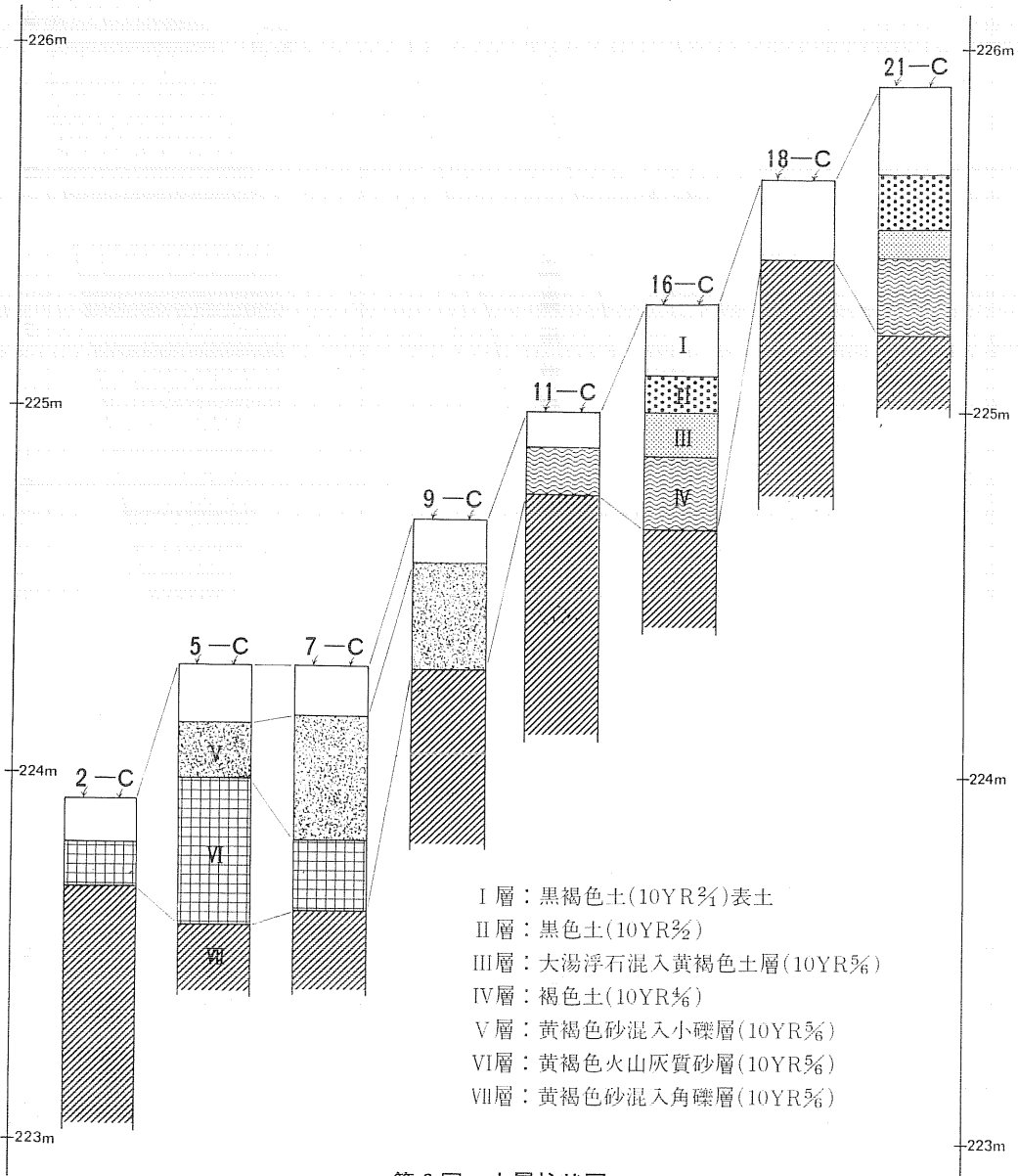


第7図 遺構配置図



#### 4. 遺跡の層位

本遺跡は西に向かって緩く傾斜しており、2-Cグリッド、23-Cグリッド間では地表面で約2mの高低差がある。遺跡全体にわたっての土層堆積状態を観察するため、2-C~23-Cラインとこれに直交するラインに幾本かのトレンチを設定し、土層断面図を作成した。本遺跡の土層は基本的には16-C、21-Cグリッドに代表される5層に分類される。ただし、2~9



第8図 土層柱状図

ライン付近では地山の上に黄褐色の礫層や火山灰質砂層が堆積しており、これらを含めてⅠ～Ⅶ層に分類される。

Ⅰ層：調査区全域に広がる耕作土で、植物根を多く含んでおり、下層から転移したと思われる礫も多い。一般に東側に厚く30～40cmの厚さを測る所があるが、12ライン以内では10cm前後となる。色調は黒褐色である。

Ⅱ層：植物根はⅠ層より少なくなり、砂粒が混入する。19ライン以東には確実に存在しているが、16ライン付近ではブロック状となり、それ以西では存在しない。色調は黒色である。

Ⅲ層：大湯浮石の混入した黄褐色の土層である。土層全体の中ではブロック状に散見されるが、主として14ライン以東に多く見られる。

Ⅳ層：褐色土で遺物包含層である。11ラインより西にはほとんど存在していない。

Ⅴ層：黄褐色の小礫層で砂を含む。土器片が少数出土している。(図版11-2)

Ⅵ層：黄褐色の土層で、炭化物、土器片が出土する。住居跡はこの土層上面から掘り込んでいる。

Ⅶ層：砂及び拳大の礫層で、地山を構成する。色調は黄褐色である。

以上の土層のうち、Ⅴ、Ⅵ層は2～9ライン付近に偏在し、S I 001住居跡はⅥ層を掘り込んで構築されている。また、Ⅱ層は黄褐色土ながら、炭化物と土器を出土することから地山とは考え難い。S X (R) 001捨場では、黒褐色の遺物包含層の上に遺物を少量出土する黄褐色土層が乗っている。これらのことからⅤ・Ⅵ層やS X (R) 001の遺物包含層の上の黄褐色土層は、遺跡北側を流れる米代川の幾度かにわたる氾濫による堆積土であろうと考えられる。

## 5. 遺構と遺物

### (1) 遺物の記載方法

#### i) 土 器

居熊井遺跡出土の土器は、縄文時代前期～後期の各期に渡っている。記述をするにあたり、各期の土器の形態、主に文様構成上から以下の如く分類した。

#### 第Ⅰ群 前期末～中期初頭、円筒系の土器

- 1類 胴部に木目状撚糸文の施されたもの。
- 2類 a種 口頸部文様帯に単軸絡条体圧痕文の施されたもの。  
b種 口頸部文様帯に、単軸絡条体に代り、撚紐圧痕の施されたもの。
- 3類 胴部に羽状縄文の施されたもの。

## 第Ⅱ群 中期末～後期初頭

- 1類 a種 磨消縄文によって文様構成されるもの。
- b種 粘土紐貼付文が主要モチーフとなる。
- 2類 網目状撚糸文の施されるもの。
- 3類 無文のものであり、ヘラミガキによる丁寧な調整の施されるもの。
- 4類 粗製土器であり、縄文のみ施されるもの。

## 第Ⅲ群 後期前葉～後葉

- 1類 縄文を地文とし、沈線及び磨消縄文手法によって文様構成されるもの。
  - a種 比較的太い曲線的沈線文の描かれるもの。
  - b種 逆S字状沈線文が横位に展開されるもの。
  - c種 2～3条の沈線による入組状磨消縄文によって文様構成されるもの。
  - d種 主に矩形区画の幾可学的磨消縄文によって文様構成されるもの。
  - e種 比較的細い幾可学的沈線文の描かれるもの、沈線は3条以上で構成される。
- 2類 平行沈線文と列点文の併用されるもの。
- 3類 大きな曲線的縄文区画文の描かれるもの。
- 4類 変形した入組带状文が口頸部文様帯に描かれるもの。
- 5類 粗製土器である。
  - a種 縄文のみ施文されるもの。
  - b種 撚紐の圧痕文が縄文部分と無文部分を画するもの。
  - c種 無文のもの。

本遺跡出土の土器の記述は、上記分類により行う。

### ii) 石 器

居熊井遺跡からは、石鏃、石錐、石匙、筥状石器、搔器、磨製石斧、石皿、凹石、半円状扁平打製石器が出土している。これらのうち、石鏃、石錐、石匙、搔器は、主にその形態から幾つかに分類される。個々の石器の計測は第10図に示した規準により、計測を行った。

#### 石 鏃

基部形態から次のように分類される。

I類：基部中央が凸状になるもの。

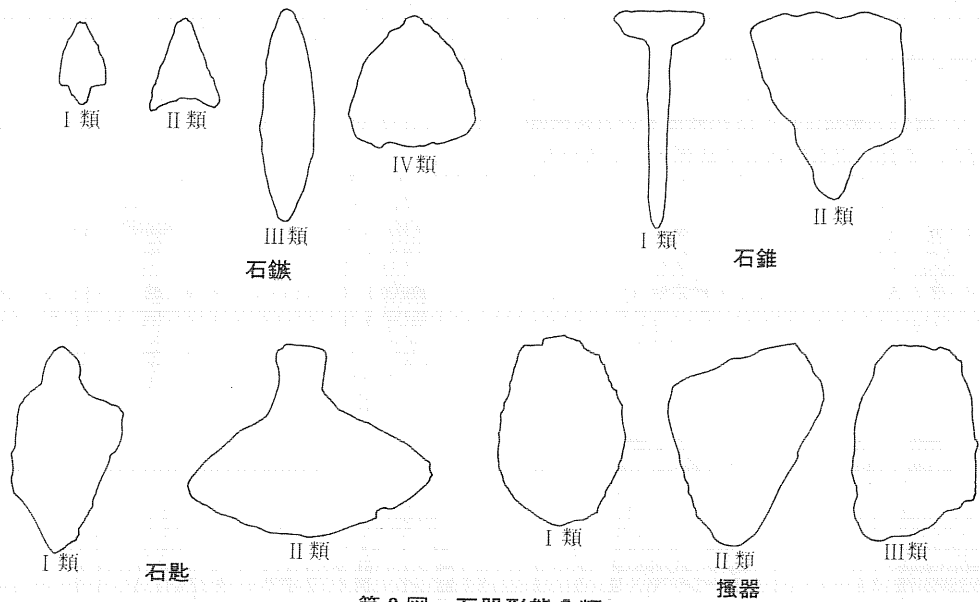
II類：基部中央が凹状になるもの。

III類：全体が棒状になるもの。

IV類：基部が平坦になるもの。

#### 石 錐





第9図 石器形態分類

つまみ部の調整方法から次のように分類される。

I類：つまみ部周縁全体に調整剥離が加えられるもの。

II類：つまみ部の調整がほとんど加えられないもの。

#### 石 匙

刃部とつまみ部の位置関係から次のように分類される。

I類：刃部に対して、つまみ部の軸線が平行に近いもの。

II類：刃部に対して、つまみ部の軸線が直角に近いもの。

#### 石 鐮

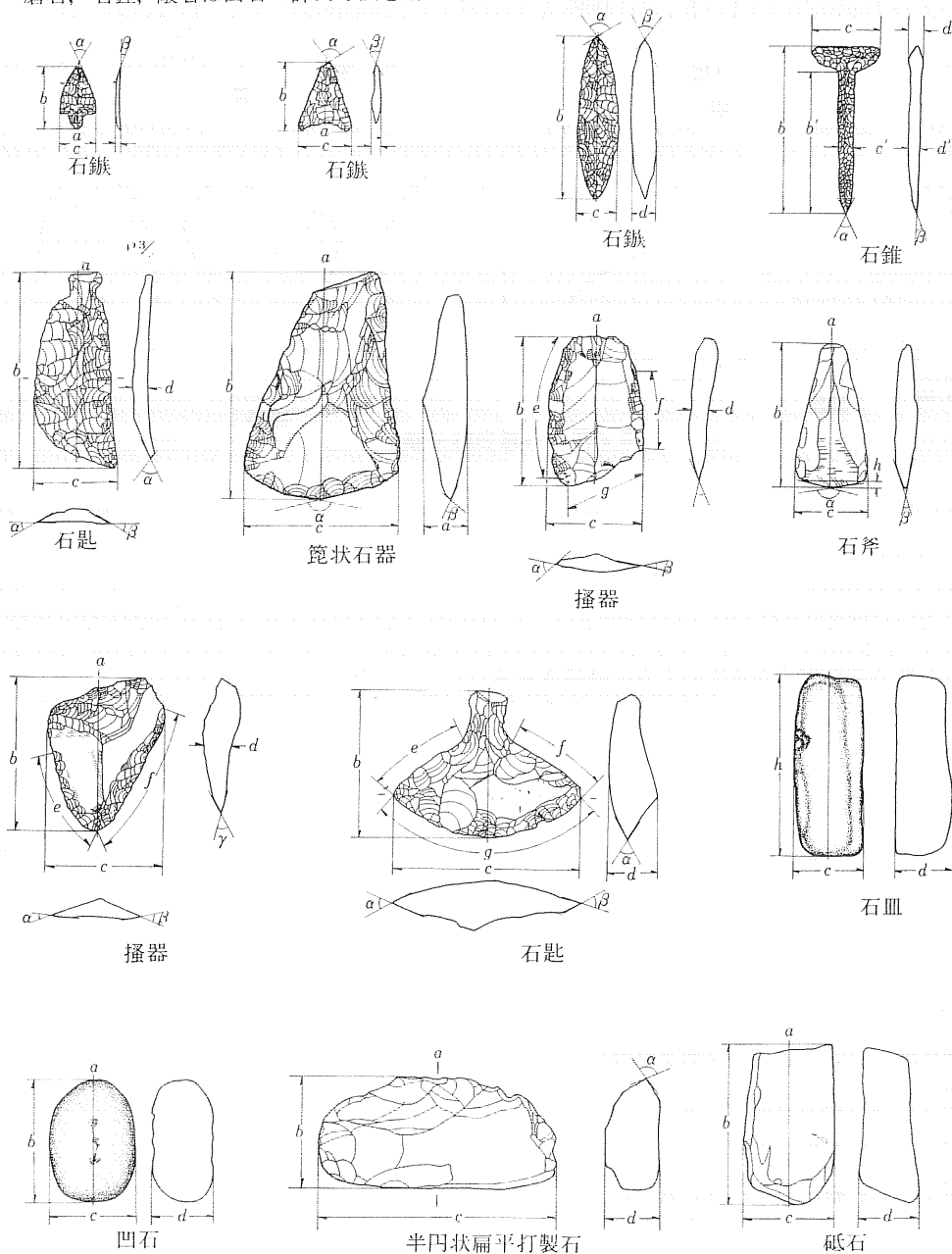
平面状態から次のように分類される。

I類：平面形態が楕円形に近いもの。

II類：平面形態が三角形に近いもの。

III類：平面形態が方形に近いもの。

$a$  . 基準線  $b$  . 最大長 ( $a$  に平行な線上の最大の長さ)  $c$  . 最大幅 ( $a$  に直角な線上における最大の幅)  
 $d$  . 最大厚  $e$  . 石匙, 搔器の左側縁の長さ  $f$  . 石匙, 搔器の右側縁の長さ  
 $g$  . 石匙, 搔器の下側縁の長さ  
 $\alpha, \beta, \gamma$  . 石鏃, 石錐, 石斧, 筧状石器, 半円状扁平打製石器の平面形, 断面形の先端部角度又は石匙, 搔器の側縁  $e, f, g$  の断面形の刃部角度  
 磨石, 石錘, 敲石は凹石の計測方法を用いた



第10図 石器計測規準

## [2] 検出遺構と遺物

### 住居跡

#### SI 001 (第11図、図版2)

〈位置と確認状況〉：3-Cグリッドの粗掘りを開始し、耕作土（厚さ20cm）を除去すると、2-Cグリッド寄りの第IV層黄褐色火山灰質砂層上面に於いて、暗茶褐色土が半円状に落ち込んでいるのが確認された。このため、2-Cグリッドと3-Cグリッドとの間に土層観察用ベルトを残し、2-Cグリッドの耕作土を除去すると、不整楕円形を呈する竪穴遺構らしきプランが検出された。この暗茶褐色土の上面には、礫、土器片等が多く確認され、また焼土も僅かながら確認された。表土（耕作土）からの土層観察用ベルトに交差させて、遺構内の土層堆積状態観察用ベルトを新たに設定し、ベルトを2本とした。堆積土層中からは、土器片、フレイク、石器、礫が多く出土した。

本遺構は黄褐色火山灰質砂混入角礫層まで掘り込まれていた。さらに住居跡床面下により古い時期の竪穴住居跡の一部が確認された。このため、数本の小トレンチを設定して精査したがその全容を検出することはできなかった。これは、古い時期の住居跡の壁等、主要部分が、米代川の洪水により原形をとどめない程流失していたためである。SI 001とした本遺構は、その後同様の原因によって堆積した黄褐色火山灰質砂層の上面に構築されたものである。

〈規模と形態〉：住居跡は、長径330cm、短径285cmの不整楕円形を呈する。炉跡によって推定される主軸方位は、N-51°-E、占地面积は7.28㎡である。壁（周）溝、出入口は検出されなかった。

〈壁〉：床面から15~30cm程の高さ、約60度の角度で緩やかに外傾する壁面は、黄褐色火山灰質砂層下位と黄褐色砂混入角礫層からなっている。壁体は確認されなかった。

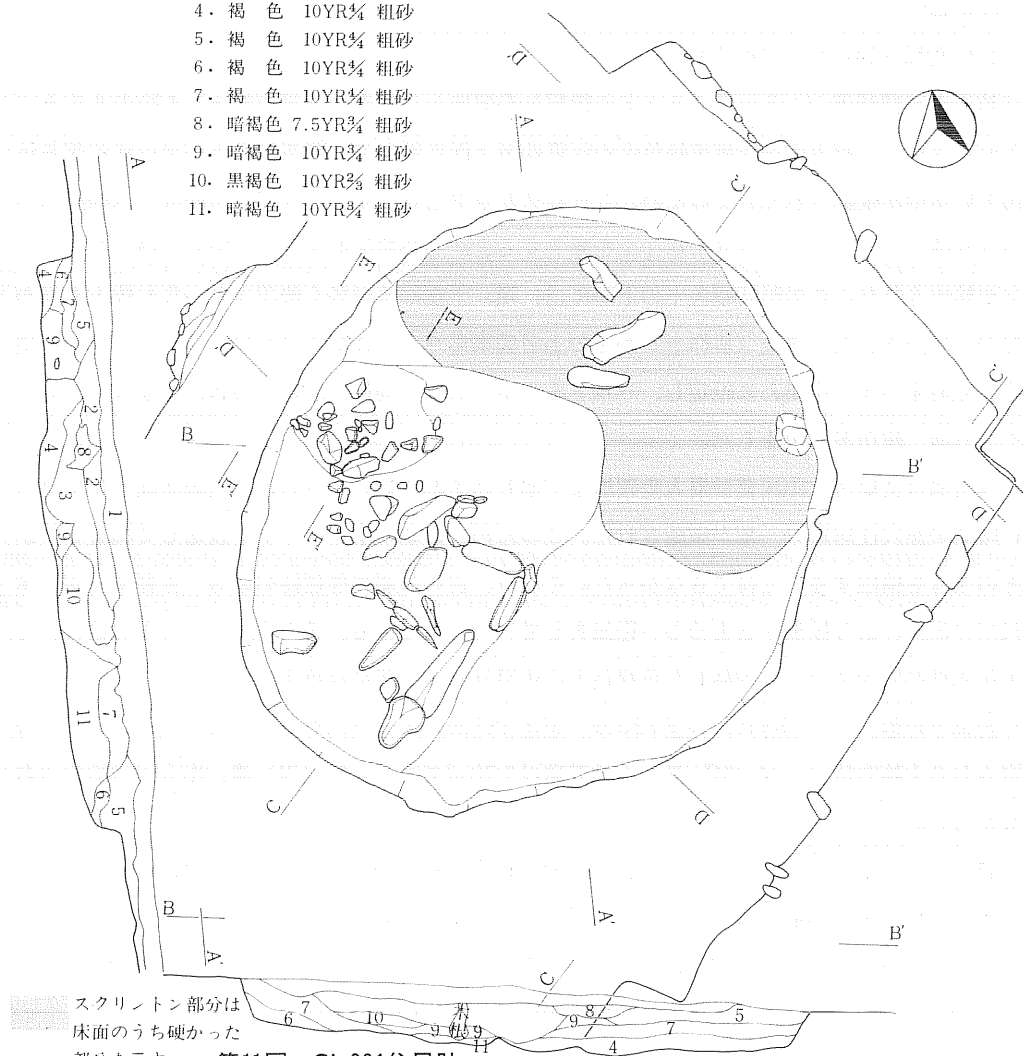
〈覆土〉：耕作土を除き、暗褐色土、黒褐色土、褐色土の3層に大別されるが、色調、粘性、含有物とその量、間隙等を観察して11層に細分した。堆積状態は所謂レンズ状を呈する。

〈床面〉：黄褐色砂混入角礫層を掘り込み、黄褐色火山灰質砂土で貼床が施されるが、不明瞭な南半の貼床部は精査の際剝除された。残存する北半の貼床部は非常によく踏み固められており、下位の礫の表出は見られない。南西部床面下には、SI 001よりも古い時期の竪穴住居跡の一部が確認された。この部分はやや暗い褐色を呈する。

〈柱穴〉：床面東側壁直下に1ヶ所検出された。長径23cm、短径17cmの不整円形を呈し、深さ25cmである。

〈炉〉：床面中央部から南西部壁面に接する長さ130cm、幅75cmの範囲に石組炉と灰捨場の要素を持つ「くぼみ」が付属する所謂「複式炉」である。<sup>(註1)</sup>河原石によって組まれたその原形はほぼ確認できるが、焼土、灰、炭化物の検出は微量であった。炉の掘り方は、古い時期の竪穴住

1. 暗褐色 10YR $\frac{3}{4}$  粗砂
2. 暗褐色 10YR $\frac{3}{4}$  粗砂
3. 黒褐色 10YR $\frac{3}{4}$  粗砂
4. 褐色 10YR $\frac{3}{4}$  粗砂
5. 褐色 10YR $\frac{3}{4}$  粗砂
6. 褐色 10YR $\frac{3}{4}$  粗砂
7. 褐色 10YR $\frac{3}{4}$  粗砂
8. 暗褐色 7.5YR $\frac{3}{4}$  粗砂
9. 暗褐色 10YR $\frac{3}{4}$  粗砂
10. 黒褐色 10YR $\frac{3}{4}$  粗砂
11. 暗褐色 10YR $\frac{3}{4}$  粗砂

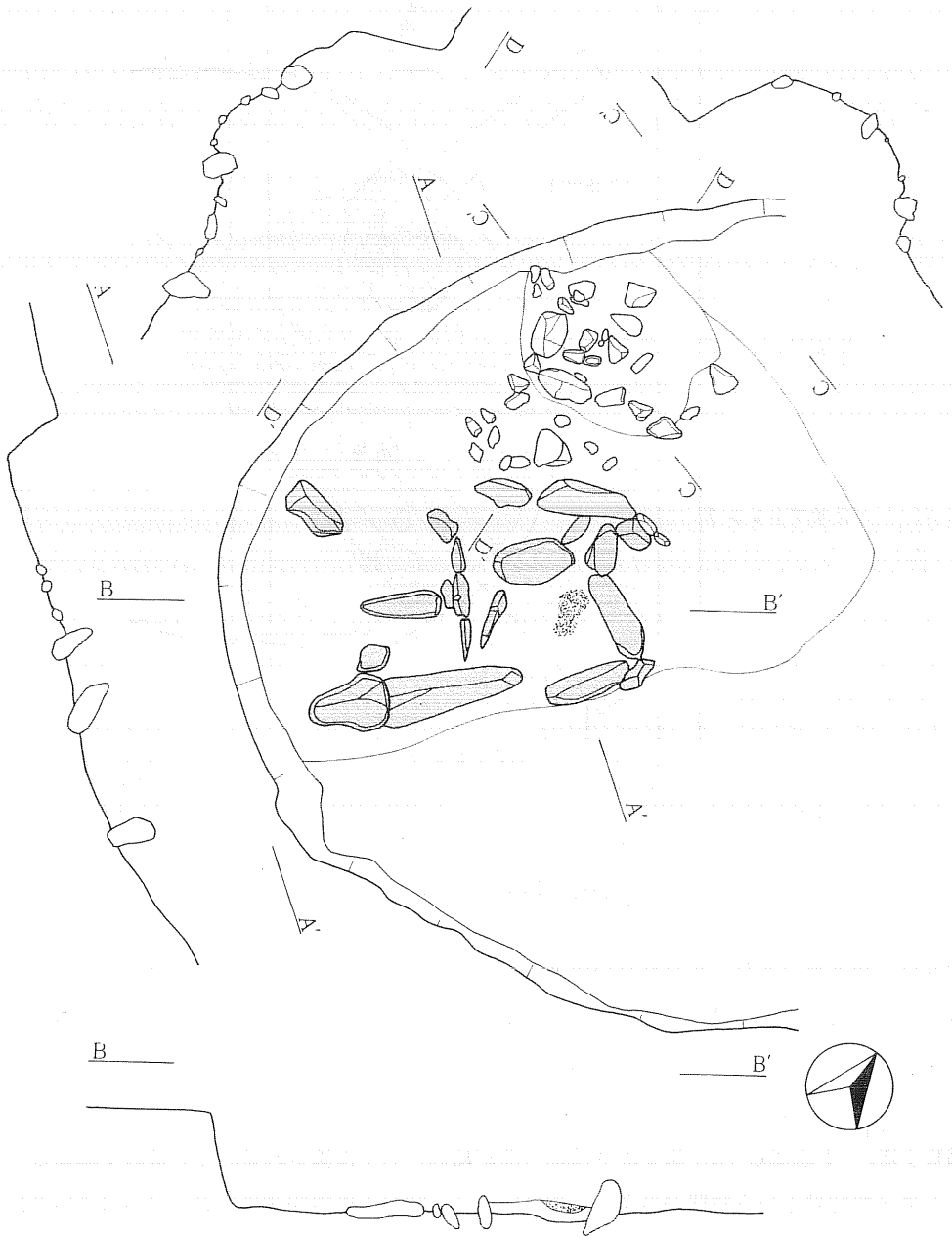


第11図 SI 001住居跡

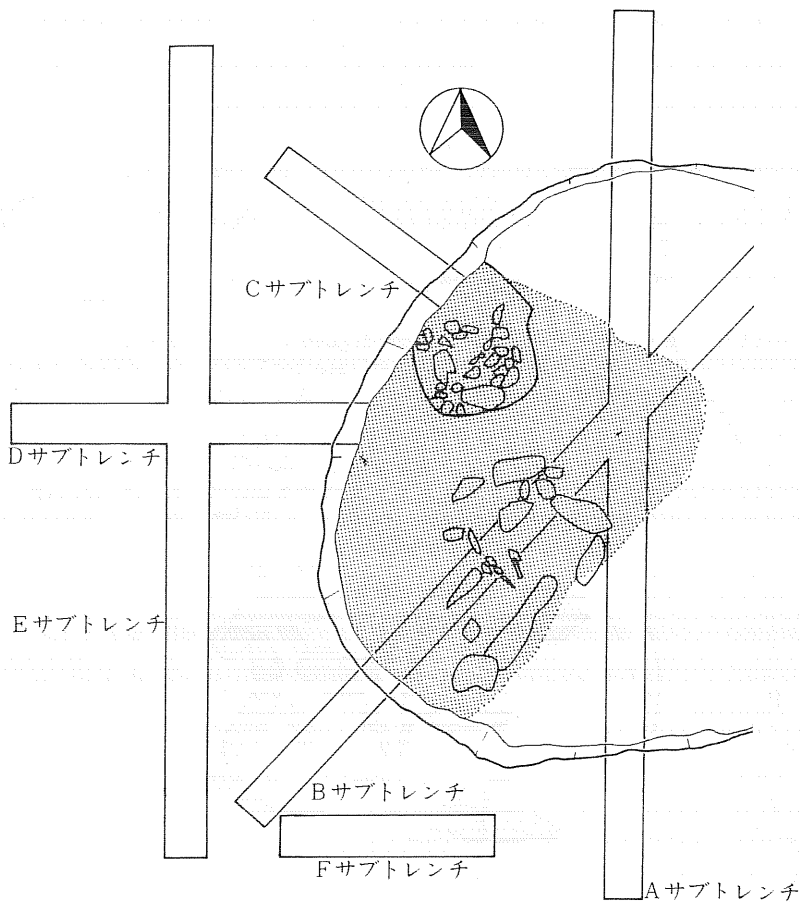
居跡の覆土を掘り込んでいるため、明確にし得なかった。古い時期の住居跡炉は、北側壁に隣接して60×70cmの範囲ではぼ円形に掘りくぼめた後、河原石を組んだ石囲炉であるが、攪乱されており明確ではない。

〈遺物とその出土状態〉：S I 001内出土の遺物は、土器については全て破片の状態で検出された。第14図はその出土状況をドットによって示したものである。遺物の水平分布は、遺構の中心径150cm×100cmの範囲に分布の密度の濃い部分をもつが、全体に北側への偏りを見せる。垂直分布では、床面から15～20cm程度上位の覆土に分布の中心をもつ。

本遺構出土土器中、時期を明確に決定できる資料は、第16図1～3の第I群1類、5～8の



第12图 SI 001住居跡炉



第13図 サブトレンチ設定状況図

第Ⅱ群1類a種であり、それぞれ円筒下層d式、木木10式に比定される。また、24、25の第Ⅲ群5類a種としたものは、後期初頭のある限られた時期のものであり、26～30の第Ⅱ群3類の無文土器は、中期末大木9式、10式期のものと思われる。<sup>(註2)</sup>

また、第17図31の資料は、かつて山田野C<sub>2</sub>式として分類された土器群で、三内丸山遺跡第Ⅷ類土器、千歳遺跡(13)第3群b類の一部が類例として指摘される。この類の土器には、大まかに後期初頭という時期が与えられてはいるが、同じく後期初頭に位置づけられている他の土器型式との関連等、未だ解明されていない部分が多い。<sup>(註3)</sup><sup>(註4)</sup><sup>(註5)</sup><sup>(註6)</sup>

i) 土器 (第16・17図 図版13)

第16図1～3 第Ⅰ群1類

1～3とも胴部小破片であり、1ではR原体、2、3ではL原体を用いている。胎土、焼成



第14図 遺物出土状況図

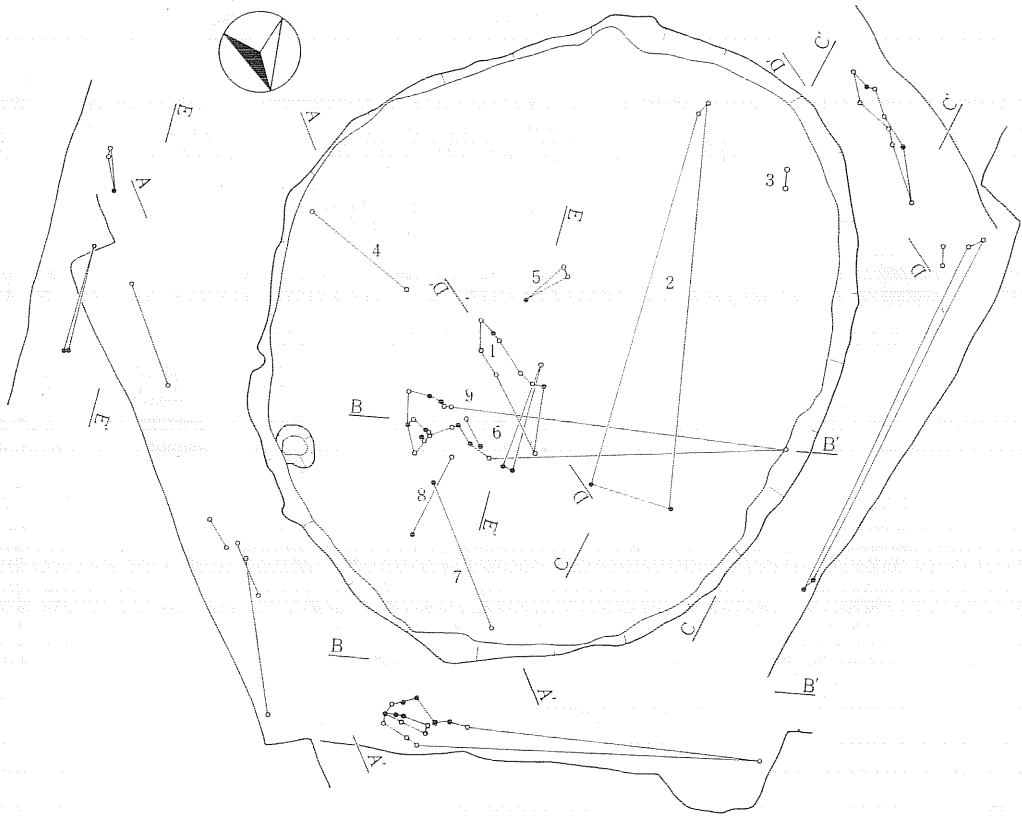
は概して良好であり、2は内面に煤状炭化物の付着が認められる。

第16図4 第I群3類

明瞭に羽状を呈するものではない。LR原体の横位回転部分が観察できるだけである。胎土中に繊維を含む。

第16図5～8 12～14 第II群1類a種

5は僅かに外反する口縁部であり、粗雑な沈線によって縄文部分と磨消部分とに区画される。7は弓なりに反る胴部であるが、磨消手法により横位楕円形区画文が描かれる。使用される原体は、RLRを縦位に回転施文したものである。12～14はいずれも小破片であり、13、14は同



第15図 遺物接合状況図

一個体であるが、沈線が横位に引かれ、縄文部分と磨消部分に画される。8は魚鱗状貼付文両端から横位沈線がのびる。

第16図9～11 第17図31 第Ⅱ群1類b種

同一個体である。頸部で緩やかな屈曲を見せる鉢形土器で、口縁は4単位の波状口縁をなす。波頂部は若干肥厚して突起化し、上端に2個所縦位の刻みが入られる。口頸部文様帯には、口縁波頂単位と対応して4単位の粘土紐貼付文が上下2段に施される。貼付文は上下段とも口縁波頂下でアクセントをもつが、上段貼付文においては、左右からの粘土紐の末端が入り組みその下に円形の貼付文が施されるものと、1本の孤隆線が横位に貼付され、その両側より下段の貼付文へ2本の隆線が貼付されるものがあり、両者は交互に配される。下段貼付文では、上位の粘土紐に沿って刺突列が並び、下位の2本の粘土紐は口縁波頂部と対応して下方へ向って垂下する。粘土紐貼付上にはL R縄文が横位回転施文される。

第16図15～23 第17図32 第Ⅱ群4類



第16図15と第17図32は同一個体である。口縁が僅かに内傾する円筒形の深鉢形土器である。原体はLRを用いているが、回転方向が一定せず羽状効果の表出されたところもある。16、17は同一個体であり、僅かに外反する口縁である。16～23とも使用された原体はLRである。

**第16図24、25 第Ⅱ群2類a種**

磨滅が著しいが、木目状撚糸文の施された胴部破片である。原体はL撚りのものである。

**第16図26～29 第Ⅱ群3類**

無文の土器である。26、27はやや外反する口縁部破片であるが、28は口唇1箇所へ刺突をもつ。29、30は胴部破片であるが、縦方向のヘラミガキによる調整が行われている。

**底部（第17図、図版13）**

**第17図33 網代痕**

33は、幅2mmの原体を用いた簡単網代編みである。底面は凹凸により一部不明瞭である。

**第17図36、37、38、40 笹葉状圧痕**

37は、現状では禾本科植物の葉を単独で置いた場合と複数の葉を並置した場合が推察されるが、現存部が寸以下のため、葉を重複して置いた可能性を残すものである。36、38、40は葉が重複しているものである。36、40は葉をずらして重ねただけであるが、38は1枚の葉に2筋の切れ目を入れ他の葉をからませたものである。この手法はSX(R)出土の底部にも見られる。

**第17図39 木葉痕**

38は木ノ葉の痕が明瞭に残っているもので、底部を利用した土製円盤であろう。

**第17図34、35 無圧痕**

圧痕の無いもの及び判別不可能のものである。

**土器接合状況**

SI001出土の土器破片は、総数357点である。これら破片のうち、接合破片は62片であり、それらは9つの資料に接合する。その内訳は以下の通りである。

口縁部接合資料 1 (第15図1＝第17図31)

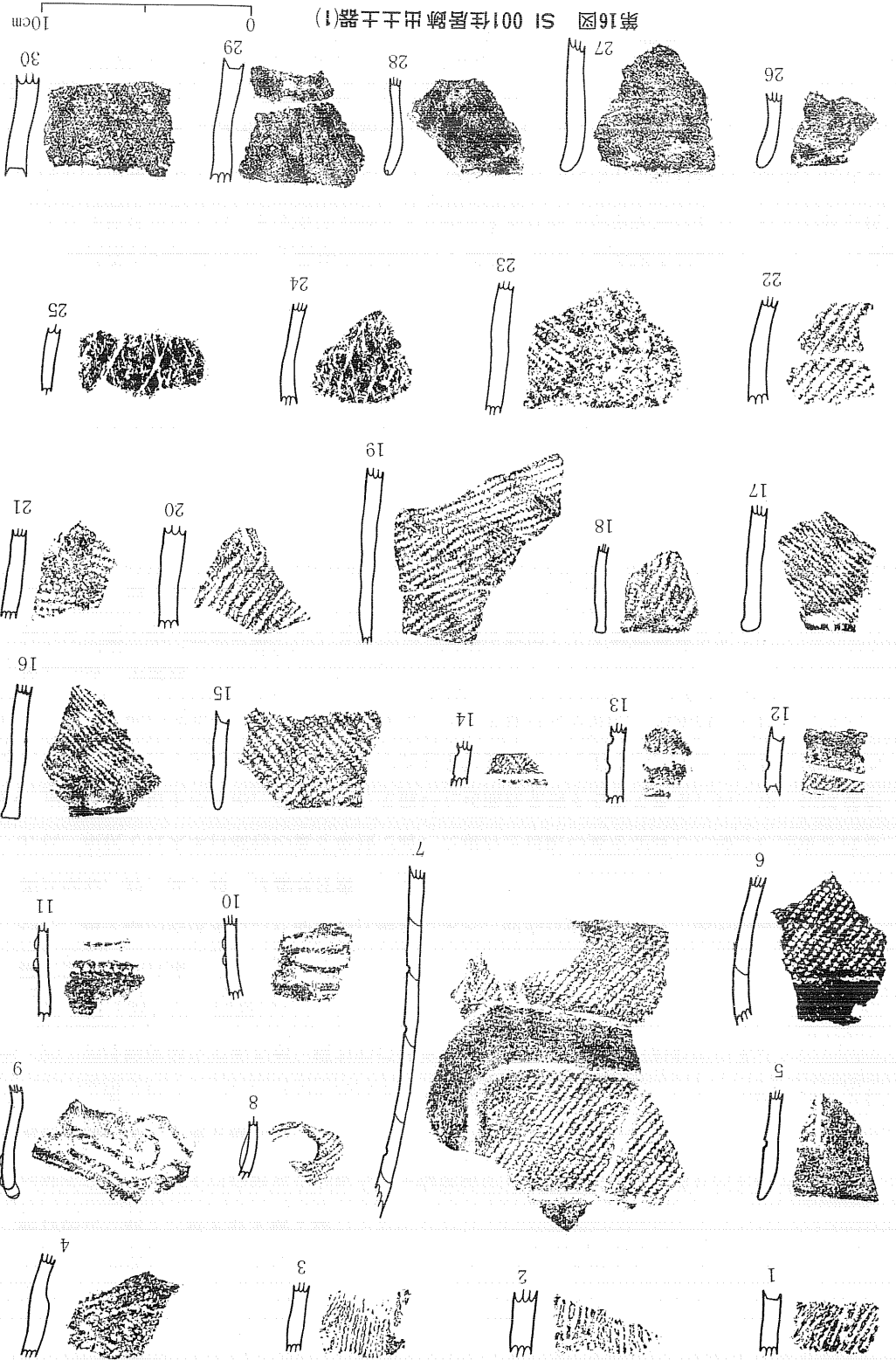
胴部接合資料 7 (第15図2～8、うち第15図2＝第16図7)

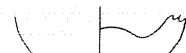
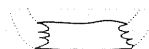
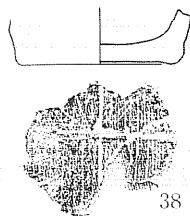
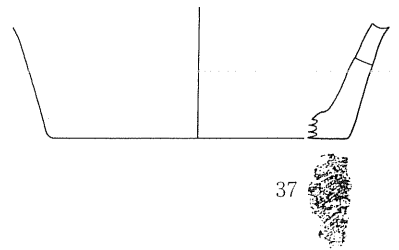
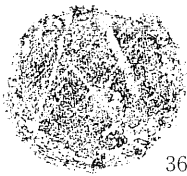
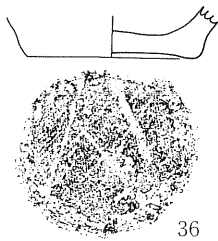
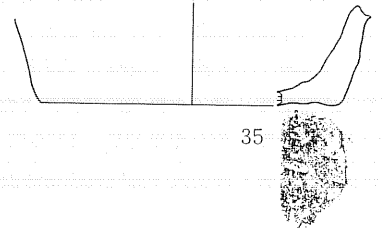
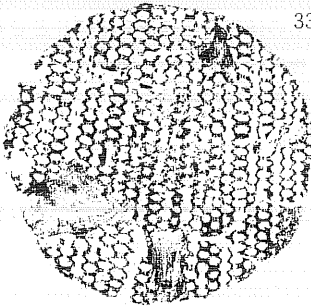
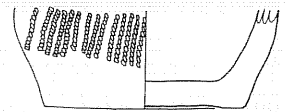
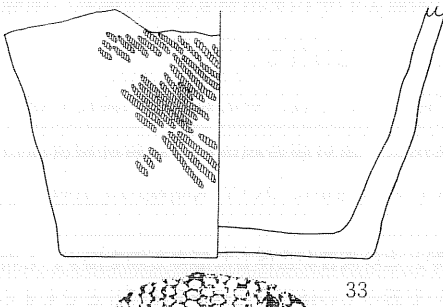
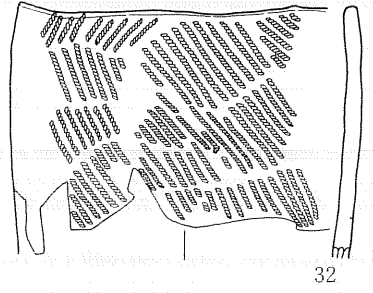
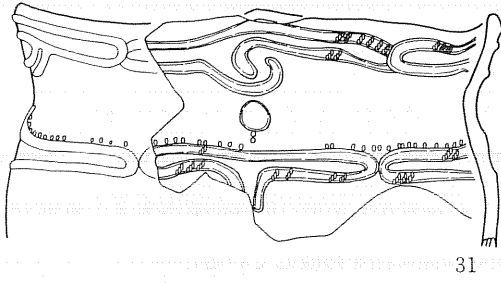
底部接合資料 1 (第15図9＝第17図33)

※括弧内の図番号は、土器接合状況図と土器拓影図及び実測図を対応させたものである。

これら土器片の接合は、その殆どが堅穴内北寄の土器片集中範囲内で行われ、接合距離の最長のもの2mを測る。例えば、第15図9は、18片の破片が接合して第17図33の底部となるものであるが、接合する破片が堅穴内北寄の土器片集中範囲に中心をもち、1片だけ1.6m離れた西壁際出土の破片が、それらに接合している。

第16图 SI 001住层出土土器(1)





第17图 SI 001住居跡出土土器(2)

0 10cm

## ii) 石器 (第18図、図版39)

S I 001から出土した石器は、石鏃1点、搔器4点、磨製石斧1点、凹石1点の計7点である。石鏃(第18図1)は両面とも細かな押圧剝離が施されている。搔器(第18図2~5)は平面形が楕円形、三角形、略方形を呈し、刃部は全辺または1、2側辺に背離面からの調整によって作り出されている。磨製石斧(第18図6)は小形のもので、頭部のみである。擦痕は長軸方向に走る。凹石(第18図7)は川原石を用い両面に凹を形成している。

<小結>: S I 001住居跡の時期は、その決定資料となる土器が必ずしも良好な状態で検出されているとは言い難く、覆土中には他時期の土器が混入しているのであるが、概ね、中期末~後期初頭、主として大木10式期周辺に位置づけられると思われる。

S I 001以前に営まれた、より古い時期の住居跡については、その時期を明確にし得ないが、S X (U) 001とした埋設土器が、その埋置状態から、第VI層黄褐色火山灰質砂層堆積以前に営まれた住居跡の炉の可能性が考えられ、S I 001の石囲炉についても同様の可能性が示唆される。

註1 「複式炉」とは、本来「石組炉」と「土器埋設炉」との両者が合体した形のを指す。したがって、本遺構の炉の様に「埋設土器」を付設しない形態のものは、「馬蹄形石組炉」とでもするべきであろうが、ここでは機能面に対する考慮からあえて「複式炉」の名称を使用した。

註2 大木9式~10式には、口縁部の無文化した土器例が多い。器面全体が無文となるものが当期土器群中に存在するか否か詳らかでない。

註3 田村誠一「大曲1号遺跡」『岩木山』所収 1965年

註4 成田滋彦、他『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ) 三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第33集 1976年

註5 小野忠明・井上久『三内丸山遺跡調査概報』 1970年

註6 十腰内I式、大曲I式、門前式等があり、それについては後に触れる。

## II 土 壙

### SK 001 (第19図、図版3)

S K 002南側の2-Dグリッドにあり、VI層上面で確認された。楕円形を呈し長径1.20m、短径0.35m、深さ0.55mで、底面にはわずかに凹凸があり、壁はやや急に立ち上がる。

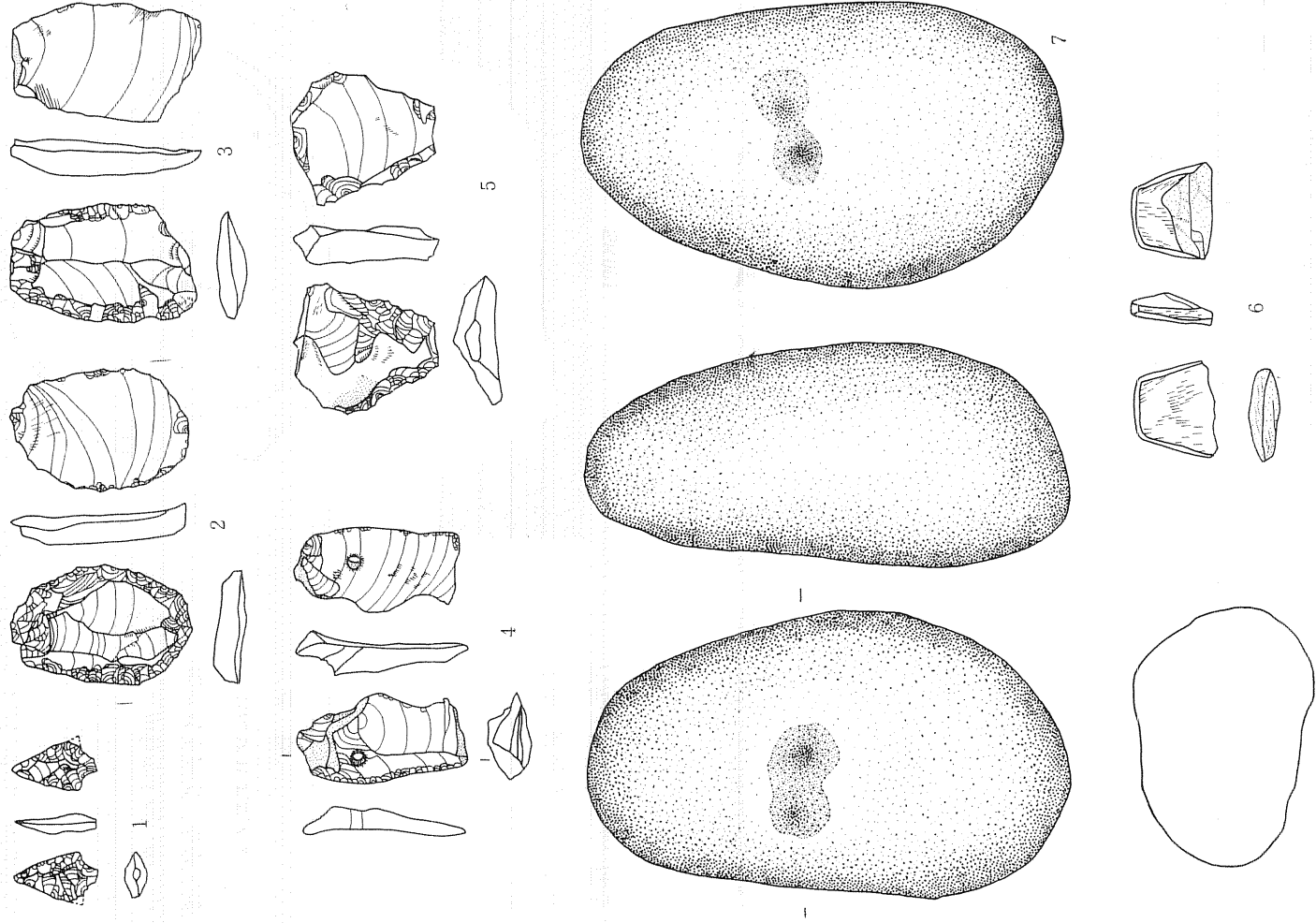
### <遺 物>

#### i) 土器 (第23図1~4、図版14)

1~3は縄文のみ施文された胴部破片であり、胎土、焼成ともに良い。4は小破片であり、磨滅が著しいが、2条の横位の沈線が認められる。

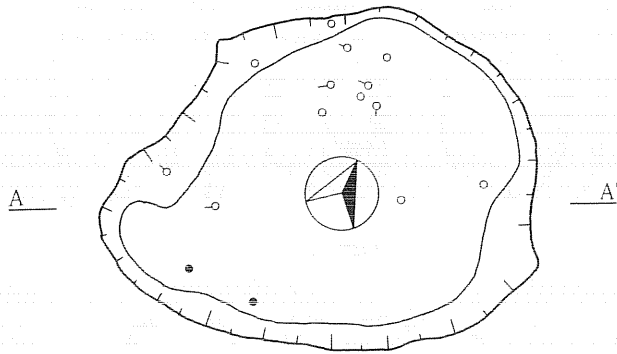
### SK 002 (第19図、図版3)

2-Dグリッド内で、S K 001のすぐ北側にあり、VI層上面で確認された。不整楕円形を呈

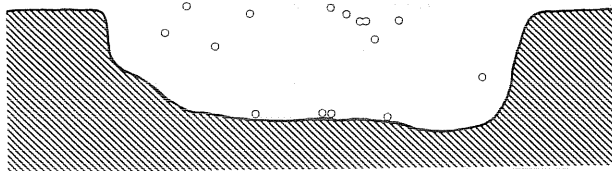


0 5 cm

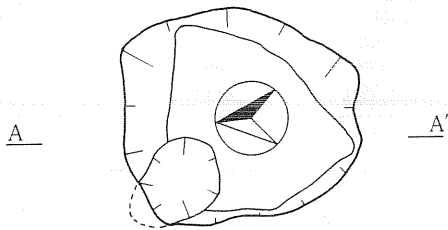
第18图 SI 001住居跡出土石器



A H = 223.900 m



SK001



A H = 223.900 m



SK002

第19図 SK001・002土坑

深さ0.28mで底面には径5~20cmの角礫が多数あり、凸凹が激しい。壁は緩やかに立ち上がる。

<遺物>

i) 土器(第23図5~12・第24図34 図版14)

5、6は同一個体である。太いLR原体を横位回転施文した後、口縁に沿って2条の平行沈線がめぐらされる。沈線も比較的太いものである。7、8も同様1~2条の沈線が横位にめぐ

し長径1.20m、短径1.30m、深さ0.30mで底面は平坦である。北壁は底面近くが急で上端は緩やかに立ち上がる。南壁も緩やかに立ち上がる。

<遺物>

出土せず。

SK 003(第20図、図版3)

調査区北西端の3-Fグリッド内にあり、VI層上面で確認された。不整形円で長径1.65m、深さ0.35mである。底面には径5cm前後の角礫や15~20cm大の川原石があり、凹凸がある。壁は急に立ち上がる。

<遺物>

出土せず。

SK 004(第20図、図版4)

7-D、7-E間の東寄りであり、V層上面で確認された。不整形形で長径1.15m、短径1.05m、

らされるものである。9、11は3条1組の沈線と磨消縄文手法によって文様構成されるものであり、10は粗雑な沈線文の施されるものである。9は壺形土器肩部破片、11は内傾する鉢形土器口縁部破片である。12は縄文のみ施された胴部破片である。

ii) 石器 (第25図、1~5 図版39)

搔器1、凹石2、不定形石器2が出土している。搔器は略円形のもので、側辺に剝離調整を施している。凹石は川原石を使用したもので、凹は浅い皿状、ロート状を示す。

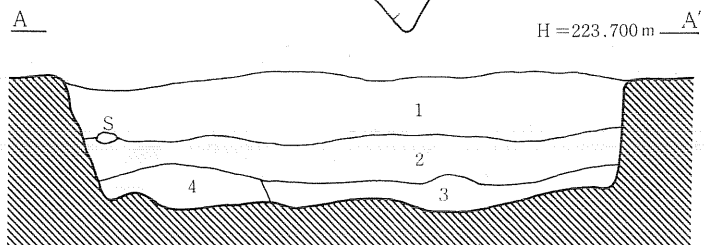
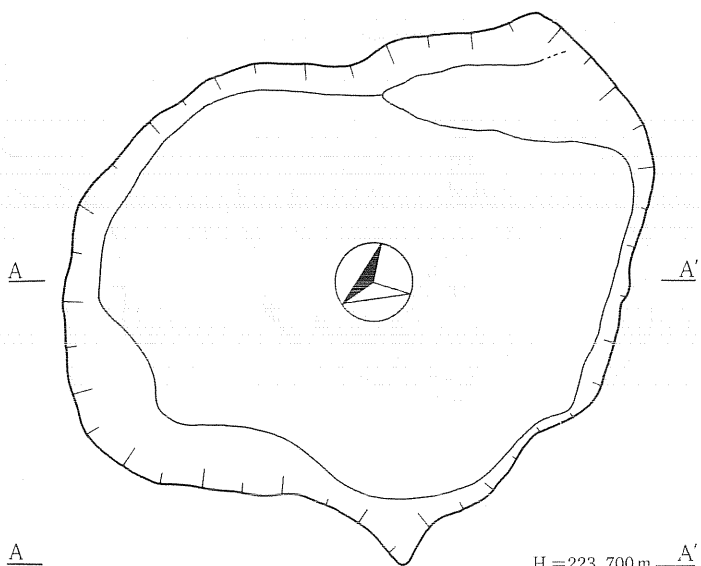
不定形石器はその1辺を刃部としている。

SK 005 (第21図、図版4)

2-E、3-Eグリッドにかけて存在し、VI層上面で確認された。不整形円形で径1.65m、深さは0.30m、底面はやや凹凸し、壁は緩やかである。

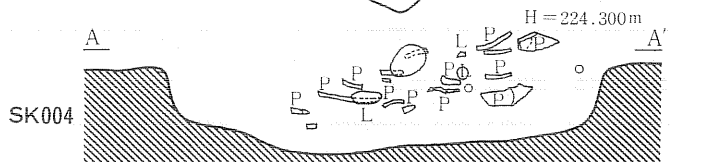
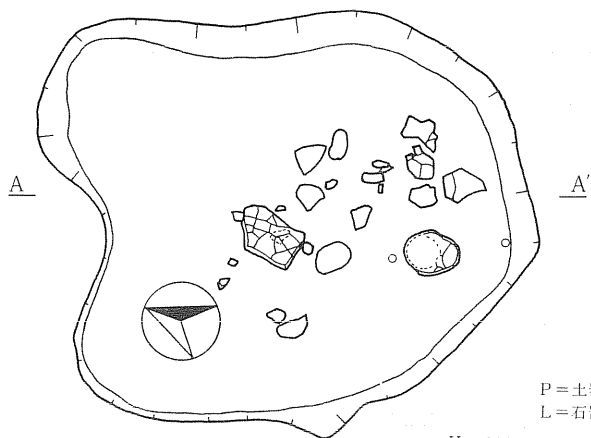
<遺物>

i) 土器 (第23図13~16、図版15)

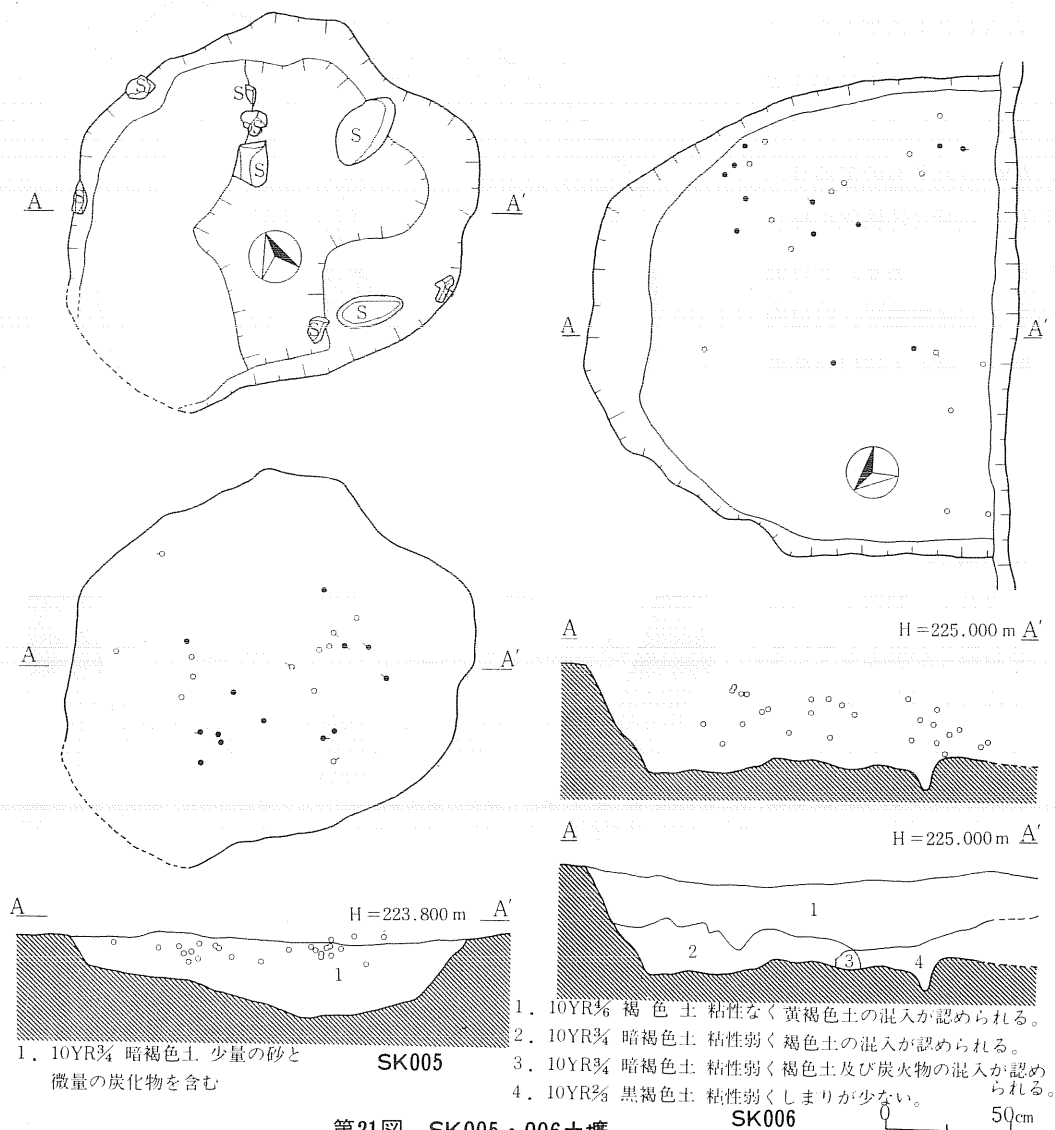


SK003

1. 10YR<sub>4/2</sub> 褐色土 軟かく粘性に富み少量のロームと微量の小石、極微量の炭化物が混入
2. 10YR<sub>3/4</sub> 暗褐色土 軟かく粘性に富み少量のロームと極微量の小石、炭化物が混入
3. 10YR<sub>3/4</sub> 暗褐色土 軟かく粘性に富み極少量のロームが混入
4. 10YR<sub>5/6</sub> 黄褐色土 軟かく粘性に富みかなり大量のロームが帯状に混入



第20図 SK003・004土壌



第21図 SK005・006土壌

13はLR原体を横位に、14、16は縦位に回転施文した縄文のみの胴部破片である。15は口縁部破片であるが、口縁に併行して撚紐の圧痕が1条施される。撚紐圧痕下は縄文が施される。

ii) 石器 (第25図6 図版39)

扁平な川原石を使用した礫器で、周縁部の約 $\frac{1}{2}$ が打ち欠かれている。

SK 006 (第21図、図版5)

10-AグリッドのV層上面で確認された。南側半分は路線外のため調査できなかったが、円形を呈するものと思われ、径約1.90 m、深さ0.35 mである。周囲には東西方向に礫群が並んで走



り、土壇内覆土にも径5～25cm程の礫が多量に存在する。

<遺物>

i) 土器 (第23図17、第24図18～33、35～37、図版15)

17～21は同一個体である。深鉢形土器胴上半の文様帯部分であるが、上限を3条下限を2条の平行沈線で画し、上限を画する平行沈線に接して渦巻状沈線文が描かれ、下限との間が斜位の3条の沈線で連結されている。この単位文様は、横位

に展開するものと思われる。地文としては、L R原体が横位回転施文され、文様描線は比較的太いものである。22は僅かに外反する口縁部破片であるが、口縁に沿って3条の平行沈線がめぐらされている。23～27は、磨消縄文手法によって幾何学的な構図をとるもので、矩形区画文が描かれる。23～25は同一個体である。28～30は縄文のみの施文された口縁部破片であり、僅かに外反するが、直立する平緑のものである。31～33は縄文のみ施された胴部破片であり、縄文原体はL Rのものを多用し、斜位回転施文している。35～37は無文のものであり、35は頸部でくびれる口縁部破片である。

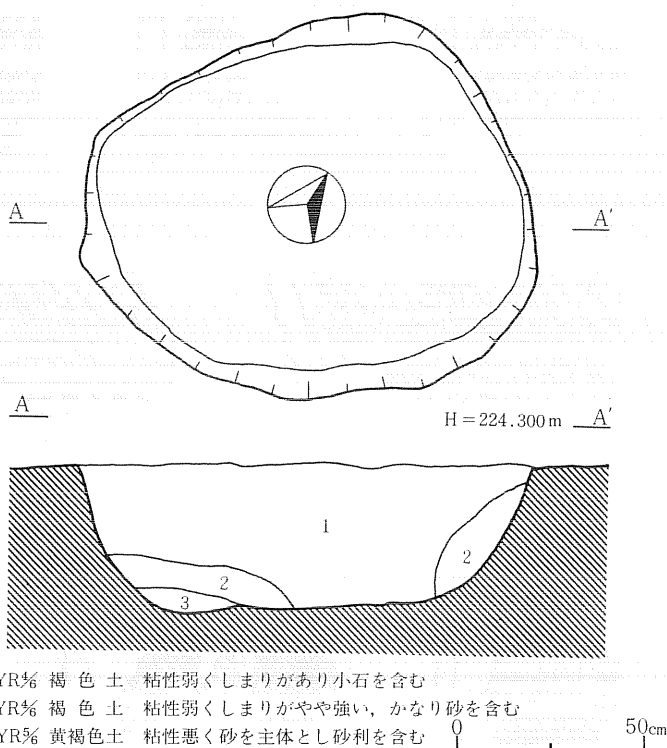
III 土器埋設遺構

SX (U) 001 (第26図、図版6)

捨場SX (R) 001の北西約2m、5-Bグリッドで単独に検出された。第VI層(黄褐色火山灰質砂層)上面で確認され、土器の周囲には径5～10cmの礫が配されており、礫は火熱を受けて赤変していた。土器内の覆土中には塊状の炭化物を含み、土器外面もやはり加熱による変化が認められた。この土器の埋設穴は、土器よりもやや大きめに掘られ、その幾分北側に土器を埋設している。土器は埋設穴底面より2cm程浮いて検出された。

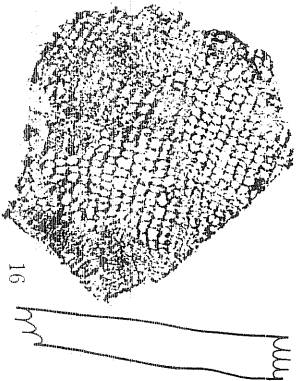
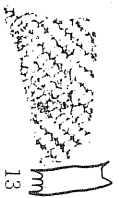
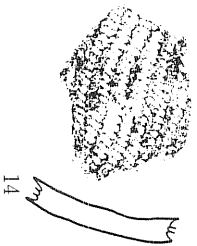
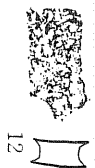
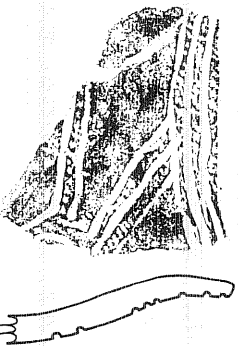
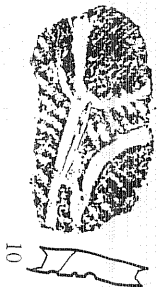
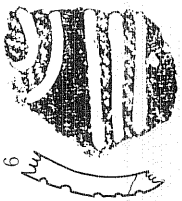
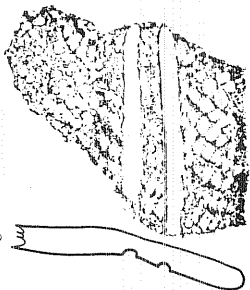
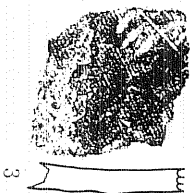
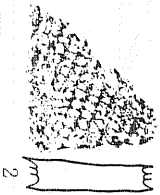
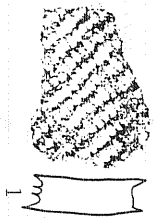
i) 土器 (第27図、図版14)

縦位の条痕が施され、口縁部を欠失した土器で、残存部は器高205mm、底径83mmを測る。外



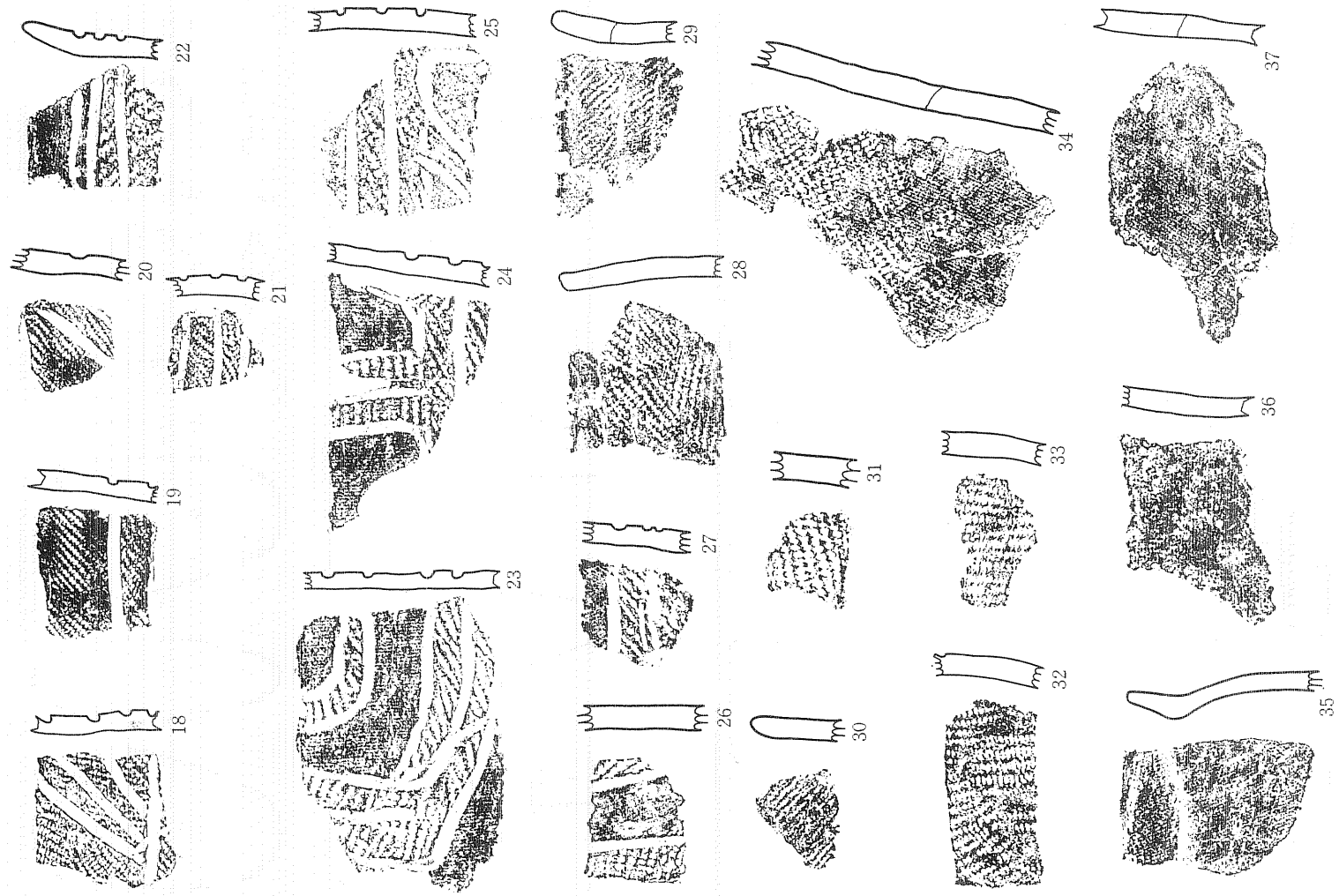
第22図 SK007土壇

- 1. 10YR<sub>6</sub> 褐色土 粘性弱くしまりがあり小石を含む
- 2. 10YR<sub>6</sub> 褐色土 粘性弱くしまりがやや強い、かなり砂を含む
- 3. 10YR<sub>6</sub> 黄褐色土 粘性悪く砂を主体とし砂利を含む



第23图 土壇出土土器(1)

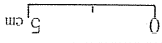
0 5 cm

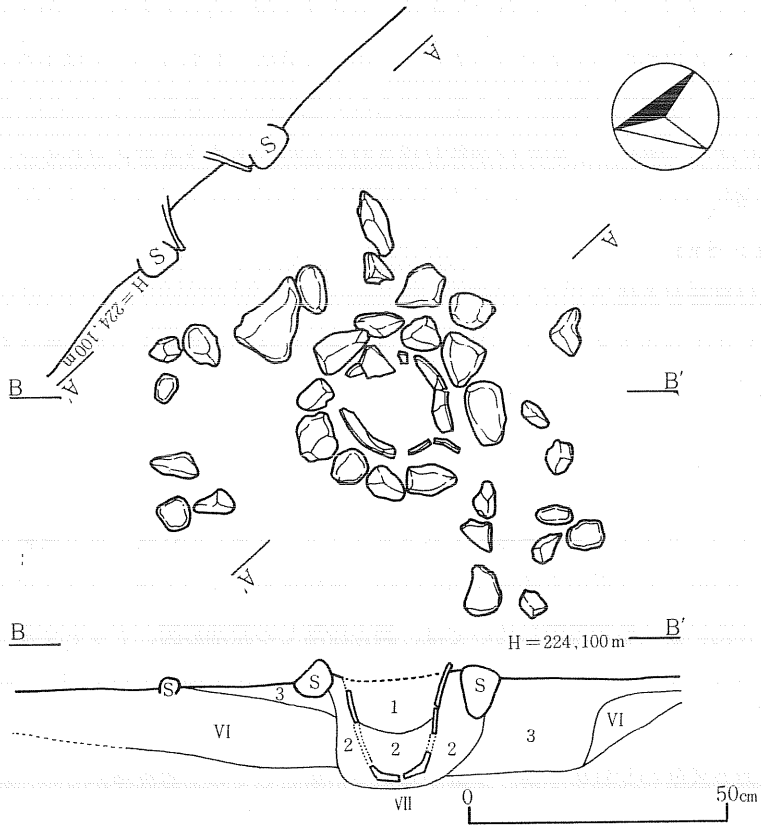


第24图 土坑出土土器(2)

0 5 cm

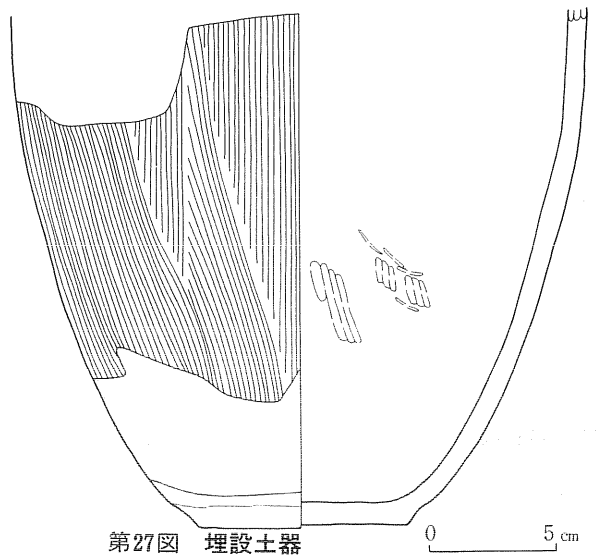
第25图 土壩出土石器





第26図 SX(U)001 土器埋設遺構

面に施された条痕は、巾、条間とも2mmである。内面底部及び胴上部は2次的加熱の為赤変しており、胴上半部には煤状炭化物が付着している。胴中程に部分的にヘラ状工具による調整痕が見られ、その巾は1~4mmである。色調は外面がにぶい褐色、内面は橙色で、胎土は粗く、小石、石英、砂粒が含まれ、焼成はややもろくなっている。



第27図 埋設土器

＜小結＞：SX（U）001は、内外に加熱による変化が認められる事から、炉としての機能を果していたものと思われる。第VI層（黄褐色火山灰質砂層）を掘り込んで構築されているが、かつては第V層（砂混入砂礫層）から掘り込まれた住居跡内に存在していたが、住居跡の壁が河川の氾濫によって流失し、炉だけが取り残されたものであろうと考えられる。

#### IV 捨場

##### SX（R）001

###### ＜調査及び整理の方法＞

SX（R）001—以下SX（R）と略す—は、それ自体が目的をもって構築され、使用、廃絶された遺構として検出されたものではなく、遺構に伴う遺物及びその出土状況によって確認され、それらの記録、分析によって性格等の決定され得べき遺構であった。

したがって調査段階に於いては、遺物及びその出土状況の詳細な記録が必要とされ、遺物一点ずつのナンバーリング、平板測量によるドットマップ（ $\frac{1}{200}$ ）の作成、遺方測量による出土状況図（ $\frac{1}{40}$ ）の作成、5ヶ所の土層断面図の作成、遺物出土範囲の5cmコンターによる原地形図の作成を行った。また整理段階に於いては、調査段階での原地形図、ドットマップ、土層断面図を用い、遺物の水平分布図、垂直分布図の作成、土器片中の精製・粗製別、口縁部・底部別の分布図の作成を行い、接合複元作業と併わせて土器の個別別接合関係図の作成を行った。

しかし、調査段階の記録の不備、多量の遺物を対象としての土器洗浄からの一連の作業過程で起きた若干の資料欠落などにより、これらの図面作成には多少の制約が伴った。したがって掲載した図も可能な限りのものを載せた訳であるが、それによってSX（R）の性格等の把握が完全に成し得るとは考えない。

###### ＜SX（R）の概観＞

###### a 原地形及び遺物水平分布（第29図）

遺物が集中して検出されたのは、5-A・B～9-A・Bグリッドにかけてであり、現表土は畑地耕作土として利用されている。この現表土面は北から南の緩斜面となっており、さらには調査区南側の水田面へと連なっている。

SX（R）は、この緩斜面表土を除去した後に確認された。農道南端よりBライングリッドまで、表土直下は緩斜面に沿って第VI層黄褐色火山灰質砂層（二次堆積層）となっているが、B～Aライングリッドにかけて、漸移的な暗褐色～黒褐色土の溝状のプランが確認された。溝状プランは、5-A～9-A、5-B～9-Bグリッドにかけて北へ向って開く扇形を呈し、第VI層面はこのプランに沿って急激に落ち込んでいる。落ち込みの最下部とプラン際では約60cmの高低差があり、また、発掘区南端であるAライン際は、最下部に比べて40～50cm程高くなっている。

遺物は、幅3 m範囲ではほぼこの溝状プランに沿って出土したが、その分布は東側で少なく、中央部から西側にかけての窪みに多いという偏りを見せている。さらにこの分布状況は遺物間のある程度のみとまりを示している。9-A~9-Bラインを中心として幅約4.4 m、溝状プランに沿っての長さ約8.4 mに1ブロック、7-B~7-Cラインを中心として幅約3 m、長さ約6.4 mに1ブロック、5-B~6-Bラインを中心として幅約3 m、長さ約7.2 mに1ブロックの3箇所がそれである。これらのまとまりは、SX(R)覆土である遺物包含層堆積時の原地形にも左右されたであろうが、単に自然営為の遺物偏在という現象のみにとどまらないことは、後述する土器接合関係がこのまとまりの中で認められ、まとまり相互間では認められないということからも窺われる。

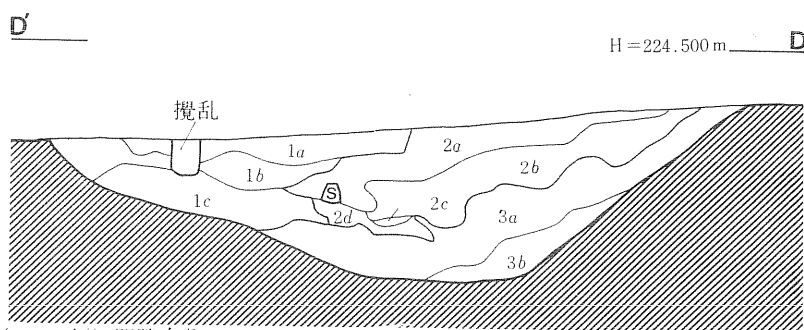
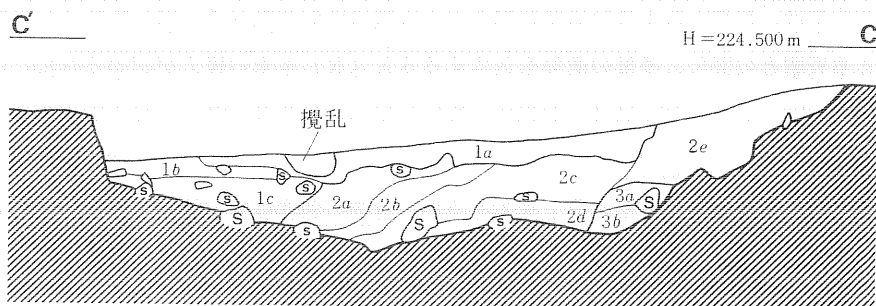
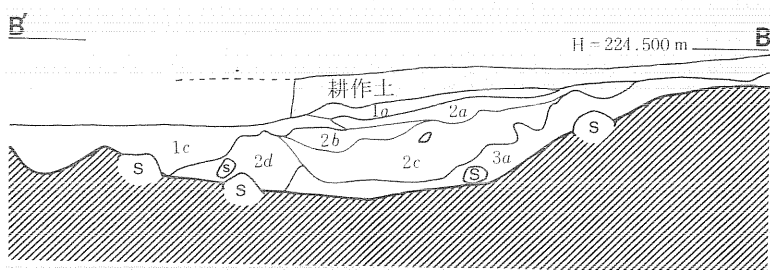
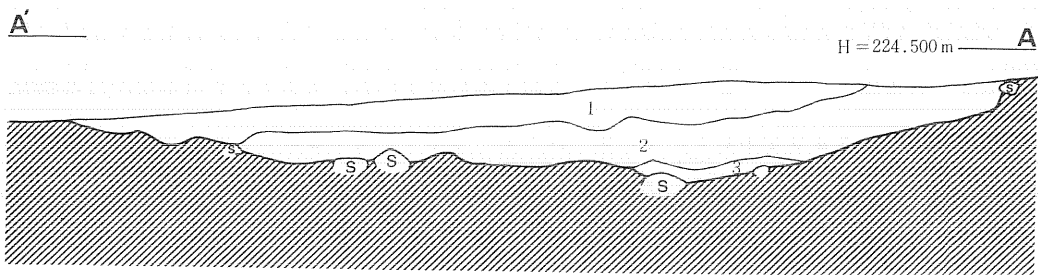
#### b 層位及び遺物垂直分布 (第28・30・31図)

SX(R)の占地する5-A・B~9-A・Bグリッドは、層厚10~20cmの耕作土によって覆われている。この耕作土中からも土器細片、石器類が攪乱された状態で出土したが、溝状プランの北側では、耕作土直下に第VI層黄褐色火山灰質砂層面が広がる。対してプラン南側では、耕作土と第VI層との間に、多量の遺物を包含するSX(R)本来の覆土が認められた。この覆土は3層に大別された。第1層は、黄褐色~褐色を呈し、砂及び小礫からなる層であり、多少の遺物を含む。第2層は、褐色~暗褐色~黒色を呈し、多量の遺物及び炭化物、礫等を包含する。第3層は、黄褐色を呈する砂質土層であるが、遺物の包含は殆ど認められない。

遺物と垂直分布を見ると第2層にその分布の中心が認められる。さらにこの第2層出土の土器は、1個体もしくはそれに近い大破片となるものが多く、それに対して第1層出土の土器は細片が多く、接合する資料も殆ど無い。このことは、第1層及び第2層の形成の差異に起因すると考えられる。即ち、第1層はその堆積に関して自然営為によるところの多い二次堆積層であり、したがって中に包含される遺物も本来的な在り方を示してはいない。対して、第2層は自然営為による再堆積作用を殆ど受けておらないと考えられ、したがって遺物の在り方もより本来的であると考えられる。

#### c 遺物出土状態 (第32図、図版11)

SX(R)第1層、第2層中心に包含されていた遺物は、前にその水平分布に関して3つのまとまりを観察し得た事を述べたが、個々のまとまり内ではその出土状態において何ら意図的なものを認め得なかった。すなわち、土器について一括状態で出土したものは全て横倒した状態で出土しており、小形土器を除いては土圧によって原形を留めない程細片に破碎されていた。また破片として出土したのも、一括破片中に混入するもの単独に出土するものと文字通りの破片であり、さらにそれらの重なり状態も、一括破片のものでも3~3片が重なるという程度であった。また、小形土器は原形を留めてはいるものの、多くが器体に亀裂を有し、中に包

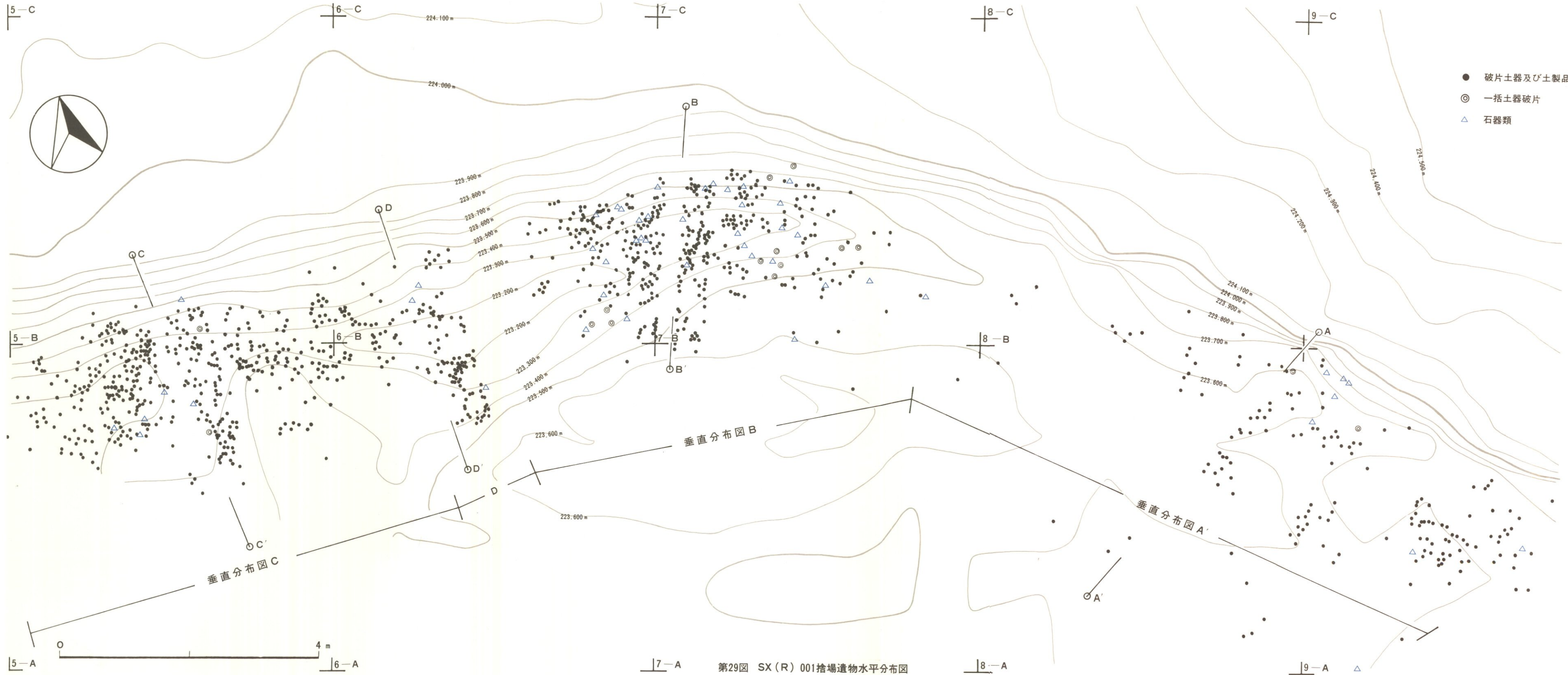


- |   |            |
|---|------------|
| 1a 褐色(10YR $\frac{3}{4}$ ) 間隙有り                           | } VI層の再堆積層 |
| 1b 黄褐色(10YR $\frac{5}{6}$ ) 間隙無し                          |            |
| 1c 黄褐色(10YR $\frac{5}{6}$ ) 間隙無し, 炭化物を含む                  |            |
| 2a 暗褐色(10YR $\frac{3}{4}$ ) 間隙無し, 粘質, 炭化物を含む              |            |
| 2b 暗褐色(10YR $\frac{3}{4}$ ) 間隙無し, 粘性強, しまっている             |            |
| 2c 黒褐色(10YR $\frac{3}{2}$ ) 間隙やや有, 粘性弱, 炭化物多く含む           |            |
| 2d 暗褐色~黒褐色(10YR $\frac{3}{2}$ ~ $\frac{3}{4}$ ) 間隙有, やや粘質 |            |
| 2e 暗褐色(10YR $\frac{3}{4}$ ) 間隙大, 粘性弱, 炭化物多く含む             |            |
| 3a 黄褐色(10YR $\frac{5}{6}$ ) 間隙無し, 粘性強                     |            |
| 3b 褐色(10YR $\frac{3}{4}$ ) 間隙無し, 粘質                       |            |

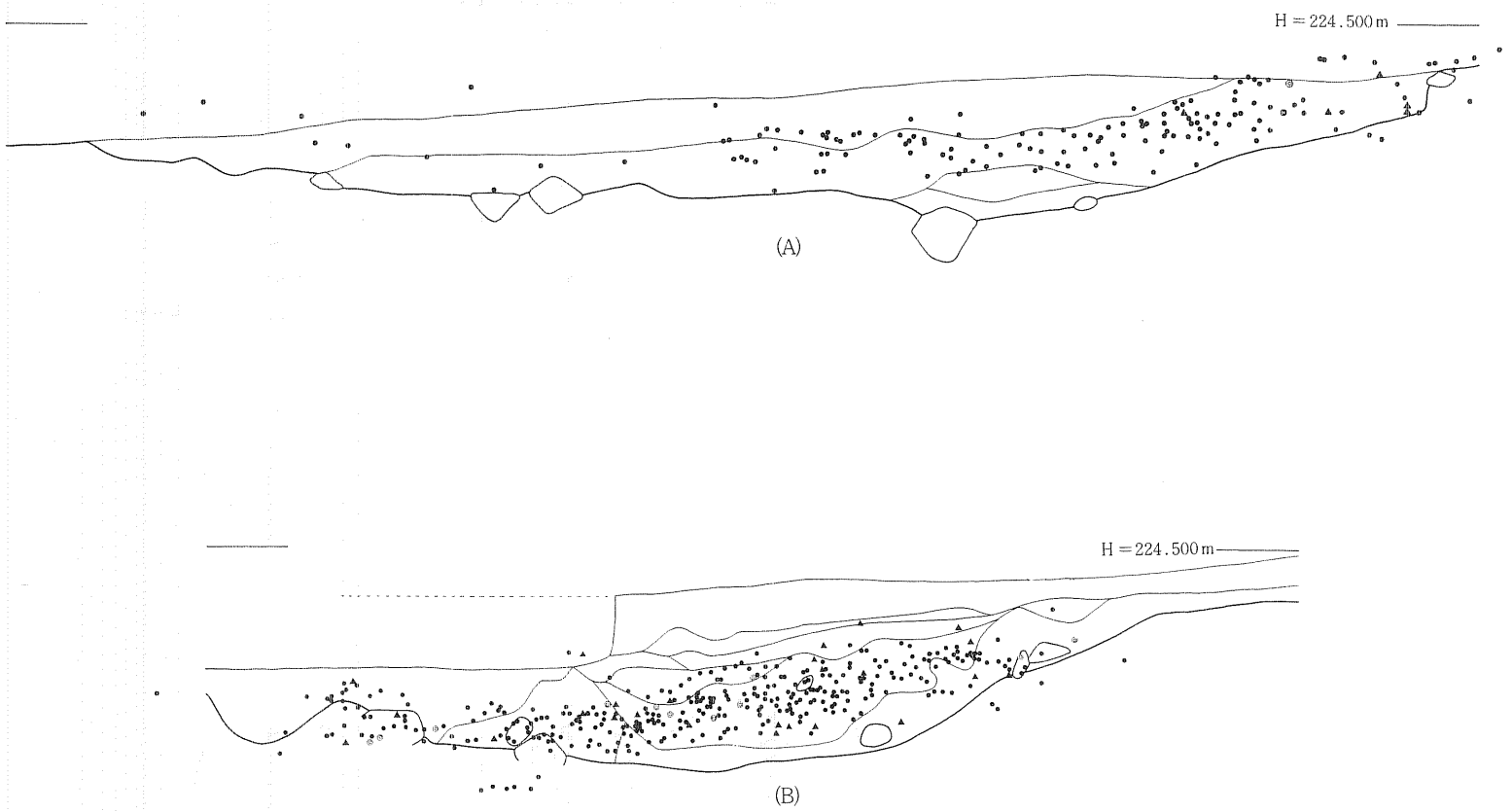
0 1 m

第28図 SX(R)001 捨場土層断面図



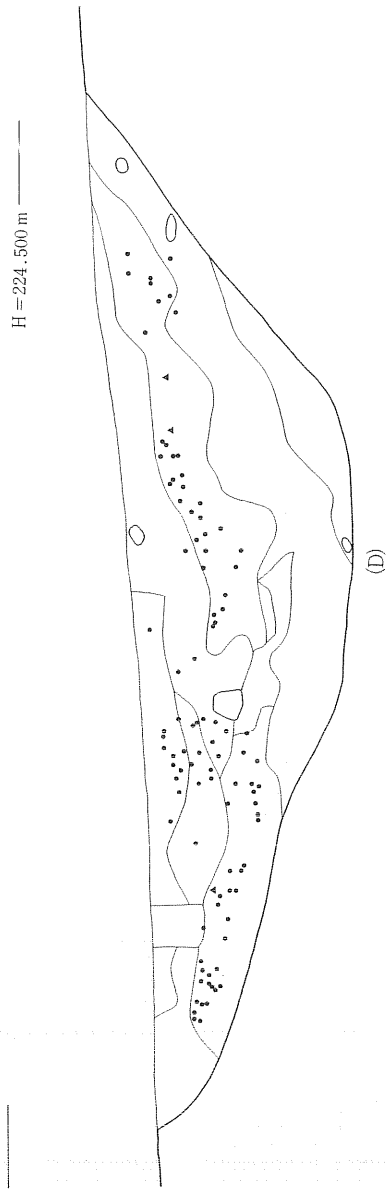


第29図 SX(R) 001捨場遺物水平分布図



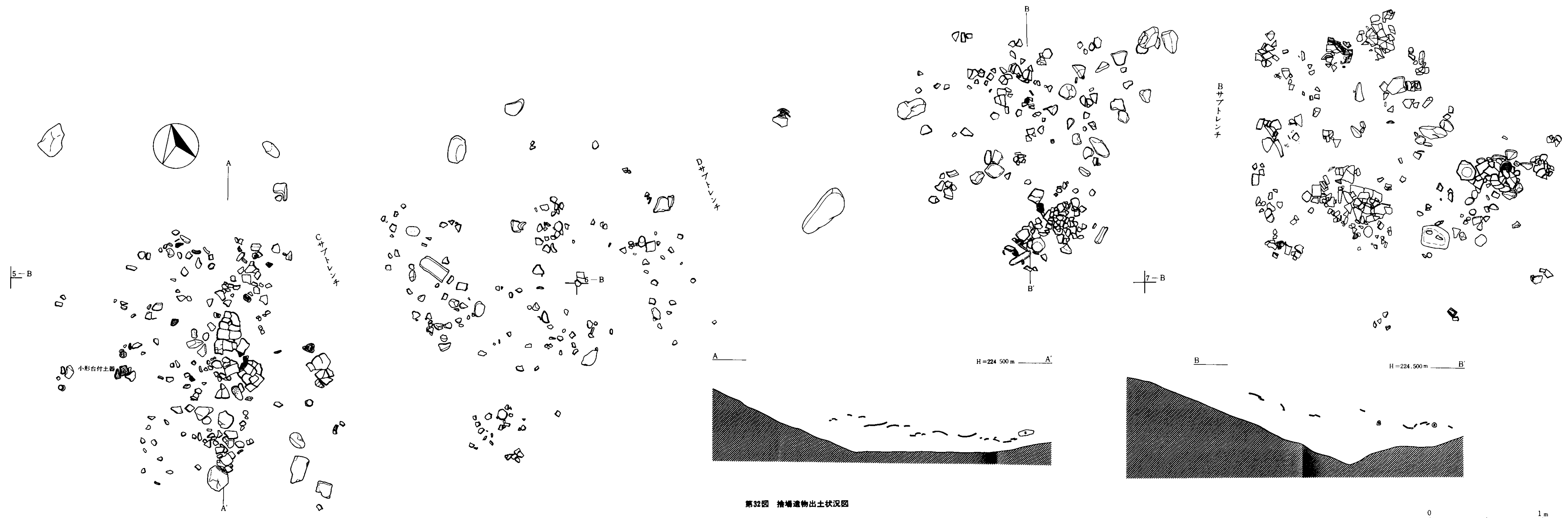
第30図 SX(R)001 捨場遺物垂直分布図(1)

0 1 m

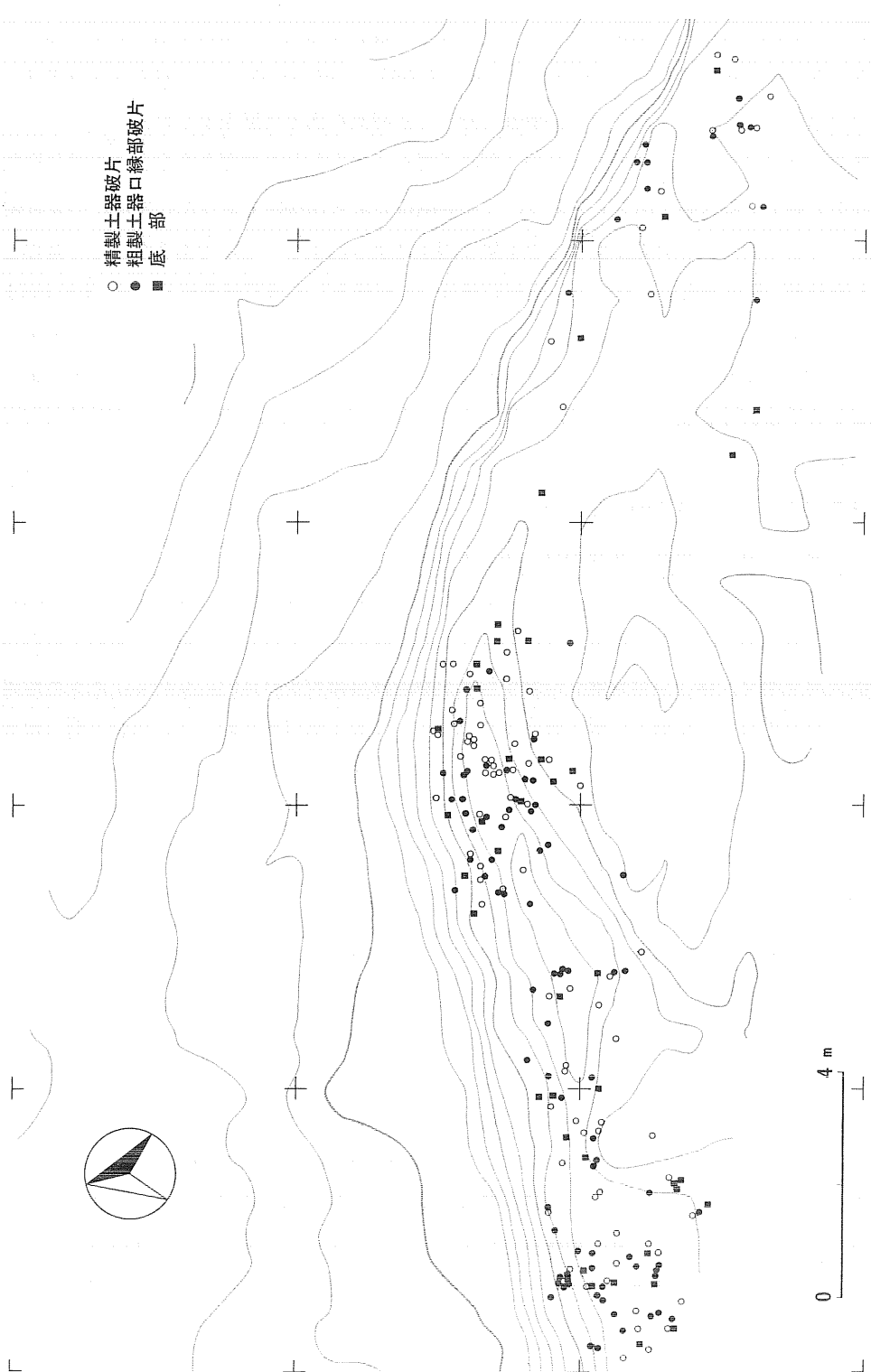


第31图 SX(R)001 捨場遺物垂直分布图(2)





第32図 捨場遺物出土状況図



第33図 精粗別土器破片水平分布図

含層と同質の土を充填させた状態で出土した。石器及びフレイク類も土器との関係、石器同志の関係で、意図的なものを観察し得ず、個々が単独に混在するという状況で出土している。

S X (R) 出土の遺物はその殆どが、この様に意識的に「置かれる」という様な出土状態を示すものではなかったが、耳飾りと小型磨製石斧だけが特異な出土状態を示した。

耳飾りは、Bサブトレンチ調査中に第2層最下部から出土したものであるが、全く同じ形態のものが2個1対の状態出土しており、その間隔はおよそ12cm程であった。また、小型磨製石斧は、S X (R) プラン確認面すなわち第2層上部より出土したものであるが、その基部を下にした状態、立位で出土した。小形磨製石斧は一応形態としては石斧を感じさせるものではあるが、その規模等からして実用に供されたものとは考えにくい。このような耳飾、小形磨製石斧といった非生産的遺物が特異な出土状態を呈したことは、S X (R) の性格の一端を示唆する事実として注目される。

### ＜S X (R) における遺物の在り方＞

#### a 精製・粗製、口縁部・底部別の分布（第33図）

第33図はドットマップより作成した一括破片を除く精製・粗製別、口縁部・底部別の分布状況を示した図である。ドットは全て接合しなかった単独の破片を点として落したものであるが、この図を見る限りでは、これら破片の分布に何ら規則性は認められない。しかし、ドットによって示される精製及び粗製の口縁部破片数を見ると、精製土器口縁部破片が、粗製土器口縁部破片に比べて予想以上に多く、対して付図に示す様に、接合復元の可能であった一括破片は、粗製土器が精製土器よりも多い。この事実は、S X (R) 出土の単独破片及び一括破片から推測される全体の個体数において、精製土器、粗製土器のそれぞれの占める割合には大きな差の無い事を示すものと思われる。さらに、粗製土器において復元可能の一括破片が単独の破片よりも多く、精製土器においては全く逆の現象が認められたという事実は、粗製土器の破損がS X (R) 外で行われた可能性の強い事を示唆していると思われる。

#### b 土器個別別接合関係（付図）

S X (R) 出土土器に於いて、個別別の接合関係を図によって示すことができたのは23個体である。これらの個体は、破片一片毎を図面上に点として落とすことが可能だったものであり、実際には一個体分の破片が点として落とすことの不可能な程集中している例、即ち一括土器片としたものも相当数あり、従って個々の接合関係も必ずしも等質的な資料として呈示されている訳ではない。ここでは、土器個別別接合資料のまとまりのようなものについて述べる。

前に、S X (R) 出土遺物の分布について3箇所のみが認められることを述べた。ここで、このまとまりを西側からCブロック、Bブロック、Aブロックとして各ブロック毎に記

述する。

Ⅲ Cブロックで個体の存在を想定できるような資料は17あり、地文以外に文様の施された所謂精製土器、小型土器、注口土器などが8、粗製土器6、底部大破片が3である。このまとまり内の接合状況の特徴は、一個体の破片の空間に占める割合が大きいことである。例えば、T57とした個体では、最も離れた破片でその距離が4.5 m程もあり、このような個体が集った結果、まとまり全体の様相としては錯綜したものになる。石器類では、石鏃、凹石、調整剥離をもつ剥片、フレイクが一点ずつ出土している。

Ⅳ Bブロックでの総個体数は、22であり、小形土器を含めた精製土器8、粗製土器11、底部大破片3である。Bブロック内の接合状況の特徴は、一個体の破片の空間に占める割合が小さく範囲がかなり限定されることで、したがって一括破片からなる個体も多い。その結果、個体数が多いにもかかわらず、まとまり全体の様相としては整然としたCブロックと対照的なものとなる。土製品として耳飾りが一對、石器として、石鏃2、石匙2、石錐1、凹石1、小形磨製石斧1、剥離調整の施された剥片1、フレイク1、石核1、敲き石1が出土している。

Ⅴ Aブロックにおける総個体数は7とA、B、Cの3つのブロック中で最も少ない。内訳は精製土器1、粗製土器6である。このまとまり内においては、破片の占める空間の大きい個体と小さい個体の両者が存在し、また個体数が少ないため、Cブロックのような錯綜した印象を与えることはない。石器としては、石鏃1、石皿1、フレイク2が出土している。

土器個別別の接合には、破片の占める空間の大きいものと小さいものが認められたが、破片の接合関係から導かれたまとまりと、破片の分布状況から認められたまとまりとは一致する。即ち、個別別の接合関係は、分布状況から認められた3つのまとまり内で完結しており、さらには、3つのまとまりには以上述べてきた異った様相が認められる。

#### <出土遺物>

##### i) 土器 (第34~52図、図版16~35)

SX(R)から出土した土器は、破片で1,000余点程である。このうち、ほぼ完形に復元されたものが17個体、破片から図面上で復元されたものが20数個体程ある。以下、分類規準に従って記述を行う。

##### 第34図1 第Ⅱ群1類b種

僅かに外反する口縁部破片である。口唇には突起が付され、竹管による刺突が2箇所施される。突起下には、粘土紐貼付により垂下する隆帯が付され、隆帯上には、竹管による刺突が縦位に2箇所施される。隆帯両側には縦位沈線が隆帯と平行して描かれる。

第34図2～第35図47, 第40図1～3, 第41図5～6, 第42図7, 第43図9 第Ⅲ群1類c種

第34図2～13は、やや外反する口縁部破片であり、いずれも波状を呈する。2～6では、口縁部文様帯に波頂部と対応して渦巻状沈線文が描かれる。第40図2は、やや外反する緩い波状口縁をもち、胴上半に最大径の膨みをもつ深鉢形土器である。口縁部文様帯には、3条の平行沈線が引かれるが、波頂下では渦巻状沈線文となる。胴部文様帯も同様、3条の平行沈線と渦巻状沈線文によって曲線的な構図が描かれる。地文として施される縄文原体はLRであるが、回転方向は一定しない。

第34図7～13では、口縁部文様帯は2～3条の平行沈線によって描かれるが、9のように逆S字状に蛇行する沈線や、平行沈線下に描かれる沈線とともに入組状を呈するものもある。7、8、9は波頂部に刻目若しくは刺突の施された例である。13は、器外面に2条の平行沈線が施され、内面には、アメーバ状の磨消縄文の施されるものである。第40図1は、頸部に比較的大きな屈曲をもつ鉢形土器であるが、口縁部文様帯は2条の平行沈線に簡素化されており、単に胴上半部文様帯の上限を画するだけのものになっている。胴上半部の文様帯には、三日月形の区画文及び波状沈線が描かれる。文様帯下限は1条の沈線によって画される。地文としての縄文は、L横位回転施文されたものである。第41図5は、口縁部波頂部に4箇所の刻目を有するものであり、口縁以下の文様帯は、水平に器面をめぐる6条の平行沈線によって構成されている。使用された文様原体は、LRであるが胴上半文様帯に於いては横位回転施文、胴下半に於いては左上一右下の斜位回転施文されている。第41図6は、口縁部に波頂下でやや屈曲する4条の平行沈線をめぐらし、胴上半部文様帯には右傾する入組状磨消縄文の施された鉢形土器であり、地文として、RL横位回転施文の縄文を用いている。第42図7は、波頂部に3箇所の刻目をもち胴上半部文様帯上限を3条、下限を2条の平行沈線で画し、3条の斜位平行沈線が上下を繋ぐものである。第43図9は、4単位の波頂部をもち、胴上半部で僅かな膨みをもちながら、胴下半以下直線的に降りる鉢形土器である。胴上半文様帯は、上限を3条、下限を2条の平行沈線で画し、沈頂部に対応して4条の沈線が右傾する入組状沈線文を構成する。入組部分は渦巻状を呈し、また上限の平行沈線と入組状沈線文は、3条の斜位沈線によって連結される。第42図7、第43図9ともに地文としての縄文は用いられず無文である。

第34図14～19は、壺形土器破片であり、うち、17～19は同一個体である。14は、文様帯上下限を2～3条の平行沈線で画し、3条の沈線で右傾する入組状磨消縄文の施されたものである。15も同様入組状磨消縄文が描かれるが、文様帯下限に引かれた沈線との接点にはC字状の刺突が施される。17では、入組状磨消縄文内に描かれる沈線が、S字または逆S字状に連続せず、入組部分で左右沈線の末端が咬み合う形をとる。

第34図29～第35図33は、文様帯上下限の平行沈線間に斜位平行沈線の描かれたものであるが、



全体の構図としてはやはり入組状磨消縄文をとると思われる。29のように左傾するものと、30～33のような右傾するものがあり、さらに29、30、32と31、33のように、縄文部分と磨消部分の関係において、ネガとポジの両者を指摘できる。第35図34～第35図44は、平行沈線及び連結する斜位沈線によって文様構成されるものである。41、42のように沈線連結部分に深い刺突の施されたものもある。第35図45～47は無文地に複数の沈線で文様の描かれたものである。45、46は同一個体であり、非常に細い沈線によって文様が描かれるが、構図としては一定のモデルをもたない規格性のない文様と思われる。

第40図3は、文様帯上限を3条の平行沈線で画し、波状磨消縄文の描かれたものであり、上限の平行沈線と波頂部は3条の斜位沈線が連結し、波底部からも1条の斜位沈線が引かれている。

#### 第35図48～第36図65 第Ⅲ群1類d種

第35図48～第36図60は、矩形区画による幾可学的磨消縄文の施されたものである。矩形区画文は、上段と下段の縄文区画帯を3条の沈線によって構成される鍵状の区画文が連結するという構図をとる。48～54では、鍵状の区画文と上段の縄文区画帯との連結部に沈線と対応して3箇所刺突が施される。また鍵状の区画文を構成する3条の沈線のうち、1条は区画文内で完結する。48～50は、緩やかな波状口縁を呈し、48、49では波頂部には刻目が施され、矩形区画波頂部と対応して施される。また、51～60は胴上半部文様帯の例であるが、この様な矩形区画文は何段か重畳して施される可能性もある。61～65は、やはり矩形区画を有するものであるが、上段と下段の縄文区画帯は3条の短沈線で連結される。

#### 第36図66～76、第41図4、第42図8、第44図10、第45図11 第Ⅲ群1類e種

口唇上に山形の突起が付されるが、全体に山形の波状口縁を呈し、交差または連結する数条の沈線が幾可学的沈線文を構成する。第36図66、第41図4は同一個体である。口唇には6～8単位の山形の突起が付され、口唇上にもLR縄文が回転施文される。突起内面には4条の弧線の施される箇所もある。口縁部には、突起の左側より5条の平行沈線が弧状に施され、その末端は突起下で他の平行沈線と交差する。また、平行沈線間最下段には突起下で刻目が充填されている。また、口縁部平行沈線、胴上半にめぐらされた3条の平行沈線の間には、5条の斜位平行沈線が、口縁突起と対応して描かれる。67～69は、山形の波頂部をもつ波状口縁破片である。67は、口縁に沿って4条の平行沈線が弧状に描かれ、波頂下で交差する。68は、波頂部から垂線がおろされ、垂直左側では口縁に沿った4条の平行沈線、右側では、やはり口縁に沿う2条の平行沈線と2列の刺突列が施される。69は、口縁部に刺突文の充填されたものである。70、71は、口唇に付された突起である。70の突起下には、竹管による刺突列が並び、突起内面には3条の弧線が描かれる。72～75は、4条乃至5条の平行沈線と弧状または斜位沈線の連結する胴部破片である。

第42図8は、口縁部を欠損するが、胴部のほぼ直線的におりる鉢形土器である。文様帯下限は7条の平行沈線で画され、6条の斜位沈線が施される。下限平行沈線と斜位沈線の連結部には、6箇所に刺突が施される。胴下半に使用された縄文はLR横位回転のものである。

第44図10は、口縁部が大きく開き、胴上半に緩やかな膨みをもち以下直線的におりる鉢形土器である。口唇には3箇所に渦巻状の粘土瘤貼り付けによる突起がつけられ、口縁は突起を頂点として緩やかな波状をなす。口縁部文様帯10mm程度の短沈線が3～5列ずつ施される。胴上半部文様帯は上限を1条の沈線、下降を4条の平行沈線で画し、4条の沈線で鍵状の区画文が描かれる。文様単位は7単位であり、口唇の突起とは対応しない。文様帯下には、LR縄文を縦位、横位、縦位と繰り返して回転施文し、羽状効果を表出させている。原体長は、10mm程度である。底部には、ヘラ状工具による擬似木葉痕が描かれる。色調は、赤褐色を呈し、胎土中にはかなりの量の金雲母が含まれている。何らかの特殊な意図をもって製作されたものであろうか。

第45図11は、肩部が張り、口縁のやや外反する壺形土器である。口縁部は無文であり、肩部文様帯は、上限を6条、下限を5条の平行沈線をもって画し、S字状の無文区画をもつ入組状磨消縄文が描かれる。文様帯単位は4単位と思われる。地文としての縄文はLR横位回転施文したものである。

#### 第36 図77、78 第Ⅲ群 2類

この2片だけであるが、4条の平行沈線下に、5～6mm程度の短沈線による列点文が施される。地文としての縄文は非常に細いRL原体を横位回転施文したものである。

#### 第36 図79～84 第Ⅲ群 3類

79～81は、頸部で大きく屈曲し、口縁部の大きく開く鉢形土器破片である。幅広の縄文帯及び無文帯が区画されるが、使用される原体は、79、80ではRL、81ではLRであり、いずれも横位回転施文している。79は、左右非対称の波状口縁をもち、波頂部には8個の刻目が施される。82は、狭小な縄文帯下に幅広の無文帯をもつものである。83、84は胴部破片であり曲線の沈線によって大きな区画文が描かれる。

#### 第52 図46～48

無文のものである。46は、SX(R)出土の唯一の注口土器である。口縁部から底部にかけて全体に緩やかなカーブをもつ。注口部は欠失しているが、かなり上向きの注口部を有するものと思われる。47は器内外面を丹念にヘラケズリをもって調整している。また、口縁には折り返し口縁状に粘土帯が部分的に貼り付けられる。48は、器面を丁寧なヘラミガキによって仕上げた小形の鉢形土器である。

**第37図85～111、第47図18、21、第48図22、第49図26、29、第50図30～39 第Ⅲ群5類a種**

第37図85～97は、波状口縁の土器であるが、94、95は波頂部に粘土層による突起の付されるものである。突起内面には2条の沈線がめぐる。97は、口縁部に指頭圧痕が施され、小波状を呈するものである。第50図38は、8単位の波頂部を有し、口縁がやや外反し、以下直線的に降りる深鉢形土器である。口縁には幅20mm程度で縄文帯が設けられ、以下50mm程度の無文帯となり、再び縄文の施されるものである。原体はLRを使用し、口縁部縄文帯では横位回転施文、胴部では左上－右下の斜位、または横位回転施文している。第50図37は、口縁部で大きく開く鉢形土器である。口縁はヘラミガキ調整が施されて無文化し、胴部はLRの縦位または左上－右下の斜位回転施文の縄文が施される。

第37図98～111は、平縁のものであるが、102のように縄文帯下に無文帯が設けられるもの、110の様に折り返し口縁のもの、111のように口縁部が無文化されたもの等がある。第47図18は口縁縄文帯下に無文帯の設けられたものである。縄文はLR横位回転施文である。第47図21はL撚り原体が縦位または左上－右下の斜位に回転施文されている。底部には荒木氏分類法による $\{A_1+B_2, B_2+A_1\}$ 型の網代痕が認められる。第50図30～33、35、36、39は、口縁以下に縄文が施されている。30、33、35、36ではLRを、31、32ではRLの原体を使用している。第48図22は、口唇部にも縄文が回転施文されている。原体は、RL撚りである。

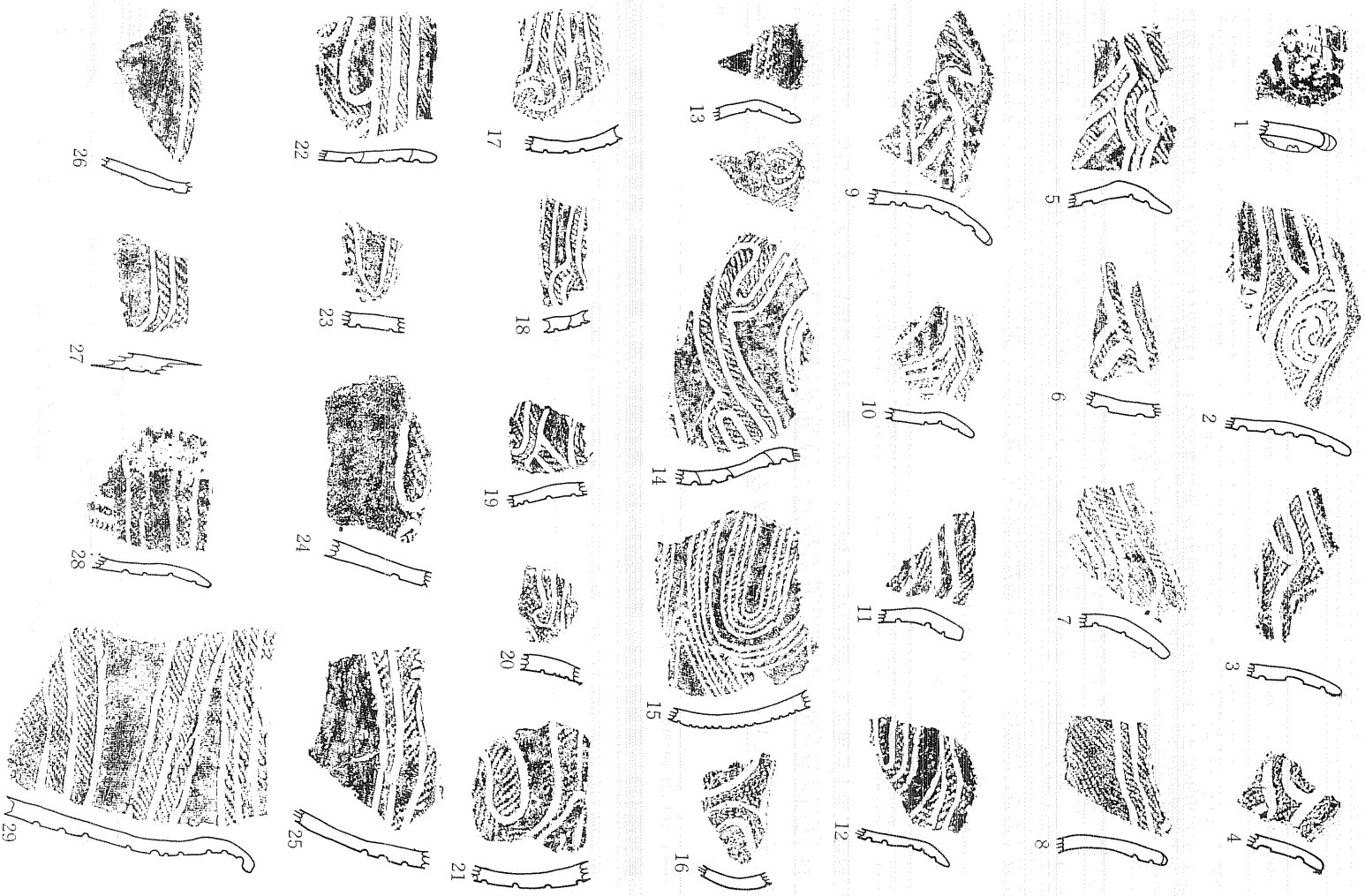
**第37図112～第38図128、第46図12～17、第47図19・20、第48図23 第Ⅲ群5類b種**

第36図112～第38図117は、無文帯上下に胴部と同一の撚紐による2条の圧痕の施されたものである。112、114は口縁無文帯上限に施された撚紐圧痕と口唇との間にも縄文が充填されており、112は、口縁が緩い波状を呈するが、口唇上にも縄文が施されている。第46図16、17では原体はLRの撚りである。118、119は口縁上部にも縄文が施されており、126の様に口唇の肥厚する例、127のように左右非対称の波状口縁例、128の様に口縁部無文帯の極端に狭くなる例などもある。第46図12～15、第47図19、20、第48図23は、原体としてLRの撚紐を使用している。また、第47図20は唇縁にも縄文の施されたものであり、底部には、 $\{A_1+B_1, B_1+A_1\}$ 型の網代痕が認められる。

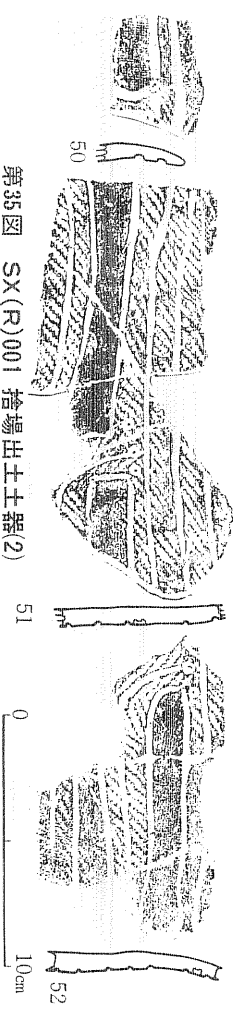
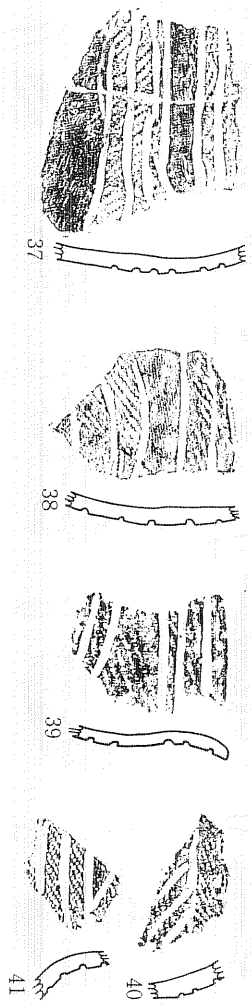
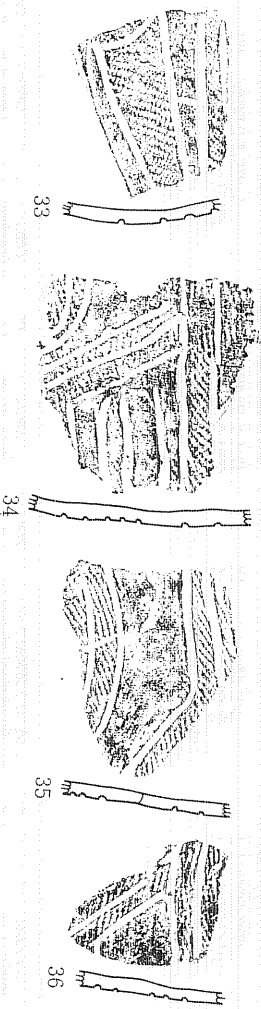
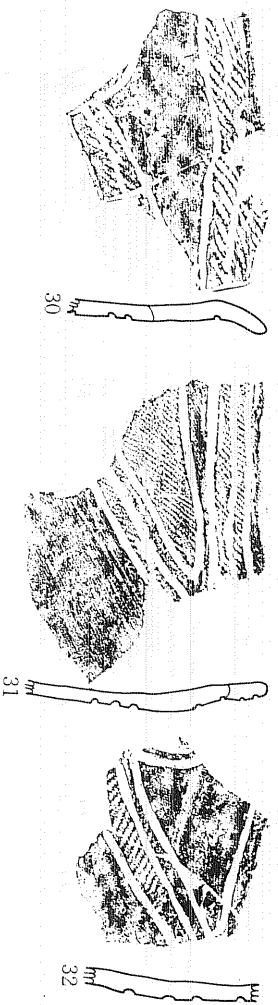
第38図129～137、第49図24、25、27、28は、縄文の施された胴部破片である。

**第50図40、第51図41～45 第Ⅲ群5類c種**

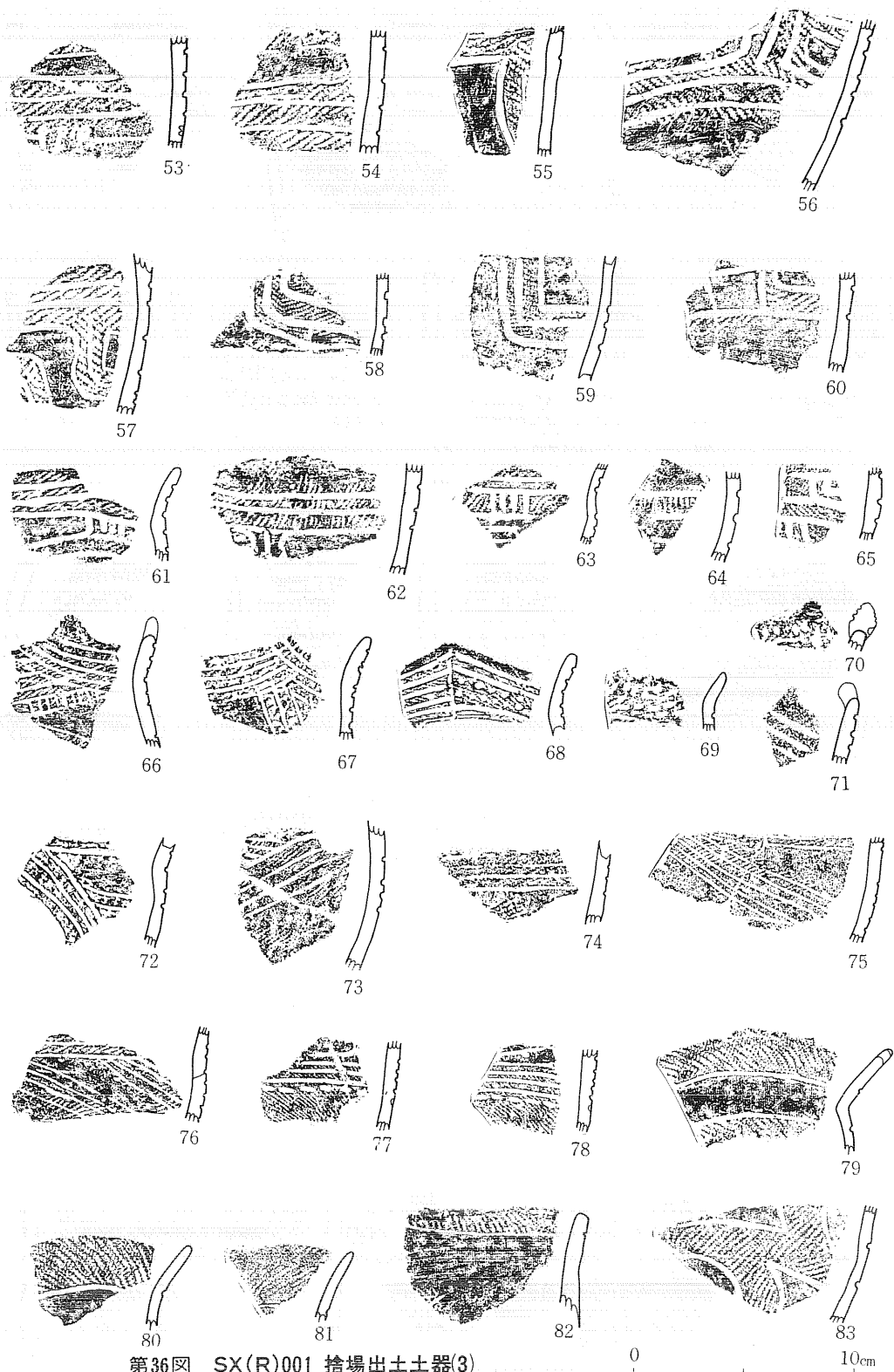
無文土器である。口縁の形状には第50図41、44、45のようにやや屈曲しながら外反するものと、42、43のように内傾もしくは直立するものの2態がある。いずれも口縁近くではほぼ横位、胴部縦位、底部横位のヘラミガキ調整が施されるが、41の様に極く僅かにLR縄文の痕跡を残すものや、45の様に、同時施文具による2条の沈線及びその擦痕を残す例もある。



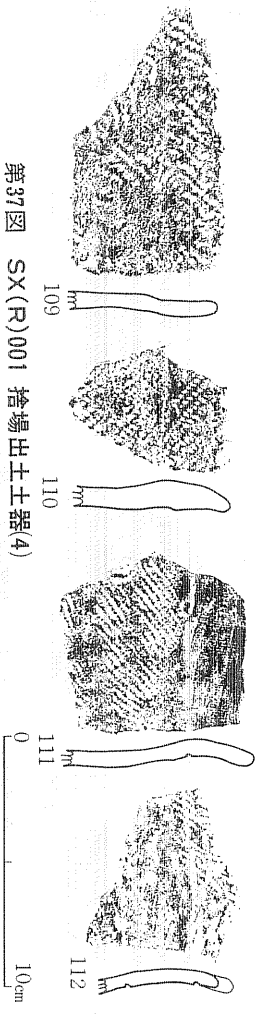
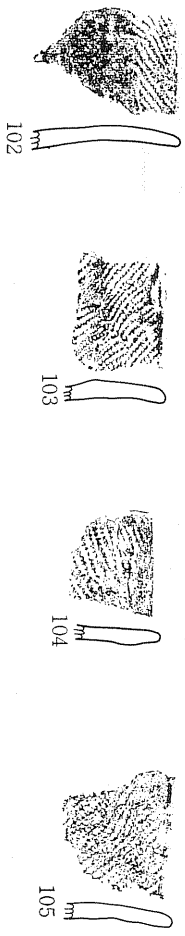
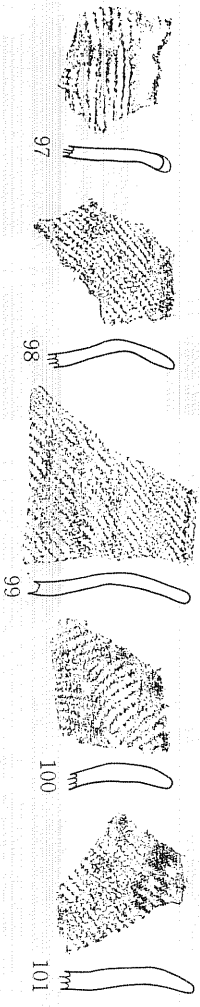
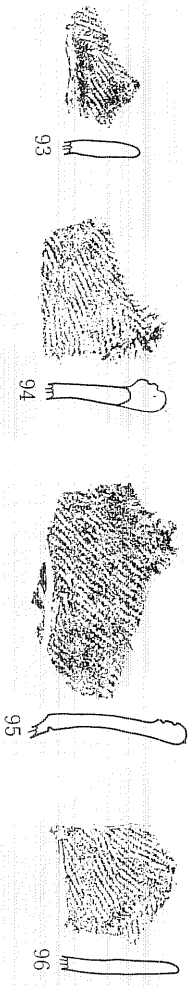
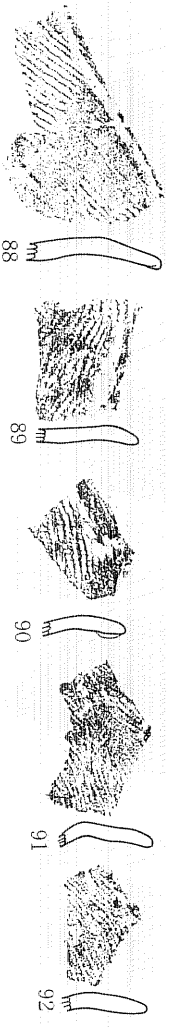
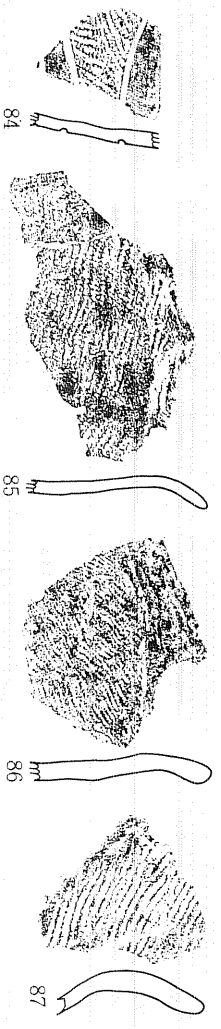
第34图 SX(R)001 捨場出土土器(1)



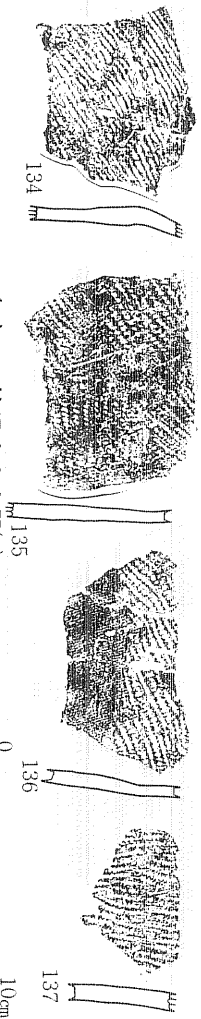
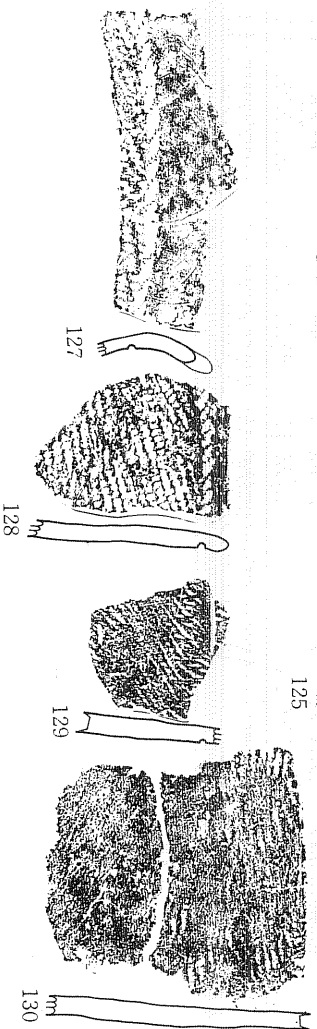
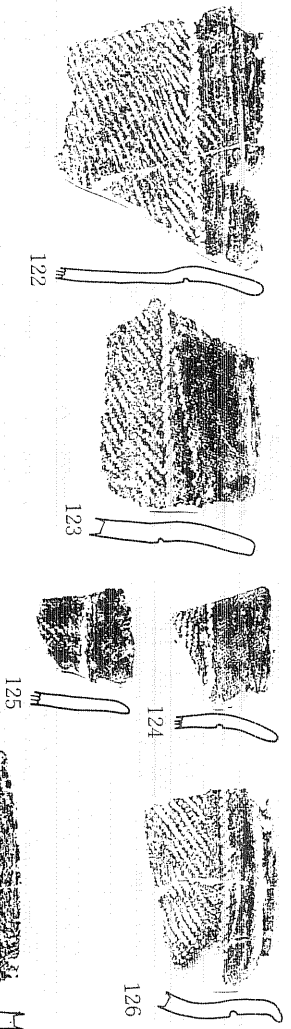
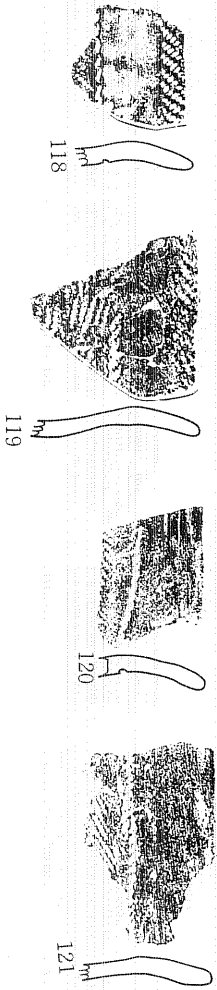
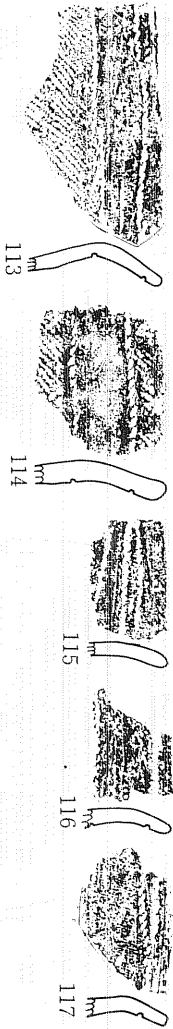
第35図 SX(R)001 捨場出土土器(2)



第36图 SX(R)001 捨場出土土器(3)



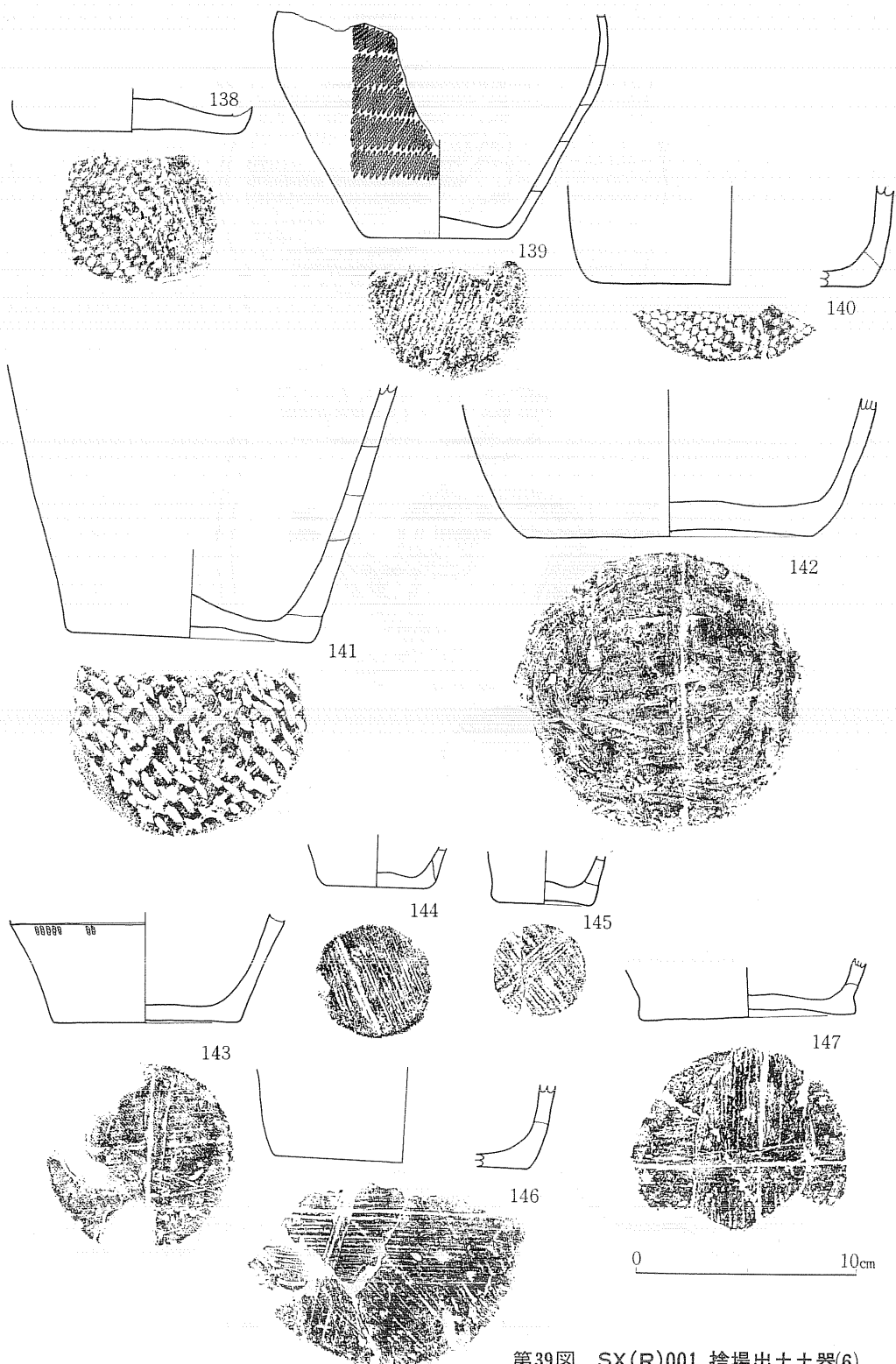
第37图 SX(R)001 捨場出土土器(4)



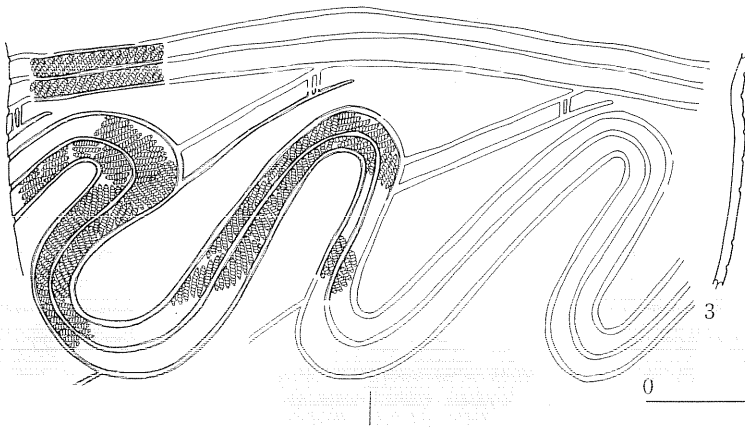
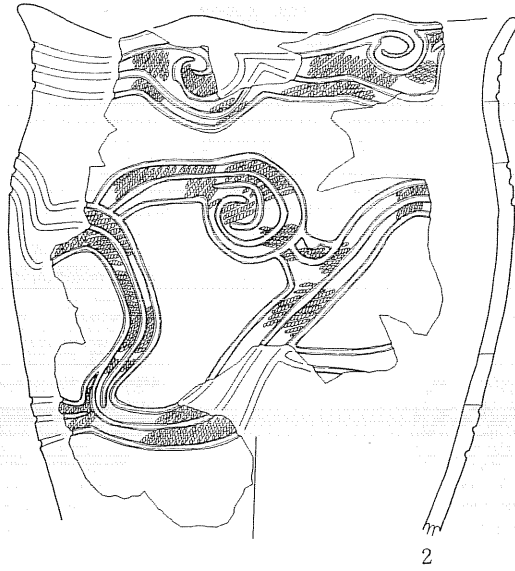
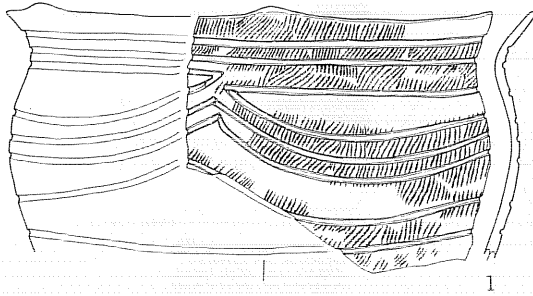
第38图 SX(R)001 捨場出土土器(5)

0 10cm

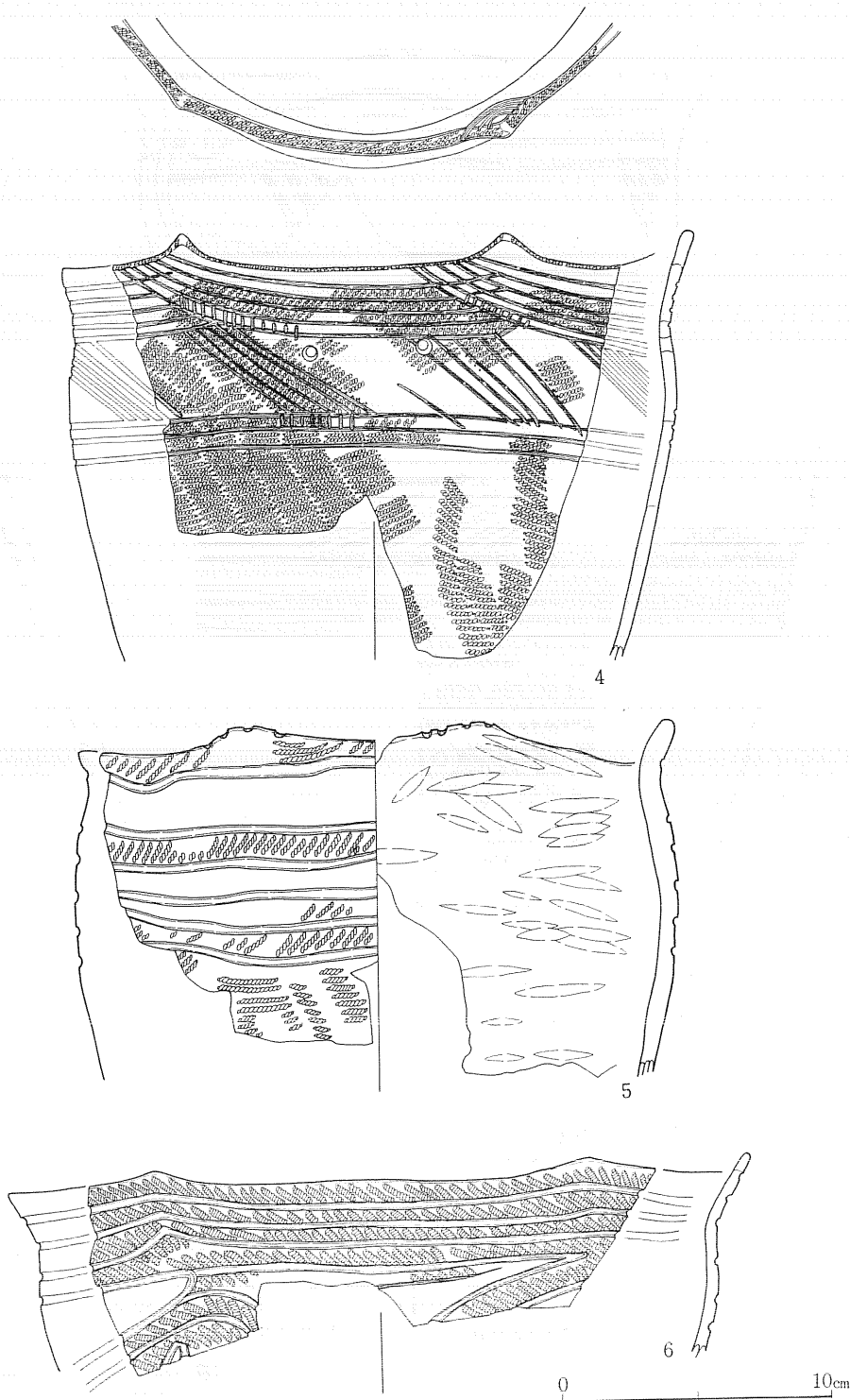




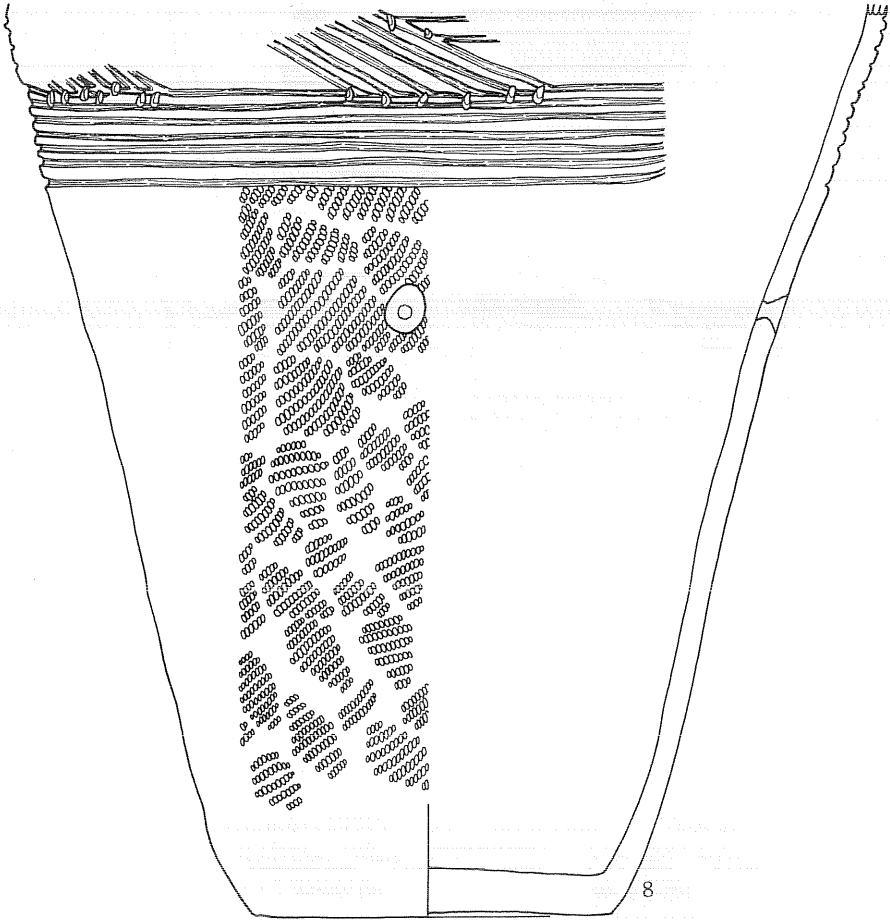
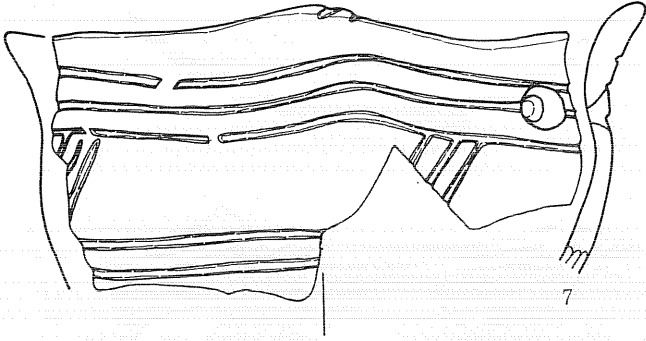
第39図 SX(R)001 捨場出土土器(6)



第40图 SX(R)001 捨場出土土器(7)

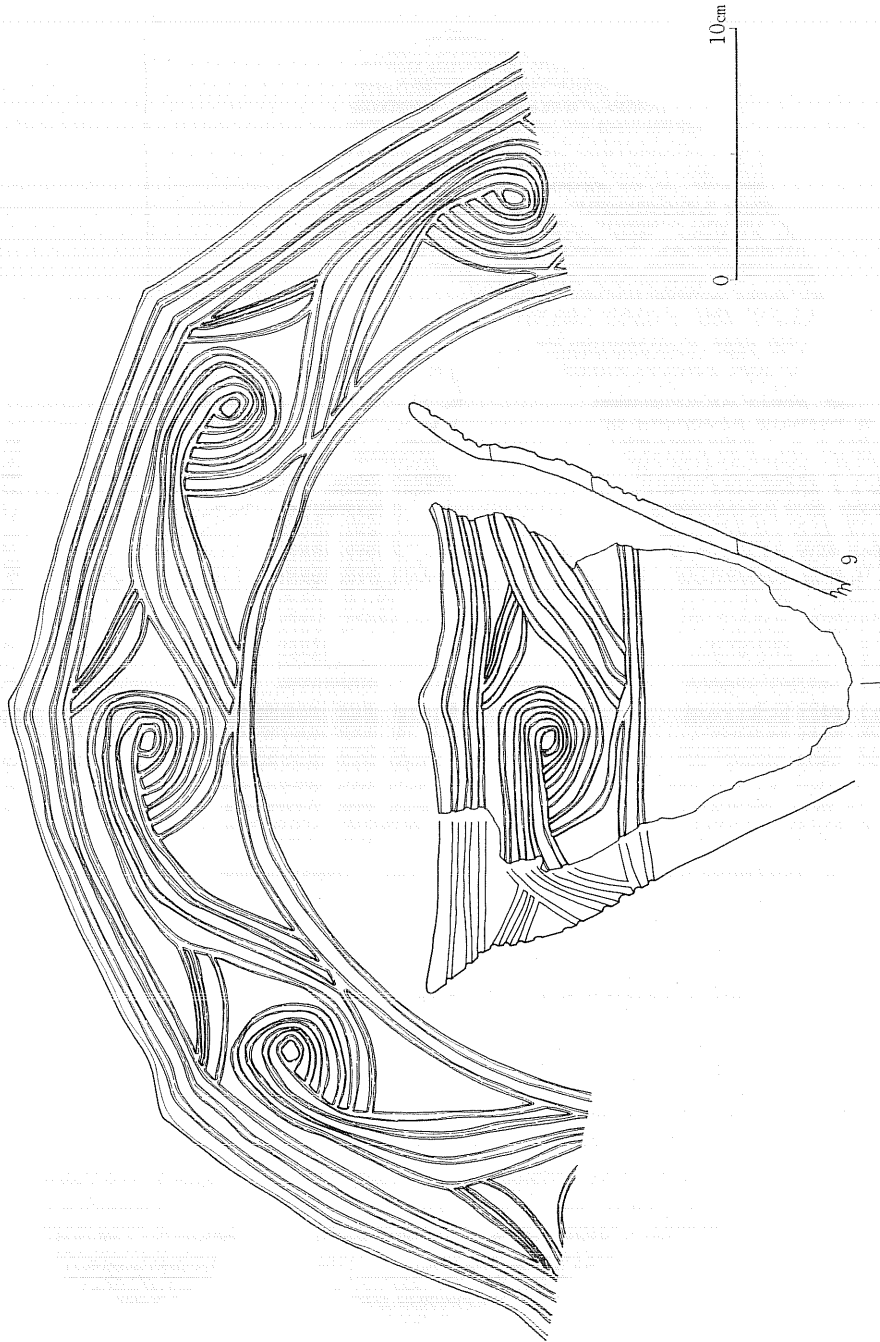


第41图 SX(R)001 捨場出土土器(8)

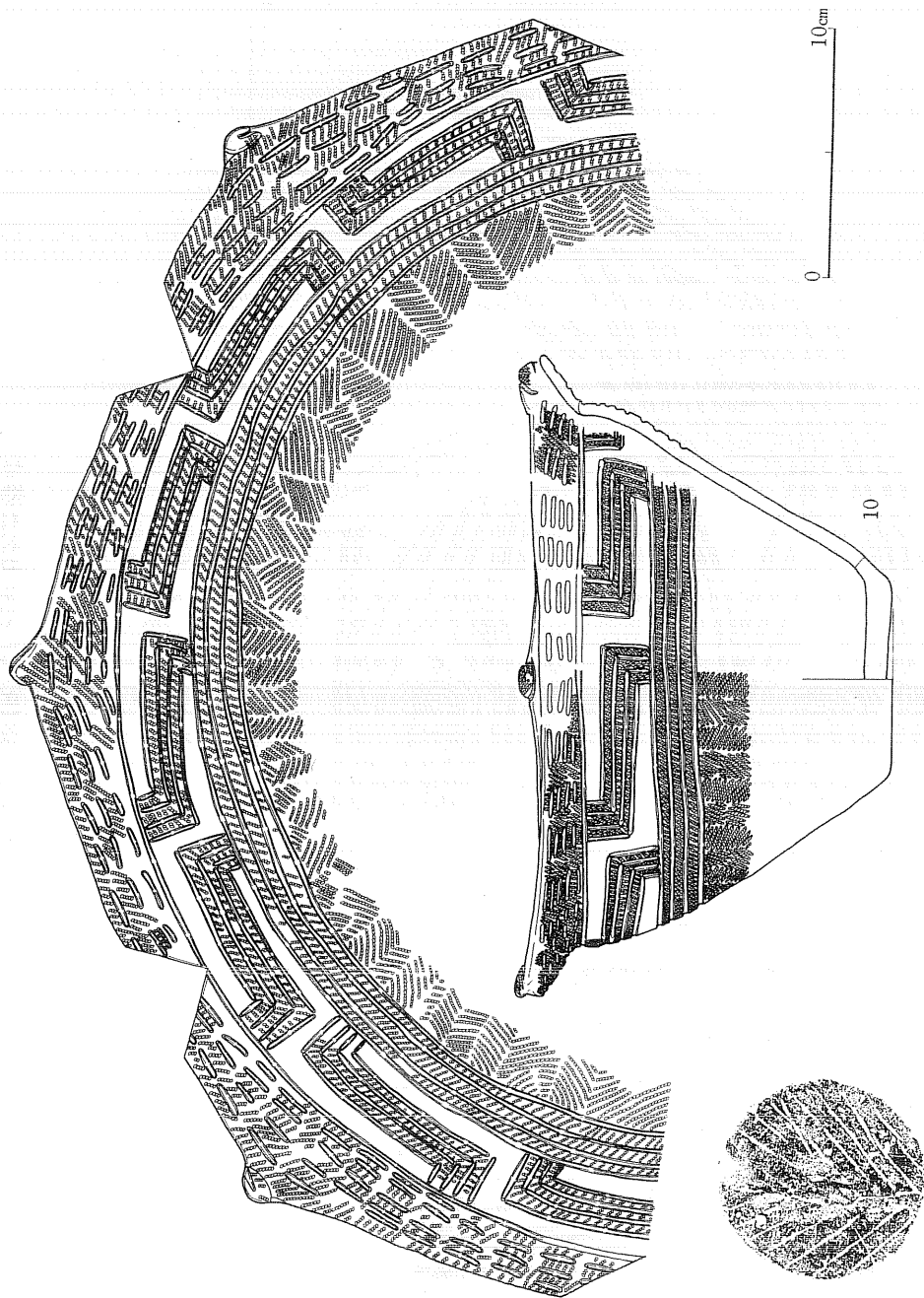


0 5 cm

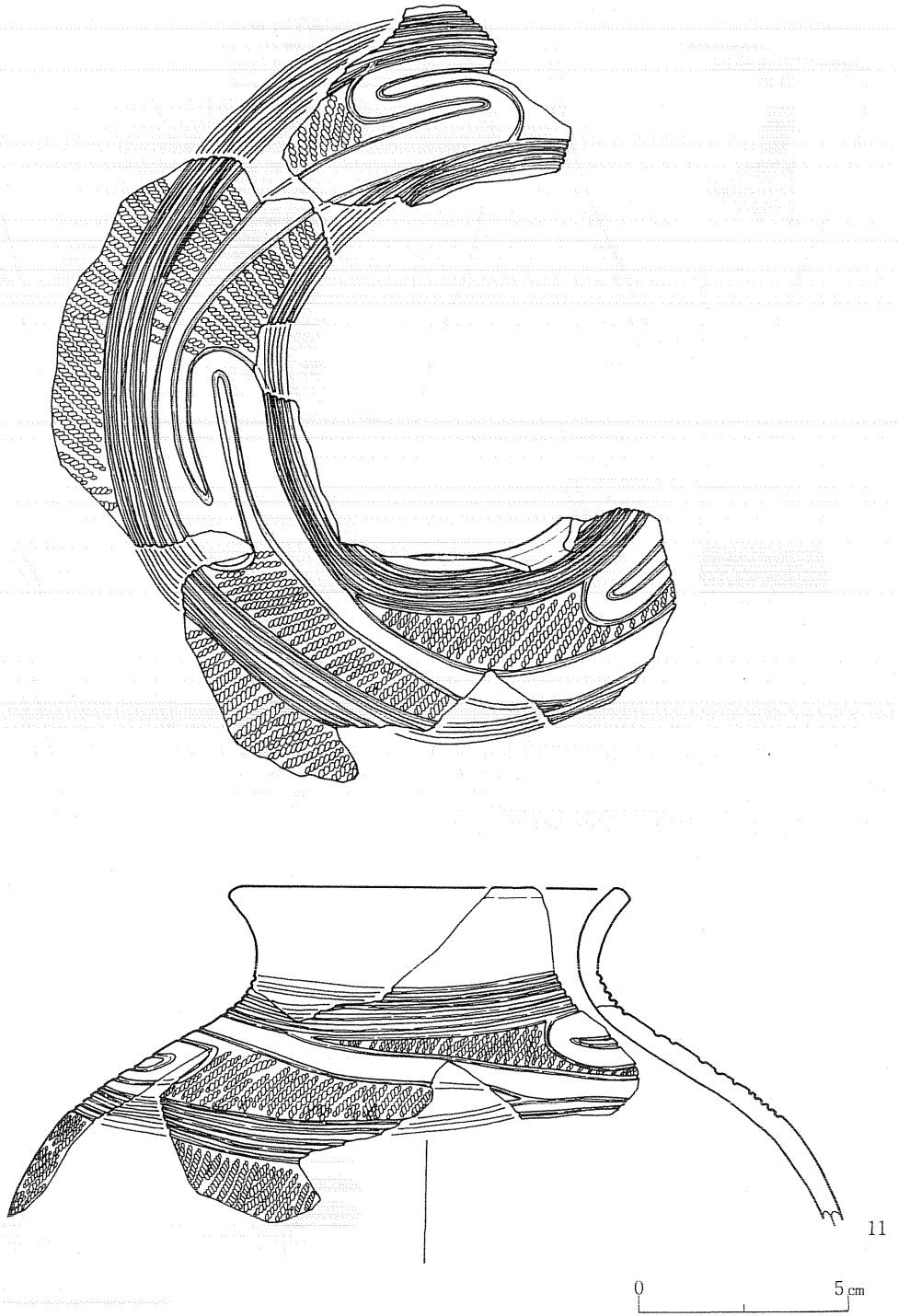
第42図 SX(R)001 捨場出土石器(9)



第43图 SX(R)001 捨場出土土器(10)



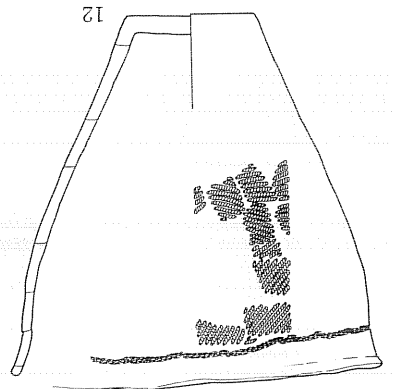
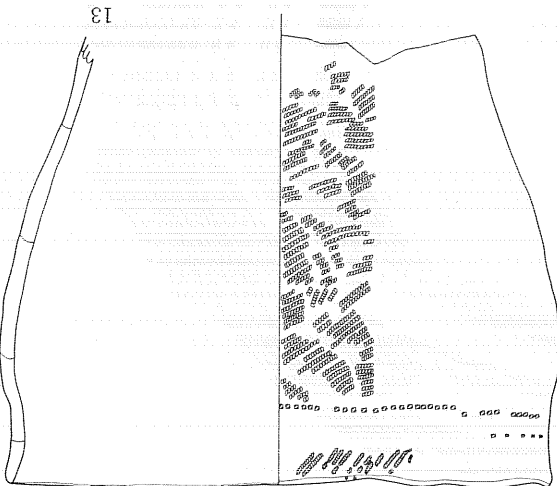
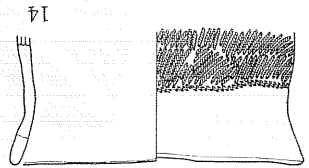
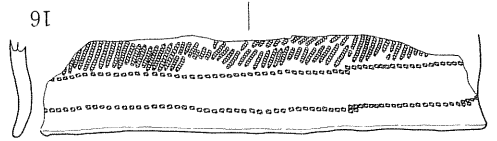
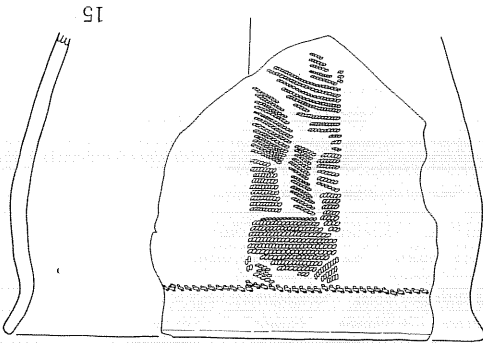
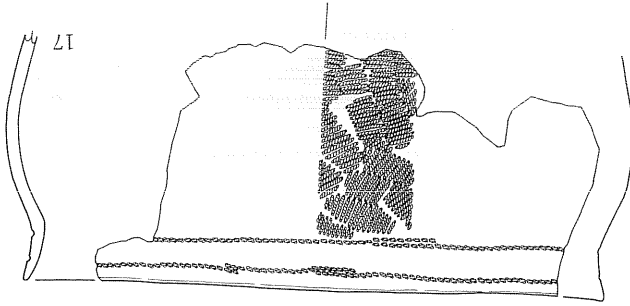
第44图 SX(R)001 拾场出土土器(1)



第45圖 SX(R)001 捨場出土土器(2)

第46図 SX(R)001 拵場出土土器

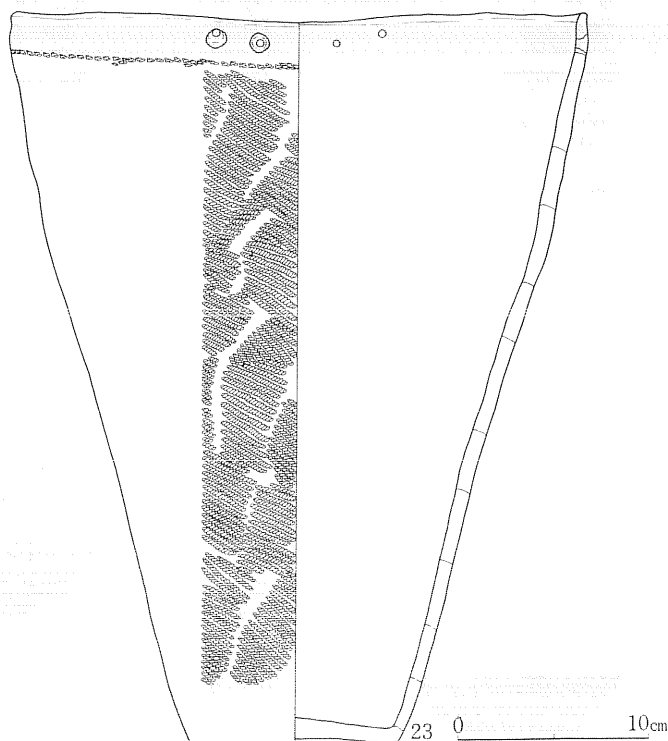
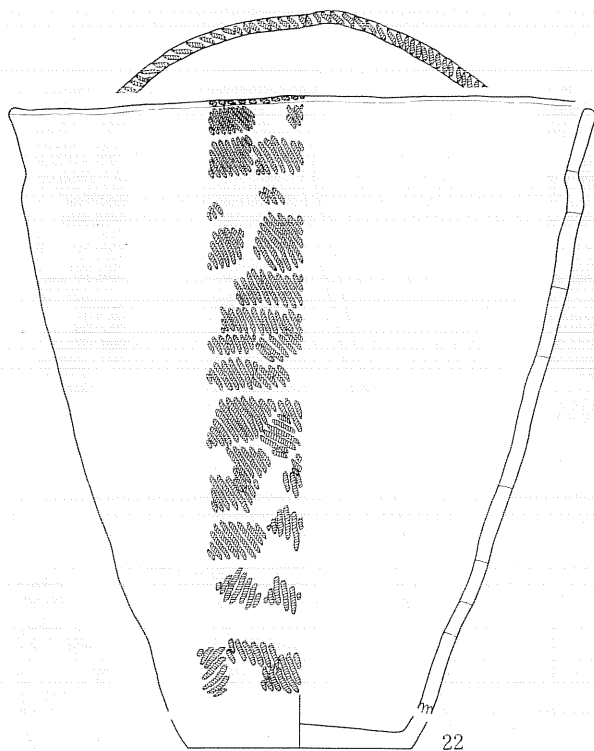
10cm  
0



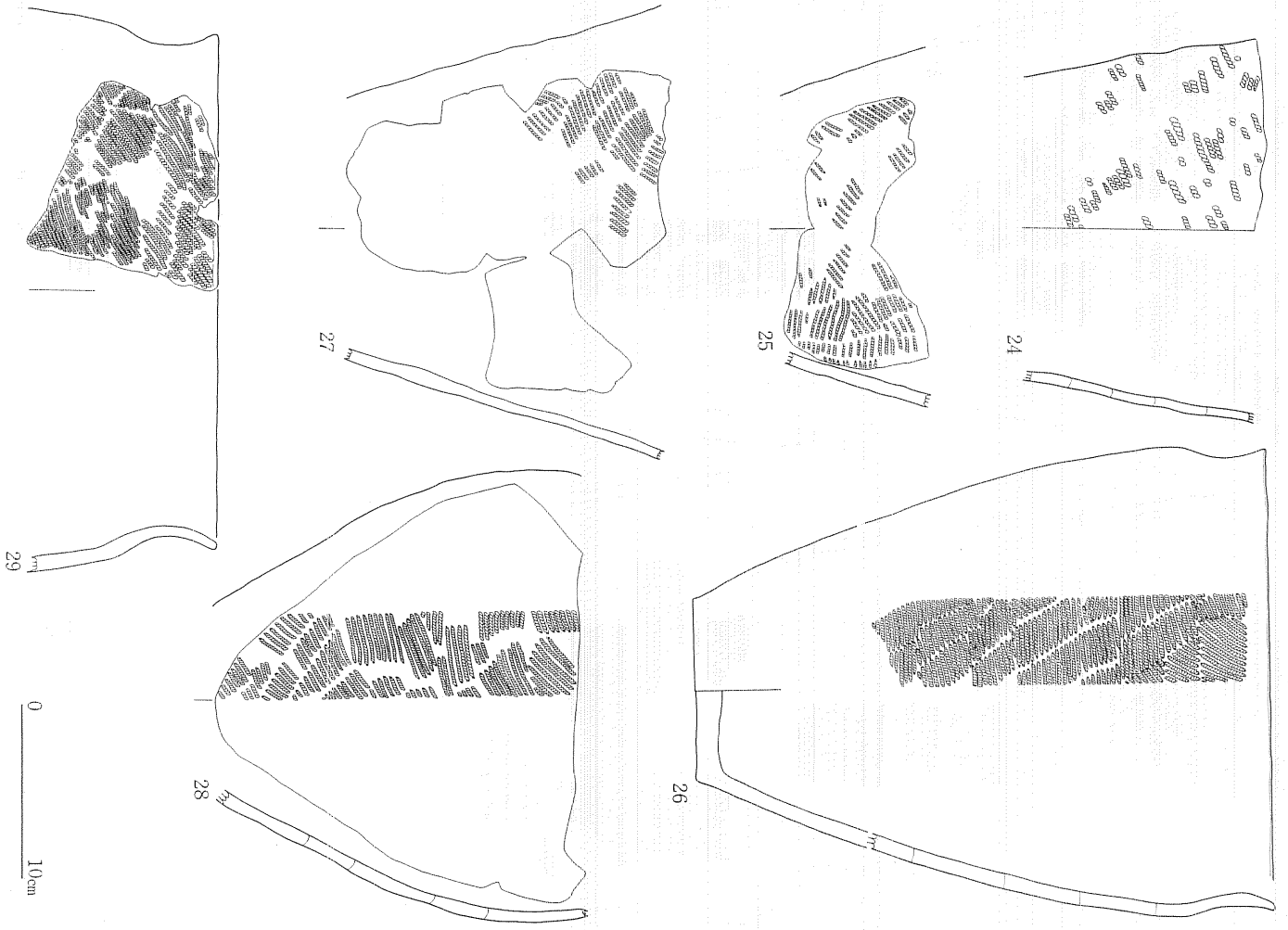




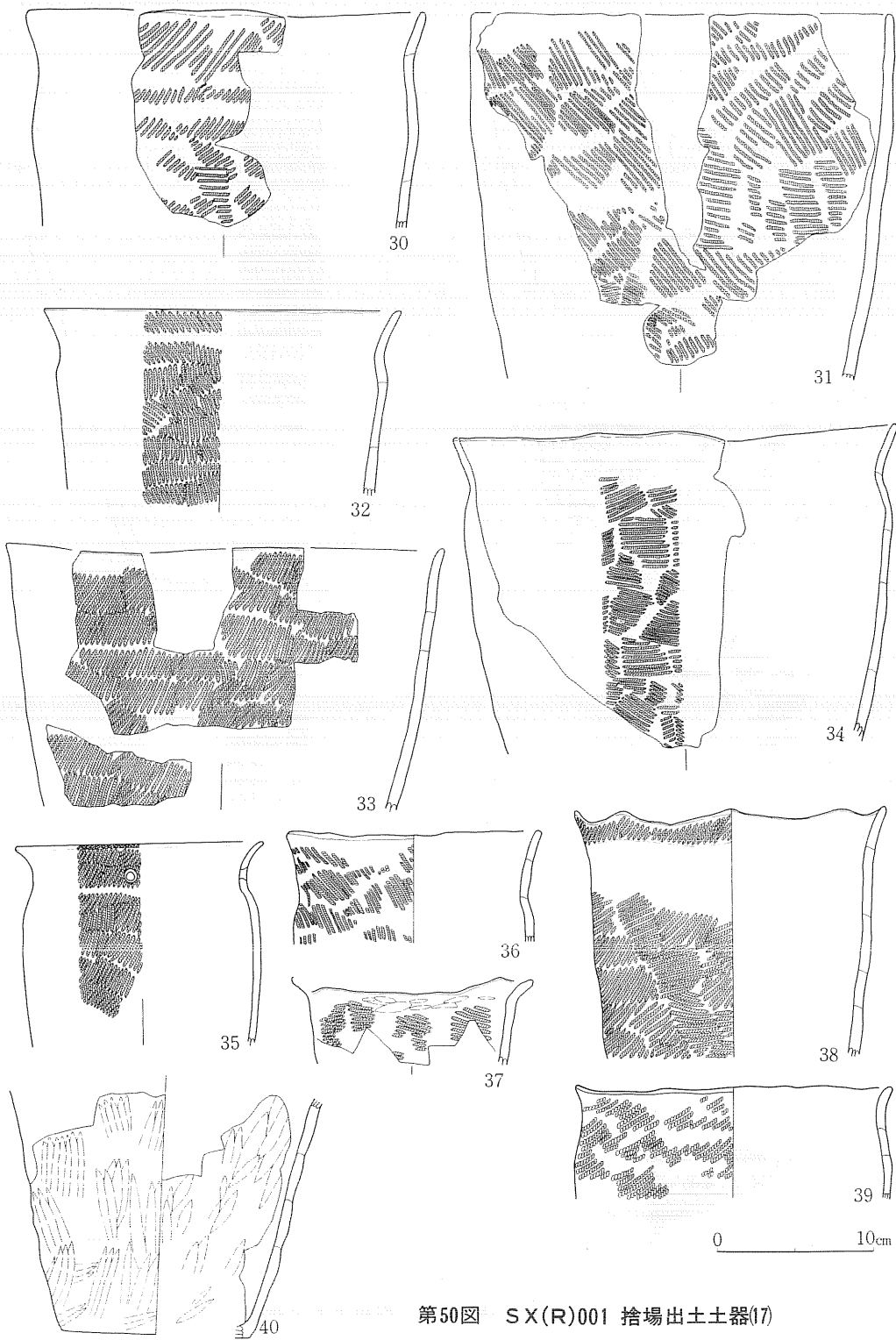
第47図 SX(R)001 捨場出土土器(14)



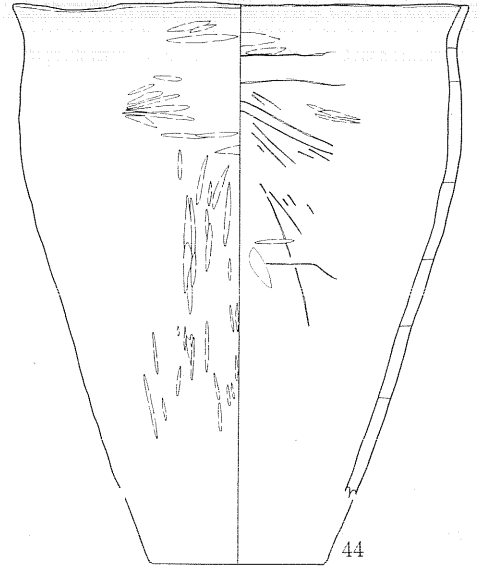
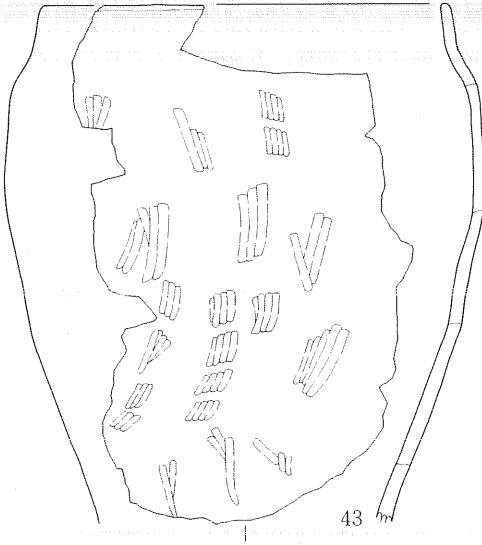
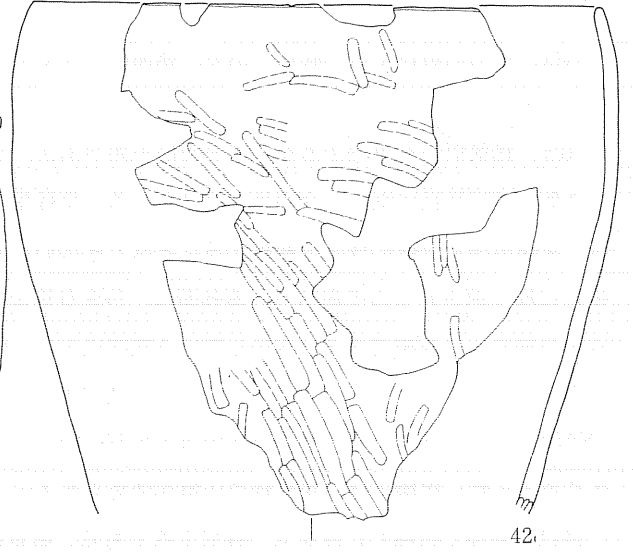
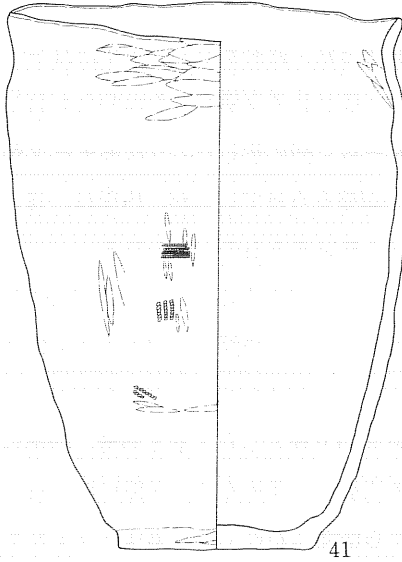
第48図 SX(R)001 捨場出土土器(15)



第49図 SX(R)001 捨場出土土器(6)



第50图 SX(R)001 捨場出土土器(17)



0 10cm

第51图 SX(R)001 拾場出土土器(18)

## 小形土器及び土製品（第53図、図版34）

49は、小形の鉢形土器の破片である。頸部は大きくくびれ、器面全体が調整をうけて無文化している。

50は、頸部以上を欠損するが、小形壺形土器である。胴部は殆ど球形を呈し、上半には上下を2条の平行沈線で画した文様帯が設けられる。文様帯中に描かれる文様は、曲線的なものが、沈線が浅く全体に亘って観察することはできない。おそらく図に示したようなモチーフが横位に繰り返されるのであろう。器外面は、丹念な横位の調整をうけているが、内面は、ほとんど指頭による調整である。欠失している頸部以上は、強く外反するものと思われる。

51は、我々がワイングラスと呼んだ台付土器である。口縁部を欠失する。器面の調整は胴部で横位のヘラミガキが行われ、台部では下半部を除いて縦位である。底面は、中央で3mm程度えぐりとられ、周縁には、笹葉状の圧痕が認められる。

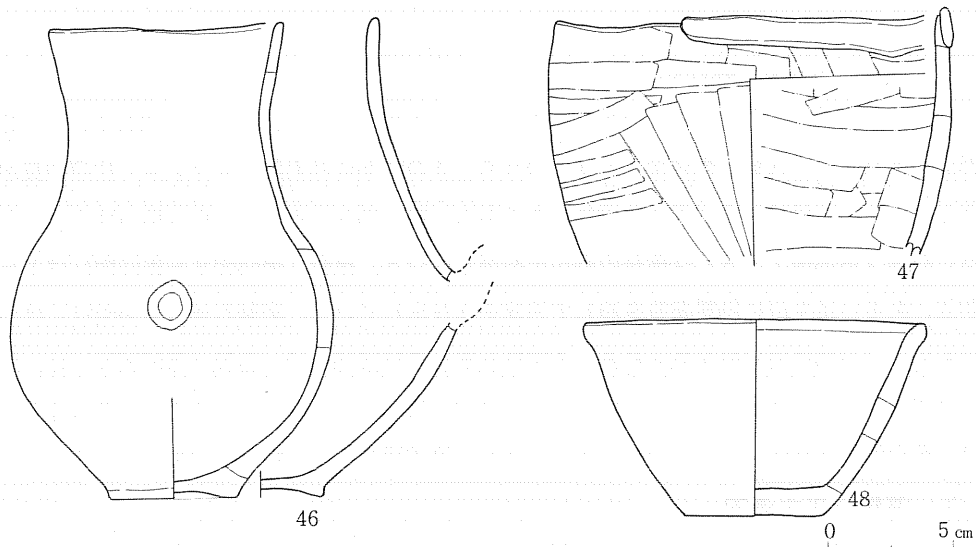
52は、頸部で屈曲した段をもつ鉢形土器である。第Ⅲ群5類b種とした土器と同様、頸部に無文帯が設けられ、胴部に施文された原体と同一の撚紐の圧痕が一条めぐる。胴部に施された縄文は、LR横位回転施文である。無文帯及び、胴下半から底面にかけては丁寧なヘラミガキによる調整が施される。

53は、エッグスタンドと呼んだ台付土器である。成形に際しては、4～8mm程度の粘土帯を積みあげたものであり痕跡が明瞭に残される。口縁一部に、つまみのような突出部が作出される。外面は粗いヘラケズリによって整形され、底面中央は53と同様、5mm程度えぐりとられている。

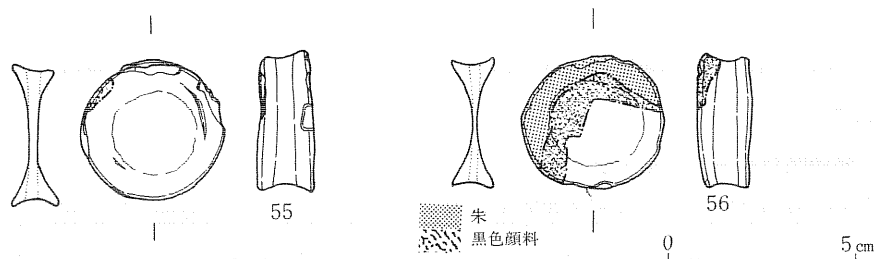
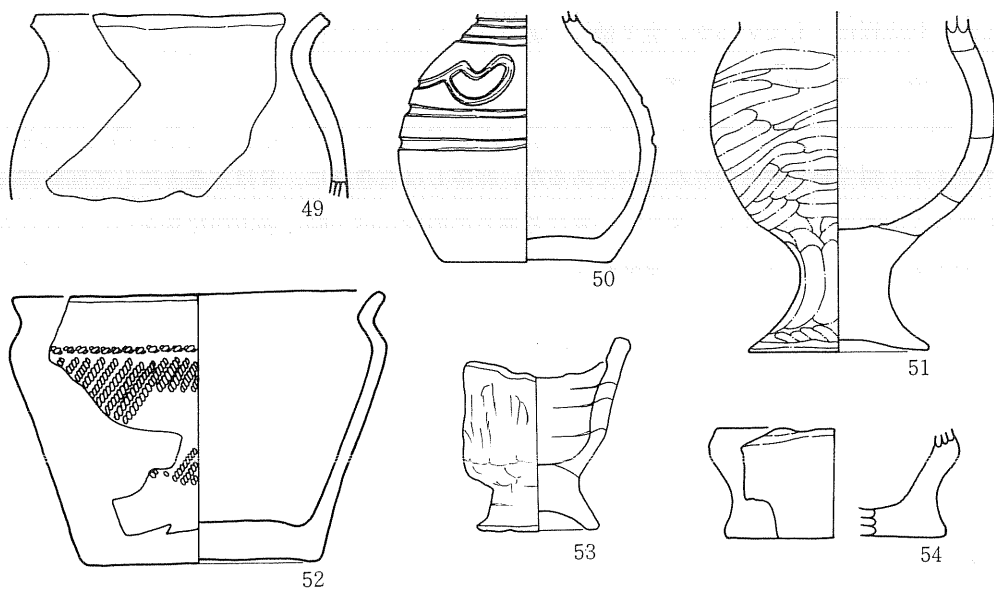
54は、小形鉢形土器の底部である。

55、56は、所謂滑車形の耳飾りである。55は径36mm、表裏縁辺間隔12.5mm中央部厚2mmを測る。本来塗布されていた朱と黒色顔料は、片面は全く剥落し、他片面と側面の一部分に僅かに認められる程度である。56は、片面径37mm、他片面径35mm、表裏縁辺間隔13mm、中央部厚1mmを測る。朱及び黒色顔料は片面で全く剥落し、他片面ではほぼ $\frac{1}{2}$ 程度、また側面でおよそ半周程認められる。55、56は本来その全面に朱及び黒色顔料が塗布されていたものであるが、顔料残存程度の良好な56で観察されるところでは、朱を塗布した後に黒色顔料を重ね塗りしている。また、この黒色顔料については、かなり光沢をもったものであり、確言できないが漆の可能性が強い。さらに、重ね塗りの状態から、表面には何らかの文様の描かれていた可能性があり、したがって55、56の耳飾りは、表面に朱及び漆と思われる黒色顔料で塗彩された耳飾りということができる。

製作にあたっては、表面に表われた粘土接合の状態から、厚さ1～2mm、径30mm程のうすい粘土板を核として、両面縁辺に粘土を貼付しながら主に指頭の調整によって成形していったも



第52図 SX(R)001 捨場出土土器(19)



第53図 SX(R)001 捨場出土小形土器及び土製品

のと考えられる。

## ii) 石器 (第54図～第58図)

石鏃4、石錐2、石匙2、搔器8、磨製石斧1、不定形石器5、石皿1、凹石2、敲石2の26点が出土した。石鏃(第54図1～4)のうち、2の基部には天然アスファルト状の物質が付着している。石錐は両面に細かい調整のあるもの(第54図5)とないもの(第54図6)とがある。石匙(第54図7・8)は横長の剥片を利用している。搔器(第54図9～第55図)は1～3側辺、あるいは全辺に剥離調整を施して刃部を作り出している。磨製石斧(第56図17)は小形のもので、刃部に使用痕が見られる。不定形石器は第55図18～22。石皿(第57図23)は、川原石を用い、2面を使用している。凹石(第57図24・第58図25)も川原石を用い、凹は2面にあり、その状態は皿状、ロート状を呈する。敲石(第58図26)は両端に使用痕を有する。

## V 遺構外出土遺物

### i) 土器 (第59図～62図、図版36～38)

遺構外からの出土土器は、3-Fグリッドを中心として100余点、ターEグリッドを中心として数10点程出土しているが、全て破片である。

#### 第59図1～4 第I群第1類

単軸絡条体の縦位回転施文による木目状撚糸文が表出されている。1、2は、撚りの同じ原体を2本1組で軸に巻きつけたものであるが、原体Lは右巻きに、Rは左巻きにして回転押捺したものである。3、4は、RとLの異なる撚りの原体が同一軸に逆方向に巻きつけられたものである。内面は丁寧な縦位の調整が施されている。

#### 第59図5～8 第I群2類a種

口頸部が屈曲し、直位あるいはやや内傾する。文様帯には単軸絡条体圧痕による平行線が、横位あるいは斜位に数段施される。6は同一軸に2本の原体を逆方向に巻きつけ押捺したものである。5～7は屈曲部に半截竹管によるC字形の刺突痕が並列し、5、6は胴部に結束のある羽状縄文が施される。

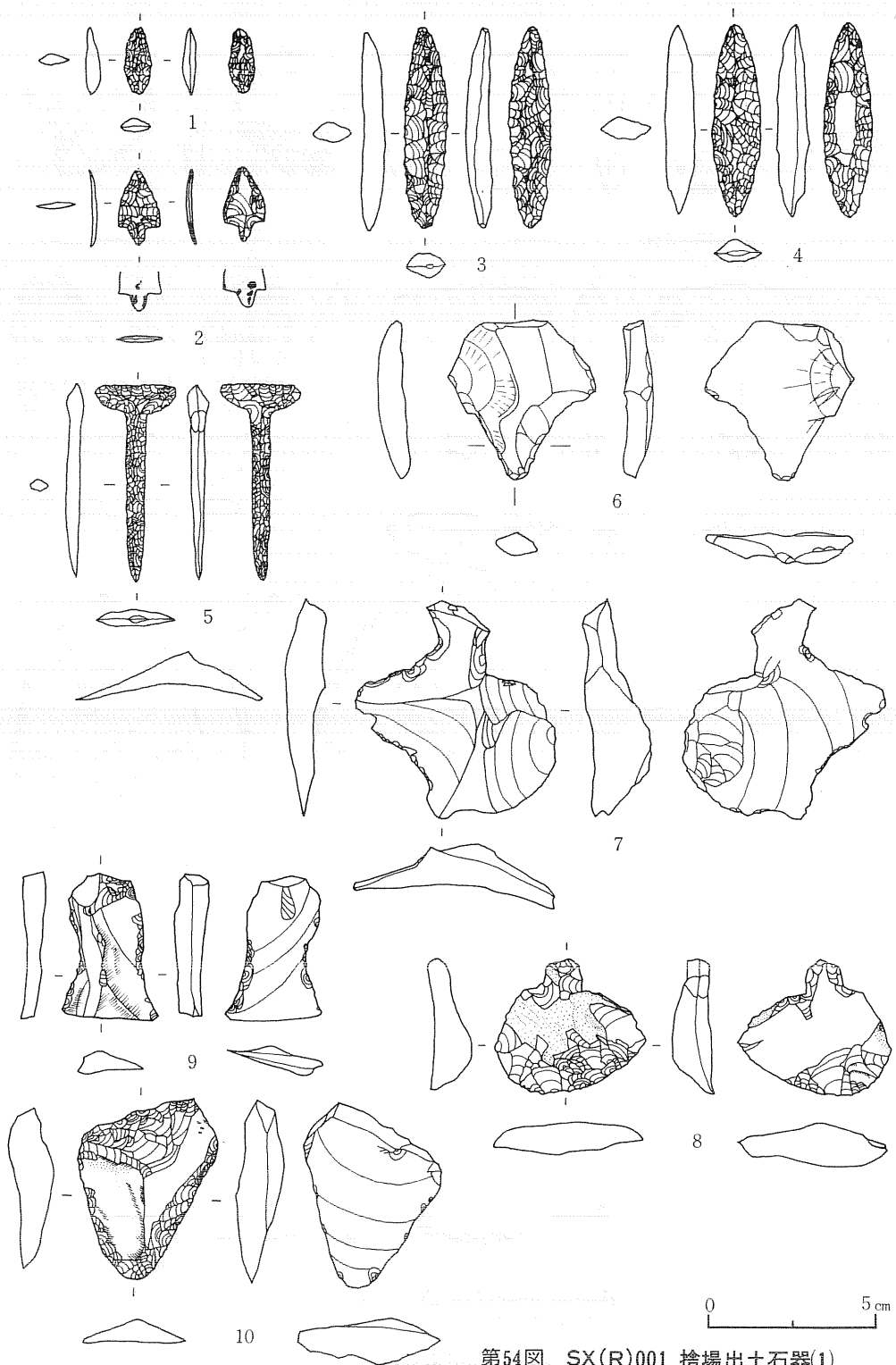
#### 第59図9～12 第I群2類b種

単軸絡条体に代り、撚紐が用いられるが、9、10では横位に11では斜位に押捺される。また、12は幾分間隔をあけた横位の撚紐圧痕間に縦位の圧痕が充填並列する。11は口頸部文様帯下に右から左方向への刺突列が並び、12では、貼り付けられた粘土瘤上にも縦位の撚紐圧痕が施される。

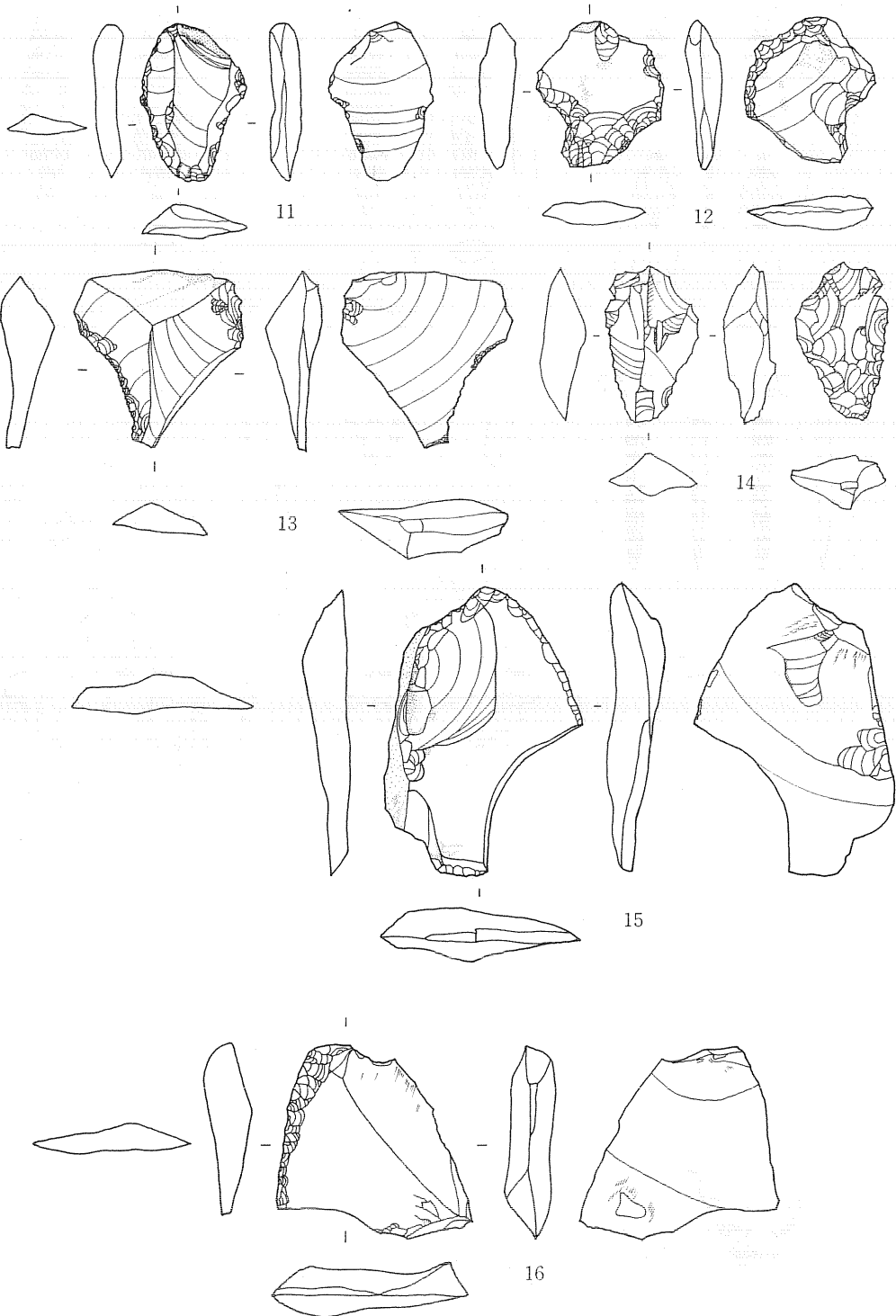
#### 第59図13～20 第I群3類

13～19は、結束第1種の手法を用いての羽状縄文を施した胴部破片である。20は、Rの原体を横位回転して無節の斜縄文を施文した後、L Rの原体を横位回転施文して羽状縄文効果を表



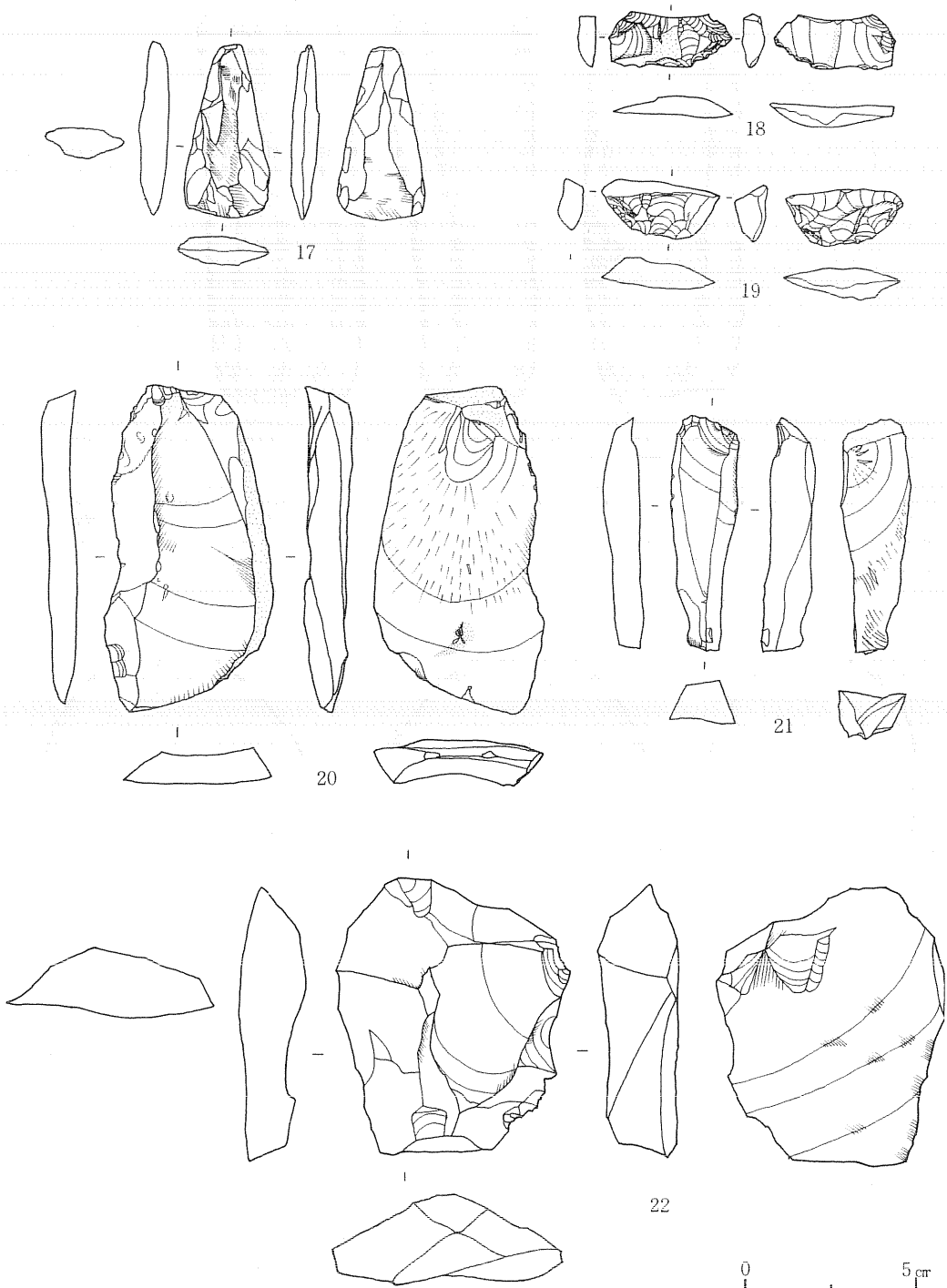


第54图 SX(R)001 捨場出土石器(1)

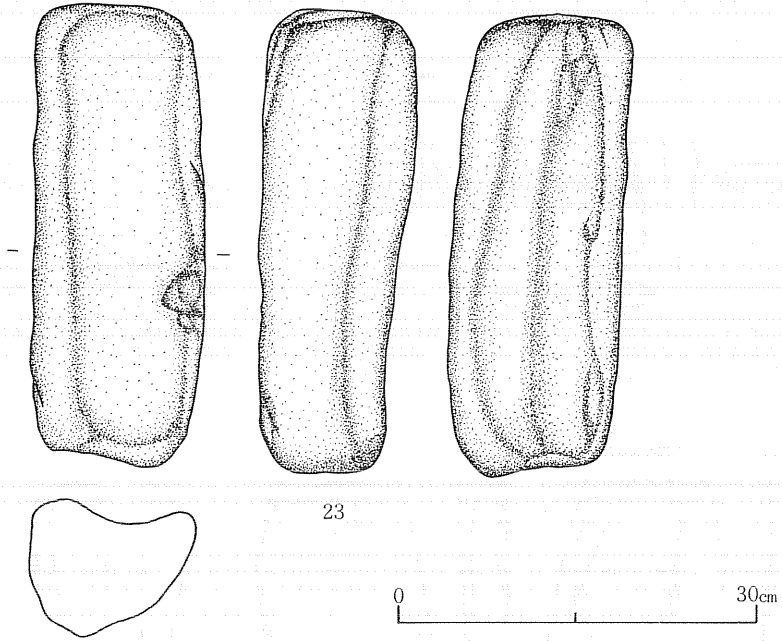


第55図 SX(R)001 捨場出土石器(2)



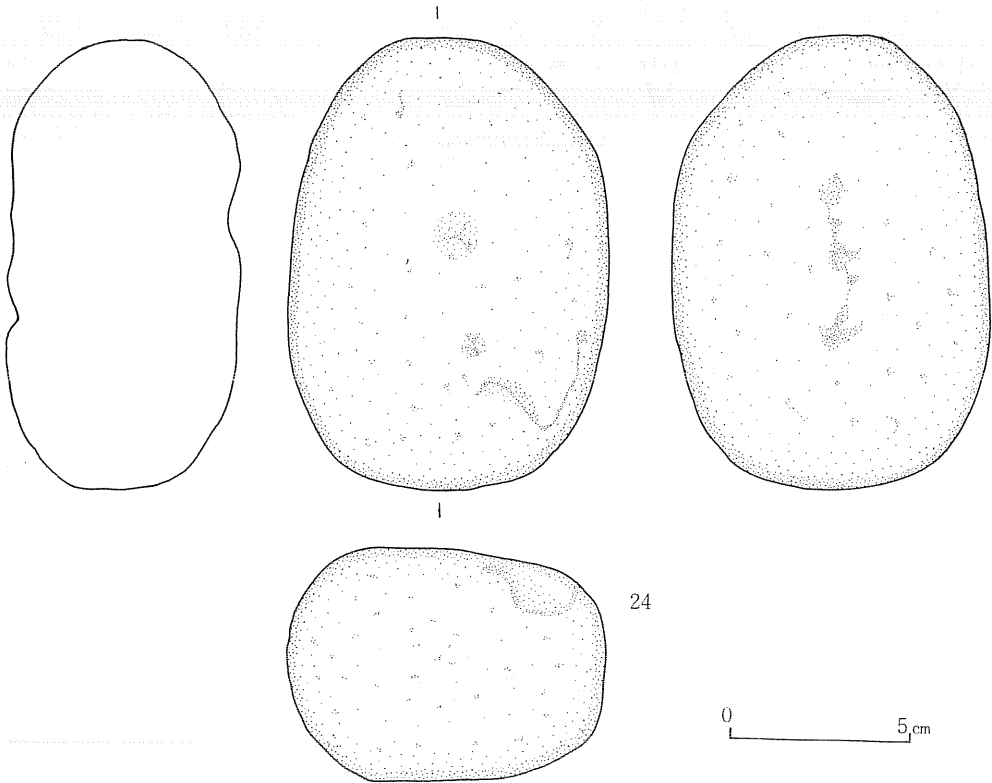


第56図 SX(R)001 捨場出土石器(3)



23

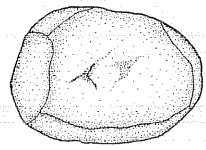
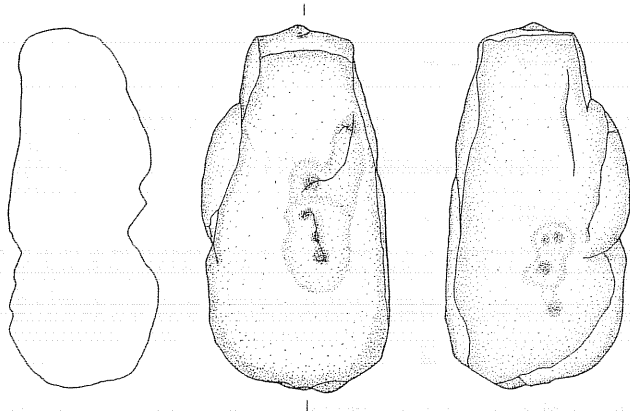
0 30cm



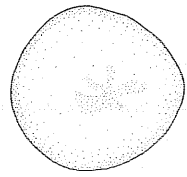
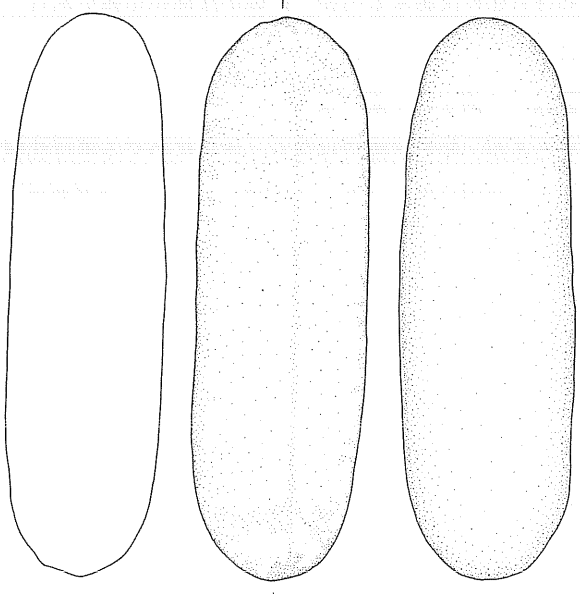
24

0 5cm

第57図 SX(R)001 捨場出土石器(4)



25



26

0 5 cm

第58图 SX(R)001 捨場出土石器(5)

出したものである。R及びLR原体は、同一の繊維からの撚紐を使用している。

**第60図22～24 第Ⅲ群1類a種**

同一個体である。曲線的沈線による主要モチーフを短い弧線が連結している。地文としてRLR原体を左上→右下の方向で斜位回転施文している。

**第60図25～27 第Ⅲ群1類b種**

逆S字状の沈線文が横位に展開する。25はゆるやかな波状口縁を呈するものであり、27は壺形土器肩部破片と思われるが、磨消縄文手法及び刺突文が併用されている。

**第60図28～30 第Ⅲ群1類c種**

複数の沈線によって縄文部と無文部が画され、全体の構図としては入組状を呈すると思われる。30は、口縁の僅かに外反する鉢形土器破片である。

**第60図31～38 第Ⅲ群1類d種**

沈線文が幾何学的構図をとり、主に矩形区画をとる。磨消縄文手法を併用するものもある。31～34は、横位沈線を連結する縦位弧線上下端、矩形区画隅等に竹管による刺突の施されたものである。35～38は、やはり矩形区画をもつが、沈線の状態が粗雑であり、磨消縄文手法もさほど顕著ではない。31は、ゆるやかな波状口縁を呈する。

**第60図39～42 第59図21 第Ⅲ群1類e種**

やはり幾何学的構図をとるが、矩形区画ではなく、水平にめぐる平行沈線から、弧状沈線がのびるという形をとる。平行沈線は概ね3条1組で描かれるが、磨消縄文手法は顕著ではない。39～41は、平縁の鉢形土器破片である。第46図には、口縁がゆるやかな波状を呈し、波頂部に3単位の突起をもつ浅鉢形土器である。突起頂部には深い刺突が施され、内側に弧線がひかれる。文様帯は上限を突起間を結ぶ3条の弧線、下限を4条の平行沈線で画され、突起と対応して上下からのびた縄文部分が入組む。

**第60図43～46 第Ⅲ群3類**

磨消縄文手法による、曲線的な縄文区画文が基調をなすものであり、地文としての縄文が比較的細かく、沈線も細い。

**第61図47～50 第Ⅲ群4類**

同一個体である。口縁には肥厚した突起、粗い刻目によって作出された2個1組の突起等が付けられる。口頸部文様帯には、刻目の充填された入組帯状文が数段に亘って施される。さらに47のような貼瘤や、48のような突起に対応する円形文等も描かれる。入組帯状文結節部は、50に示されるように完全な入組文とはならず、連結するS字状沈線を境として、僅かに縦位置のずれる変則的なものとなっている。

### 第61図51 第Ⅱ群2類

遺構外からの出土は、この1点だけである。原体の撚りはRのものであり、僅かに内傾する口縁部破片である。

### 第61図52～56 第Ⅲ群5類a種

縄文のみの粗製土器である。52は、波状口縁のものであるが、波頂部を境として右側が大きく切り込まれ非対称である。口唇部にも縄文が回転施文される。53、54は平縁のものである。56は、やや外反する折返し口縁のものであり、同一原体が口縁では横位に、胴部では縦位に回転施文される。

### 第61図57～64 第Ⅲ群5類b種

胴部に回転施文する原体と同一の撚紐の圧痕によって縄文部分と無文部分を画するものであるが、57～60は、無文部分上下に1条ずつ撚紐の圧痕が認められ、口縁上端及び胴部の縄文施文部分とを画している。57は波状口縁のものであるが、52同様非対称のものであり、口唇部にも縄文が施される。61～64は、1条の撚紐の圧痕によって、口縁無文部分と胴部縄文施文部分とが画されるが、61、62のように無文部分の比較的幅広のものと、63、64のように幅の狭いものがあり、後者は、口唇部がやや肥厚する。この種の器形は、無文部分以上で外反する深鉢であり、使用される原体は、L Rが多い。

### 第61図65 第Ⅲ群5類c種

ヘラミガキによる器面調整の結果、無文化したものである。器形は、やや内傾する口縁の深鉢と思われる。

### 第61図66～69

縄文の施文された胴部破片である。68、69は、底部近くのものであり、下半は縄文が施文されていない。

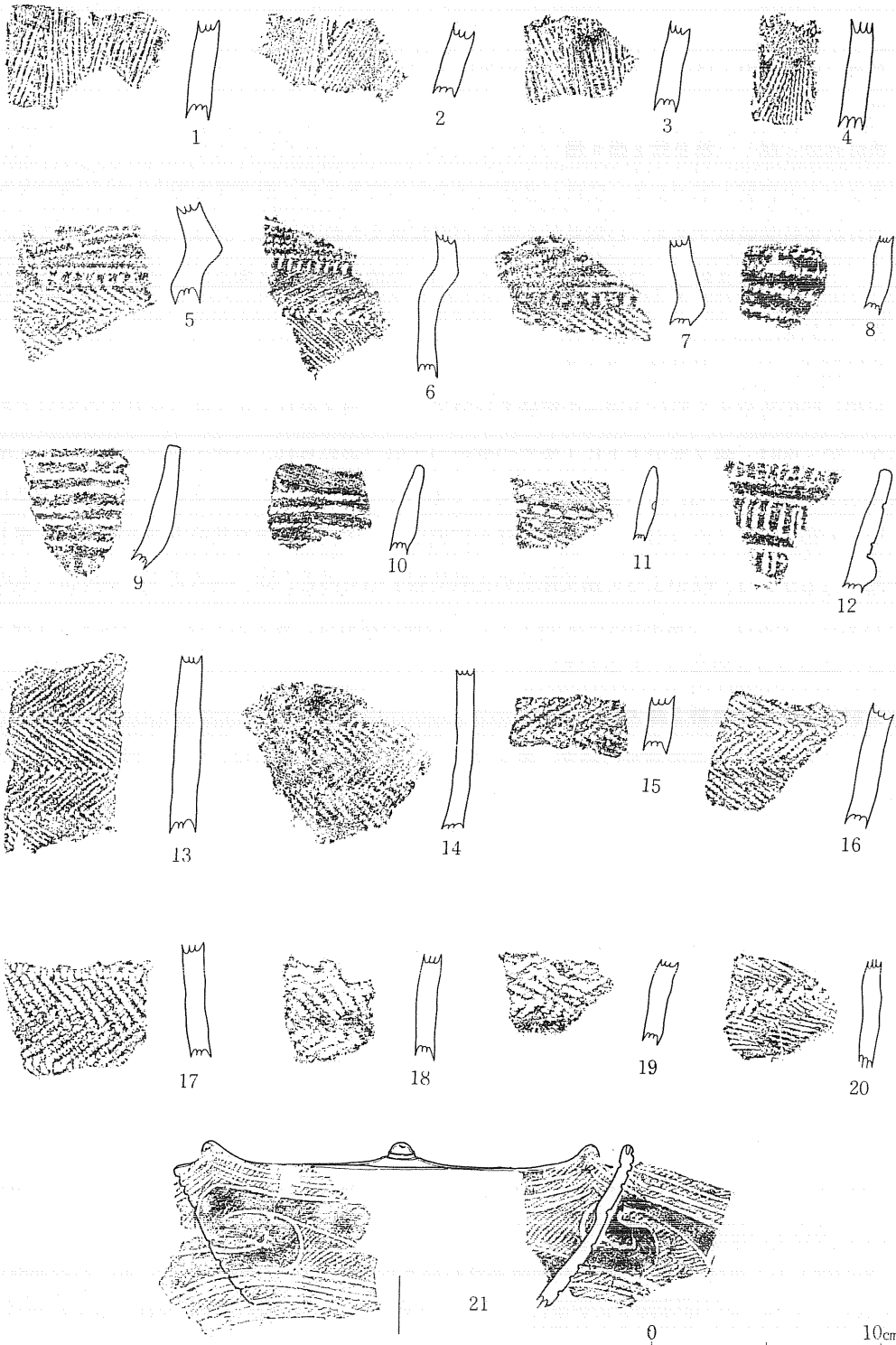
### 第62図70～75

土器底部である。遺構外出土の底部は13点で、網代痕4、笹葉状圧痕3、圧痕のないもの6である。70～73は、幅2mm(70・73)、幅2mmと3mm(71)、幅3mm(72)の原体を用いた簡単網代編みである。74・75は禾本科植物の葉が重複しているものである。

### ii) 石器(第63図～第65図)

遺構外からは、石鏃2、石錐2、石匙3、搔器2、筒状石器2、石皿2、半円状扁平打製石器1、磨石3の総計17点が出土している。

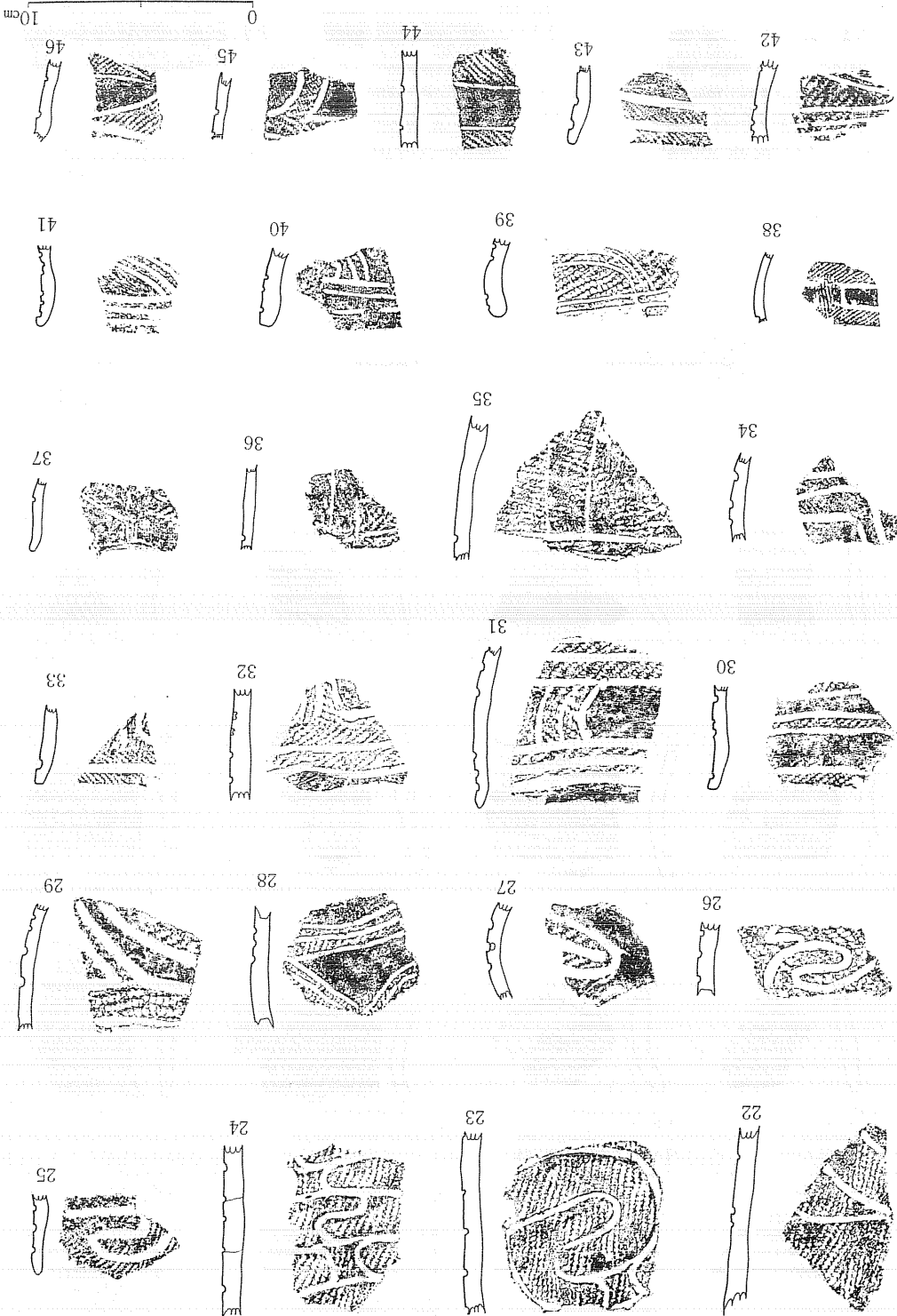
第63図1の石鏃は、両面に細かな剝離調整が施されているが、第63図2の石鏃は剝離調整が周縁部のみである。第63図4の石錐はつまみ部が大きく、この部分に剝離調整は施されていない。石匙(第63図5、6)は縦長、第62図7は横長の剝片を使用しており、剝離調整により刃



第59圖 遺構外出土土器(1)

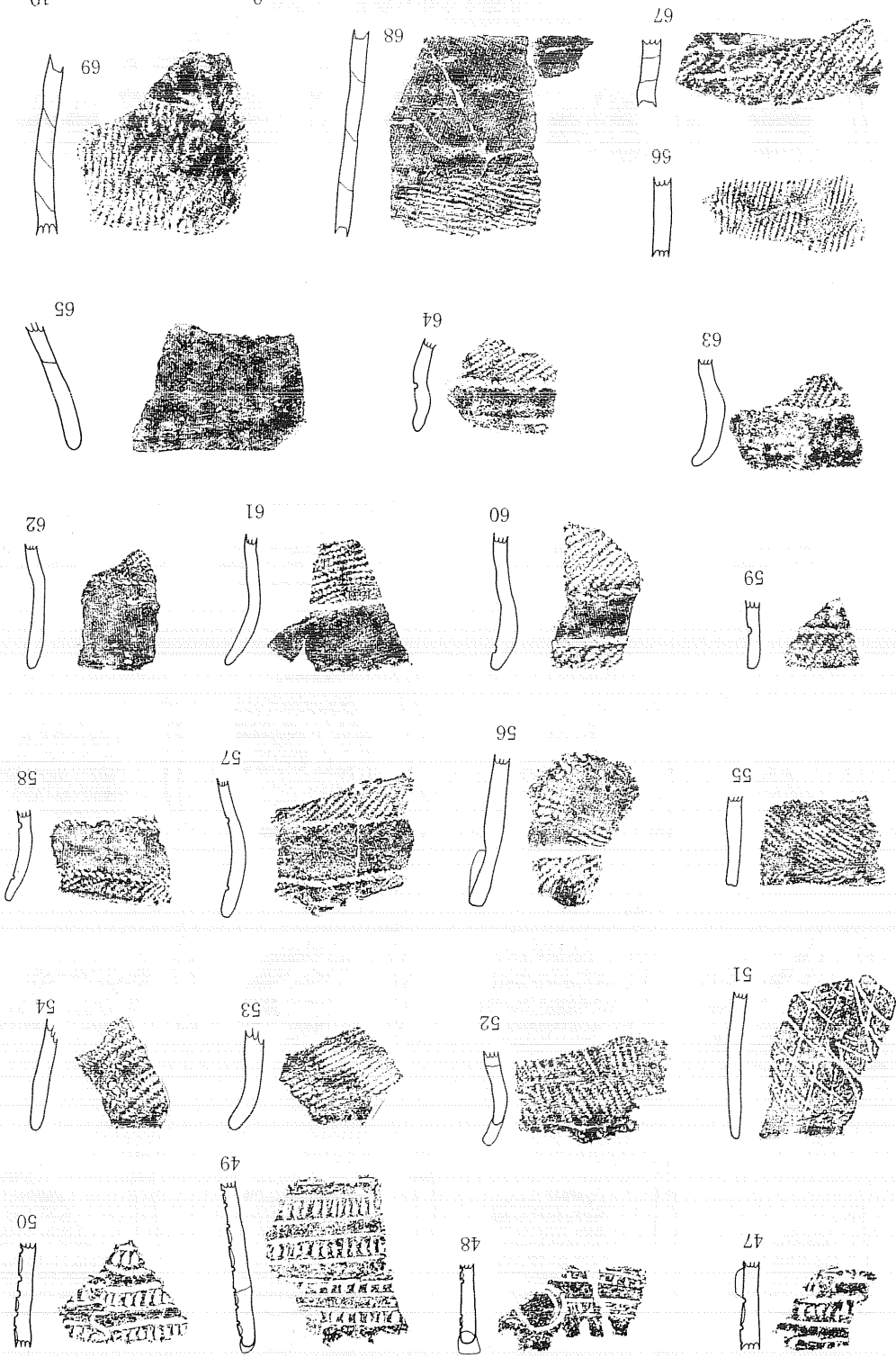


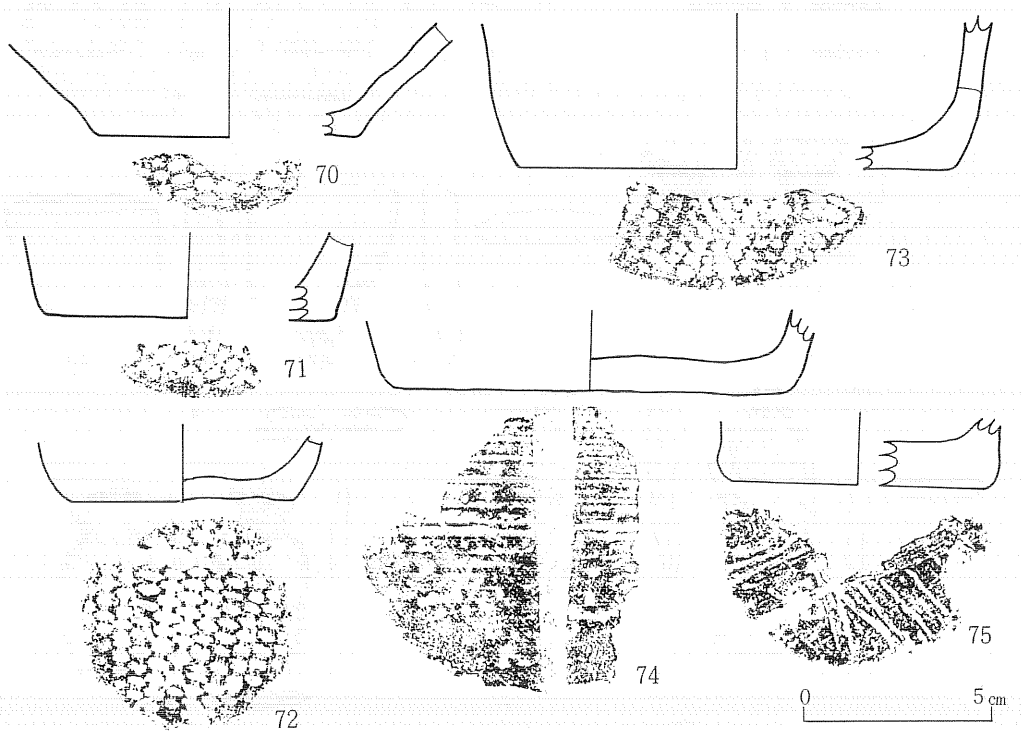
第60圖 遺構外出土器(2)



第61圖 遺構外出土器(3)

10cm  
0

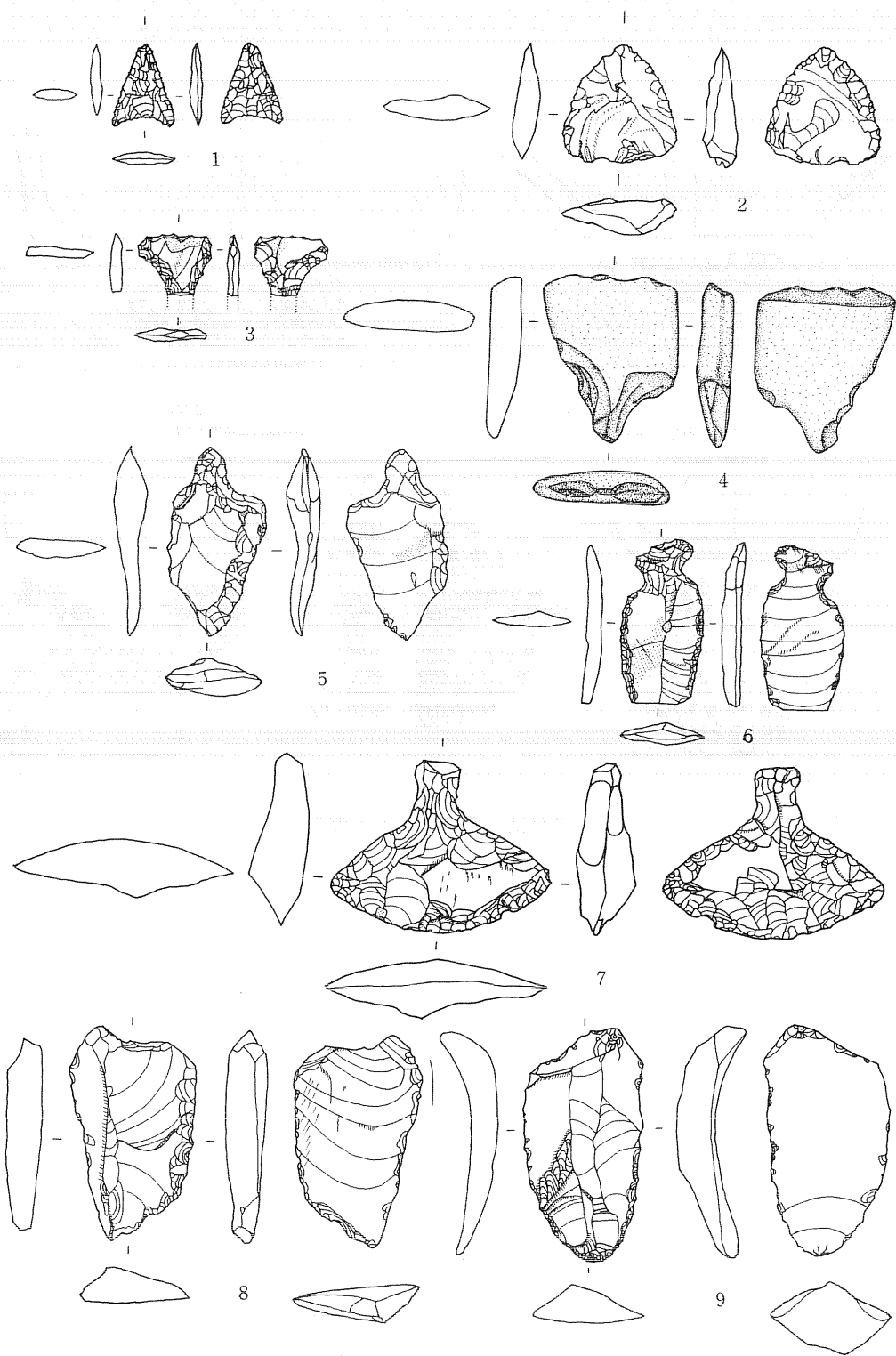




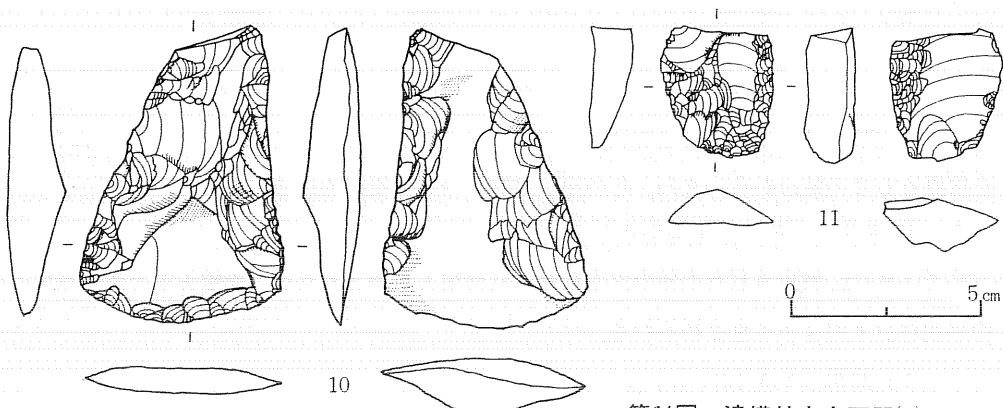
第62図 遺構外出土石器(4)

部を作り出している。搔器（第63図8・9）、背離面からの調整が加えられたものである。

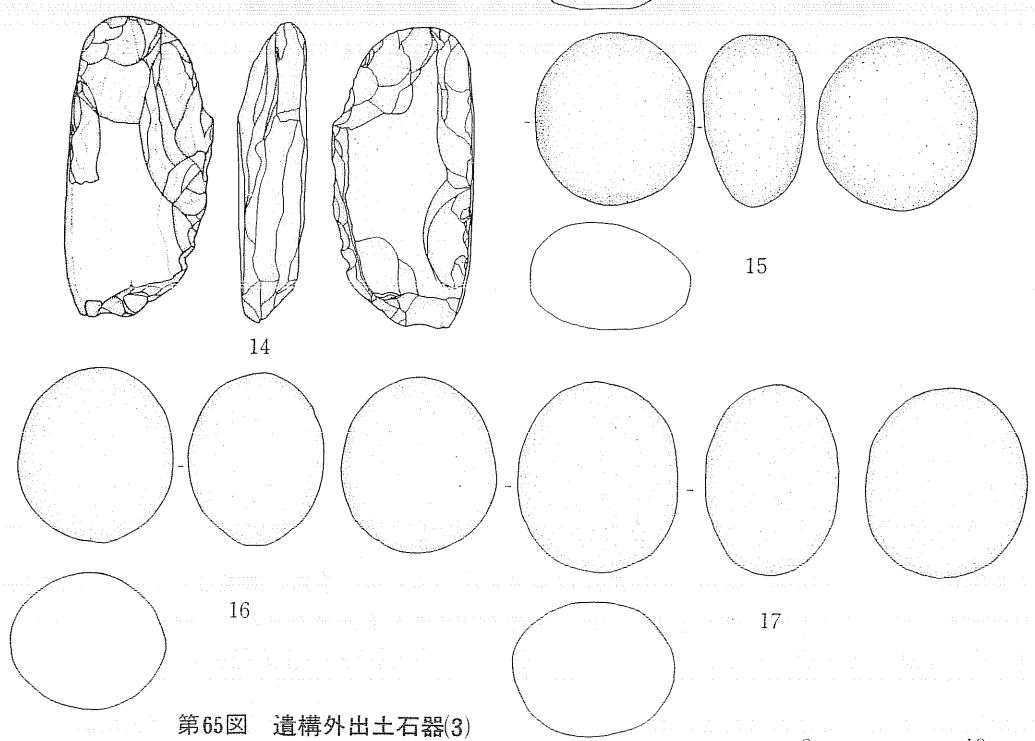
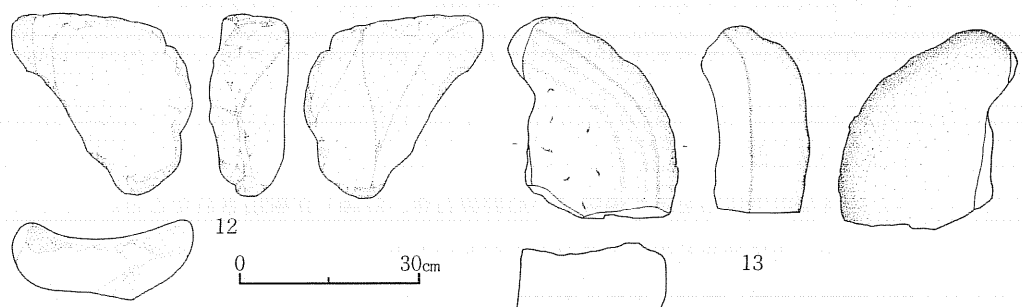
筥状石器（第64図10・11）は、縦長の剥片を使用したもので、両側辺に剝離調整を加え、刃部を作っている。石皿（第65図12・13）は、大形の川原石を使用したもので、12は2面、13は1面を使用している。半円状扁平打製石器（第65図14）は、扁平な川原石を用い、1側辺を磨き、他の側辺は敲打によって刃部を作り出している。磨石（第65図15～17）は両面を使用している。



第63圖 遺構外出土石器(1)



第64図 遺構外出土石器(2)



第65図 遺構外出土石器(3)

## 6. ま と め

以上、居熊井遺跡の遺構と遺物について述べてきたが、ここでは、その中心となったSX(R)を捨場としての観点から、また、その出土遺物について総括的に述べてみたい。

### I 捨場SX(R)と廃棄物としての土器

SX(R)は、検出された土器の出土状態から捨場と予測されたが、捨場とその廃棄物についての事実は以下のようにまとめられる。

#### ア・捨場〔SX(R)〕

- i) 自然地形(斜面)を利用すること。
- ii) 自然営力による遺物の分布層と、意図的な堆積層に分けられること。
- iii) 遺物分布に3箇所のみまとまりが認められ、破片の接合は各まとまり内で行われること。

#### イ・廃棄物〔土器〕

i) 特殊な出土状態を示す遺物(小形磨製石斧、耳飾)が検出されたこと。

ii) 粗製土器に補修孔の穿たれたものが多いこと。

iii) 精製土器数、粗製土器数において

単独破片<sup>(註2)</sup> ; 精製土器 $\geq$ 粗製土器 } 精製土器 $\approx$ 粗製土器  
接合・一括破片 ; 粗製土器 $\geq$ 精製土器 } (遺跡全体で推測される個体数)

という関係が認められたこと。

居熊井遺跡における土器廃棄パターンは、アーi)、ii)により、小林達雄氏分類のパターンD(平和台パターン)<sup>(註4)</sup>及び、パターンEに該当する。即ち、土器廃棄行動に際し、竪穴住居跡以外の特定な場所〔SX(R)〕が選定され、小破片から完形乃至は完形近くまで及ぶ土器が棄てられ(パターンD)、その後、自然営力による再堆積作用によって形成された土器片を多く含む第VI層が、SX(R)付近に同様の原因によって再々堆積(パターンE)したものと考えられる。

また、小林氏は、特にパターンA(吹上パターン)を例として、土器廃棄の行動は、トータルシステムとしての縄文人の周期的(シーズン制的)生活行動の中で意義づけられるべきものであり、直接的には土器製作及び使用の問題と関わるとし、使用可能な土器が多量に棄てられている事実と、補修孔やアスファルトによって修繕された土器が存在するという事実、このような一見矛盾する現象もそうした仮説では統一的に把え得る事を述べている。<sup>(註5)</sup> 事実、捨場としてのSX(R)においても、イーii)としてあげたように同様の現象が認められるのであるが、同時にイーiii)としたような現象も認め得るのであり、精製土器と粗製土器とではその廃棄に関して若干異なった様相が呈示されていると思われる。即ち、パターンDとして認識された明らかに意図的に棄てられ

た第2層中であっても、精製土器は粗製土器と比べて単独破片で出土した例が多く、未だ使用可能な状態で棄てられたと思われる接合・一括破片で出土した例は、粗製土器の方が多いという事実であり、さらに補修孔に関しては穿たれているのは粗製土器のみであって、精製土器に穿たれた例はないのである。この事実から、居熊井遺跡においては、小林氏のいわれた土器と古い土器との「取り換え」という土器の製作 — 使用 — 廃棄に関する特徴的な行動様式は主に粗製土器に関して顕著であり、精製土器の場合は異った行動様式のもとにその廃棄が行われたのではないかと考えられるのである。

さらに小林氏は、土器の廃棄には不用品を「片付ける」といった単純な動機の他に、土器製作ともかかわる特定の動機の存在の可能性を指摘している。<sup>(註7)</sup>このことは、使用不能となった土器片が塵屑と区別され、丁寧な扱いをうけるという民族例、パターンBに見られる特殊な土器の廃棄例、パターンA・Dに見られる使用可能な土器の廃棄例から想定されているのであるが、本遺跡にあっても、そういった土器の廃棄行動に介在した特定動機の想定を可能にする事実が認められる。即ち、イーi)とした特殊遺物の存在である。恰かも人体に装着されたまま出土したような一対の耳飾り、地面に突き立てたように出土した小形磨製石斧がそれであり、これらは、他の土器と異なり、「投棄」というよりは、むしろ「安置」という方が適切な出土状態を示している。さらに、遺物に表われるそれを残した人間の精神性の度合が遺物の種類によって相対的に測り得るものならば、日常頻繁に用いられたであろう粗製土器や、利器としての石器はその度合の小さいものであろうし、実用的な意味を殆んど持たない装飾品の類は特に大きいものであろう。そして、より加飾され、文様それ自体に意味がこめられるような精製土器は、ちょうどその半ばに位置すると思われる。そして、土器の製作を「補給」という観点で把えるなら、その生産的意味合から、第一義的な対象は、より実用的な粗製土器にこそあったと思われる。小林氏によって土器製作と表裏一体をなすと考えられた廃棄においてもその中心は粗製土器であったと考えられる。<sup>(註8)</sup>

以上のようなことから、SX(R)における土器の廃棄では、「投棄」された主体としての粗製土器と、「安置」された客体としての特殊遺物、さらには破片として単に棄てられた精製土器の3者があり、土器廃棄の背景となる特定の動機についても、その中心に粗製土器について新たに製作された土器と古い土器との「取り換え」という意識があり、そこに、特殊遺物によって示唆される何らかの特別の意義を付加しようとしたものと考えられる。

## II 土器について

遺構と遺物の項で冒頭に記したように、居熊井遺跡出土の土器は大別して3つの群にまとめられ、SX(R)出土の土器は主に縄文時代後期前葉～中葉に位置づけられた。ここでは、隣接地域の当該期資料、主に青森県の例との対比を試みながらSX(R)出土土器群を型式学的に検討

したい。

(註9)

### 十腰内 I 群 (I 式) 土器

十腰内 I 群土器は、分層的な発掘成果をもとに設定された型式であり、関東地方の堀之内式や東北地方南半の南境式、宮戸 I a 式、I b 式に併行するとされ、後期初頭に位置づけられた。以下、その型式内容を要約する。

- 器種構成は主体となる深鉢、橋状把手の付されたものを含む壺、鉢等から成る。
- 深鉢形土器における文様構成は、波状口縁のもので口縁波頂部に刻みや押圧を施すものがあり、多く口縁部は無文帯をなす。文様帯は通常頸部～胴部上半に設けられ、上下は文様帯区画が重なることもある。文様帯文様は、2～3条の平行沈線によって描かれる横位展開の入組文を基調とし、磨消縄文が用いられることもあるが、他に縦位区画例、細い粘土紐による貼付文例も多い。平縁のものでは波状口縁とはほぼ同様の文様構成をとるものと、全く無文のもの、竹管により乱雑な平行沈線の施されるもの、撚糸文、網目状撚糸文を施すものがある。

十腰内 I 群土器は層位的に一括出土したものだっただため、型式設定当初からその細分の可能性が大きいことが予測され、I 群土器に含まれる細い粘土紐貼付文、平行沈線文、磨消縄文の3つの文様表出技法が、その基準となり得ることが述べられている。<sup>(註10)</sup>

(註11)

### 大曲 I 号遺跡出土土器

榎林式、大木10式から関東地方称名寺式、堀之内式、東北地方北半では大湯式までに併行し中期末～後期初頭に位置づけられて、山田野 A 式、山田野 B 式、山田野 C<sub>1</sub>～C<sub>7</sub>式と仮称された。以下、報文から抜粋、要約する。

#### ◦ 第 1 類土器 (山田野 A 式土器、榎林式、大木10式に相当)

殆どが、口縁の外反する深鉢形であり、平縁のものとは4単位のかすかな波状口縁をなすものがある。平縁のものには折返し口縁のものもある。胴部に施される文様は、殆ど斜行縄文だけであるが、磨消縄文手法を用いたものもある。

#### ◦ 第 2 類土器 (山田野 B 式土器)

深鉢形、浅鉢形、壺形があり、口縁には平縁のものとは小さな山形突起をおくものがある。胴部の文様は、地文としての縄文に沈線による曲線文をあしらったものや、さらには、半円形の区画に点線または鎖線を充填し胴部に三日月状の貼付文の施されるものがある。底部は全て網代痕が施される。

#### ◦ 第 3 類土器～第 9 類土器 (山田野 C<sub>1</sub> 式～山田野 C<sub>7</sub> 式土器)

深鉢形、浅鉢形、壺形、甕形等がある。口縁形状にも波状口縁、平縁のものがあり、装飾隆起部の設けられるものもある。文様としては、半肉彫的手法と沈線文を併用す



る文様、並行線による長円形区画文、鉤形文、渦巻文などが施される。

大曲Ⅰ号遺跡出土土器の第3類～第9類土器という分類は、概して、十腰内Ⅰ群土器のバラエティの指摘という域を越えるものではなく、積極的に型式設定が可能となるような類別は  
(註12)  
されていない。

(註13)  
中の平遺跡出土土器

関東地方後期初頭からの称名寺式、堀之内Ⅰ式、堀之内Ⅱ式の類型に基づいて、十腰内Ⅰ群土器の細分が試みられた資料であり、新たに大曲Ⅰ式の設定もなされた。以下、その細分された土器群を要約する。

○後期第Ⅰ群土器（大曲Ⅰ式土器）

(註14)  
大曲Ⅰ号遺跡第2類土器（山田野B式）を標式として設定された型式である。深鉢形を基調とし、稀に壺形の土器もある。文様は主に胴部に展開するが、無方向な入組曲線文、枝先状の曲線文、擦り消し沈線文、網様擦糸文、格子目状沈線文が施される。

○後期第Ⅱ群土器（十腰内Ⅰa式土器）

深鉢形、浅鉢形を基調とするが、浅鉢が特に発達し壺形土器も次第に多くなる。文様は、口縁部、頸部、胴部に横位文様帯が設けられて施文されるが、他に縦位文様区画内に施文されることも特徴的であり、網様擦糸文、長方形（区画）文、入組状曲線文、縦位平行沈線文、弧状沈線文、蛇行懸垂文、X字状充填文があげられる。

○後期第Ⅲ群土器（十腰内Ⅰb式土器）

深鉢形、浅鉢形、壺形の三形態を基幹として成立しており、波状平行沈線文、波状入組曲線櫛目文、入組状曲線文、菱形方形文、幾何学的充填文、入組状曲線文、菱形充填区画文、入組連繫文、幾何学的区画文、磨消縄文の入組文、鍵状L字文、花卉状区画文等が描かれる。磨消縄文については多く充填縄文手法が用いられる。

この細分編年案は、一応後期初頭～前葉を3階程として扱ったものであり、十腰内Ⅰ群土器が型式設定された際に予測された細い粘土紐の貼付文→平行沈線文→磨消縄文という型式変遷観とは第1階程から第2階程への移行の点で異なるが、円筒土器の解体、変化から平行沈線文の多用される土器文化の確立、さらにその発展という中期末から後期前葉に亘る大枠の流れでは一致して把握されている。

居熊井遺跡、特にSX(R)で主体的に検出された土器は、第Ⅲ群Ⅰ類c種、d種とした入組状磨消縄文、幾何学的磨消縄文によって文様構成される土器群であるが、この土器群を十腰内Ⅰ群土器との対比で捉えるならば、中の平遺跡後期第Ⅲ群土器（十腰内Ⅰb式）とされたより新しい部分に併行すると考えられる。十腰内Ⅰ群土器の型式設定にあっても、磨消縄文手法はより後出する要素として理解され、その理解のもとに細分が行われているからである。居熊井

遺跡で類別された第Ⅲ群Ⅰ類c種及びd種の文様は、かなり純粹にこの磨消縄文手法によって構成されている。

さて、十腰内Ⅰ群土器の分布中心地域では、十腰内Ⅰ群土器から十腰内Ⅱ群土器への移行が、外部地域からの土器文化の影響によってもたらされたものとの考えが提示されている。<sup>(註15)</sup>これは、加曾利B<sub>1</sub>式の北海道までも含めた汎東日本化を指してのことであるが、文化の伝播、波及が、いわば自動車におけるトランスミッションに例えられるような何重かの伝達地域の介在を前提として行われたものである以上、加曾利B<sub>1</sub>式の汎東日本化という現象は、ある時期をもつての土器型式の激変を意味するものではなく、小波及的にもたらされた変化の積み重ねの結果として理解されるものである。したがって、十腰内Ⅰ群土器における細分型式の変化もそうした観点から捉えられる。

居熊井遺跡第Ⅲ群Ⅰ類c種、d種に伴ったと考えられる第Ⅲ群5類とした粗製土器と、十腰内Ⅰ群土器分布中心地域のそれとを比較すると、第Ⅲ群5類にかなり特徴的なb種の土器、口縁部無文帯と胴部縄文帯との境に撚紐の圧痕が施された土器は、十腰内Ⅰ群土器の中心地域ではその類例が認められず、むしろ太平洋側の岩手県であるとか、秋田県においても南部に認められる。<sup>(註16)</sup>このことは、同じ磨消縄文手法が多用される第Ⅲ群Ⅰ類c種、d種の土器であってもそれを十腰内の文化圏に属する十腰内Ⅰb式そのものとして捉えるよりも、十腰内Ⅰb式への型式変化に影響を及ぼした、より南側に位置する伝達地域及びその文化圏に属する土器群として理解することの蓋然性を示唆していると思われる。<sup>(註17)</sup>

第Ⅲ群土器Ⅰ類e種とした比較的細い沈線によって幾何学的沈線文の描かれる土器群は、本来の十腰内Ⅰ群土器にはないと思われるが、大湯環状列石では特殊な器形の壺形土器、即ち、口縁部が大きく開き、沈線のめぐらされる突起が付され、胴部縄文に回転方向を変えて羽状効果を表出させた土器に好例を認めることができる。<sup>(註21)</sup>類例が少なく確言できないが、このような土器には、一つに第Ⅲ群Ⅰ類c種及びd種に伴った特殊な意図のもとに製作された土器としての可能性、また一つには、沈線の細密化、波状口縁波頂部の突起化、撚りの細かい縄文の多用というような型式変化の流れの中で位置づけられる時間差をもつた土器としての二つの可能性を指摘できる。

居熊井遺跡は、主に縄文時代後期前葉から中葉にかけて営まれた遺跡である。遺跡は、特に捨場によって特徴づけられ、多量の土器を中心とする遺物を出土した。縦貫道建設に伴う調査のため調査区に限界があり、捨場を形成した人間集団の生活が必ずしも充分復元されたとは言いがたい。今後の類例の増加を待ち、課題としたい問題である。

- 註1 ここで、精製土器と粗製土器の線引きの問題がある。居熊井遺跡出土の土器については、単に地文以外の文様の施されたものを精製土器、地文または単なる器面調整のみのものを粗製土器として扱ったが、この分け方は、必ずしも土器の機能面を推測し得る器形、器種などの分け方とは一致しないし、また同一型式内における文様表出の技法の点でも、稚拙なものから精緻なものまで様々ある。例えば、単に器形という点をとっても、縄文時代全般を通じて、地文及び器面調整以外に文様が施されるか否かに拘らず、深鉢形の土器は存在し、本遺跡にあっては例外ではない。
- 註2 単独破片、接合・一括破片の認定に際しては、使用不能の状態になった時点、廃棄されて初めて使用不能となった時点での土器片及び土器の破砕を想定している。単独破片としたものは、SX(R)外で使用不能の状態に破損し、破片としてSX(R)に廃棄されたもの（小林達雄氏分類、ケース3）であり、接合・一括破片としたものはSX(R)に廃棄された時点で破片となったもの（同分類、ケース1）である。
- 註3 小林達雄「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』第93号 1974年
- 註4 可見通宏「住居址の廃絶と土器の廃棄」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ』1969年
- 註5 前掲註3
- 註6 前掲註3 この点に関連して、小林氏は、縄文土器がめまぐるしい変化をとげ、弥生時代のように新旧2型式が一括出土することはなく、縄文土器は伝世しないことを述べておられるが、実際には2型式程度に亘る伝世はおこりうることはないかと思っている。好例ではないが、埼玉県桶川市高井東遺跡第8A住居跡は、最低2回の拡張が考えられる竪穴であるが、安行3a式、安行3b式（姥山Ⅱ・Ⅲ式）、安行3c式の復元可能な各型式を出土している。
- 註7 前掲註3 このような土器廃棄の意識的背景について、末木健氏は、竪穴、斜面への廃棄は単に「埋立て」という実利的なねらいをもった行為も考えられるとし、精神文化としての背景を疑問視しているが、鈴木克彦氏は、縄文人の思惟様式、倫理規範から導かれる精神的行為が背景としてあることを述べ、例として、廃棄場所における後期からの土偶の頻出、晩期の岩版、土版、岩偶の頻出、完形で棄てられた石器等をあげ、「供養」の意識を想定している。  
鈴木克彦「廃棄論の再構成と課題」『考古学ジャーナル』第142号 1977年  
末木 健「縄文時代中期土器廃棄の再検討」『考古学ジャーナル』第133号 1977年
- 註8 本来、「投棄」は廃棄の定義に含まれるが、「安置」は、廃棄の定義から外されるものである。しかし、ここでは遺跡内の廃棄場所としてのSX(R)において、この二者が同時に認められ、廃棄行為の中で主体的な位置を占める「投棄」に加え「安置」もまた補足的な意義をもつと考える。
- 註9 今井富士雄・磯崎正彦「十腰内遺跡」『岩木山』所収1968年
- 註10 円筒土器上層式以後中期終末に至る土器型式変遷の趨勢は、隆線文的なものから、沈線文的な傾斜が認められるとし、十腰内I式設定以前の編年（角田文衛1935、江坂輝弥1956）観とも併せてその可能性を示唆している。
- 註11 田村誠一「大曲I号遺跡」『岩木山』所収1968年

- 註12 第4類土器(山田野C2式)は、その後、千歳⑬遺跡b類I器の一部に類例が認められるとされた。田村氏が分類したものは報文による限りでは、十腰内I群土器中の古い要素をもつ土器群(口縁に粘土紐が貼付されたもの等)を分離したものであり、本遺跡S I 001出土土器や、千歳⑬の土器が、元来、十腰内I群土器として把握されていたかどうかは疑問が残る。
- 註13 鈴木克彦他『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第25集 青森県教育委員会 1974年
- 註14 井上 久他『縄文土器のうつりかわり』 青森県立郷土館 1976年  
また、同書において、三宅徹也氏は鈴木氏の見解と異なり、大曲I式が大木10式に含まれる可能性を述べている。
- 註15 前掲註13
- 註16 門前貝塚第Ⅲ群3類土器  
及川洵他『門前貝塚』岩手県陸前高田市教育委員会 1974年
- 註17 片符沢遺跡出土土器1-(1)-②種土器  
橋本高史・富樫泰時他『片符沢遺跡I発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書 第72集 秋田県教育委員会 1980年
- 註18 秋田県においては大館市塚ノ下遺跡が十腰内I群土器の分布圏に入ると思われる。当遺跡では、十腰内I a式とされるより古い部分の土器が磨消縄文を施された土器を伴ってかなり主体的に出土した。また粗製土器においても、網目状撚糸文を施した折返し口縁のものや、無文のものが多く、撚紐の圧痕によって特徴づけられる居熊井遺跡の粗製土器とは様相を異にする。  
富樫泰時他『塚ノ下遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書 第61集 秋田県教育委員会 1979年
- 註19 居熊井遺跡第Ⅲ群1類c、d種としたものは、県内では片符沢遺跡、北野遺跡(『縄文土器』日本原始美術大系I 講談社 1977)等でも出土し、また、山形県水上遺跡、第Ⅱ群b類土器も、同種の可能性があり、宮戸I b式に比定されている。このように東北地方南半にもある程度分布するものと思われる。
- 註20 本遺跡と地域を同じくする大湯式土器について、鈴木克彦氏は、より新しい段階、堀之内Ⅱ式併行と捉え、同様の見解が大和久震平氏によっても唱えられたが(『秋田県の考古学』吉川弘文館 1967)、芹沢長介氏は加曾利B式併行と、さらに新しい段階に位置づけた(『石器時代の日本』築地書館 1968)
- 註21 同型のものが岩手県北上市八天遺跡から出土している。  
本堂寿一他『八天遺跡』北上市文化財調査報告27集 北上市教育委員会 1979年  
文化財保護委員会『大湯町環状列石』 1953年

#### 《主要参考文献》

- 山内清男他編「縄文式土器」『日本原始美術I』 講談社 1964年
- 林 謙作「東北一縄文文化の発展と地域性」 河出書房新社 1965年

- 山内清男編『日本先史土器図譜』（再版、合冊） 先史考古学会 1967年
- 麻生 優「原位置論序説」『上代文化』38 1969年
- 草間俊一編『貝鳥貝塚』 花泉町教育委員会 1971年
- 佐藤禎宏他『神矢田遺跡』山形県遊佐町教育委員会 1972年
- 草間俊一編『崎山弁天遺跡』岩手県大槌町教育委員会 1974年
- 村越 潔『円筒土器文化』 1974年
- 市川金丸他『中の沢西張遺跡、古街道長根遺跡調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第29集 青森県教育委員会 1975年
- 三浦圭介他『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』青森県埋蔵文化財調査報告書第22集 青森県教育委員会 1975年
- 井上義安他『茨城県おんだし遺跡』 大洗町文化財調査報告書5 1975年
- 麻生 優「原位置論の現代的意義」『物質文化』24 1975年
- 新谷・山道他『妻の神、白山堂遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第30集 青森県教育委員会 1976年
- 市川金丸他『泉山遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第31集 青森県教育委員会 1976年
- 成田滋彦他『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)・三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第33集 青森県教育委員会 1976年
- 鈴木保彦他『当麻遺跡・上依知遺跡』 神奈川県埋蔵文化財調査報告12 神奈川県教育委員会 1977年
- 宮城県教育委員会・日本道路公団  
『上深沢遺跡』 東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ 宮城県文化財調査報告書第52集 1978年
- 佐原 真「縄文土器Ⅱ」『日本の原始美術』 講談社 1979年

第3表 S1001住居跡出土土器観察表

挿図 番号	出土地点	R P 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考	
				文 様	色 調	調 整	色 調					
1			胴 部	R捻糸文の縦位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	横 位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	8	白色粒	粗	普通	外面スス付着
2			胴 部	R捻糸文の縦位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	横 位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	9	石英 白色粒	粗	不良	内面スス付着, 輪積痕
3		102	胴 部	L R縄文の斜位回転。	橙色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	橙色 5 Y R $\frac{1}{2}$	7 7	白色粒	密	良好	
4		17	胴 部	不明。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	縦 位	明褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	9	白色粒	粗	普通	
5		108	口縁部	沈線文。	灰黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	灰黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	7	長石, 石英	密	普通	
6	2, 3-C	一括	胴 部	R L縄文の縦位回転→沈線と隆帯で無文部(磨消)と縄文部を区画。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	縦 位	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	6	雲母	密	不良	外面スス付着
7			胴 部	R L縄文の縦位回転→沈線で無文部(磨消)と縄文部を区画。	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	横縦位	明褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$ 赤色粒	5	石英, 長石, 雲母 赤色粒	密	普通	内面スス付着
8		69	胴 部	R L縄文の縦位回転→沈線と隆帯で無文部(磨消)と縄文部を区画。	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	雲母	密	不良	外面スス付着
9		189	口縁部	隆線文。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	黒褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	長石, 雲母 赤色粒	粗	普通	
10		189	胴 部	隆線文。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	斜 位	黒褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	雲母 白色粒	粗	不良	
11	2, 3-C		胴 部	2段の隆帯→下の隆帯下に刺突文。	にぶい橙色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	にぶい橙色 5 Y R $\frac{1}{2}$	5	雲母 白色粒	粗	不良	
12		125	胴 部	R L縄文の縦位回転→沈線で無文部(磨消)と縄文部を区画。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	縦 位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	6	石英, 長石	密	普通	
13		85	胴 部	R L縄文の横位回転→平行沈線文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	横 位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	8	石英	粗	普通	外面スス付着
14		83	胴 部	R L縄文の横位回転→平行沈線文。	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	斜 位	にぶい赤褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英	密	不良	外面スス付着
15	2, 3-C	164	口縁部	L R縄文の結束羽状文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	斜 位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	6	石英, 長石	粗	不良	外面スス付着
16		9	口縁部	R L縄文の横位回転。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	縦 位	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英, 長石		不良	外面スス付着
17		3	口縁部	R L縄文の横位回転。	浅黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	7	石英, 雲母	密	良好	
18		89	口縁部	R L縄文の縦位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	横 位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	4	石英, 長石, 雲母	粗	普通	外面スス付着
19			胴 部	L R縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	横 位	にぶい褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英 白色粒	密	普通	
20		111	胴 部	L R縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	横 位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	8	石英	密	良好	外面スス付着, 輪積痕

挿図 番号	出土地点	R P 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎	土	焼成	備 考
				文 様	色 調	調 整	色 調					
21		31	胴 部	L R 縄文の縦位回転。	橙色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	横 位	橙色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	6	白色粒	粗	不良	外面スス附着
22		110 151	胴 部	L R 縄文の横位回転。	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	斜 位	褐灰色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	8	雲母	密	普通	
23		33	胴 部	L R 縄文の縦位回転。	橙色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	横 位	橙色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	7	白色粒	密	良好	
24	2, 3--C	167	胴 部	R 網目状捺糸文。	にふい橙色 5 Y R $\frac{5}{6}$	横 位	にふい橙色 5 Y R $\frac{5}{6}$	5	石英	粗	不良	
25			胴 部	L 網目状捺糸文。	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	斜 位	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	6	石英	粗	普通	内面スス附着
26		8	口縁部	無文。	灰黄褐色 10 Y R $\frac{5}{2}$	横 位	灰黄褐色 10 Y R $\frac{5}{2}$	6	石英、長石	密	良好	外面スス附着
27		209	口縁部	無文。	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	横 位	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	8	石英、長石	粗	普通	
28		97	口縁部	無文。口唇部に沈線。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	横 位	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	5	石英、長石	粗	普通	
29		37 39	胴 部	無文。	明褐色 5 Y R $\frac{5}{6}$	縦 位	明褐色 5 Y R $\frac{5}{6}$	8	石英、雲母 白色粒	密	良好	内面スス附着
30		155	胴 部	無文。	明赤褐色 5 Y R $\frac{5}{6}$	斜 位	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	8	石英、長石、雲母 白色粒	密	良好	内面スス附着

第4表 SK土壙出土土器観察表

挿図 番号	出土地点	RP 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考
				文 様	色 調	調整	色 調				
1	SK001	8	同 部	RL縄文横位回転。	にぶい褐色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	灰褐色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	9	石英・長石 密	普通	
2	SK001	16	胴 部	RL縄文横位回転。	にぶい橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	7	石英・長石 密	普通	
3	SK001	17	胴 部	LR縄文横位回転。	にぶい橙色 5 YR $\frac{4}{1}$	横位	浅黄橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	6	石英・長石 密	普通	
4	SK001	15	胴 部	縄文施文後横走する2条の沈線(原体不明)	橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	7.5 YR $\frac{5}{2}$	6	石英・長石 粗	不良	
5	SK004	16	口縁部	LR縄文横位回転後口線に沿って2条の平行沈線。	にぶい橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	9	石英・長石 密	普通	同一個体
6	SK004	14	口縁部		にぶい橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	灰白色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	7	石英・長石 密	普通	
7	SK004	一括	胴 部	縄文施文後横走する2条の沈線(原体不明)	にぶい橙色 7.5 YR $\frac{4}{1}$	横位	にぶい橙色 7.5 YR $\frac{4}{1}$	6	石英・長石 密	普通	
8	SK004	21	口縁部	縄文施文後横走する1条の沈線(原体不明)	灰褐色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	灰褐色 7.5 YR $\frac{5}{1}$	6	石英・長石 密	普通	外面スス付着
9	SK004	一括	胴 部	LR縄文横位回転後。	にぶい橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	明褐色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	5	石英・長石 密	良好	輪積痕
10	SK004	15	胴 部	LR縄文横位回転後沈線、一部磨消。	にぶい橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	黒色 7.5 YR $\frac{5}{1}$	7	石英・長石 密	普通	内外面スス付着、輪積痕
11	SK004	18	口縁部	LR縄文横位回転後3条1組の沈線で区画し、磨消手法を施す。	にぶい橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	8	石英・長石 密	良好	内面スス付着
12	SK004	一括	胴 部	縄文のみ。(原体不明)	浅黄橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 YR $\frac{4}{1}$	7	石英・長石 密	普通	
13	SK005	11	胴 部	LR縄文横位回転。	にぶい橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	明褐色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	7	石英・長石 密	良好	
14	SK005	1	胴 部	LR縄文縦位回転。	灰白色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 YR $\frac{4}{1}$	6	石英・長石 密	普通	外面スス付着
15	SK005	2	口縁部	口線に沿ってRL細線圧痕その下に縄文施文(原体不明)	褐色 7.5 YR $\frac{5}{1}$	横位	褐色 7.5 YR $\frac{5}{1}$	6	石英・長石 密	普通	
16	SK005	13	胴 部	RL縄文横位回転。	明褐色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	縦位	明褐色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	12	石英・長石 密	良好	
17	SK006	一括	胴 部	LR縄文横位回転後横走する3条1組の平行沈線と2条1組の平行沈線間に渦巻状沈線を施している。	灰褐色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	褐色 7.5 YR $\frac{4}{1}$	7	石英・長石 密	良好	同一個体
18	SK006	23	胴 部		にぶい橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	5	石英・長石 密	良好	
19	SK006	一括	胴 部		にぶい褐色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	黒褐色 7.5 YR $\frac{5}{1}$	5	石英・長石 密	良好	
20	SK006	一括	胴 部		灰褐色 7.5 YR $\frac{5}{2}$	横位	褐色 7.5 YR $\frac{4}{1}$	6	石英・長石 密	良好	
21	SK006	21	胴 部		褐色 7.5 YR $\frac{4}{1}$	横位	褐色 7.5 YR $\frac{4}{1}$	6	石英・長石 密	普通	



挿図 番号	出土地点	R P 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考	
				文 様	色 調	調整	色 調					
22	S K 006	4	口縁部	R L 縄文横位回転後、口縁部に横走る 3 条の沈線。	にぶい橙色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい橙色 5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英・長石	粗	良好	同一個体
23	S K 006	28	胴 部		にぶい橙色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	7	石英・長石	密	良好	
24	S K 006	15	胴 部	R L 縄文横位及び斜位回転後、磨消手法による矩形区画文。	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英・長石	密	良好	
25	S K 006	26	胴 部		にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石	密	良好	
26	S K 006	一括	胴 部	L R 縄文横位回転後磨消手法による矩形区画文。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	褐灰色 7.5 Y R $\frac{5}{1}$	7	石英・長石	密	良好	
27	S K 006	16	胴 部	L R 縄文横位回転後磨消手法による矩形区画文。	明褐色 7.5 Y R $\frac{5}{1}$	斜位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石	密	普通	
28	S K 006	8	口縁部	L R 縄文横位回転。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石	密	普通	
29	S K 006	一括	口縁部	R L 縄文横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石	密	普通	輪積痕、外面煤付着
30	S K 006	24	口縁部	R L 縄文横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石	密	普通	
31	S K 006	13	胴 部	L R 縄文横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	縦位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	8	石英・長石	密	普通	
32	S K 006	2	胴 部	R L 縄文横位及び斜位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英・長石	密	良好	内面煤付着
33	S K 006	6	胴 部	L R 縄文斜位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英・長石	密	普通	
34	S K 004	6	胴 部	L R 縄文横位回転。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	斜位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	8	石英・長石	密	良好	輪積痕
35	S K 006	一括	口縁部	無文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	4	石英・長石	粗	普通	
36	S K 006	27	胴 部	無文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石	密	良好	
37	S K 006	11	胴 部	無文。	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英・長石	密	普通	

第5表 SX(R)001捨場出土土器(拓影図)観察表

挿図 番号	出土地点	層位	R P 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考	
					文 様	色 調	調整	色 調					
1	9-A	2	33	口縁部	波状口縁の頂点に2つの刺突、その下に刺突が縦に並ぶ。縦位の沈線	にぶい橙色 7.5 YR 7/4	横位	にぶい橙色 7.5 YR 7/4	6	石英・長石・雲母	密	普通	外面スス附着
2	9-AB	2	13	口縁部	波状口縁下に渦巻縄文。RL縄文の縦位回転。沈線により縄文帯と、磨消帯とに区画。	にぶい橙色 7.5 YR 7/4	横位	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	5	石英・長石・雲母	粗	良好	外面スス附着
3	9-A	2	13	口縁部	沈線による入組文。RL縄文の横位回転。 RL縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 YR 7/4	横位	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	6	石英・長石・雲母	粗	不良	外面スス附着
4	9-AB	2	一括	口縁部	口縁部に渦巻縄文、平行沈線が走る。LR縄文の縦位回転。	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	横位	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	5	長石・雲母	粗	良好	外面スス附着
5	6-AB	2	384	口縁部	波状口縁下に渦巻縄文があり、それを右傾する沈線が、胴部文様と、結ぶ。RL縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	横位	褐色 7.5 YR 7/4	7	石英・長石	密	良好	
6	9-A	2	49	胴 部	太い平行沈線間にLR縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	斜位	褐灰色 7.5 YR 4/1	6	石英	密	普通	
7	5-AB	2	716	口縁部	波状口縁、平行沈線が施される。LR縄文の横位回転。	浅黄褐色 7.5 YR 8/4	横位	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	7	石英・長石	密	普通	外面スス附着
8	10-A	2	一括	口縁部	波状口縁部に刻目をもつ。口縁部は2条の沈線。LR縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	横位	灰褐色 7.5 YR 5/2	6	石英	密	良好	内外面スス附着。輪積痕。
9	6-B	2	一括	口縁部	波状口縁、頂点に刻目が入り下には沈線による入組文。RL縄文の横位回転。	黒褐色 7.5 YR 3/1	横位	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	6	石英・長石	粗	良好	内面スス附着
10	7-B	2	120	口縁部	波状を呈する。入組文、磨消縄文。LR縄文の横位回転。	黒褐色 7.5 YR 3/1	横位	黒褐色 7.5 YR 3/1	5	長石	密	良好	内面スス附着
11	6-AB	2	一括	口縁部	波状を呈する。入組文。RL縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	横位	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	6	石英・雲母	粗	良好	外面スス附着
12	5・6-B	2	37	口縁部	波状を呈する。入組文と磨消帯。RL縄文の横位回転。	浅黄褐色 7.5 YR 8/4	横位	浅黄褐色 7.5 YR 8/4	5	石英・長石	密	不良	
13	6-AB	2	206	口縁部	波状口縁、RL縄文。内面・波状口縁部に沈線文。	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	斜位	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	5	石英	密	普通	
14	7-B	2	151	胴 部	入組文を2条の縄文帯で結び他は磨消帯。LR縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	横位	浅黄褐色 7.5 YR 8/4	6	石英・長石 赤色粒	密	普通	外面スス附着 輪積痕
15	6-AB	2	271	胴 部	4条1組の沈線文。磨消手法。沈線内にRL縄文の横位回転が成る。	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	斜位	褐色 7.5 YR 7/4	6	雲母	密	良好	外面スス附着
16	6-A	2	一括	胴 部	沈線による入組文。縄文帯と磨消帯。LR縄文の横位回転。	浅黄褐色 7.5 YR 8/4	横位	浅黄褐色 7.5 YR 8/4	5	石英・長石	粗	不良	
17	5-AB	2	600	胴 部	平行沈線による入組文と渦巻縄文。LR縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	横位	浅黄褐色 7.5 YR 8/4	5	石英	密	普通	輪積痕
18	5-AB	2	一括	胴 部	平行沈線による入組文。磨消縄文。LR縄文の横位回転。	にぶい黄褐色 10 YR 7/3	横位	にぶい黄褐色 10 YR 7/4	6	石英 赤色粒	密	良好	輪積痕
19	5-AB	2	676	胴 部	平行沈線により磨消帯と縄文帯に区画。縄文帯はLR縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	横位	浅黄褐色 7.5 YR 8/4	6	石英・長石 赤色粒	密	普通	輪積痕
20	9-A	2	一括	胴 部	渦巻状の縄文帯と磨消帯。LR縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	斜位	にぶい褐色 7.5 YR 7/4	7	石英・長石・雲母 赤色粒	粗	良好	外面スス附着

挿図 番号	出土地点	層位	RP 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考
					文 様	色 調	調整	色 調				
21	6-A	2	一括	胴 部	沈線によって、磨消、無文帯と縄文帯に区画される。R L縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	雲母	密	良好
22	9-A	2	11	口縁部	磨消、無文帯と縄文帯に区画される。L縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	雲母	密	良好 外面スス付着 輪積痕
23	8-A B	2	一括	胴 部	沈線によって、磨消、無文帯と縄文帯に区画される。L R縄文の横位回転(?)。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	雲母	密	普通 内外面スス付着
24	7-B	2	152	胴 部	沈線によって、縄文帯と無文帯に区画される。R L縄文の縦位回転。	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	横位	灰黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	6	雲母・石英 赤色粒	粗	良好 外面スス付着
25	5・6-A B	2	598 346	胴 部	R L縄文の横位回転後平行沈線。下半は横位のミガキ。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英	密	良好
26	9-A B	2	一括	胴 部	平行沈線による縄文帯と磨消帯、L R縄文の横位回転。	灰白色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	灰白色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	長石・雲母 赤色粒	密	不良 外面スス付着
27	5-A B	2	582	胴 部	3条1組の沈線によって、磨消無文帯と縄文帯に区画される。L R縄文の横位回転。	褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	雲母 白色粒	密	普通 内面スス付着
28	5-A B	2	413	口縁部	波状口縁であろう。2条1組の沈線があり胴部文様と左傾する沈線でつなく。L R縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英・雲母	粗	良好 内外面スス付着
29	5・6-A	2	1	口縁部	L R縄文の横位回転→3条1組の沈線によって磨消、無文帯と沈線間縄文帯に区画される。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英・雲母 赤色粒	粗	普通
30	8・9-A B	2	一括	口縁部	L R縄文の横位回転、2条1組の沈線、広い無文帯と沈線間縄文帯。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	明褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英・長石	密	良好 内外面スス付着
31	6-A B	2	30	口縁部	3条1組の沈線によって磨消無文帯と縄文帯に区画される。沈線内にL R縄文の横位回転が残る。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	雲母	粗	良好 内面スス付着 輪積痕
32	5・6-B	2		胴 部	R L縄文の横位回転、2条1組の沈線。広い無文帯と沈線間縄文帯。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	8	石英 白色粒	密	良好 輪積痕
33	8・9-A B	2		胴 部	L R縄文の横位回転。沈線によって磨消無文帯と縄文帯に区画される	明赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	雲母・石英	密	良好 輪積痕
34	5-A B	2	717	胴 部	磨消無文帯と沈線文。	褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・雲母	粗	普通 外面スス付着
35	6・7-B	2	154	胴 部	L R縄文の横位回転、2条1組の沈線、広い無文帯と沈線間縄文帯。	明褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	4	石英・雲母	密	普通
36	6・7-B	2	152	胴 部	L R縄文の斜位回転、3条1組の沈線間に縄文残る。広い磨消、無文帯。	橙色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英 赤色粒	密	良好 内面スス付着
37	6-A B	2	325	胴 部	横走する4条1組の沈線によって、磨消無文帯と縄文帯が区画される沈線内にL R縄文の横位回転が残る。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	雲母	密	良好
38	8-A	2	48	胴 部	L縄文の横位回転→磨消、無文帯と縄文帯に区画される。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	雲母	密	良好
39	6・7-B	2	172	口縁部	L R縄文の横位回転→磨消、手法。3条1組の沈線内に地文残る。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	5	雲母 白色粒	密	良好
40	6-A	2	一括	胴 部	平行沈線と右傾の沈線により、縄文帯と無文帯に区画される。R L縄文の縦位回転。	褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	斜位	褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	8	石英・長石	粗	不良 内外面スス付着
41	6-B	2	288	胴 部	R L縄文の横位回転→沈線によって磨消無文帯と縄文帯に区画される。	明褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・雲母 白色粒	密	良好
42	7-B	2	一括	胴 部	L R縄文の横位回転、3条1組の沈線によって磨消無文帯と縄文帯に区画される。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	斜位	明褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	雲母 白色粒	粗	普通 内面スス付着

挿図 番号	出土地点	層位	R P 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考
					文 様	色 調	調整	色 調				
43	6-B	2	一括	口縁部	L R 縄文の横位回転→磨消無文帯と縄文帯に区画される。波状口縁。	浅黄橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	浅黄橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	4	石英・雲母 白色粒	密	良好
44	6-B	2	一括	口縁部	沈線文。	橙色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	浅黄橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・雲母	密	良好 外面スス付着
45	5-A	2	一括	胴 部	沈線文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	橙色 5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・雲母 白色粒	密	良好
46	5-A B	2	一括	胴 部	沈線文。	明褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英	密	良好 外面スス付着
47	6・7-B	2	74	胴 部	沈線文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英・長石・雲母		良好 内外面スス付着
48	5-A B	2		口縁部	波状口縁頂点に刻み、L R 縄文の横位回転。沈線により幾可学的に磨消、無文帯と縄文帯に区画される。刺突文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	8	石英・雲母 赤色粒	密	普通 外面スス付着
49	5-A B	2	662	口縁部	波状口縁頂点に刻み、L R 縄文の横位回転。沈線により幾可学的に磨消、無文帯と縄文帯に区画される。刺突文。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	9	石英・雲母	密	良好 外面スス付着
50	5-A B	2	573	口縁部	波状口縁頂点下に刺突、以下沈線文。	褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英・雲母 赤色粒	密	良好
51	5-A B	2		胴 部	L R 縄文の横位回転。沈線により幾可学的に磨消、無文帯と縄文帯に区画される。刺突文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	明褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	雲母	密	良好 外面スス付着
52	5-A B	2		口縁部	L R 縄文の横位回転。沈線により幾可学的に磨消、無文帯と縄文帯に区画される。刺突文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・雲母	密	普通 外面スス付着
53	5-A	2	一括	胴 部	L R 縄文の横位回転。沈線により幾可学的に磨消、無文帯と縄文帯に区画される。刺突文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	暗赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英	粗	不良
54	5-A B	2	445	胴 部	L R 縄文の横位回転。沈線により幾可学的に磨消、無文帯と縄文帯に区画される。刺突文。	灰白色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	縦位	灰白色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英・雲母	密	普通
55	5-A B	2	一括	胴 部	L R 縄文の横位回転。沈線により幾可学的に磨消、無文帯と縄文帯に区画される。刺突文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	縦位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・雲母	密	良好
56	5・6-A B	2	598 409	胴 部	平行沈線による入組文。縄文帯と磨消縄文。L R 縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・雲母	密	普通 内面スス付着
57	5-A B	2		胴 部	L R 縄文の横位回転。沈線により幾可学的に磨消、無文帯と縄文帯に区画される。刺突文。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・雲母・長石	密	良好 内外面スス付着
58	9-A	2	一括	胴 部	L R 縄文の横位回転。3条1組の沈線により磨消、無文帯と沈線間縄文帯に区画される。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英・雲母	粗	良好
59	9-A	2	58	胴 部	L R 縄文の横位回転。3条1組の沈線により磨消、無文帯と沈線間縄文帯に区画される。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	黒褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英・雲母 赤色粒	粗	普通
60	9-A	2	6	胴 部	L R 縄文の横位回転。沈線により磨消、無文帯と縄文帯に区画される。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	雲母	密	良好
61	5-A B	2	615	口縁部	横走する縄文帯を縦走する3条の沈線でつなぐ。L R 縄文の横位回転。	橙色 2.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	雲母 白色粒	密	良好
62	5-A B	2	463	胴 部	横走する縄文帯を縦走する3条の沈線でつなぐ。L R 縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	雲母 白色粒	密	良好
63	7-B	2	一括	胴 部	横走する縄文帯を縦走する3条の沈線でつなぐ。L R 縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	4	石英 白色粒	密	不良
64	5-A	2	一括	胴 部	横走する縄文帯を縦走する3条の沈線でつなぐ。L R 縄文の横位回転。	橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	雲母 白色粒	密	良好

挿図 番号	出土地点	層位	RP 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考	
					文 様	色 調	調整	色 調					
65	9-A	2	49	胴 部	横走する縄文帯を縦走する3条の沈線でつなく。LR縄文の横位回転。	にふい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	雲母 白色粒	密	普通	
66	6・7-B	2	93	口縁部	波状口縁頂点から右側の沈線下に横走の沈線。沈線間には縄文あるいは刺突。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英 白色粒	密	良好	
67	6・7-B	2	57	口縁部	波状口縁頂点から斜めに沈線。沈線間に刺突。	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	雲母	粗	普通	
68	6・7-B	2	216	口縁部	波状口縁より垂下する沈線によって右文様帯(縄文+刺突)と左文様帯とに区画される。RL縄文の横位回転。	にふい赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	暗赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英	密	良好	
69	9-A B	2	一括	口縁部	RL縄文の横位回転→磨消手法。横走する沈線。	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	9	石英・雲母	密	良好	
70	5-A B	2		口縁部	RL縄文の横位回転→沈線、刺突。	にふい赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	暗赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	11	雲母	密	良好	
71	6-B	2	一括	口縁部	コブ状突起を有する波状口縁。沈線。	浅黄橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	不明	浅黄橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	雲母	粗	不良	外面スス付着
72	6-A B	2	202	胴 部	沈線間に刺突文。	黒褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	雲母	密	良好	
73	6-A B	2	231	胴 部	LR縄文の横位回転→沈線文。	にふい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にふい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	雲母 白色粒	密	普通	
74	6-A B	2	71	胴 部	LR縄文の横位回転→沈線文。	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	雲母	密	不良	外面スス付着
75	6-A B	2	231	胴 部	LR縄文の横位回転→沈線文、磨消手法、沈線間縄文残る。	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	雲母	密	普通	
76	6・7-B	2	190	胴 部	LR縄文の横位回転→沈線文、磨消手法、沈線間縄文残る。	暗褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	雲母	密	良好	外面スス付着
77	6-B	2	一括	胴 部	RL縄文の横位回転後、沈線刺突。	浅黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	横位	灰黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英	粗	普通	
78	6・7-B	2	17	胴 部	RL縄文の横位回転後、沈線刺突。	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	暗褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	雲母	密	良好	
79	7-B	2	175	口縁部	口縁部突帯状。沈線によって磨消無文帯と縄文帯とに区画される。RL縄文の横位回転。	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	暗褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・雲母		良好	
80	6・7-B	2	149	口縁部	RL縄文の横位回転。沈線により磨消無文帯と縄文帯に区画される。	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英	密	良好	
81	7-B	2	一括	口縁部	LR縄文の横位回転。	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英・雲母	密	良好	
82	6・7-B	2	140	口縁部	RL縄文の横位回転、沈線により磨消無文帯と縄文帯に区画される。	しふい褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にふい褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英 白色粒	粗	不良	
83	6-A B	2	191	胴 部	沈線により、磨消無文帯と縄文帯に区画される。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	斜位	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	4	石英・雲母	密	良好	
84	6・7-B	2	137	胴 部	沈線により、磨消無文帯と縄文帯に区画される。LR縄文の横位回転。	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	斜位	黒褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英	密	良好	
85	7-B	2	523	口縁部	波状口縁、LR縄文の縦位回転。	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にふい赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英・長石・雲母	密	普通	内外面スス付着
86	6・7-B	2	170	口縁部	波状口縁、LR縄文の横位回転。	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にふい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石	密	普通	内外面スス付着、輪積痕

挿図 番号	出土地点	層位	R P 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考
					文 様	色 調	調整	色 調				
87	7-B	2	146	口縁部	L R 縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	9	石英・長石・雲母 白色粒	粗	普通
88	5-B	2	一括	口縁部	L 縄文の横位回転。	橙色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{5}{4}$	7	石英 赤色粒	粗	不良 外面スス附着
89	7-B	2	163	口縁部	波状口縁, L R 縄文の縦位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	6	石英	密	普通
90	7-B	2	159	口縁部	波状口縁, L R 縄文の斜位回転。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	5	石英・雲母 白色粒	密	良好
91	6・7-B	2	一括	口縁部	波状口縁, L R 縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	6	石英・長石・雲母	密	良好
92	5-A B	2	623	口縁部	L R 縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	6	石英・長石	密	良好
93	6-B	2	一括	口縁部	波状口縁, L R 縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	6	石英・長石	密	普通 輪横痕
94	6・7-B	2	78	口縁部	R L 縄文の縦位回転。	明褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	6	石英 白色粒	粗	普通
95	6・7-B	2	129	口縁部	L R 縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	5	石英	密	不良
96	6・7-B	2	71	口縁部	L R 縄文の横位回転。	橙色 5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	褐色 5 Y R $\frac{5}{4}$	6	石英 白色粒	密	普通
97	8-A B	2	一括	口縁部	波状口縁, L R 縄文の斜位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	5	石英	粗	普通 内外面スス附着
98	6・7-B	2	73	口縁部	L R 縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	5	石英・雲母	粗	普通
99	7-B	2	280	口縁部	L R 縄文の横位回転。	黒褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	5	雲母	密	良好 内外面スス附着
100	9-A	2	6	口縁部	L R 縄文の横位→縦位回転。	黒褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	7	石英・長石 白色粒	密	良好 外面スス附着
101	6-A B	2	303	口縁部	L R 縄文の横位回転。	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	褐色 5 Y R $\frac{5}{4}$	7	石英・長石	密	良好 外面スス附着
102	7-B	2	186	口縁部	L R 縄文の横位回転。	褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	6	石英・長石	粗	普通 内外面スス附着
103	9-A	2	一括	口縁部	R L 縄文の横位回転。	浅黄褐色 10 Y R $\frac{5}{4}$	横位	浅黄褐色 10 Y R $\frac{5}{4}$	6	石英	密	良好 内外面スス附着
104	5・6-B	2	63	口縁部	L R 縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{5}{4}$	6	石英	粗	普通 外面スス附着
105	10-A	2	一括	口縁部	R L 縄文の横位回転。	褐灰色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	6	石英	粗	普通 外面スス附着
106	5-A B	2	442	口縁部	L R 縄文の横位回転。	褐灰色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	7	石英・長石 白色粒	粗	良好 外面スス附着
107	7-B	2	一括	口縁部	L R 縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{5}{4}$	6	石英	粗	良好 外面スス附着
108	7-B	2	246	口縁部	L R 縄文の横位回転。	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{5}{4}$	横位	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{5}{4}$	7	石英・長石・雲母	粗	普通

挿図 番号	出土地点	層位	R P 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考	
					文 様	色 調	調整	色 調					
109	6-A B	2	221	口縁部	L R縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	6	石英・長石・雲母	粗	不良	外面スス付着
110	9-A	2	一括	口縁部	R L縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	斜位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	10	石英・雲母	密	普通	外面スス付着
111	6・7-B	2	120	口縁部	1条のL R縄文押圧, L R縄文の横位回転。	明褐色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	横位	明褐色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	7	石英 白色粒	密	良好	外面スス付着
112	7-B	2	154	口縁部	波状口縁, 2条のL R縄文押圧。	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{7}{4}$	5	雲母	密	良好	
113	6・7-B	2	46	口縁部	2条のL R縄文押圧, L R縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	6	石英	粗	良好	
114	6・7-B	2	67	口縁部	2条のL R縄文押圧, L R縄文の横位回転。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{3}{2}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{3}{2}$	9	石英・雲母	粗	普通	外面スス付着
115	5-A B	2	376	口縁部	3条のL R縄文押圧。	橙色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	横位	にぶい橙色 5 Y R $\frac{7}{4}$	5	石英・雲母	密	不良	
116	6-B	2	一括	口縁部	2条のL R縄文押圧。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	5	白色粒	粗	普通	
117	6・7-B	2	70	口縁部	2条のL R縄文押圧。	明褐色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	横位	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	長石・雲母	密	普通	
118	8-A B	2	一括	口縁部	1条のL R縄文押圧, L R縄文の横位回転。	浅黄橙色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	7	石英・雲母 赤色粒	密	良好	
119	9-A	2	49	口縁部	L R縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	不明	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	7	石英・雲母	密	普通	外面スス付着
120	6-A B	2	203	口縁部	1条のL R縄文押圧, L R縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	6	石英・長石・雲母 白色粒	密	不良	
121	8-B	2	95	口縁部	1条のL R縄文押圧, L R縄文の横位回転。	にぶい褐色 5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい褐色 5 Y R $\frac{7}{4}$	8	石英・長石	密	良好	内面スス付着
122	6・7-B	2	95	口縁部	1条のL R縄文押圧, L R縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	5	石英	粗	普通	外面スス付着
123	5-A B	2	489	口縁部	1条のL R縄文押圧, L R縄文の横位回転。	褐色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	褐色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	8	石英・雲母	粗	普通	外面スス付着
124	7-B	2	一括	口縁部	1条のL R縄文押圧, L R縄文の斜位回転。	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{7}{4}$	7	石英 赤色粒	密	良好	
125	5-A	2	一括	口縁部	L R縄文の横位回転。	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい褐色 5 Y R $\frac{7}{4}$	5	石英・雲母	密	普通	
126	5-A B	2	一括	口縁部	1条のL R縄文押圧, L R縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	6	石英 赤色粒	密	普通	
127	7-B	2		口縁部	1条のL R縄文押圧, L R縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	6	石英・雲母	密	良好	
128	6-A	2	一括	口縁部	1条のL R縄文押圧, L R縄文の縦位回転。	褐灰色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	6	石英 赤色粒	密	良好	
129	5-A B	2	一括	胴 部	L縄文の横位回転。	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい褐色 5 Y R $\frac{7}{4}$	7	石英	密	良好	外面スス付着
130	7-B	2	518	胴 部	不明。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	斜位	褐色 5 Y R $\frac{7}{4}$	7	石英 白色粒	粗	不良	

挿図 番号	出土地点	層位	R P 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考
					文 様	色 調	調整	色 調				
131	8-A	2		胴 部	L 縄文の横位回転。	にぶい橙色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	雲母・石英	密	普通
132	6-A	2		一括 胴 部	L R 縄文の横位回転？	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英	密	良好
133	7-B	2	188	胴 部	不明。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英	粗	普通
134	8-A B	2		一括 胴 部	L R 縄文の横位回転。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英	密	良好
135	5-A B	2	375	胴 部	L R 縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい橙色 5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英 白色粒	密	普通 外面スス付着
136	6-B	2		一括 胴 部	R L 縄文の斜位回転？	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$		にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	白色粒	粗	不良
137	6・7-B	2	56	胴 部	L R 縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$		灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・雲母	粗	普通

挿図 番号	出土地点	層位	R P 番号	部 位	外 面		内 面		底 径 底 厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考
					圧 痕	色 調	色 調	色 調				
138	6-A	2		一 括 底 部	網代痕。	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{1}{2}$		にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	100 14	雲母・石英	普通	外縁部磨減
139	7-B	2	147 145	底 部	網代痕。	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$		明黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	65 10	雲母	不良	外縁部磨減
140	8-A B	2		底 部	網代痕。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$		にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	120 8	石英・雲母	良好	スス付着
141	6-A B	2	115	底 部	網代痕。	浅黄橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$		橙色 2.5 Y R $\frac{1}{2}$	110 14	石英	良好	外縁部磨減
142	7-B	2	273	底 部	笹葉状痕。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$		にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{1}{2}$	130 14	石英 赤色粒	良好	外縁部ひらなでスス付着
143	5-A B 6-A B	2	374, 398 411, 572	底 部	笹葉状痕。	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{1}{2}$		にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{1}{2}$	85 7	石英	良好	外縁部磨減
144	8・9-A B	2		底 部	笹葉状痕。	黄橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$		明黄橙色 10 Y R $\frac{1}{2}$	45 7	石英・雲母	良好	外縁部磨減
145	7-B	2	149	底 部	笹葉状痕。	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{1}{2}$	褐灰色 10 Y R $\frac{1}{2}$	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{1}{2}$	45 65	石英 赤色粒	良好	
146	9-A	2		一 括 底 部	笹葉状痕。	明赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$		明赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	130 7	石英	良好	外縁部磨減
147	6-A B	2	400	底 部	笹葉状痕。	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{1}{2}$		灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	95 7	石英 赤色粒	良好	



第6表 SX(R)001捨場出土土器(実測図)観察表

挿図 番号	出土地点	口径 (mm)	器 厚 (mm)	底径 (mm)	焼成	胎土含有物	外 面		内 面	
							地 文	色 調	調 整	色 調
1	5-A B	253	5		良好	雲母	L 縄文	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{1}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$
2	7-B	241	7		良好	雲母 白色赤色粒	L R 縄文	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位→斜位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$
3	8-A R P 84 一括 8・9-A B	不明	5		良好	石英 白色粒	L R 縄文	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	斜位	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{1}{4}$
4	7-B	232	4		良好	雲母	L R 縄文	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位→斜位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$
5	5・6-B 5-A B	218	9		普通	石英・雲母	L R 縄文	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$ 灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$ 灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$
6	5・6-B	273	4		良好	雲母	R L 縄文	にぶい橙色 5 Y R $\frac{1}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$
7	6-A	165	5		良好	石英・長石・雲母	無文	褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	横位	褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$
8	6-A B 6-B	不明	6	99	良好	石英・雲母	L R 縄文	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{3}$	横位→斜位, 縦位, 横位	褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$
9	5-A B	227	6		良好	石英・長石・雲母 白色粒	無文	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	横位	黒色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$

挿図 番号	出土地点	口径 (mm)	器 厚	底径 (mm)	焼成	胎土含有物	外 面		内 面	
							地 文	色 調	調 整	色 調
10	7-B	255	5	75	良好	雲母 白色粒	L R 縄文	明赤褐色 2.5 Y R 5/8	横位	明赤褐色 2.5 Y R 5/8
11	7-B	89	5		良好	石英・雲母 白色粒	L R 縄文	にぶい黄橙色 10 Y R 7/8	不明	にぶい黄橙色 7.5 Y R 6/8
12	6-A B	190	6	67	良好	石英	L R 縄文	にぶい橙色 7.5 Y R 7/8	横位→横位・斜位・縦位	黒褐色 7.5 Y R 3/8
13	5-A B	284	9		良好	石英・長石・雲母 白色粒	L R 縄文	にぶい橙色 7.5 Y R 7/8 にぶい黄褐色 10 Y R 5/8	横位	灰黄褐色 10 Y R 6/8 橙色 2.5 Y R 6/8
14	8-A B	149	5		良好	石英	L R 縄文	にぶい橙色 5 Y R 6/8 灰黄褐色 10 Y R 5/8	横位	にぶい黄橙色 10 Y R 6/8
15	6-A B	246	8		良好	石英・雲母	L R 縄文	褐色 7.5 Y R 7/8	横位	にぶい褐色 7.5 Y R 6/8
16		249	9		良好	石英・雲母	L R 縄文	にぶい橙色 7.5 Y R 6/8 にぶい褐色 7.5 Y R 5/8	横位	灰褐色 7.5 Y R 4/8 橙色 7.5 Y R 7/8
17	7-B	305	6		良好	石英・雲母	L R 縄文	黄橙色 7.5 Y R 7/8	横位	黒褐色 7.5 Y R 3/8

挿図 番号	出土地点	口径 (mm)	器 厚	底径 (mm)	烧成	胎土含有物	外 面		内 面	
							地 文	色 調	調 整	色 調
18	5-A B	247	8		良好	石英・長石	L R 縄文	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{7}{4}$
19	9-A	232	6		普通	石英・長石・雲母	R L 縄文	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$ 褐灰色 7.5 Y R $\frac{9}{4}$	横位→斜位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{9}{4}$
20	6・7-B 6-A B	272	6	112	良好	石英・長石	L R 縄文	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{7}{8}$ 褐灰色 10 Y R $\frac{4}{1}$	横位→斜位・縦位・横位	黒褐色 10 Y R $\frac{8}{2}$
21	7-B	189	9	98.5	良好	石英・長石・雲母	L R 縄文	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{7}{8}$ 褐灰色 10 Y R $\frac{4}{1}$	横位→斜位・縦位・横位	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{7}{4}$
22	8-A・8-A B	296	7	118	普通	石英・長石・雲母	R L 縄文	にぶい橙色 5 Y R $\frac{9}{8}$	横位→斜位	橙色 7.5 Y R $\frac{7}{8}$
23	8-A・8-A B 9-A B・9-A 8-A・8-A B	297	8	109	良好	石英・長石・雲母	L R 縄文	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{9}{8}$ 明赤褐色 2.5 Y R $\frac{9}{8}$	横位→縦位	赤褐色 2.5 Y R $\frac{4}{8}$
24	5-A	不明	6		良好	石英・長石・雲母	L R 縄文	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{9}{8}$	横位→斜位	黒褐色 7.5 Y R $\frac{9}{4}$

挿図 番号	出土地点	口径 (mm)	器 厚	底径 (mm)	焼成	胎土含有物	外 面		内 面	
							地 文	色 調	調	整 色 調
25	8—A	不明	8		普通	石英・雲母	R L 縄文	にぶい黄橙色 10Y R $\frac{7}{2}$ 褐灰色 10Y R $\frac{4}{1}$	斜位	明黄褐色 10Y R $\frac{7}{6}$ 褐灰色 10Y R $\frac{4}{1}$
26	5—A・B	246	9	103	良好	石英・雲母 白色粒	L R 縄文	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	橙色 5 Y R $\frac{7}{6}$
27	5・6—B	不明	10		普通	石英・長石・雲母	L R 縄文	浅黄橙色 10Y R $\frac{8}{3}$	横位	浅黄橙色 10Y R $\frac{8}{3}$
28	5—B	不明	9.5		良好	石英	L R 縄文	にぶい橙色 2.5 Y R $\frac{8}{3}$ にぶい赤褐色 2.5 Y R $\frac{7}{4}$	横位	にぶい橙色 5 Y R $\frac{6}{3}$
29	8—F	286	9.5		不良	石英・長石・雲母	L R 縄文	明褐灰色 7.5 Y R $\frac{7}{2}$ にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{8}{3}$	横位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{7}{4}$
30	9—A 8—A	243	7		良好	石英・長石・雲母	L R 縄文	灰褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{3}$
31	9—A 9—A 9—A B	261	10		普通	石英・雲母	R L 縄文	浅黄橙色 10Y R $\frac{8}{3}$ 黒褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	縦位	褐灰色 10Y R $\frac{5}{4}$ 浅黄橙色 10Y R $\frac{8}{3}$

挿図 番号	出土地点	口径 (mm)	器 厚	底径 (mm)	烧成	胎土含有物	外 面		内 面	
							地 文	色 調	調 整	色 調
32	7-B	214	5		普通	雲母 白色粒	R L 縄文	灰黄褐色 10Y R ½	横位	にぶい橙色 5 Y R ¼
33	5・6-B 6-A B 5-B 5-A B				良好		L R 縄文	橙色 7.5 Y R ⅙ にぶい褐色 7.5 Y R ⅙	横位	にぶい橙色 7.5 Y R ⅙
34	7-B	279	6		良好	雲母	L R 縄文	橙色 7.5 Y R ⅙ 灰黄褐色 10Y R ⅝	横位・斜位	褐灰色 10Y R ⅝
35	7-B	145	5		良好	雲母	L R 縄文	褐色 7.5 Y R ⅓	横位	明赤褐色 5 Y R ⅙
36	9-A	150	6		良好	石英・雲母	L R 縄文	灰黄褐色 10Y R ⅝	横位	にぶい黄橙色 10Y R ¼
37	6-A B 7-B	130	7		良好	石英	L R 縄文	浅黄橙色 7.5 Y R ⅙ 黒褐色 10Y R ⅔	横位	灰褐色 7.5 Y R ⅝ にぶい橙色 7.5 Y R ⅔
38	7-B	196	6		良好	石英・長石	L R 縄文	灰褐色 7.5 Y R ⅝	横位	灰褐色 7.5 Y R ⅝
39	6-A B	195	5		良好	石英・雲母	L R 縄文	にぶい褐色 7.5 Y R ⅙	横位	灰黄褐色 10Y R ⅝

挿図 番号	出土地点	口径 (mm)	器 厚	底径 (mm)	焼成	胎土含有物	外 面		内 面	
							地 文	色 調	調 整	色 調
40	7-B 7-B 7-B		7		良好	石英・雲母	無文	にぶい褐色 7.5 Y R 5/6	斜位・縦位→横位	にぶい黄橙色 10 Y R 7/6
41	6-A B	205	8.5	100	普通	石英・長石 白色粒	無文	橙色 7.5 Y R 7/6	横位→斜位→横位	にぶい黄橙色 10 Y R 7/4 にぶい黄褐色 10 Y R 5/4
42	5-A B 5-A	296	9		良好	石英・長石・雲母 白色粒	無文	にぶい褐色 7.5 Y R 5/4	横位	明褐色 7.5 Y R 5/6
43	8-B	203	8		良好	石英・長石・雲母 赤色粒	無文	にぶい橙色 7.5 Y R 7/4	横位→斜位	橙色 7.5 Y R 7/6 にぶい褐色 7.5 Y R 5/6
44	6-A B 5-A B	241	7	91	普通	石英・長石 白色粒	無文	にぶい赤褐色 5 Y R 5/4	横位→斜位・横位・縦位	にぶい黄橙色 10 Y R 7/4
45	6-A B	255	8		良好	石英・長石	無文	暗赤褐色 5 Y R 3/6	横位	赤褐色 7.5 Y R 4/6
46		82	7	50	良好	石英・長石	無文	にぶい黄橙色 10 Y R 7/4	横位	明黄褐色 10 Y R 6/6
47	6-A B 7-B 6-B 6-A	153	8		良好	石英・雲母	無文	にぶい橙色 7.5 Y R 7/4	横位	にぶい橙色 7.5 Y R 7/4

挿図 番号	出土地点	口径 (mm)	器 厚	底径 (mm)	焼成	胎土含有物	外 面		内 面			
							地 文	色 調	調	整	色 調	
48	5—A B 5—B 6—A B 7—B	134	7	55	普通	雲母	無文	にぶい橙色 7.5 YR 7/6 淡赤橙色 7.5 YR 7/4	横位			にぶい橙色 7.5 YR 7/6 にぶい橙色 5 YR 7/4

第7表 遺構外出土土器観察表

挿図 番号	出土地点	層位	R P 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考	
					文 様								
1	13-C			一括 胴 部	R木目状捺糸文。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	横位	暗褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	10	石英・長石	密	普通	
2	13-E			一括 胴 部	RとLの木目状捺糸文。	明褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	縦位	にぶい橙色 5 Y R $\frac{3}{4}$	10	石英・長石・雲母	粗	良好	
3	13-C			一括 胴 部	Lの木目状捺糸文。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	縦位	暗褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	10	長石・繊維	密	良好	外面スス付着
4	13-E			一括 胴 部	RとLの木目状捺糸文。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$		にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	10	石英・長石 赤色粒	粗	不良	
5	3-F			一括 口縁部	口縁部菱形の刺突文、LRの結束羽状縄文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	16	石英・長石・雲母	密	普通	
6	3-F			一括 口縁部	口縁部刺突文、胴部がRLの結束羽状縄文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	11	石英・長石・雲母	密	良好	
7	3-F	1	15	口縁部	口縁部LR縄文押圧、胴部LR結束羽状縄文?	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$		明褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	10	石英・長石	粗	普通	外面スス付着
8	2-E	6	1	胴 部	RL縄文を5条に押圧。	褐色 2.5 Y R $\frac{3}{4}$		にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	8	石英・長石・雲母	粗	普通	
9	3-F			一括 口縁部	RL縄文を6条に押圧。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$		にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	9	石英・長石	粗	不良	外面スス付着
10	2-E			口縁部	RL縄文を4条に押圧。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	9		密	良好	外面スス付着
11	13-B			一括 口縁部	口縁部にLR縄文、頸部に刺突、胴部RL縄文?	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	7	石英・長石 白色粒	粗	普通	外面スス付着
12	5-F			一括 口縁部	LR縄文を縦横に押圧。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$		にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	8	石英・長石・雲母	粗	普通	外面スス付着
13	15-F			一括 胴 部	LRの結束羽状縄文。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	縦位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	12	石英・長石・雲母	密	良好	外面スス付着
14	12-C			一括 胴 部	RLの結束羽状縄文。	褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	斜位	明褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	7	石英・長石・雲母 白色粒	密	普通	輪積痕
15	3-F	1	8	胴 部	LRの結束羽状縄文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$		灰褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	11	石英・長石	密	普通	
16	3-F	1	15	胴 部	LRの結束羽状縄文。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	10	石英・長石	粗	普通	内面スス付着
17	1-C			一括 胴 部	RL+LRの結束羽状縄文。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$		浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	9	石英・長石・雲母	密	不良	外面スス付着
18	3-F			一括 胴 部	RLの結束羽状縄文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	9	石英・長石	粗	普通	
19	3-F			胴 部	LRの結束羽状縄文。	明褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	8	石英・長石	粗	普通	
20	3-F	1	37	胴 部	R縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$		にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{4}$	8	石英・長石	密	良好	



挿図 番号	出土地点	層位	R P 番号	部 位	外 面			内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考	
					文	様	色 調	調 整	色 調					
21	3-F		16-20 一括	口縁部	L R 縄文の横位回転。3条1組の横走する沈線と他の組の沈線の間に入組文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	横位	褐灰色 7.5 Y R $\frac{4}{2}$		5	石英・長石 白色粒	密	良好	口唇部に突起があり、上端に刺突、内面に沈線。
22	4-D		一括	胴 部	R L R 縄文の斜位回転→沈線文。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{3}{2}$	縦位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{3}{2}$		8	石英・長石	密	普通	
23	4-D		一括	胴 部	R L R 縄文の縦位回転→沈線による入組文	灰白色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	縦位	灰白色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		7	石英・長石 赤色粒	密	良好	外面スス付着
24	4-D		一括	胴 部	R L R 縄文の縦位回転→横走する沈線をS字状沈線でつなぐ。	浅黄橙色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	横位	浅黄橙色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		9	石英・長石 赤色粒	密	普通	外面スス付着、輪積痕
25	7-E		一括	口縁部	波状口縁、L R 縄文の横位回転→入組文。	橙色 7.5 Y R $\frac{7}{2}$	横位	橙色 7.5 Y R $\frac{7}{2}$		6	石英・長石・雲母	粗	不良	
26	5-D		一括	胴 部	L R 縄文の縦位回転→入組文。	浅黄橙色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	縦位	浅黄橙色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		8	石英・長石 赤色粒	粗	良好	外面スス付着、輪積痕
27	5-F		一括	胴 部	L R 縄文の横位回転→沈線で楕円を描き、中に刺突を行う。	灰白色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	横位	灰白色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		6	長石・石英・雲母 白色粒	密	良好	
28	3-C		一括	胴 部	L R 縄文の横位回転後、沈線により磨消、無文帯と縄文帯に区画される。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		8	石英・長石・雲母 白色粒	密	普通	内外面スス付着
29	5-F			胴 部	L R 縄文の横位回転→沈線により磨消無文帯と縄文帯に区画される。	灰白色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	横位	灰白色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		6	石英・長石・雲母 微砂粒	粗	良好	
30	7-E	1	48	口縁部	L R 縄文の横位回転→横走する沈線により無文帯と縄文帯に区画される。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		6	石英・長石・雲母 白色粒	粗	不良	内外面スス付着
31	8-B		一括	口縁部	L R 縄文施文→3条1組の沈線が横走し、それを3条1組の沈線がつなぐ。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	口縁部 横位 胴 部 斜位	明褐色 7.5 Y R $\frac{7}{2}$		6	長石・石英	密	良好	外面スス付着
32	4-D		一括	胴 部	L R 縄文の横位・縦位回転→沈線により磨消、無文帯と縄文帯に区画。刺突文。	浅黄橙色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	縦位	浅黄橙色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		9	長石・石英	密	良好	輪積痕
33	13-B		一括	口縁部	R L 縄文の横位回転→沈線文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		6	長石・石英	密	良好	内外面スス付着
34	13-B		一括	胴 部	R L 縄文→沈線で幾可学的に磨消無文帯と縄文帯に区画される。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		6	長石 赤色粒	密	普通	内外面スス付着
35	3-F		一括	胴 部	L R 縄文の斜位回転→横走する2条の沈線と縦走する2条の沈線。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	縦位	橙色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		6	石英 白色粒	密	普通	内外面スス付着、輪積痕
36	4-C		一括	胴 部	磨消→沈線文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		5	石英・長石・雲母	密	普通	内外面スス付着
37	4-C		一括	口縁部	波状口縁を呈す磨消→沈線文。	褐灰色 7.5 Y R $\frac{4}{2}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		4	石英・長石	密	普通	内外面スス付着
38	3-F			胴 部	L 縄文横位回転→沈線により幾可学的に無文帯と縄文帯に区画される。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		4	石英	密	良好	
39	9-D		一括	口縁部	L R 縄文横位回転→沈線文。	黒褐色 7.5 Y R $\frac{4}{2}$	横位	灰白色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		8	長石・雲母	密	良好	輪積痕
40	4-C		一括	口縁部	磨消→沈線文。	明褐色 7.5 Y R $\frac{4}{2}$	横位	明褐色 7.5 Y R $\frac{4}{2}$		8	石英・長石 赤色粒	密	良好	外面スス付着
41	6-E		一括	口縁部	磨消→沈線文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$		6	石英・長石・雲母 白色粒	密	普通	
42	8-D		一括	胴 部	L R 縄文横位回転→沈線文。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{8}{2}$	横位	褐灰色 7.5 Y R $\frac{4}{2}$		7	長石・雲母	粗	良好	外面スス付着

挿図 番号	出土地点	層位	R P 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考	
					文 様	色 調	調 整	色 調					
43	13-B		一括	口縁部		にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英	密	良好	外面スス付着
44	4-D		一括	胴 部	横走する沈線によって、磨消無文帯とR L 縄文帯に区画される。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	縦位	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石・雲母 白色粒	密	良好	輪積痕
45	4-D		一括	胴 部	R L縄文の縦位回輪→沈線により磨消無文 帯と縄文帯に区画される。	にぶい褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英・雲母 白色粒		良好	
46	5-F		一括	胴 部	L R縄文施文→沈線によって磨消無文帯と 縄文帯に区画される。	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英・長石・雲母 白色粒	密	良好	内外面スス付着
47	12-E		一括	胴 部	平行沈線間に連続刻目文。コブ状突起。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	長石	粗	不良	
48	11-E F		一括	口縁部	口縁部に円柱状の突起と刻目。突起下に沈 線で円を描き、平行沈線間に連続刻目文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石	粗	普通	外面スス付着
49	11-E F		一括	口縁部	口縁部に2個1対の小突起。平行沈線間に 連続刻目文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英	粗	不良	
50	11-E F		一括	胴 部	入組文風の平行沈線間に連続刻目文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英・長石	粗	普通	外面スス付着
51	10-D		一括	口縁部	Rの網目状撚糸文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石	密	普通	外面スス付着
52	4-F		一括	口縁部	口唇部にR L縄文の押圧。胴部R L縄文の 斜位回転。	褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	褐灰色 10 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英	密	普通	内外面スス付着、輪積痕
53	3-F		一括	口縁部	L R縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英・長石	密	普通	外面スス付着、輪積痕
54	2-E		1	口縁部	L R縄文の横位回転。	にぶい赤褐色 2.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 2.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石	密	良好	
55	9-C		一括	口縁部	L R縄文の縦位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	口縁部 縦位 胴 部 横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英	粗	普通	外面スス付着
56	1-D		一括	口縁部	口縁部L R縄文の横位回転。胴部L R縄文の 縦位回転。口縁部に隆帯貼付。	明褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	明褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	8	雲母 赤色粒	密	普通	外面スス付着
57	7-E		一括	口縁部	口唇部、口縁部にL R縄文の押圧。胴部L R縄文の横位回転。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石 赤色粒	密	普通	輪積痕
58	7-E		一括	口縁部	口唇部L R押圧、直下に約8mmのL R横位 縄文。口縁L R押圧2条。胴部L R横位。	褐灰色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	浅黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	5	長石・雲母	密	良好	外面スス付着
59	表 採			口縁部	口縁部L R縄文の横位回転。下に1条のL R縄文押圧。	灰白色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	灰白色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英 赤色粒	密	良好	
60	4-C		一括	口縁部	口縁部L R縄文帯。下に2条のL R縄文。 胴部L R縄文の横位回転。	黒褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	黒褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	長石・雲母 白色粒	密	良好	
61	3-D		一括	口縁部	口縁部横位ミガキ。胴部との境に1条のL R縄文押圧。L R縄文の斜位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英・長石・雲母	密	良好	外面スス付着
62	6-E		一括	口縁部	口縁部横位ミガキ。胴部との境に1条のL R縄文押圧。胴部R L縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石・雲母	密	良好	外面スス付着
63	5-F			口縁部	口縁部横位ミガキ。胴部との境に1条のL R縄文押圧。胴部横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	8	石英・長石・雲母	粗	普通	外面スス付着
64	6-F		一括	口縁部	口縁部横位ミガキ。胴部との境に1条のL R縄文押圧。胴部L R縄文の横位回転。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	長石・石英 赤色粒	密	良好	

挿図 番号	出土地点	層位	R P 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考	
					文 様	色 調	調 整	色 調					
65	13-A		一括	口縁部	無文, 横位のミガキ。	灰褐色 7.5 Y R ½	横位	にぶい赤褐色 7.5 Y R ¾	7	石英・長石・雲母 粗	良好	外面スス附着, 輪積痕	
66	7-C		一括	胴 部	L R 縄文の横位回転。	灰白色 7.5 Y R ¾	横位	灰白色 7.5 Y R ¾	8	石英 微砂粒	粗	良好	外面スス附着
67	5-D		一括	胴 部	L R 縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R ¾	縦位	にぶい橙色 7.5 Y R ¾	8	長石・石英	密	良好	輪積痕明瞭
68	7-C		一括	胴 部	上半 L 縄文の斜位回転, 下半横位ミガキ。	にぶい褐色 7.5 Y R ¾	横位	にぶい橙色 7.5 Y R ¾	6	石英・長石・雲母 白色粒		良好	外面スス附着, 輪積痕
69	7-E		一括	胴 部	R L 縄文の斜位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R ¾	横位	にぶい橙色 7.5 Y R ¾	8	石英	密	普通	外面スス附着, 輪積痕

挿図 番号	出土地点	層位	R P 番号	部 位	外 面		内 面		底 径 底部厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考
					圧 痕	色 調	色 調	色 調				
70	3 F		一括		網代痕	にぶい黄橙色 10 Y R ¾	黄灰色 2.5 Y R ¾	70 7	石英 赤色粒	良好	スス附着, 外縁部わずかに磨減	
71	3 D		一括		網代痕	にぶい橙色 7.5 Y R ¾	にぶい黄橙色 10 Y R ¾	75 9	石英	良好	外縁部わずかにひらなで痕跡	
72	4 D		11		網代痕	にぶい黄橙色 10 Y R ¾	にぶい黄橙色 10 Y R ¾	60 6	石英	良好	外縁部磨減	
73	10 A		一括		網代痕	にぶい黄褐色 10 Y R ¾	にぶい橙色 7.5 Y R ¾	115 6.5	雲母・石英	良好		
74	10 A		一括		笹葉状痕	にぶい黄橙色 10 Y R ¾	にぶい褐色 7.5 Y R ¾	105 9.5	雲母・石英	良好	外縁部わずかに磨減, スス附着	
75	13 B		一括		笹葉状痕	にぶい橙色 7.5 Y R ¾	橙色 7.5 Y R ¾	70 12	石英	良好		

第8表 S I 001住居跡出土石器観察表

※ 大きさの単位はcm, 重量の単位はg。

石 鏃

挿図 番号	出土地区	遺物番号	大きさ			重量	形態	先端部角度		残存状態	石質	備考
			長	幅	厚			$\alpha$	$\beta$			
1	S I 001	RQ5	24	15	5	1.1	I	59	27	基部破損	硬質頁岩	—————

掻 器

挿図 番号	出土地区	遺物番号	大きさ			重量	形態	刃部の長さ			刃部角度			残存状態	石質	備考
			長	幅	厚			e	f	g	$\alpha$	$\beta$	$\gamma$			
2	S I 001	埋土中	51	33	7.5	16.7	I	50	50	—	58	63	—	—————	硬質頁岩	—————
3	S I 001	RQ1	52	33	8	12.1	III	49	18	—	23	36	—	—————	玉 髓	—————
4	S I 001	RQ3	48	35	6	6.9	III	38	—	—	38	—	—	—————	硬質頁岩	有孔バルブ除去
5	S I 001	RQ7	40	36	9	12.9	II	27	25	—	27	70	—	先端部破損	硬質頁岩	バルブ除去

石 斧

挿図 番号	出土地区	遺物番号	大きさ			重量	刃幅	刃部角度		欠損方向	石質	備考
			長	幅	厚			$\alpha$	$\beta$			
6	S I 001	一括	22	26	8	7.3	—	—	—	長軸に対しほぼ平行	結晶片岩	—————

凹 石

挿図 番号	出土地区	遺物番号	大 き さ			重 量	凹 の 形 態	凹 数		残 存 状 態	石 質	備 考
			長	幅	厚			L	R			
7	S I 001	RQ6	136	81	62	735	ロート状	2	2	—	安山岩	—

第9表 SK土壌出土石器観察表

掻 器

挿図 番号	出土地区	遺物番号	大 き さ			重 量	形 態	刃 部 の 長 さ			刃 部 の 角 度			残 存 状 態	石 質	備 考
			長	幅	厚			e	f	g	$\alpha$	$\beta$	$\gamma$			
1	S K 004	RQ4	41	36	10	18	I	5	6	—	42	39	—	硬質頁岩	バルブ除去	

凹 石

挿図 番号	出土地区	遺物番号	大 き さ			重 量	凹 の 形 態	凹 数		残 存 状 態	石 質	備 考
			長	幅	厚			L	R			
2	S K 004	RQ1	107	73	58	590	皿状	4	0	—	安山岩	
3	S K 004	一括	111	63	38	310	皿状	2	2	—	安山岩	敲石との併用?

不 定 形 石 器

挿図 番号	出土地区	遺物番号	大 き さ			重 量	石 質	備 考
			長	幅	厚			
4	S K 004	RQ5	60	38	20	39.1	硬質頁岩	
5	S K 004	RQ6	35	36	13	142	硬質頁岩	アスファルト付着

磨 石

挿図 番号	出土地区	遺物番号	大 き さ			重 量	砥 ぎ 面 数	石 質	備 考
			長	幅	厚				
6	S K 0 0 5	R Q 1	50	52	22	84	2	安 山 岩	円辺の%が打ち欠かれている。敲石との併用？

第10表 SX(R)001捨場出土石器観察表

石 鏃

挿図 番号	出土地区	遺物番号	大 き さ			重 量	形 態	先端部角度		残 存 状 態	石 質	備 考
			長	幅	厚			$\alpha$	$\beta$			
			1	7-B遺構外	一括			19	7			
2	7-B	一括	22	12	3	0.6	I	58	13	————	玉 髓	アスファルト
3	9-A SX(R)	————	56	14	8	5.1	III	29	19	————	硬質頁岩	アスファルト
4	5-AB SX(R)	————	58	12	7	5.0	III	38	29	————	硬質頁岩	

石 錐

挿図 番号	出土地区	遺物番号	大 き さ			重 量	形 態	錐部大きさ			錐部角度		残 存 状 態	石 質
			長	幅	厚			長	幅	厚	$\alpha$	$\beta$		
			5	6・7-B Bサブトレ	————			58	25	5	2.1	I		
6	7-B SX(R)	————	45	43	8	12.7	II	21	22	7	—	—	錐部破損	

石 匙

挿図 番号	出 土 地 区	遺物番号	大 き さ			重 量	形 態	刃 部 の 長 さ			刃 部 角 度			残 存 状 態	石 質
			長	幅	厚			e	f	g	$\alpha$	$\beta$	$\gamma$		
7	6・7-B SX(R)	RQ6	65	54	11	25.0	II	20	70	50	37	30	37		硬質頁岩
8	6A-B SX(R)	RQ13	39	44	11	15.6	II	20	20	60	46	44	—		玉髓

播 器

挿図 番号	出 土 地 区	遺物番号	大 き さ			重 量	形 態	刃 部 の 長 さ			刃 部 角 度			残 存 状 態	石 質
			長	幅	厚			e	f	g	$\alpha$	$\beta$	$\gamma$		
9	6-A B SX (R)	RQ2	42	28	9	10.1	III	30	33	—	—	—	27	————	硬質頁岩
10	7-B SX (R)	RQ60	52	40	12	18.9	II	30	49	—	34	50	45	————	硬質頁岩
11	5-A B Cサブトレ	RQ2	46	31	8	10.8	I	41	35	—	38	61	52	————	硬質頁岩
12	5-A B Cサブトレ	一括	42	38	9	13.7	II	28	38	10	63	37	34	————	硬質頁岩
13	5-A B Cサブトレ	————	52	48	15	29.0	—	45	—	—	54	—	—	————	硬質頁岩
14	9-A	一括	46	26	13	11.3	I	41	31	—	60	77	—	————	硬質頁岩
15	6-B SX (R)	RQ15	84	55	13	49.0	I	49	10	—	74	74	66	一部欠損	硬質頁岩
16	6-B SX (R)	一括	61	56	13	30.1	II	52	—	—	31	45	57	一部欠損	硬質頁岩

磨 製 石 斧

挿図 番号	出 土 地 区	遺物番号	大 き さ			重 量	刃 部 角 度		欠 損 方 向	石 質	備 考
			長	幅	厚		$\alpha$	$\beta$			
17	6・7-B Bサブトレ	————	50	24	8	10.8	160	40	————	結晶片岩	————

不定形石器

挿図 番号	出土地区	遺物番号	大 き さ			重 量	石 質	備 考
			長	幅	厚			
18	10-A SX (R)	RQ17	14	34	9	39.1	硬質頁岩	
19	10-A SX (R)	RQ2	87	38	10	34	硬質頁岩	
20	9-A SX (R)	RQ2a	95	49	9	57.0	硬質頁岩	
21	9-A SX (R)	RQ2b	67	18	11	18	硬質頁岩	
22	6-AB SX (R)	RQ24	80	64	19	106	硬質頁岩	

石 皿

挿図 番号	出土地区	層 位	遺物番号	大 き さ			重 量	使 用 面 数	使 用 面 形	使 用 面 大 き さ			脚 の 有 無	残 存 状 態	石 質
				長	幅	厚				長	幅	深			
23	SX (R)	——	——	310	144	124	——	2	楕円形	363	100	18	無	——	安山岩

凹 石

挿図 番号	出土地区	遺物番号	大 き さ			重 量	凹 の 形 態	凹 数		残 存 状 態	石 質	備 考
			長	幅	厚			L	R			
24	5-AB SX (R)	RQ72	126	88	65	1035	皿状	2	3	——	安山岩	——
25	7-B SX (R)	RQ16	149	67	52	516	ロート状	3	3	——	安山岩	——



敲 石

挿図 番号	出 土 地 区	遺物番号	大 き さ			重 量	磨 面 数	残 存 状 態	石 質	備 考
			長	幅	厚					
26	6-A B S X (R)	R Q 14	199	60	58	1025	—	—	安 山 岩	両端に打ち欠き。

第11表 遺構外出土石器観察表

石 鏃

挿図 番号	出 土 地 区	遺物番号	大 き さ			重 量	形 態	先端部角度		残 存 状 態	石 質	備 考
			長	幅	厚			$\alpha$	$\beta$			
1	5-C	—	24	18	3	1	II	41	10	先端部破損	硬質頁岩	—
2	3-C	一 括	35	33	7	7.9	IV	102	31	—	硬質頁岩	—

石 錐

挿図 番号	出 土 地 区	遺物番号	大 き さ			重 量	形 態	錐 部 大 き さ			錐 部 角 度		残 存 状 態	石 質
			長	幅	厚			長	幅	厚	$\alpha$	$\beta$		
3	11-C	—	18	22	4	1.4	I	8	9	3	—	—	錐部破損	硬質頁岩
4	7-E	R Q 12	49	39	9	20.5	II	11	10	5	—	—	錐部先端磨耗	粘板岩

## 石 匙

挿図 番号	出 土 地 区	遺物番号	大 き さ			重 量	形 態	刃 部 の 長 さ			刃 部 角 度			残 存 状 態	石 質
			長	幅	厚			e	f	g	$\alpha$	$\beta$	$\gamma$		
5	2-D	一括	56	38	10	10.8	I	24	47	—	79	36	—	—————	硬質頁岩
6	16-F	一括	49	24	5	6	I	23	33	—	31	32	—	先端部破損	硬質頁岩
7	6-E	一括	52	65	16	33.5	II	30	30	70	44	48	64	—————	硬質頁岩

## 掻 器

挿図 番号	出 土 地 区	遺物番号	大 き さ			重 量	形 態	刃 部 の 長 さ			刃 部 の 角 度			残 存 状 態	石 質	備 考
			長	幅	厚			e	f	g	$\alpha$	$\beta$	$\gamma$			
8	2-C	一括	63	35	11	25.8	III	42	40	1.8	49	34	68	—————	硬質頁岩	—————
9	12-B	一括	69	38	11	29.2	I	35	36	—	44	33	—	—————	硬質頁岩	—————

## 筒 状 石 器

挿図 番号	出 土 地 区	遺物番号	大 き さ			重 量	刃 部 角 度		残 存 状 態	石 質	備 考
			長	幅	厚		$\alpha$	$\beta$			
10	31-D	—————	79	52	14	45.6	150	46	胴部中央より破損	硬質頁岩	—————
11	7-A	表 採	32	29	12	13.6	146	35	—————	硬質頁岩	—————

石 皿

挿図 番号	出土地区	層 位	遺物番号	大 き さ			重 量	使 用 面 数	使 用 面 形	使 用 面 大 き さ			脚 の 有 無	残 存 状 態	石 質
				長	幅	厚				長	幅	深			
12	3-C	VI上面	一括	—	—	—	1000	2	不定形	240	200	25	無	—	凝灰岩
13	7-E	—	RQ11	110	81	60	502	1	円形?	7	5	—	無	扇形に残る	凝灰岩

半円状打製石器

挿図 番号	出土地区	遺物番号	大 き さ			重 量	刃 部 角 度	残 存 状 態	石 質	備	考
			長	幅	厚		$\alpha$				
14	5-D	RQ1	165	78	37	618	77	刃部が破損	安山岩		

磨 石

挿図 番号	出土地区	遺物番号	大 き さ			重 量	砥 ぎ 面 数	石 質	備	考
			長	幅	厚					
15	3-F	RQ2	87	95	55	558	2	安山岩		
16	7-E		96	85	79	904	全面	安山岩		
17	8-E	RQ14	104	88	73	771	2	安山岩		

# 湯 瀨 館 遺 跡

遺 跡 番 号	No. 2
所 在 地	鹿角市八幡平字湯瀨古館62番地他
調 査 期 間	昭和54年 6 月 6 日～10月 5 日
発掘調査予定面積	1,652 m <sup>2</sup>
発掘調査面積	4,047 m <sup>2</sup>

## 1. 遺跡の概観

秋田県北東部に位置する鹿角市には、謡曲『錦木』の悲恋物語や、『ダンブリ長者』などの伝説があり、またその存立期が中世に属する「館跡」が多く存在する。これらの「館跡」は古くから『鹿角42館』と総称されている。<sup>(註1)</sup>

鹿角市の中心地花輪から国道282号線を南下すると、米代川と熊沢川の合流点の東側で、右折すると八幡平へ、左折すると岩手県安代町へ向う分岐点がある。ここから左へ五ノ宮嶽と八森の狭隘な谷間を曲流する米代川に沿って東進すると、米代川右岸に湯瀬の集落一湯瀬温泉郷一が見えてくる。国道282号線に並走する国鉄花輪線の湯瀬駅は、集落のやや東側に所在する。湯瀬駅の北西400m、五ノ宮嶽へ連なる栗ノ木林と俚称される山の急峻な斜面の先端部、八幡平小学校湯瀬校舎の所在した台地と、その西方の通称「館コ」と呼ばれる台地を中心とする一帯は、小字名を古館と言ひ、『鹿角42館』の1つ、湯瀬館の跡と伝えられている。

湯瀬館を構成する主要郭の1つであり、本調査対象区である館コは、急峻な斜面をもつ独立台地となっており、周囲を沢目から流れる水路が巡っている。

館コの上部は、畑地であるが、7つの平坦面にわかれている。北側の平坦面を最大とし、南東の平坦面、南西の7つの平坦面となり、それぞれ段差が認められるが、これは戦後、北側からの緩やかな斜面を畑地化するため、段差をつけて削平したものである。

北側の平坦面の西縁部において、幅2～2.5m、長さ20m、比高差0.7～0.8mの人工的削平跡が認められ、また北側周縁にも幅1.5m、長さ18.5m、比高差0.2～0.4mの平坦面と、さらにその1.5m下方の斜面にも幅0.8～11m、長さ16.5mの平坦面が認めることができる。

最南西の平坦面の南側周縁に盛土が部分的に認められる。

館コの上部平坦面は、南東隅にある急な坂道により外部と通じている。

館コの周囲の低地は、「堀内」と通称されており、現状は湿地である。東側の湿地は歩行が困難であり、そこから滲出する水は、館コ南側へと流れている。西側の下方には、上端幅5～14m、底幅2～9m、深さ(西側との比高)1.5m～2.0mの窪んだ湿地が認められ、その中を小川が流れており、館コの南端下方で、東側からの小川と合流している。

館コの南西下方に土塁状の小山が認められる。

館コの西方約50mに北方から緩やかな傾斜をもって南方へ細長く延びる台地があり、また館コの北方約40mに栗ノ木林から南方へ緩傾斜をもちながらも、東側で段差を生じて小学校跡地の台地に接する台地がそれぞれあるが、湯瀬館との関係については不明である。

館コと小学校跡地の台地との間に細長く一見土塁状の小山が幾つか認められ、その東端のものは、小学校跡地の台地から断続的に館コ南側まで南北方向に延びている。館コの東側付近で

は、低地との比高が、西方で8～9 m、東方で5～6 mあり、両裾に掘り込みが認められる。

湯瀬館を構成するもう一方の主要郭である小学校跡地の台地は館コより規模が大きい（館コ上部平坦面の面積 2.084 m<sup>2</sup>、小学校跡地 4.780 m<sup>2</sup>）。

上部平坦面は、その大部分を占める校庭跡と、その北側の一段高い平坦面から成っている。

台地の南、東、西方は急斜面となっており、背後（北方）は栗ノ木林へ通じている。

小学校跡地の郭は、小学校校庭造成時に削平されており、その多くが破壊されたと考えられる（体育館建設に際し、人骨2体が出土したと言われている）。

この郭の東側には、水田や畑地が階段状に広がっており、南側斜面には3～4の腰郭（帛郭）状の平坦面が認められる。西南下方には湯瀬地区の産土神である神明社（天照皇御祖神社）が鎮座している。この神社は、伝えによると文治5年（1189年）湯瀬中務によって創祀され、明治14年（1881年）に現在地に移転するまで、北方の山手、古産土と呼ばれる地にあつたと言われている。<sup>（註2）</sup>旧社地の正確な場所は不明であるが、古産土と呼ばれる地は館コの東北の方角（小学校跡地からは西北の方角）にあたる。また、その近く（古産土の南側と言われる）に、八幡神を祀った八幡森、疱瘡神を祀った疱瘡森があるとも言われている。<sup>（註3）</sup>これら古産土を中心とする一帯に湯瀬館に関連する宗教・祭祀施設が存在したであろうことは、湯瀬館からの方角から推察されよう、創祀年代はともかく神明社は館神社であつたと考えられる。

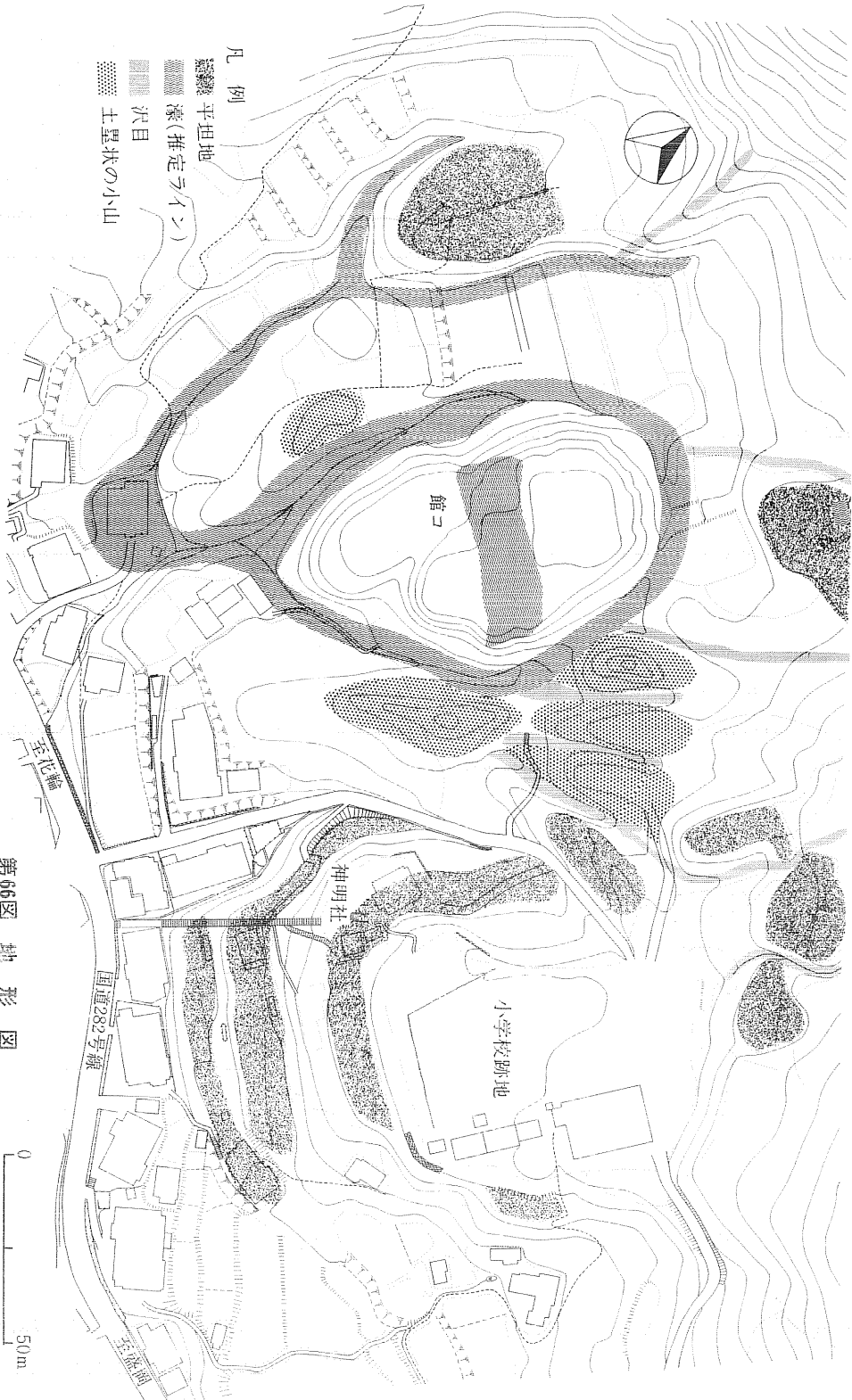
館コの西南に寺屋敷と呼ばれる地があるが、湯瀬に寺院が存在したという記録もなく詳細は不明である。この寺屋敷の背後の高台の一角に、由来は不詳であるが、「殿様の墓どこ」と呼ばれる所があり、数基の墓石が殿様の墓として伝えられている（この墓石は、国道282号線の改良工事に伴い移転した）。

『鹿角郡由来記』の中の湯瀬村の条に、<sup>（註4）</sup>「一、湯瀬村 湯瀬中務領也 本名成田後に湯瀬刑部領す本名安倍也、一戸より来り館有。」と記されている。

湯瀬館に拠つた成田氏は、中世の鹿角地方に威を振つた武士団一鹿角4氏のうちの1氏で、湯瀬館の南方、八森を越えた谷内館（谷内三郎）、長嶺館（長嶺下総）、米代川上流の館市館（佐比内采女、岩手県二戸郡安代町館市に所在するが、鹿角42館のうちの1館として数えられる）にも成田氏の一族が拠つていたと言われている。<sup>（註5）</sup>

成田氏の一族である湯瀬中務については、資・史料に乏しく、成田氏の一族内における地位、湯瀬入部の時期、経過、湯瀬を離れた時期と理由、湯瀬中務の一族・子孫については不詳である。

湯瀬中務の後に入部した湯瀬（安倍）刑部については、小豆沢大日靈貴神社（通称大日堂）の別当<sup>あんべ</sup>安倍家に伝わる『寺社由緒世代書上之事』<sup>（註6）</sup>『大日堂故実傳記』<sup>（註7）</sup>等の記録により、湯瀬刑部が安倍氏の先祖であることや、湯瀬入部の時期、経過等を知ることができる。



第66図 地形図

安倍氏は、代々奥郡一戸郷に住していたが、安部刑部左衛門守綱が時、文明年中〔1469～1487年、一説には文明12年(1480年)〕に鹿角に来たりて、当時空席となっていた大日堂別当(註8)となり、三位儀安と称して以後現在に至ったと伝えられている。

『鹿角郡由来記』湯瀬村の条に見られる湯瀬刑部こと安倍刑部は、5代安倍秀安のことと思われる。

安倍氏の湯瀬入部の時期、経過については、(註9)『寺社由緒世代書上之事』の中に、

五代 三位坊秀安

右者嫡子刑部(ママ)～(略)～永祿十一年同郡長牛陣之時、御先達被仰付兄弟被出忠之働仕候故、～(略)～旦御鑓拝領仕候、弟宮内右之依忠同郡湯瀬村領地ニ被下置御奉公仕候由。と、記されている。

「永祿十一年同郡長牛之陣之時」とあるのは、永祿年間(1558～1570年)に、三戸南部氏と松山安東氏のあいだで、数回にわたる鹿角争奪戦が行なわれたが、その中の永祿12年(1569年)(註10)に南部氏が鹿角支配権を回復した合戦をさしている。

ただ、この記録によれば、湯瀬に入部したのは刑部ではなく、その弟宮内とされている。このことについて『大日堂故実傳記』には、(註11)「弟に湯瀬村被下置番所相据、田山往来警固可仕旨被仰付」と記されており、やはり安倍刑部の弟安倍宮内が湯瀬館に拠ったと思われる。

永祿12年(1569年)の合戦で安倍兄弟が南部軍の先導を務めたことは、他の資・史料にも見られ、(註12)『鹿角由来集』には「御先達ハ小豆沢別当刑部左衛門兄弟(ママ)式人本名安部」と記されている。

湯瀬館主と目される安倍宮内については、天正16年(1588年)南部軍が安東氏の比内大館城を落城させた時、南部軍に従軍した鹿角諸士の中に「湯瀬宮内」としてその名を認めることができる。(註13)

(註14)安倍宮内のその後及び子孫については、『大日堂故実傳記』に、「其後大坂陣の騎馬御供願上無御免に付、御家を相背秋田江行けるを御届有、被召帰御改易被成子孫桜庭家信(三戸南部家臣)臣と成」と記されている。

一方、成田氏(湯瀬氏)、安倍氏の外に阿部氏なる館主が居ったとする言い伝えもある。(註15)それによれば、阿部氏は文永の頃に成田氏を滅して湯瀬館に拠ったとするものである。しかし、阿部氏の出自やこのことを支証する資・史料が皆無であるため事実かどうか不明である。(この阿部氏館主説によれば、館主は成田氏→阿部氏→安倍氏の順になるが、他に阿部氏→成田氏→安倍氏とする言い伝えも存在する。)

湯瀬には、江戸時代には鹿角地方と盛岡方面を結ぶ交通路の要衝として駅伝所が置かれていたことや、温泉地であったこと等の記録が残っており、江戸時代の様子を知ることができる。(註16)



かし、それ以前については、『大日堂故実傳記』に「番所相据、田山往来警固」と記されているのみであるが、中世においても鹿角地方と岩手方面を結ぶ交通路の要衝として重視されていたことは推察されよう。

江戸時代の湯瀬を通る交通路は、鹿角方面から湯瀬溪谷を通り、湯瀬館の南裾から岩手方面へ通ずるものであった。この旧街道がいつの頃から開かれたのか不明であるが、この旧街道の他に湯瀬の東方、岩手方面から居熊井を通り、板戸ノ沢から八森を経て、谷内・長嶺方面へ至る古道があり、中世においてはこの古道が主として使用されていたと<sup>(註18)</sup>言う。

湯瀬館からは、これらの交通路が一望のもとに眺められる。

なお、湯瀬館は、天正19年(1591年)に破却されたという<sup>(註19)</sup>記録が残っている。

註1 「鹿角郡由来記」(天保3年(1832)6月写本、南部叢書刊行会編『南部叢書』第1冊・P299～315・歴史図書社・1970年)には、「鹿角郡四十二館」とある(前掲書・P309)。『南部叢書』の解題によれば、「鹿角郡由来記」は、寛文年間(1661～73)以後に、成立したとある。鹿角市立花輪図書館には、文化13年(1816)写本のコピーがある。

大里武一郎『改訂増版・鹿角方言考』(鹿角方言考刊行会・1974年10月)には、「鹿角四十八館」とある(同書・P162)。

註2 畠山誠一「郷土の伝説・(25)・湯瀬の館あと」(広報『はちまんたい』第78号・旧八幡平村広報・1968年7月)。

『中世城館遺跡調査票(案)』・「湯瀬館」・報告者安倍良行・秋田県教育委員会蔵・1978年調査。近年まで、湯瀬地区では、古産土一帯の下刈りを、毎年行っていたとのこと(現地採話)。

註3 広報『はちまんたい』第78号。

註4 「鹿角郡四十二館に侍四十二人居候事」(前掲書・P310)。

「鹿角由来集」(延享5年(1748)写本、米田勇氏蔵、郷土史学習会編『鹿角由来集』・鹿角市立花輪図書館・1977年5月)の「京郡四拾二江ニ侍四拾貳人住居事一湯瀬村の条一」にも、同様のことが、記されている(前掲書・P7)。「鹿角郡由来記」(『南部叢書』第1冊)の解題によれば、「鹿角由来集」は、「鹿角郡由来記」の成立(寛文年間以後)以後に、同書を加筆増補して、作成されたものとしているが、『鹿角由来集』の解説では、慶安4年(1651)まで、その成立がさかのぼれようとしている。

註5 「鹿角郡由来記」(前掲書・P310)、「鹿角由来集」(前掲書・P7)。

註6 安倍洋直氏蔵。同書は、延享2年(1745)10月、11代大日別当妙光院(安倍)典徹によって、書かれたものである(阿部甚之助他編『大日堂舞楽』・P241～245・安倍洋直発行責任・大館孔版社・1980年3月)。

註7 同書は、安永10年(1718)3月、安倍典徹の編によると言われている(『大日堂舞楽』P199～210、同書に記載されているのは、阿部貞三氏蔵の文久2年(1862)2月谷内阿部重蔵借用写本)。

註8 「寺社由緒世代書上之事」(前掲書・P241)、「大日堂故実傳記一当特別当相蒙事一」(前掲書・P208)。

註9 前掲書・P242。

- 註10 永祿年間の合戦は、永祿9年(1566、一説には永祿8年)から、数回にわたり、鹿角地方南部の八幡平地区を中心に、行われた。南部氏が、鹿角支配権を回復したのは、「鹿角由来集」(前掲書・P24)・「聞老遺事」(文政5年(1822)梅内祐訓著『南部叢書』第2冊・P287～597・1970年3月、P376～377)等では、永祿12年(1569)としている。
- 註11 「鹿角乱大守御出馬の事」(前掲書・P209)。
- 註12 「鹿角由来集」(前掲書・P24)。
- 註13 内藤調一編著『鹿角志』・「五城目兵庫心変比内落城事」(「奥羽永慶軍記」一戸部正直、元祿11年(1698)一抄録)・1907年3月発行・明治文献・1975年4月刊行、P57。
- 註14 前掲書・P209。
- 註15 広報『はちまんたい』第78号。  
石鳥谷米太郎「湯瀬の昔噺のあれこれ」(老人大学学習記録集『八幡平の民俗年中行事』・鹿角市立八幡平公民館・八幡平老人クラブ連合会・大館孔版社・1979年3月、P43～45)。
- 註16 菅江真澄「けふのせはのの」(内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第1巻・P295～324・未來社・1971年3月、P305～306)。  
江刺恒久編「奥々風土記」(『南部叢書』第1冊、P1～274)巻9(P219・P232)。  
大巻秀詮「邦内郷村志」(江戸中期頃成立。『南部叢書』第5冊・P1～584・1971年)巻1(P97)、巻6(P429)。  
漆戸茂樹「北奥路程記」(『南部叢書』第7冊・P95～472・1971年4月、P447)。
- 註17 註11に同じ。
- 註18 『中世城館遺跡調査票(案)』「湯瀬館」・「長嶺館」・安倍良行報告・秋田県教育委員会蔵  
・1978～79年調査。  
石鳥谷米太郎、前掲書。
- 註19 伊藤祐清「祐清私記一内山助右衛門奥北の館破却之事一」(『南部叢書』第3冊・P113～460・1970年、P183)。

## 2. 調査の方法

### (1) 調査区の設定

東北縦貫自動車道の調査では、館及び城柵遺跡は、グリッド設定基準線を方位に合せ、その他の遺跡は、路線に合せてグリッドを設定することになっているので、湯瀬館遺跡の調査では、グリッド設定基準線を方位に合せることにし、台地上部平坦面にある東北縦貫自動車道の路線中心杭 S T A 43+20 (H : 255.420 m) を基点 (7-E) として、5 m × 5 m のグリッドを「館コ」と通称される台地全面に設定した。グリッドの呼称は、東から西へアラビア数字、北から南へアルファベット (大文字を使用) を用いて、その組合せによった。

調査対象全域にグリッドを設定することにより、計画的な調査と同時に、遺構の平面的位置の把握に努めた。

台地斜面とその周囲では、2 次的堆積や、人為的、自然的要因による層序の逆転等も考慮し、斜面とその周囲の遺構検出に努めた。

### (2) 発掘の方法

「館コ」と通称される台地の上部平坦面は、グリッド単位で調査を行ない、台地の斜面及びその周辺は、起伏が激しいためグリッドを設定せずに、地形に応じたトレンチを台地上面のグリッド杭を基準として、設定し調査を行なった。

台地上部平坦面は、畑地として耕起されていたが、耕起深度が 10~15 cm と浅いことから少しずつ表土 (耕作土層) を除去して遺構の探索に努めた。

その後、地形により遺構の存在が推定される地区までトレンチを延長して、その確認を行なった。

### (3) 遺構の調査

検出された遺構は、その所存をグリッド名で明らかにし、遺構配置図 (1 / 100) 作成後に精査を行なった。

調査では、遺構確認と同時に写真撮影し、平面実測を行なった。次に 2 分法を用いて内部に堆積する覆土の状態、遺物等の包含状態を観察して断面図を作成した。その後、土層断面及び遺構完掘状態を写真撮影して、平面実測図を完成させるという手順をとった。

#### (4) 遺物の取り上げ

遺物を原則としてグリッドごとに取り上げ、遺跡名、出土地点、遺物の種類（土器、石器、鉄器、木器等）、層位、出土年月日をカードに記入して、一点一袋又は、一括一袋として取り上げた。特に遺構に関係するものや、年代決定資料となるものは、出土地点及び出土レベル、出土層位等を実測し、平面図や遺物台帳等に記録した。

#### (5) 実測図の作成

調査区全域の平面図は1 / 100、遺構配置図は1 / 20、遺構の平面図は1 / 10の縮尺を原則として、遣り方測量で行なった。台地上部平坦面より検出された空堀は、縮尺を1 / 50とし、平板測量で作図した。

断面図は、遺跡基本層位、遺構内覆土の堆積状態を示す遺構断面図、台地斜面の土層断面図を作成した。原図の縮尺は1 / 20を原則としたが、柱穴等の細部においては1 / 10を使用した。

#### (6) 写真の記録

記録のために撮影した写真は、35mm判モノクロ写真、35mm判カラー写真、35mm判リバーサル・フィルム（スライド用）、6 × 9 cmモノクロ写真である。撮影時においては、35mm、55mm（マイクロ）、105mmのレンズを使い分けて、遺跡全景、確認遺構、土層断面、遺物出土状態、掘り方、遺構完掘状態等を撮影した。また遺構の撮影においては6 × 9 cm（モノクロ）も同時に使用した。

#### (7) その他の記録

調査日誌を調査員、補佐員が毎日交替で記録した。



第67図 グリッド及びトレンチ配置図

### 3. 調査の経過

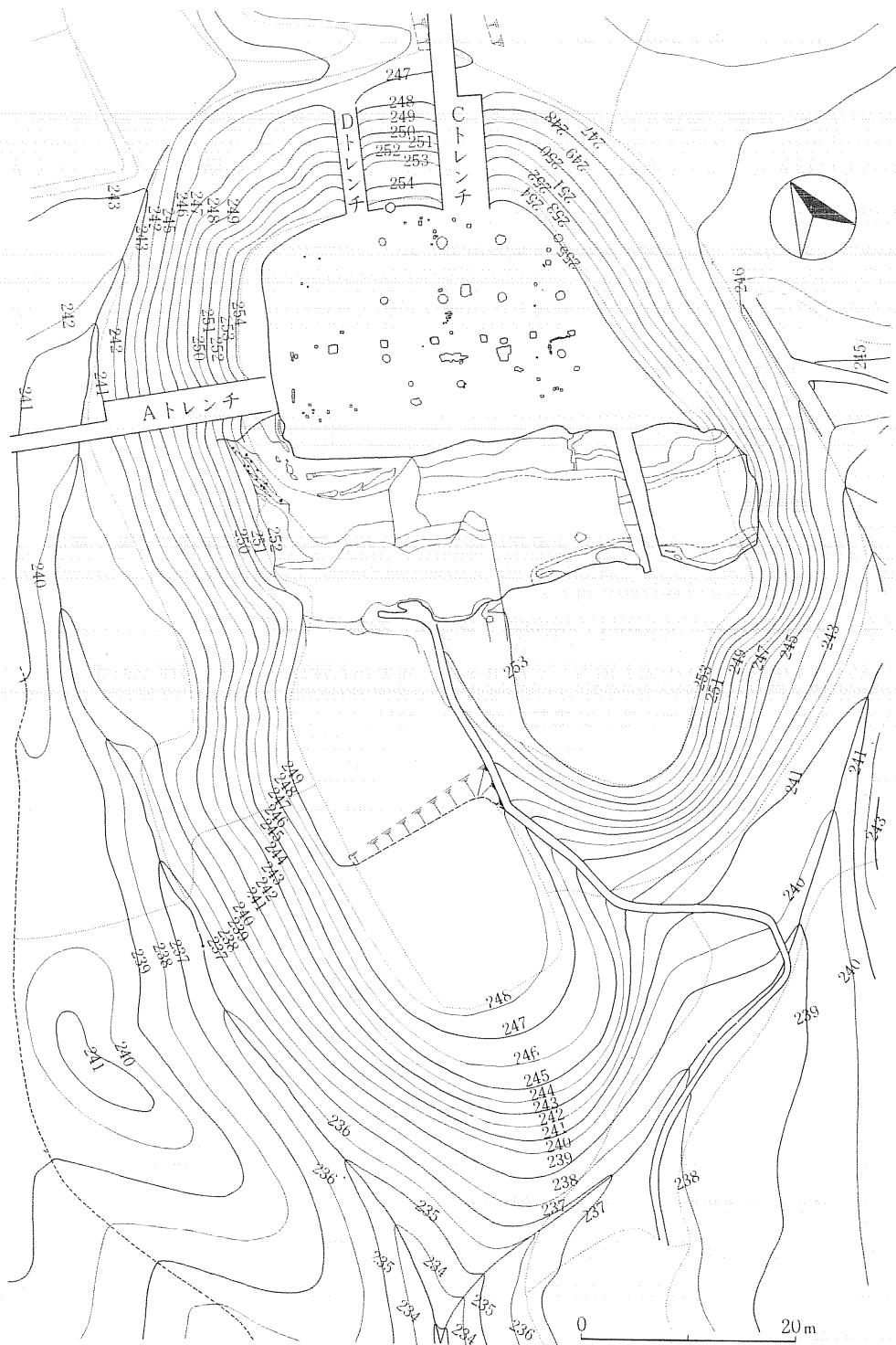
湯瀬館の発掘調査に先立ち、6月5日に調査現地を踏査し、遺跡までの通路確保と雑草等の下草刈り、伐採木の枝葉等の焼却が必要であると判断した。翌6日から14日までそれらの作業を行なった。その後、遺跡北東の山8合目付近より発掘調査前の遺跡全景を撮影した。15日から19日までの間に業者にグリッド設定を委託して、20日より調査を開始した。

台地上部平坦面は畑地で表土（耕作土）が浅く、遺構損壊の恐れもあったため掘り下げには十分に留意し、表土を少しずつ除去して遺構の検出に努めた。併行して台地斜面西側にはAトレンチ（10-Fと12-Eを結ぶ直線を基準として南へ幅3.5m、長さ55.2m）、斜面北側にはCトレンチ（5-Fと4-Dを結ぶ直線を基準として東へ幅4m、長さ86.1m）、斜面北側にはDトレンチ（6-Eと5-Cを結ぶ直線を基準として西へ幅2m、長さ10.6m）、斜面東側にはEトレンチ（6-Pの杭からE-19°41'-Sの線を基準線とし北へ幅2m、長さ100m）を設定して、遺構の検出や堆積層序が人為的営力または自然的営力に起因するものかをも把握できるように努めた。Aトレンチは6月20日、C、Dトレンチは25日に掘り下げを開始した。トレンチは急斜面で地山が崩壊しやすいシラスだったので、階段状に一段ずつ掘り下げていった。

その後、遺跡西側の台地上においても多くの遺物を表面採集できたため、地形等も考慮してA、Cトレンチを延長した。7月5日にはAトレンチを水田部分を通して沢向いの台地斜面下まで全長約55mに延長し、同じ理由からCトレンチも7月19日に沢向いの台地上まで全長86mに延長して調査を行なった。Eトレンチは7月24日に斜面東側から旧八幡平小学校湯瀬校舎グラウンドまで達する全長約100mの調査を開始した。しかし、道路や水利問題の関係で実質48mしか調査できなかった。

これらのトレンチ調査によって、台地の周囲は、沢目を利用した水濠があることが確認された。

台地上部平坦面は6月26日に基本層位実測を行ない、その後、残っていた表土を全て除去して、掘立柱建物跡1棟、川原石を礎石とした建物跡1棟、掘り方が一辺約40cmの方形を呈する柱列を確認した。8月17日に遺構実測のため1m×1mの遣り方を組み、翌日より作図にとりかかった。8月21日には建物跡の実測を行ない、8月23日には台地上部平坦面の遺構配置図が完成した。柱列をなす方形の柱穴からは、魚骨、獣骨が多量に出土したことから柱列遺構ではないと推察された。掘立柱の建物跡は2間×3間であったが、北東角にあたる柱穴1個が台地の崩壊によって明確ではなかった。同じ理由で、川原石を礎石とする建物跡も北西角が確認されただけである。おそらく湯瀬館が存在した頃は、現在より台地上部平坦面は広がったと推定



第68図 遺構配置図 (I)

される。

8月29日には、現地説明会を開き、多くの参加を得られた。

その後、台地中央部に遺構らしきプランが東西に幅広く確認できたため、9月7日より掘り下げた結果、空堀と確認された。空堀の調査は、9月20日に平板測量による実測も終了し、その深さは約4 m、幅9 mで埋土観察により、埋もれていく過程で一時期生活面であったことが確認された。遺物は古銭〔開元通宝（唐銭）、元祐通宝（北宋銭）、永樂通宝（明銭）、寛永通宝（江戸時代）、無銘銭〕や鉄製品等が出土した。

10月5日に空堀内の柱穴1個を調査して全調査を終了した。

## 4. 遺構と遺物

### (1) 遺構（第68図～第75図。第12表～第14表。図版46～51）

#### ① 建物跡

本遺跡では「館コ」上部平坦面北東部に掘立柱建物跡、礎石配列建物跡の2棟を検出し、その先後関係は、掘立柱建物跡が古い。

#### ア 掘立柱建物跡 SB001（第70図。第12表。図版47、48）

礎石配列建物跡、柱穴等と複合して検出され、地表から確認面までの層厚がわずか20cmで、しかも以前に削平されているため遺存状態は良くない。

遺構の規模は、東西約16.4 m（約54.6尺）、南北約10.9 m（約36.3尺）である。構造は桁行3間、梁行2間である。柱筋は1直線上に並び、各柱間の間尺は若干の差異はあるものの、ほぼ18.2尺を基本に計画されている。建物方向は、東西で軸線方位はN-60°-Wである。東隅部の柱穴は、崩壊のためわずかにその痕跡が認められるのみである。

各柱穴の平面形は、ほぼ円形を呈し、確認面から5～25cm掘り込んでいるが、中央部を不整な円ないし楕円形に5～10cm掘り残している。底面は、ほぼ平坦なもの（1～3、5～8、12）と、放射状に長円形の掘り込みが認められるもの（9～11）がある。

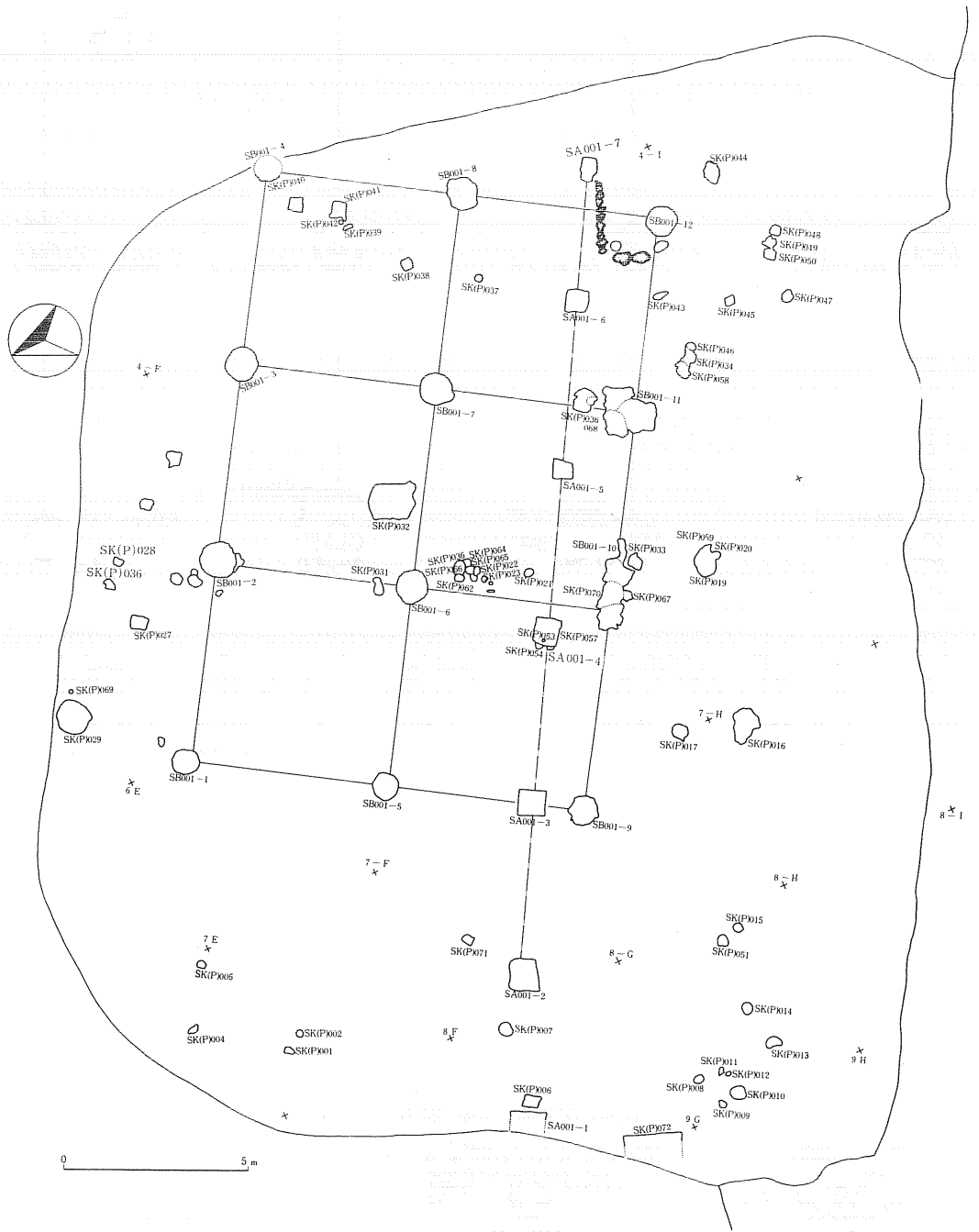
中央の掘り残し部分が、柱を据えた位置とも考えられるが、硬度はその他の面と変わらないあるいはやや軟かいことから、直接柱を据え置いたものではないと考えられる。

掘り方埋土は、複数層に分層されたが、地山のシラスを多量に含む混土層である。

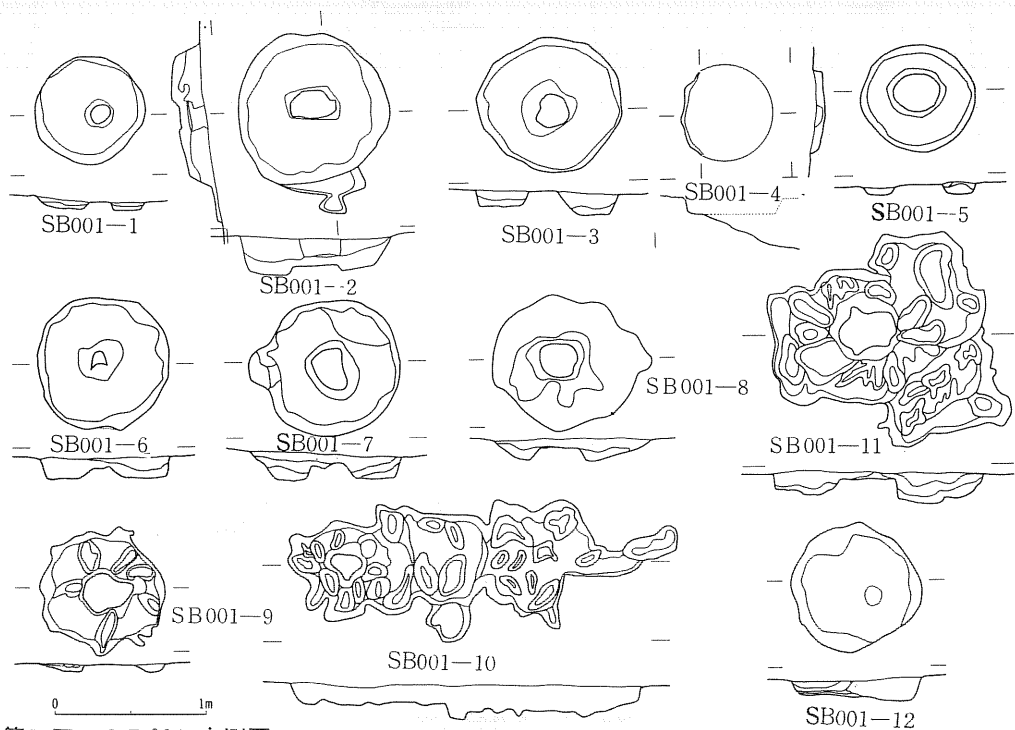
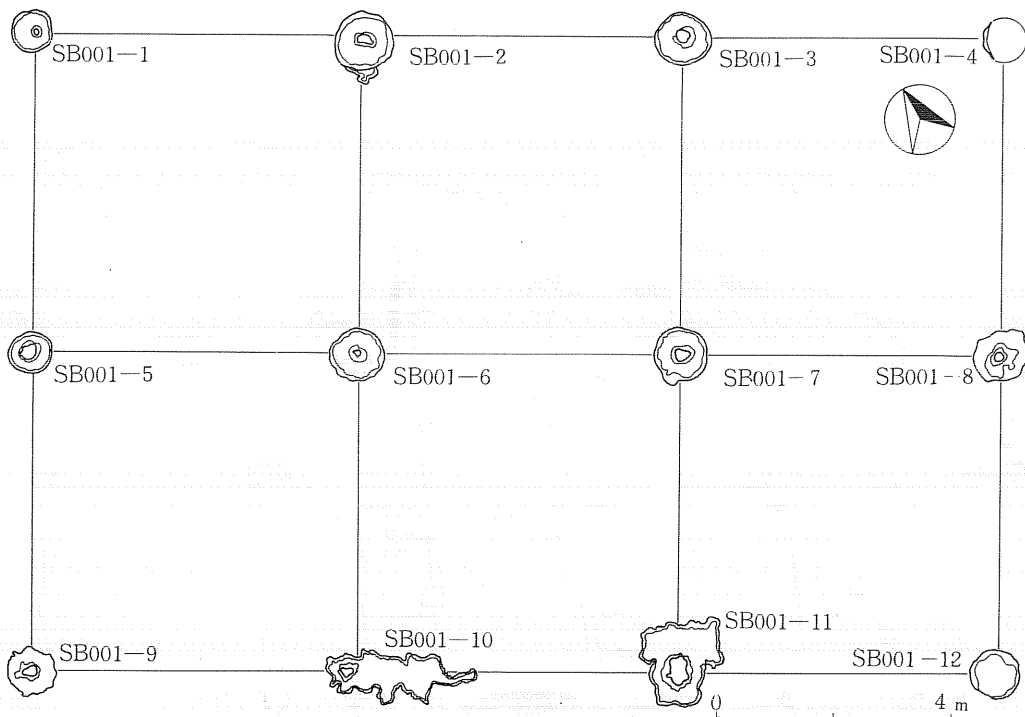
#### イ 礎石配列建物跡（第71図。図版50）

扁平な川原石を並置し、礎石としたものであるが、耕作あるいは削平により南側と東側の列が欠損する。礎石の規模は、遺存する北側列で205cm、西側列で99cmを計測するが、北西隅部分を考慮すると215cm、135cmとなる。石列の上面は平坦でほぼ同レベルとなっている。掘り方は明確ではない。





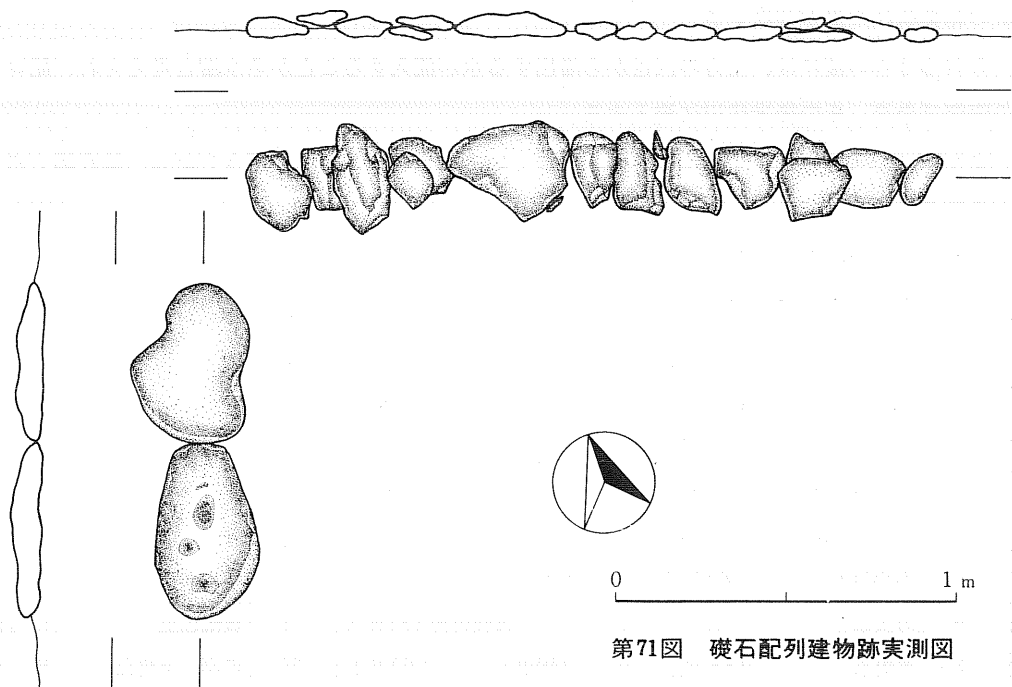
第69図 遺構配置図 (II)



第70图 SB001 实测图

第 12 表 SB001 柱穴計測表

ピット番号	形態	大きさ (cm)	深さ (cm)	底面形状
SB001-1	円形	73 × 72	6	中央部に盛り上がりあり
2	円形	104 × 99	26	同上
3	円形	96 × 89	15	同上
4	円形	(65) × (60)		崩落のため不明
5	円形	75 × 71	8	中央部に盛り上がりあり
6	円形	91 × 88	14	同上
7	円形	95 × 91	19	同上
8	不整円形	95 × 88	15	同上
9	不整円形	85 × 83	6	中央部に盛り上がりがあり、それを中心に放射状くぼみあり
10	不整円形	256 × 95	23	同上
11	不整円形	178 × 145	21	同上
12	円形	87 × 86	16	平坦



第71図 礎石配列建物跡実測図

② 濠・堀跡 (第72図。第13表。図版46、51)

上部平坦面のほぼ中央を東西に箱葉研状に掘削した空堀は、長さ47.8m、上端幅8.3m、深さ3.68m、基底幅2.41mを計測する。

空堀内の埋土は、地山のシラス火山灰を混入する土で自然営力による堆積と見られるが、第72図のスクリーントーンで示すようにシラス単純層が底面上2.3mで堆積している。このシラス単純層下の埋土中には遺物の出土が見られず、シラス単純層上面でピット（SK(P)081）、あるいは銅銭（開元通宝）、シラス単純層の上を覆う埋土中から中国製蓮弁文青磁碗片、銅銭等が出土していることから、このシラス単純層は、人為的に覆土したものと考えられる。このことから本空堀は少くとも2期に区分することができよう。

（人為的に幅の広い堀を埋没させる場合でも、所謂レンズ状の堆積となる可能性があるのでその堆積状態から単純に自然営力、人為力と判断することは難しい。）

館コの下方を巡る濠は、西側の現地形からも容易にその存在が確認された。その後、土塁状の小山の連なる東側で、この土塁状小山連との間、北側の現在道路となっている低地もその可能性が考えられ、トレンチで調査の結果、上端幅5～10mの濠が館コ下方を一巡していることが確認された。基底幅及び深さは、激しい湧水に水中ポンプが役に立たず、約2m掘り下げた時点で壁面の崩落が始ったため作業を中止したので不明である。

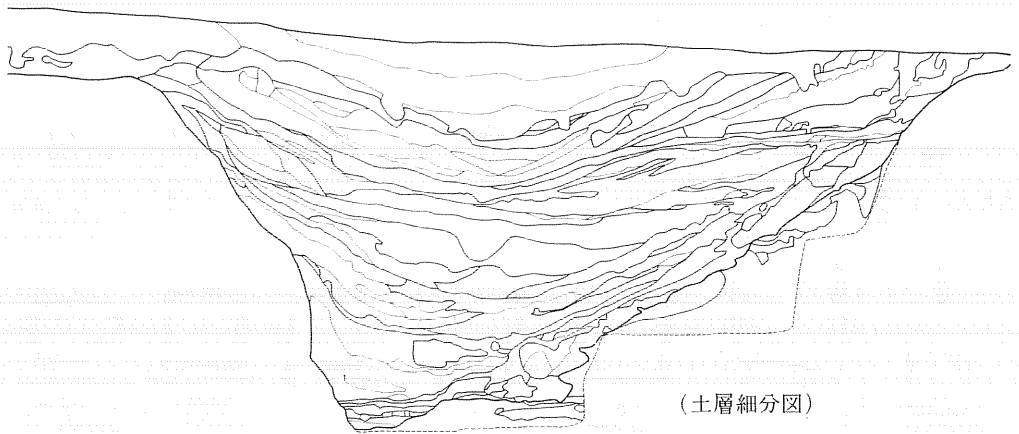
館コの西側、水田を挟んで舌状台地が存在するが、この舌状台地の東側下方にも上端幅4.20mの箱葉研状の濠が存在する。

これら2本の濠には、北方の沢目から滲出する水が流入することから水濠と考えられ、館コの南側で合流、その後米代川に流入する。

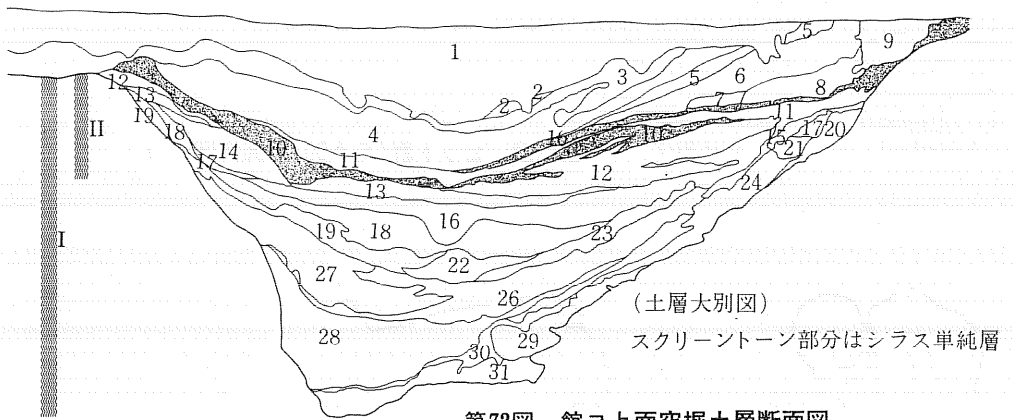
また館コ北方の台地上でも空堀が確認されている。上端幅3.82m、深さ1.42m、基底幅1.95mの箱葉研状を呈する。

第13表 館コ上面空堀土層註記表

層番号	土色	層番号	土色	層番号	土色
1	黒褐色土 10YR 3/2	2	黒褐色土 10YR 3/2	3	褐色土 7.5YR 4/3
4	暗褐色土 10YR 3/4	5	黒褐色土 10YR 2/3	6	黄褐色土 10YR 5/6
7	暗褐色土 10YR 3/4	8	黄褐色土 10YR 5/6	9	黒褐色土 10YR 2/3
10	にぶい黄橙色土 10YR 6/3	11	黒褐色土 10YR 2/3	12	黒褐色土 10YR 2/2
13	にぶい黄褐色土 10YR 4/3	14	褐色土 7.5YR 4/4	15	黒土色 7.5YR 2/1
16	黒褐色土 10YR 3/2	17	黒褐色土 10YR 2/3	18	褐色土 10YR 4/4
19	黄褐色土 10YR 5/6	20	にぶい黄橙色土 10YR 7/3	21	黄褐色土 10YR 5/6
22	黒色土 10YR 1/1	23	暗褐色土 10YR 5/4	24	にぶい黄橙色土 10YR 6/4
25	灰黄褐色土 10YR 6/2	26	黒褐色土 10YR 2/2	27	褐色土 7.5YR 4/3
28	にぶい黄褐色土 10YR 5/4	29	黄褐色土 10YR 5/6	30	黒褐色土 10YR 2/2
31	褐色土 7.5YR 4/3				



(土層細分図)



(土層大別図)

スクリーントーン部分はシラス単純層

第72図 館コ上面空堀土層断面図

### ③ ピット群 (第73図～第75図。第14表。図版49)

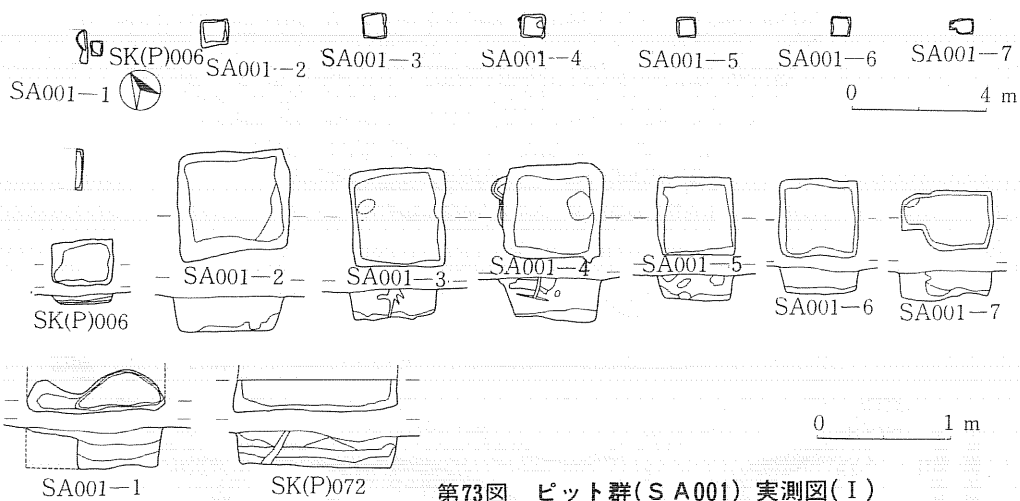
上部平坦面のうち、空堀から北側の平坦面と、空堀中から合計82カ所確認されている。

北側平坦面では、69カ所のピットが確認されたが、そのうち平面プランが方形を呈し、約400cm間隔で列をなす一群が他のピット群と形態、規模が異なる。この方形ピット群(SA001第73図)は、底部から魚骨が多く出土したことから近年の掘り込みとも考えられる。他のピット群(第75図)は、その形態、規模、位置関係に特別な意図が見られない(第14表)。

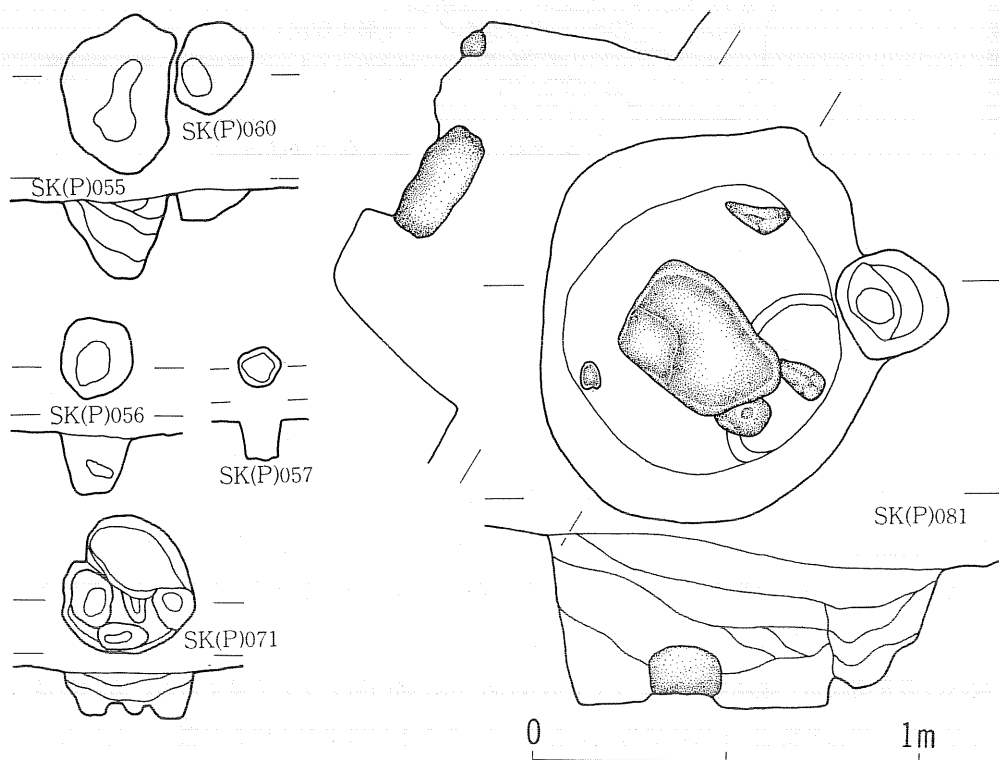
空堀内北側壁面西寄り(9-G、9-H、10-G、10-H)で検出された12カ所のピット群は、東側5カ所で1列、西側7カ所で1列の2列に並んで地山面に穿たれており、その位置から土留のための柱穴ではないかとも考えられる。

空堀内の第Ⅱ期底面で確認されたピット(SK(p)081)は、略円形プランを呈するが、底面のほぼ中央部が16×18cmの範囲(円形)で約4cm盛り上り、その上に扁平な川原石が置かれていた。底面には他に川原石が4個検出されている。このピットは、SB001とした柱穴群と同規模、

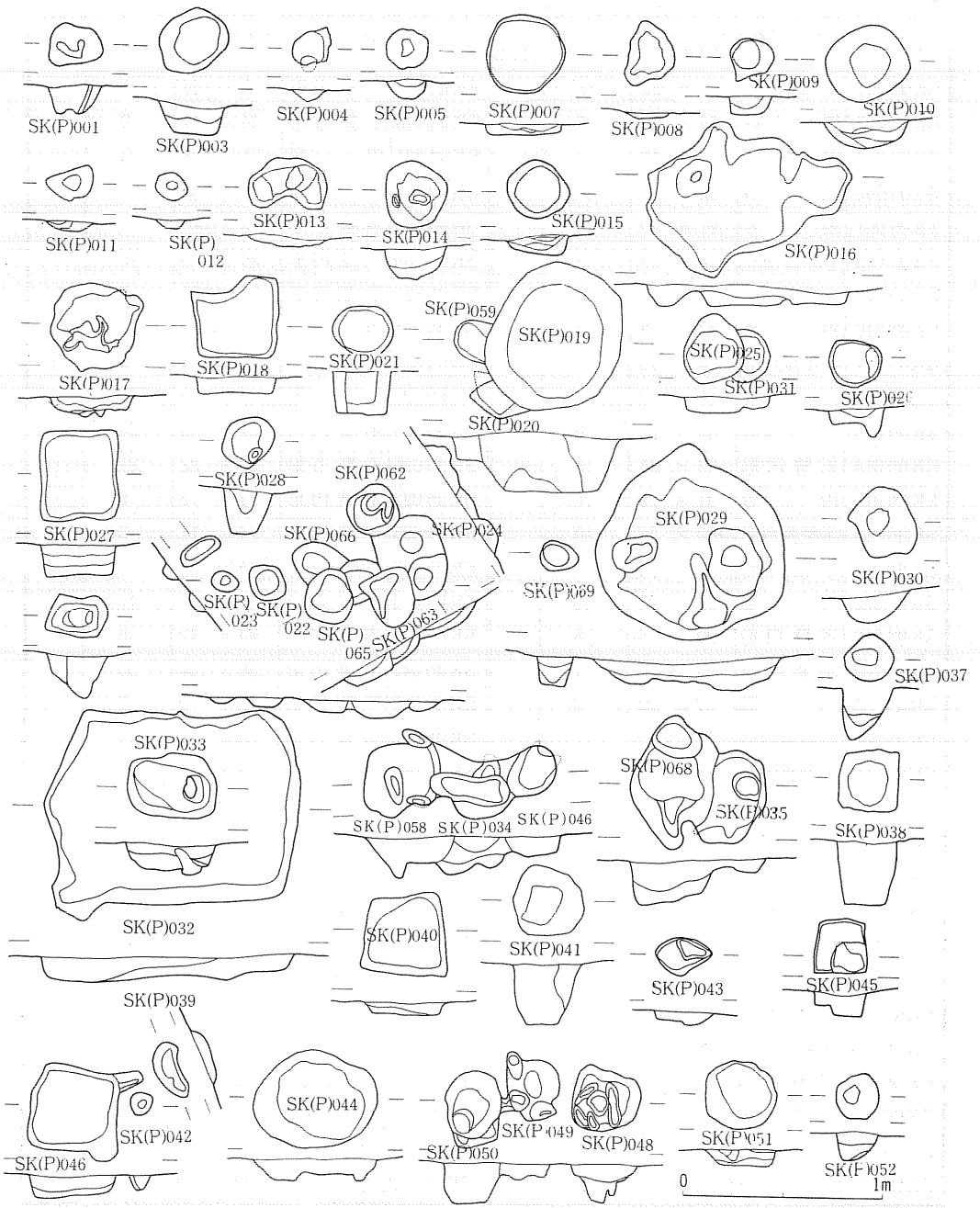
同形態を示していることに留意する必要がある。(第74図)



第73図 ピット群(SA001) 実測図(I)



第74図 ピット群実測図(II)



第75図 ピット群実測図(Ⅲ)

第14表 ビット群計測表

ビット番号	形 態	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考	ビット番号	形 態	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考
SK(P)001	不 整 円形	27 × 22	15		SK(P)017	不 整 円形	49 × 46	10	
SK(P)003	円 形	36 × 29	15		SK(P)018	不 整 方形	44 × 41	9	
SK(P)004	円 形	18 × 16	6		SK(P)021	円 形	31 × 26	23	
SK(P)005	円 形	22 × 21	10		SK(P)019	円 形	75 × 64	30	
SK(P)007	円 形	41 × 39	5		SK(P)020	不 整 方形	19 × (30)		
SK(P)008	不整長円形	33 × 23	2		SK(P)059	不 整 円形	20 × (25)	12	
SK(P)009	不 整 円形	23 × 17	10		SK(P)025	不 整 円形	36 × 30	8	
SK(P)010	円 形	43 × 38	14		SK(P)031	円 形	27 × (24)	6	
SK(P)011	不整長円形	24 × 15	5		SK(P)026	円 形	27 × 24	15	
SK(P)012	円 形	16 × 13	4		SK(P)027	方 形	47 × 40	16	
SK(P)013	ゴーグル形	39 × 25	6		SK(P)028	不 整 円形	27 × 23	23	
SK(P)014	不 整 円形	33 × 31	15		SK(P)036	不 整 方形	32 × 22	21	
SK(P)015	円 形	31 × 29	10		SK(P)022	不 整 円形	21 × 18	5	
SK(P)016	不整長円形	102 × 78	10		SK(P)023	不 整 円形	14 × 11	3	
SK(P)024	不 整 方形	43 × 34	7		SK(P)033	不整長円形	44 × 32	14	
SK(P)062	円 形	26 × 27	10		SK(P)032	不 整 方形	128 × 105	12	
SK(P)063	不 整 円形	29 × 25	8		SK(P)040	不 整 方形	44 × 42	6	
SK(P)064	不 整 円形	23 × (25)	7		SK(P)041	不 整 円形	36 × 35	30	
SK(P)065	円 形	27 × 24	9		SK(P)043	不 整 円形	28 × 19	7	
SK(P)066	不整長円形	23 × (32)			SK(P)045	不 整 方形	28 × 27	11	
SK(P)069	不整長円形	19 × 15	15		SK(P)052	円 形	23 × 22	15	
SK(P)029	不 整 円形	98 × 94	16		SK(P)051	円 形	36 × 34	9	
SK(P)030	不 整 円形	36 × 32	15		SK(P)048	不 整 円形	37 × 36	19	
SK(P)037	不 整 円形	25 × 24	26		SK(P)049	不 整 円形	38 × 28	8	
SK(P)038	不 整 方形	31 × 30	32		SK(P)050	不 整 円形	39 × 24	20	
SK(P)035	不整長円形	49 × (35)	7		SK(P)044	不 整 円形	62 × 49	11	
SK(P)068	不整長円形	67 × 42	22		SK(P)039	不整長円形	30 × 15	6	
SK(P)046	不 整 円形	29 × 21	10		SK(P)042	不 整 円形	12 × 12	8	
SK(P)034	不整長円形	29 × (40)	20		SK(P)046	不 整 方形	60 × 47	12	
SK(P)058	不 整 円形	38 × (51)	20		SK(P)055	不整長円形	41 × 29	21	
SK(P)060	不 整 円形	25 × 19	8		SK(P)071	不 整 円形	36 × 34	12	
SK(P)056	円 形	21 × 19	15		SK(P)081	円 形	107 × 90	44	
SK(P)057	円 形	11 × 10	10		SK(P)082	円 形	30 × 28	31	



## (2) 遺物 (第76図～第80図・第15表～第17表・図版52～54)

### ① 土器 (第76図・第15表・図版52)

本遺跡から出土した土器類は、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器の4種99点であるが、全て小破片である。

縄文式土器は、前期(1～3)、後期(4～17、21)、晩期(18～20、25)の3期22点である。

弥生式土器は、後期9点(23、24、26～32)である。

土師器は、製作にロクロを使用した甕形土器の破片3点(33～35)、須恵器は、壺形土器の破片(36)1点のみである。

### ② 陶磁器 (第77図)

上部平坦面、Aトレンチ、Cトレンチ、上部空堀から出土した陶磁器は12点であるが、9点は近～現代陶器である。

上部空堀から出土した青磁小片は、13～14世紀の中国製蓮弁文碗片である。4-L及び5-Iグリッドから出土した丸皿または小皿破片は、16世紀前半の美濃灰釉皿の破片である。4-Lグリッド出土の皿は約 $\frac{1}{2}$ 欠損し、高台がすり減っている。(第76図37)

(陶磁器の鑑定は、金沢大学法文学部佐々木達夫教授に依頼したものである。)

### ③ 金属器 (第78図・第16表・図版54)

出土した金属器は、鉄、青銅、真鍮の3種類からなっている。

鉄製品は、腐食しているためその形状が明確ではないが、27～57mmの長さの釘25点(1～25) 柄付小刀1点(27)、小刀2点(28、29)、刀子茎部2点(30、31)、鉄1点(32)、手持ち部分を2回捻り、頭部を折り曲げて輪にした火箸1対(38)、鎖1点(35)、用途不明3点(26、33、37)の6種36点である。

真鍮でつくられた鈴(34)には刻印が認められる。

青銅製品は、破損しているため形状が明確ではないが、断面長方形を呈し、内部に木材が挿入されている1点(36)のみである。

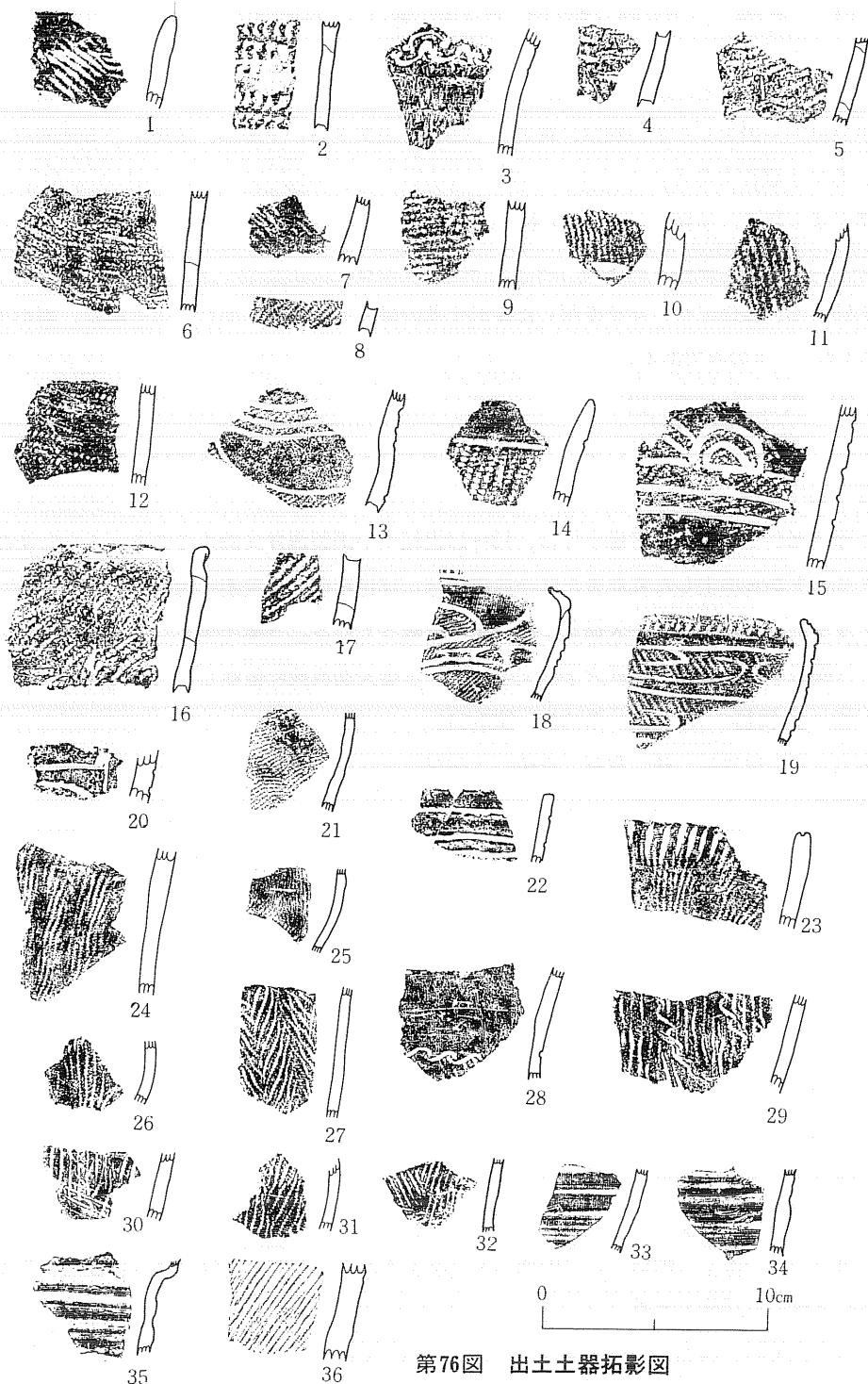
38点の金属器のうち、その出土状況、形態等から「館」時代に生産・消費されたものより、それ以後のものが多数を占めると考えられる。

### ④ 銅銭 (第79図・第17表・図版54)

本遺跡から出土した銅銭は、その銭名の判読できるもの6枚、判読できないもの(あるいは無銘)9枚の計15枚である。

その出土地区、銭名、初銭年等は、第17表の通りである。

判読できない、あるいは無銘銭とも考えられる9枚の銅銭のうち11を除く8枚については、



第76图 出土土器拓影图

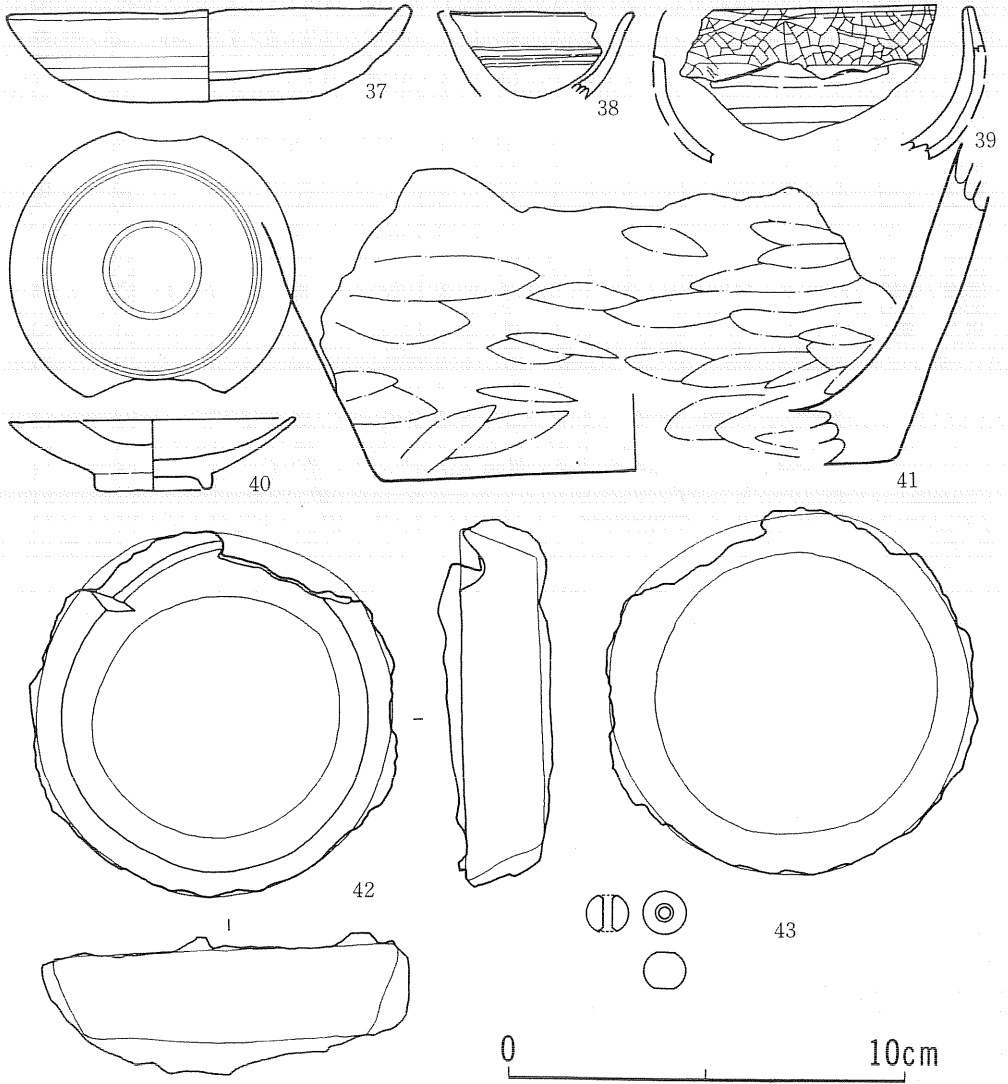
第15表 出土土器観察表

番号	出土地点	部位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考
			文 様	色 調	調 整	色 調				
1	2-J	口縁部	L縄文の縦位回転。	褐灰色 7.5 Y R 4/	横位(?)	明褐灰色 7.5 Y R 7/2	8	石英・赤色粒子 砂粒	密	普通
2	8-I	胴 部	連続爪形文。	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	横位ミガキ	灰褐色 7.5 Y R 7/2	6	石英砂粒	粗	不良
3	8-K	胴 部	沈線による波状文と縄を撚り戻したもの。末端を押圧している(?)	にぶい黄橙色 10 Y R 7/4	横位ミガキ	にぶい黄橙色 10 Y R 7/4	6	石英	密	良好
4	6-I	胴 部	R L縄文の斜位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	縦位ミガキ	にぶい褐色 7.5 Y R 4/	7	石英・砂粒 白色・赤色粒子	粗	普通
5	8-K	胴 部	L R縄文の斜位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	縦位ミガキ	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	6	石英砂粒	密	良好
6	5-I	胴 部	R L縄文の斜位回転。	橙色 7.5 Y R 7/4	縦位ミガキ	7.5 Y R 4/	6	石英・赤色粒子	密	良好
7	5-L	胴 部	原体不明	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	横位ミガキ	浅黄橙色 7.5 Y R 7/4	8	石英砂粒	粗	普通
8	Eトレンチ	胴 部	L R縄文の横位回転。	浅黄橙色 7.5 Y R 7/4	横位ミガキ	浅黄橙色 7.5 Y R 7/4	6	白色粒子	密	良好
9	Aトレンチ	胴 部	L R縄文の斜位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	不明	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	7	石英砂粒	粗	不良
10	6-K	胴 部	R L縄文の横位回転。	明赤褐色 2.5 Y R 7/4	横位ミガキ	明赤褐色 2.5 Y R 7/4	9	砂粒・白色粒子	密	普通
11	上部 5ライン西側	胴 部	R L縄文の縦位回転。	にぶい赤褐色 5 Y R 4/	横位ミガキ	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	6	石英砂粒	密	普通
12	6-K	胴 部	L R縄文、施文後—ミガキ調整。	にぶい橙色 7.5 Y R 7/4	横位ミガキ	橙色 7.5 Y R 7/4	7	石英砂粒	粗	普通
13	Eトレンチ	胴 部	壺形土器であろう。L R縄文帯とすり消し帯に区画される。	浅黄橙色 7.5 Y R 7/4	横位・斜位ミガキ	浅黄橙色 7.5 Y R 7/4	7	石英砂粒	密	普通
14	7-J・K	口縁部	上半部横位のミガキ、一条の沈線下にL R縄文の斜位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	横位ミガキ	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	7	石英砂粒	密	普通
15	5-J	胴 部	平行沈線によって、縄文帯とすり消し帯が区画され、二重の弧状を呈する縄文帯がある。L R縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	横位ミガキ	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	8	石英砂粒	密	普通
16	4-K	口縁部	直立平縁 L R縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	横位ミガキ	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	6	石英砂粒 赤色粒子	粗	普通
17	8-H	胴 部	L R縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	不明	にぶい橙色 7.5 Y R 4/	9	石英砂粒	粗	普通
18	5-I	口縁部	すり消し縄文帯と縄文帯が入組文を構成する。 L R縄文の横位回転。	灰褐色 7.5 Y R 7/2	横位ミガキ	黒褐色 7.5 Y R 4/	5	砂粒	密	良好

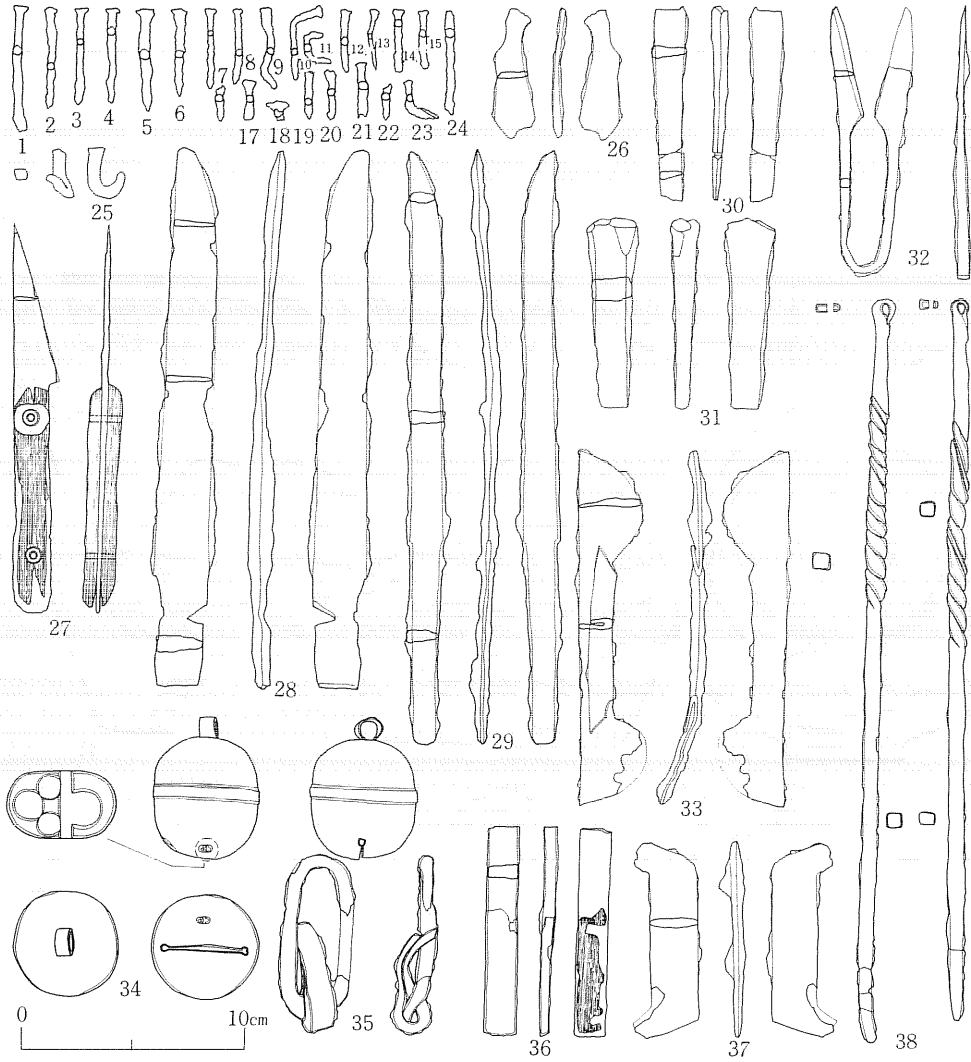
番号	出土地点	部位	外面		内面		器厚 (mm)	胎土	焼成	備考	
			文様	色調	調整	色調					
19	Aトレンチ	口縁部	R L縄文の横位回転された縄文帯が変形工字文を構成する。	にぶい橙色 5 Y R 5/6	不明	浅黄橙色 7.5 Y R 5/6	5	石英・白色粒子	密	良好	
20	7-J・K	胴部	沈線文。	にぶい褐色 7.5 Y R 5/6	不明	にぶい褐色 7.5 Y R 5/6	3	石英・砂粒	粗	普通	
21	Eトレンチ	胴部	L R縄文の斜位回転。	褐灰色 7.5 Y R 5/6	横位ミガキ	にぶい橙色 7.5 Y R 5/6	5	白色粒子 赤色粒子	密	良好	内外面スス付着
22	7-J・K	口縁部	3条の平行沈線。	黒褐色 7.5 Y R 5/6	横位ミガキ	にぶい橙色 7.5 Y R 5/6	5	石英	密	普通	
23	7-J・K	口縁部	口縁部に太い沈線、口縁部に縦長の単沈線が並び胴部はRの燃糸文。	にぶい橙色 7.5 Y R 5/6	横位ミガキ	にぶい橙色 7.5 Y R 5/6	7		密	普通	
24	7-J・K	胴部	Rの燃糸文。	褐色 7.5 Y R 5/6	不明	にぶい橙色 7.5 Y R 5/6	8	石英・砂粒	粗	普通	
25	5-I	胴部	L R縄文、横位・斜位回転。	黒褐色 5 Y R 5/6		黒褐色 5 Y R 5/6	5		密	良好	
26	7-J	胴部	R燃糸文。	にぶい橙色 7.5 Y R 5/6	横位ミガキ	にぶい褐色 7.5 Y R 5/6	5	石英・砂粒	粗	良好	
27	7-J	胴部	Lの燃糸文を綾杉状に施文する。	褐灰色 7.5 Y R 5/6	横位ミガキ	褐灰色 7.5 Y R 5/6	5	石英・砂粒	密	良好	内面スス付着
28	8-J	胴部	横位のミガキがあり、R燃糸文による綾線文が施文さる。	にぶい褐色 7.5 Y R 5/6	横位ミガキ	にぶい褐色 7.5 Y R 5/6	6	石英・砂粒	密	普通	
29	8-J	胴部	R燃糸文を縦位にさらに2条綾線文がある。	にぶい褐色 7.5 Y R 5/6	横位ミガキ	にぶい褐色 7.5 Y R 5/6	6	赤色粒子 石英・砂粒	密	良好	外面スス付着
30	7-J・K	胴部	R燃糸文。	にぶい赤褐色 5 Y R 5/6	横位ミガキ	にぶい褐色 5 Y R 5/6	6	石英・砂粒	密	良好	
31	7-J	胴部	R燃糸文。	にぶい褐色 7.5 Y R 5/6	不明	黒褐色 7.5 Y R 5/6	5		密	良好	内面スス付着
32	Aトレンチ	胴部	L燃糸文。	浅黄褐色 7.5 Y R 5/6	横位ミガキ	浅黄褐色 7.5 Y R 5/6	5	石英・砂粒	密	普通	
33	6-K	胴部		にぶい褐色 7.5 Y R 5/6		にぶい褐色 7.5 Y R 5/6	5			良好	土師器
34	7-J・K	胴部		にぶい褐色 5 Y R 5/6		にぶい褐色 5 Y R 5/6	6			良好	土師器
35	7-J・K	胴部		にぶい褐色 5 Y R 5/6		にぶい褐色 5 Y R 5/6	5			良好	土師器
36	8-J	胴部		褐灰色 7.5 Y R 5/6		褐灰色 7.5 Y R 5/6	11			良好	須恵器

銭名の削りとりか銭名をつけずに鑄造したものの2者が考えられるが、前者の可能性が強い。

また、所謂「館跡」から出土する銅銭の中に、この削りとりと考えられる薄い無銘銭が多いことが注目される。



第77図 出土陶磁器等実測図

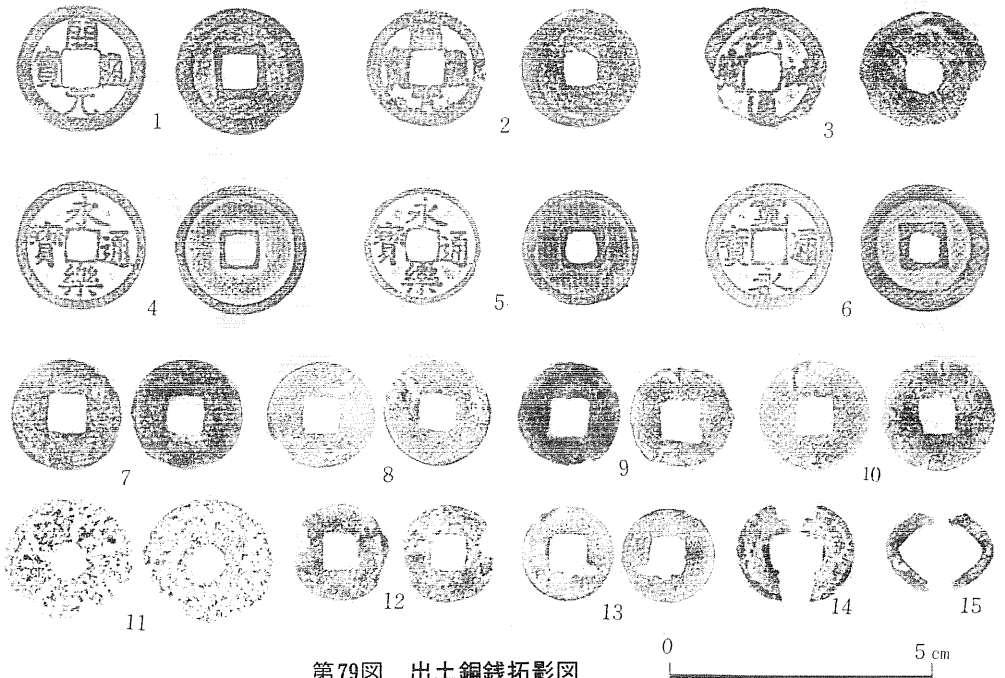


第78図 出土金属器実測図

第16表 出土金属器一覽表

番号	出土地区	番号	出土地区	番号	出土地区	番号	出土地区
1	5-Iグリッド	2	SA 001-3	3	5-Iグリッド	4	SA 001-2
5	SA 001-3	6	SA 001-3	7	SA 001-2	8	SA 001-3
9	SA 001-3	10	SA 001-3	11	SA 001-3	12	SA 001-2
13	SB 001-7	14	SA 001-2	15	SB 001-6	16	SA 001-2
17	SA 001-3	18	SB 001-7	19	SA 001-3	20	SA 001-2
21	SA 001-3	22	SA 001-3	23	SB 001-7	24	SB 001-7

25	7-J・7-K グリッド上部堀	26	8-Kグリッド上部堀	27	10-Gグリッド	28	8-Kグリッド
29	3-Lグリッド上部堀	30	不明	31	9-G・10-G グリッド	32	7-Kグリッド上部堀
33	9-Jグリッド	34	Aトレンチ	35	7-Kグリッド上部堀	36	7-J・7-K グリッド上部堀 (青銅製・内部に木材挿入)
37	3-Lグリッド上部堀	38	8-Kグリッド上部堀				



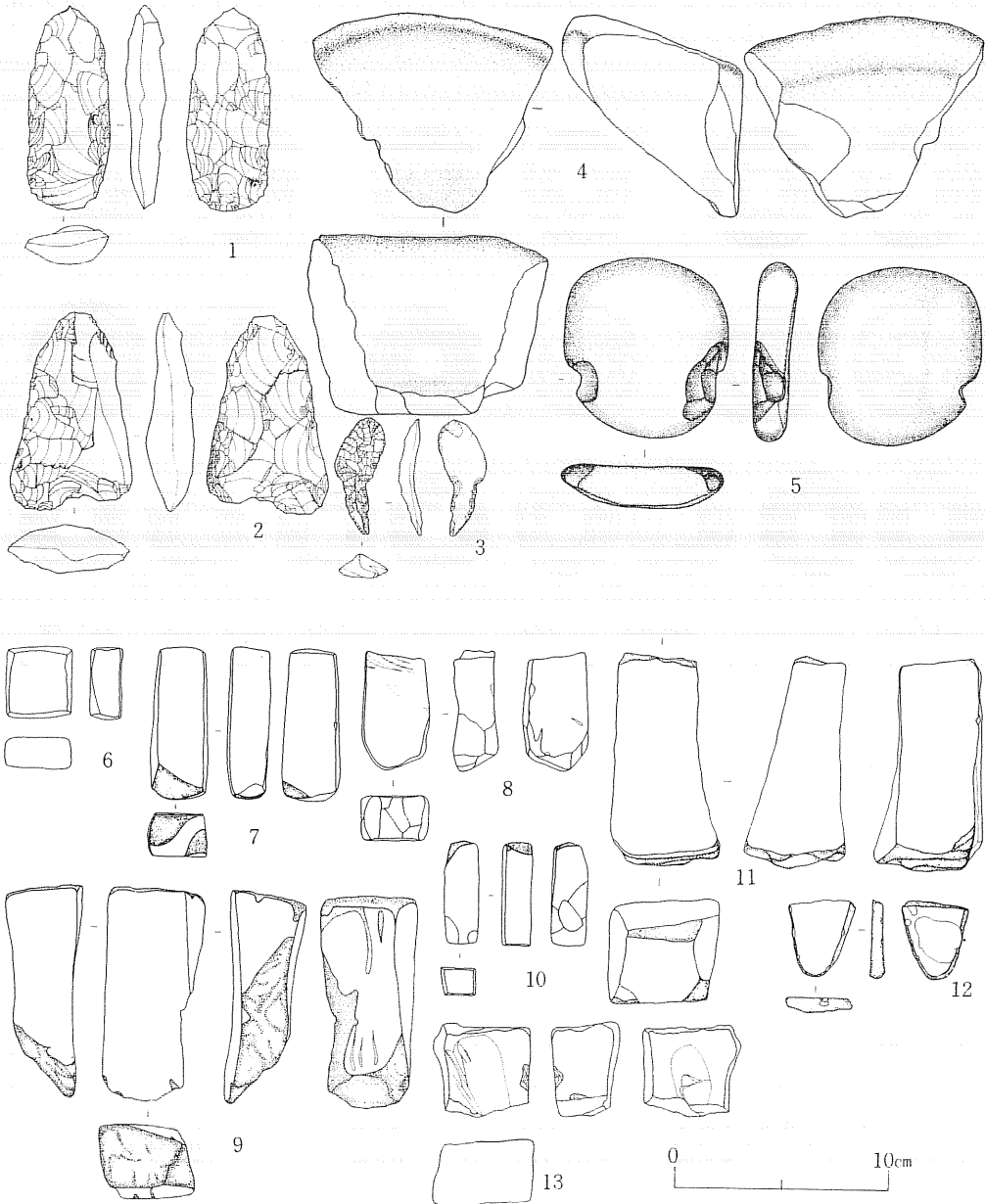
第79図 出土銅銭拓影図

第17表 出土銅銭一覽表

拓影 番号	出土地区	層位	銭名	初 鑄 年	拓影 番号	出土地区	層位	銭名	初 鑄 年	
1	上部空堀	I 表採	開元通宝	唐 621年	9	上部空堀		判読不可 あるいは 無銘		
2	10-G		開元通宝	唐 621年	10	6-H				
3	上部空堀		元祐通宝	北宋1086年	11	上部空堀				
4	5-I		永楽通宝	明 1408年	12	10-H				
5	不明		永楽通宝	明 1408年	13	上部空堀				
6	Bトレンチ		寛永通宝	江戸1636年	14	上部空堀				
7	Aトレンチ		判読不可 あるいは 無銘			15				上部空堀
8	上部空堀									

⑤ 石製品 (第80図. 図版53)

本遺跡において出土した石製品は、筒状石器2点、石錐1点、石錘1点、石皿1点、砥石8点の5種類13点である。



第80図 出土石製品実測図



## ア 筥状石器

	出土地区	層位	遺物 No.	大きさ (mm)			重量(g)	刃部角度		残存状態	石質	備考
				最大長	最大幅	最大厚		$\alpha$	$\beta$			
1	6-A	I	RQ-1	96	38	18	64	51	168		硬質頁岩	
2	6-G	I	RQ-1	95	58	22	105	71			硬質頁岩	

縦長の剥片を用い、打撃による成形後部分的に二次剥離で調整している。いずれも刃部縁にはこまかい刃こぼれ痕が認められる。主要剥離面に部分的に一次剥離面を残す。2の刃部中央のくぼみは使用の際の剥離であろう。

## イ 石錐

	出土地区	層位	遺物 No.	大きさ (mm)			重量(g)	形態	刃部の大きさ(mm)			刃部角度		残存状態	石質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			最大長	最大幅	最大厚	$\alpha$	$\beta$			
3	8-J	I	RQ-1	55	22	6	19	I	25	10	3	35	11		硬質頁岩	

押圧剥離による調整が加えられており、つまみ部から錐部にかけてゆるやかな角度でえぐりを入れている。

## ウ 石皿

	出土地区	層位	遺物 No.	大きさ (mm)			重量(g)	石質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
4	8-K	I	RQ-2	117	111	17	570	凝灰岩	

## エ 石錘

	出土地区	層位	遺物 No.	大きさ (mm)			重量(g)	形態	残存状態	石質	備考
				最大長	最大幅	最大厚					
5	5-K	I	RQ-1	85	77	18	104			凝灰岩	

扁平な川原石を使用しており、短軸方向に一方向からの打ちかきによってくびれ部分を作り出している。くびれ部分の剥離によってできた稜線は丸みをもっており使用時に磨滅したものとされる。

## オ 砥石

	出土地区	層位	遺物 No.	大きさ (mm)			重量(g)	砥ぎ面数	砥面の大きさ(mm)			残存状態	石質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			長さ	幅	深さ			
6	6-K	I	RQ-1	34	41	14	31	6	33	41	1		凝灰岩	擦痕-斜位
7	10-H	I	RQ-2	71	26	19	66	6	64	24			凝灰岩	
8	7-K	I	RQ-1	54	31	21	50	4	48	29		破損	凝灰岩	擦痕-長軸方向 スス付着
9	8-K	I	RQ-1	99	44	35	137	4	97	38	3.5		凝灰岩	条痕-短軸方向
10	表採			48	16	13	21	5	44	14			凝灰岩	擦痕-長軸方向 スス付着
11	7-J	I	RQ-1	99	46	45	224	4	91	40	3.5		凝灰岩	擦痕-斜位
12	9-J	I	RQ-1	34	30	7	6	1	34	30		破損	凝灰岩	
13	10-H	I	RQ-1	42	45	29	84	5	36	38		破損	凝灰岩	擦痕-斜位

いずれも自然石を転用したもので、4面から6面使用されているものが多い。9、11は大型のもので置砥石、その他は小型のもので手持ち砥石として使用されたと思われる。

## 5. まとめ

鹿角地方に多い中世の館跡の一つ、湯瀬館は、平坦地の少ない狭隘な湯瀬地区の中でも居住性、要害性、所領支配の諸要素に最も適した地に立地している。この自然地形の要害性が、人為的防禦施設をあまり必要としないと思われる程、自然を巧みに利用して構築されており、またいくつかの資・史料から、館主と破却された時期を推定することのできる館跡のひとつであり、発掘例の少ない鹿角42館の解明に、ひとつの考古学的資料を提供できるものである。

館跡が、小学校跡地の郭と館コと称される郭の2つから構成されているが、いずれも上部を削平されていることから当初の予想をかなり下回るものとなったが、主要調査区である館コの上部平坦面が調査の結果、空堀により2つの郭にさらにわけられていたこと、その北側の郭に建物跡が検出されたことなど一応の成果をおさめることができた。

中世における鹿角地方の館は、その存立期における所領支配が第1の目的として構築されているが、各館は所領支配及び軍事面においても相互に関連しており、湯瀬館も谷内館、長嶺館、館市館との連携が想定される。

湯瀬館は、それらの目的の他に交通路の押えとしての性格をも合せもつものと考えられ、南部氏系の安倍氏の居館となったことで、交通路の押えとしての要素が特に強まったと考えられる。

この交通路の押えとしての要素を第1義に考え、小学校跡地と館コを比較すると、小学校跡地の方が展望も優れていることから、小学校跡地の郭が主をなしていたとも考えられよう。

防禦的性格を考えると、館コはその下方に地形的特質を十分生かして水濠を巡らしており、部分的ではあるが、自然地形を巧みに利用して土塁としている。また小学校跡地の南側斜面の3段の帯郭（腰郭）状平場は、堀跡となる可能性もある。その場合、3段の堀とその中間に2本の土塁が出現することになる。これらのことから、単に交通路の押えとしてだけでなく、防禦面でも非常に堅固な館跡となる。

館コ上面の掘立柱建物跡は、郭面積の $\frac{1}{3}$ 以上を占有する規模のもので、各柱穴は、その掘り方から、中央部が盛り上り、それを中心に川原石を並べ、中央に扁平な川原石を置いたものと考えられることから掘立柱の概念から逸脱するかも知れない。

湯瀬館の創始期は不明であるが、館コ上部平坦面を区画する空堀Ⅱ期の堀土中から13～14世紀の中国製蓮弁文青磁碗片が出土しており、それ以前から使用されていたと考えられる。また美濃灰釉皿は館破却の時期（1591年）とほぼ一致する。

# 付 篇

湯瀬館遺跡の調査に関連して、鹿角地方の館跡に関する資料を掲載する。

(付図2. 第18表～第24表)

第18表 鹿角地方の館の分布一覧表 (鹿角4氏の館主を中心として)

No.	所在地	「鹿角郡由來記」		「鹿角由來集」		(註3) 館主 の変遷	備 考
		館(村)名	館 主	館(村)名	館 主		
1	岩手県二戸郡安代町字 藍ノ野	田 山	田山左京進	田 山	田山右京進	あり	・田山館の東方に田山古館がある。 ・地藏寺に、延文2年銘板碑あり。 ・正中2年(1325)・暦応2年(1339) の文書に、安保氏の所領「田山郷」 とある。(註4) ・暦応2年の文書に「田山入道」の 名がみえる。
2	岩手県二戸郡安代町館 市	左比内 (館市)	左比内采女	佐比内 (館市)	佐比内采女		・正中2年(1325)の文書に「あにの はた(兄畑)」の地名がみえる。 (註5)
3	鹿角市八幡平字湯瀬古 館	湯 瀬	湯瀬中務	湯 瀬	湯瀬中務	あり	・天正19年(1591)に、館が破却され たと記録にある。(註6)
4	鹿角市八幡平字東館・ 西館・堂ノ前	長 峯	長峯下総	長 嶺	長嶺下総		・天正19年に、館が破却されたと記 録にある。(註7)
5	鹿角市八幡平字三ヶ田	三ヶ田	三ヶ田左近	三ヶ田	三ヶ田左近	あり	・三ヶ田地区の産土神・古四王神社 は、貞応年中(1222～24)、館主安 保左近の勧請によると伝えられて いる。
6	鹿角市八幡平字上苗代	谷 内	谷内三郎	谷 内	谷内三郎	あり	・天照皇御祖神社(神明社)境内に、 板碑・磨崖仏あり。 ・天正19年に、館が破却されたと記 録にある。(註8)
7	鹿角市八幡平字長牛・ 林ノ外・タタラ	長 牛	秋元弾正左衛門	長 牛	秋本弾正左衛門	あり	・長牛館内より、正安元年銘板碑出 土する。 ・秋元弾正左衛門は秋田へ半入した とある。 ・館の南側を妻部道(流霰路)が通 っている。
8	鹿角市八幡平字夏井	夏 井	夏井但馬	夏 井	夏井但馬	あり	
9	鹿角市八幡平字糸坪平	長 内	長内刑部	長 内	長内刑部		・天保3年写本では欠落している。 文化13年写本には、長内氏は安保 氏の一族とある。 ・天正19年の九戸の乱の九戸方に、 長内弥左衛門昌教、長内伝右衛門 等の名がみえる。(註9)
10	鹿角市八幡平字白砂館	白 還	白欠勘解由	白 懸	白懸勘解由		・白欠氏が何氏に属するか不明であ る。
11	鹿角市八幡平字石鳥谷	石鳥屋	石鳥屋五郎	石鳥屋	石鳥屋五郎	あり	
12	鹿角市八幡平字天神館	松 館	松館越前	松 館	松館越前		
13	鹿角市尾去沢字尾去	尾 去	尾佐利越中	尾 去	尾去越中	あり	・館の北側に、東在家・西在家の地 名あり。 ・永祿年間の合戦の安東方に、安保 左衛門大夫の名がみえる。(註10)
14	鹿角市八幡平字下鶯ノ 巢	小豆澤	小豆澤駿河	小豆澤	小豆澤駿河		・大日堂境内に正安2年銘板碑あり。 ・詳細は不明だが、島根県松江市方 面に小豆沢氏の子孫がおるとのこ と。 ・天正19年に館は破却されたと記録 にある。(註11)

15	鹿角市八幡平宇堀・大里	大里	大里上総	大里	大里上総守 <sup>(ママ)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大里氏は鹿角安保氏の惣領と言われる。</li> <li>・建武年間の館主は、鹿角郡国代成田小二郎左衛門尉頼時。<sup>(註12)</sup></li> <li>・永祿年間の合戦の記録の中に、大里豊前、大里備中の名がみえる。<sup>(註13)</sup></li> <li>・最後の館主、大里修理親基は九戸政実の乱においては九戸方の大将となる。<sup>(註14)</sup></li> <li>・天正19年、館が破却された。<sup>(註15)</sup></li> </ul>
16	鹿角市八幡平宇玉内	玉内	玉内大炊之助	玉内	玉内大炊之助	<ul style="list-style-type: none"> <li>・玉内氏は津軽へ半人したとある。</li> </ul>
17	鹿角市花輪字古館	花輪	花輪次郎	花輪	花輪治郎	あり <ul style="list-style-type: none"> <li>・花輪氏は後に九戸郡円子村へ移り円子氏を称する。</li> <li>・臥牛本館と呼ばれ、周辺には孫右衛門館(南)・近世の花輪館(西)・黒土館(北西)が近接してある。</li> </ul>
18	鹿角市花輪字陳場	黒土	黒土丹後	黒土	黒土丹後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒土氏は津軽へ半人したと言われる。<sup>(註16)</sup></li> <li>・館は天正19年破却される。<sup>(註17)</sup></li> </ul>
19	鹿角市花輪字堪忍沢・浦館	高瀬	高瀬土佐	高瀬	高瀬土佐	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高瀬氏は秋元氏の惣領と言われている。</li> <li>・「鹿角郡由来記」・「鹿角由来集」の高梨村の条に高瀬潮防の名がみえる。</li> <li>・館の正式な所在地は不明である。</li> <li>・館の擬定地の東側に、半在家の地名あり。</li> <li>・現在は館に付属する集落も存在せず、地名を残すのみである。</li> </ul>
20	鹿角市花輪字茶臼館	高屋	高屋筑前	高屋	高屋筑前	あり <ul style="list-style-type: none"> <li>・高屋氏は秋田へ半人したとある。</li> </ul>
21	鹿角市花輪字西町	柴内	柴内弥治郎	柴内	柴内弥治郎	<ul style="list-style-type: none"> <li>・館の東西に東町・西町の地名が残っている。</li> </ul>
22	鹿角市花輪字乳牛平	<sup>(ママ)</sup> 向牛	<sup>(ママ)</sup> 向牛六郎	乳牛	<sup>(ママ)</sup> 乳牛村六郎	<ul style="list-style-type: none"> <li>・血牛と記すものもある。</li> <li>・乳牛六郎は柴内氏の弟とも言われる。</li> </ul>
23	鹿角市花輪柴内地区	中柴内	中柴内八郎	中柴内	中柴内八右衛門	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中柴内氏は柴内弥治郎一門。</li> <li>・館の所在地は不明である。一説に柴内館の北方に所在するとあり。<sup>(註18)</sup></li> </ul>
24	鹿角市花輪柴内地区	折加内	折加内甚右衛門	折加内	折加内勘右衛門	<ul style="list-style-type: none"> <li>・折加内氏は柴内弥治郎一門。</li> <li>・館の所在地は不明である。一説に柴内館・中柴内館の北方に所在するとある。<sup>(註19)</sup></li> </ul>
25	鹿角市花輪字大坊沢・新斗米	新斗米	新斗米左近	新斗米	新斗米左近	
26	鹿角市花輪字高沢	高市	高市玄蕃			<ul style="list-style-type: none"> <li>・天保3年写本では欠落している。</li> <li>・「鹿角由来集」抄録には、高市玄蕃頭(成田)が拠っていたとある。<sup>(註20)</sup></li> </ul>
27	鹿角市十和田大湯宇古館	大湯	大湯左衛門	大湯	大湯佐左衛門督	あり <ul style="list-style-type: none"> <li>・大湯氏は、奈良氏の惣領。</li> <li>・鹿倉館とも呼ばれる。</li> <li>・九戸政実の乱当時の館主・大湯四郎左衛門昌次は九戸方の大将となり、乱後九戸政実等と共に誅された。<sup>(註21)</sup></li> <li>・九戸の乱当時、鹿倉館は南部軍の攻撃を受け落城した。<sup>(註22)</sup></li> </ul>
28	鹿角市花輪字古館・館神・八幡館・上町	小枝指	小枝差左馬	小枝指	小枝指左馬助	<ul style="list-style-type: none"> <li>・七ツ館、七館の通称ありと言われているが古い記録にはみえず。<sup>(註23)</sup></li> <li>・「小枝指系図」は、安保姓になっているが、小枝指氏は、大湯佐左衛門督の次男を祖とされている。</li> </ul>

29	鹿角市花輪字下モ館			小 平	小平彦次郎		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「鹿角郡由来記」には欠落している。</li> <li>・小平氏は、小枝指氏の末弟を祖とする。</li> <li>・永祿年間の合戦の記録に、小平彦四郎の名が安東方の中にみえる。 (註24)</li> </ul>
30	鹿角市十和田末広字神田沢	神 田	神田 十郎	神 田	神田 十郎		<ul style="list-style-type: none"> <li>・基石館とも呼ばれる。</li> </ul>
31	鹿角市十和田毛馬内字前館	<sup>(ママ)</sup> 毛馬内(町)	毛馬内備中	毛馬内(村)	毛馬内備中	あり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当麻館と呼ばれる。</li> <li>・毛馬内氏は、成田氏の惣領(三戸南部氏の毛馬内氏とは異なる)。</li> <li>・館の西側に西町の地名がある。</li> <li>・慶長13年(1608)、柏崎館に移るにおよんで廢館となる。</li> </ul>
32	鹿角市十和田瀬田石字森ノ越	瀬田石	瀬田石 太郎左衛門	瀬田石	瀬田石 太良左衛門	あり	
33	鹿角郡小坂町大地字館	大 地	大地甚之進	大 地	大地甚之尉		
34	鹿角郡小坂町小坂鉾山字尾櫓部	小 坂	小坂 筑後	小 坂	小坂 筑後	あり	
35	鹿角郡小坂町字向田表	濁 川	濁川 但馬				<ul style="list-style-type: none"> <li>・「鹿角由来集」では欠落している。</li> </ul>
36	鹿角郡小坂町荒川字松森	荒 川	荒川 備中	荒 河	荒川 備中		
37	鹿角郡小坂町砂子沢字向	八幡館	秋元兵部少	八幡館	秋本兵部少		
38	鹿角市十和田山根字館ヶ沢	高清水	高清水豊後				<ul style="list-style-type: none"> <li>・「鹿角由来集」では欠落している。</li> <li>・館の近くに根小屋の地名がある。</li> </ul>
39	鹿角市十和田大湯字関上	関 神	関神 安房	関 神	関神 安房		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「鹿角郡由来記」では、関神安房を成田氏としているが、「鹿角由来集」では秋元氏としている。</li> </ul>
40   A	鹿角市十和田山根字堂ノ下	芦名澤	芦名澤太郎兵衛	芦名沢	芦名澤太郎兵衛		<ul style="list-style-type: none"> <li>・シキヒ館とある。「鹿角郡由来記」</li> <li>・「鹿角由来集」によれば、こちらが芦名沢館となる。</li> </ul>
40   B	鹿角市十和田山根字上砂沢	同 上	同 上	同 上	同 上		<ul style="list-style-type: none"> <li>・市兵衛館とも呼ばれ、こちらを芦名沢館とするものもある。(註25)</li> </ul>
41	鹿角市十和田草木字丸館	草 木	奈良 越後	草 木	奈良 越後		<ul style="list-style-type: none"> <li>・寺坂・室田も領したとある。</li> </ul>
42	鹿角市十和田末広字高梨館	高梨子館	高梨子土佐	高 梨	高梨 土佐		<ul style="list-style-type: none"> <li>・高瀬周防一門とある。</li> <li>・高梨土佐は子が無く系統が絶えた とある。</li> </ul>
43	鹿角市花輪字地羅野						<ul style="list-style-type: none"> <li>・「館っこ」と通称されている。不動川を挟んで、柴内館の北方約200mの所に対峙している。</li> <li>・館の由来等は伝っていないが、中柴内館ではないかと考えられる。 (註26)</li> </ul>
44	北秋田郡比内町独鉾字上独鉾・中独鉾・下独鉾						<ul style="list-style-type: none"> <li>・独鉾城とも十狐城とも記されている。</li> <li>・永正15年(1518)、浅利則頼によって築城される(浅利氏の全盛期)。</li> <li>・城の近くを流霞路が通っており、城はこの古道の比内側の出入口に位置している。</li> <li>・比内・鹿角の両地方の領有が目的で築城されたか。</li> <li>・城内に独鉾の大日堂がある。</li> </ul>
45	鹿角市花輪字中花輪						<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在、鹿角市立花輪小学校地他。</li> <li>・花輪(御)館。</li> <li>・近世の館、江戸時代を通して、要害屋敷として書き上げられ、延宝2年(1674)以降は、中野南部氏の御預館(陣屋)、花輪通代官所(享保20年)として幕末まで存続。</li> </ul>

46	鹿角市十和田毛馬内字 柏崎					<ul style="list-style-type: none"> <li>・慶長12年から慶長13年まで（1607～08）に築城される。</li> <li>・柏崎館。</li> <li>・慶長13年に当麻館より移る。</li> <li>・近世の館、江戸時代を通して、要書屋敷として書き上げられ、本丸には南部氏の重臣桜庭氏の御預館二ノ丸には毛馬内通代官所が置かれ、幕末まで存続した。</li> </ul>
47	鹿角市十和田大湯字和町					<ul style="list-style-type: none"> <li>・大湯館とあり、慶長の頃築城されたと言われる。</li> <li>・鹿倉館の東方にあたる。</li> <li>・江戸時代を通して主に北氏の館として幕末まで存続した。</li> </ul>
48	鹿角市八幡平字下モ館					<ul style="list-style-type: none"> <li>・由来等を伝える記録は皆無であるが、現地調査によって確認する。</li> <li>・館の西裾を田街道が通っている。</li> <li>・大里館との関係が考えられる。</li> </ul>
49	鹿角市花輪字孫右衛門館					<ul style="list-style-type: none"> <li>・由来等を伝える記録は皆無である。</li> <li>・臥牛館の南側に富士川を挟んで対峙している。</li> <li>・臥牛館との関係が考えるが、周辺には館型地形が多く、詳細については不明である。</li> </ul>
50	鹿角市花輪字妻ノ神					<ul style="list-style-type: none"> <li>・乳牛館のすぐ東側に近接しており乳牛館との関係が考えられる。</li> </ul>
51	鹿角市花輪字西町					<ul style="list-style-type: none"> <li>・柴内館の西方一柴内氏の菩提寺万松寺の背後にある「寺ノ林」と通称される南北に細長い独立丘陵にある。</li> <li>・柴内館、もしくは乳牛館との関係が考えられるが、詳細については不明である。</li> </ul>

註1 第18表は、「鹿角郡由来記」（『南部叢書』第1冊・天保3年（1832）写本、鹿角市立花輪図書館蔵・文化13年（1816）写本コピー）・「鹿角由来集」（延享5年（1748）写本・米田勇氏蔵）・『中世城館遺跡調査票』・『同（案）』（報告者安村二郎・片岡正一・安倍良行・板橋範芳・渡部紘一、秋田県教育委員会蔵、1978～79年調査）をもとに、作成した。

註2 鹿角4氏とは、中世鹿角に於いて威を振った武士団一安保・秋元・成田・奈良の4氏を言う。4氏は、関東武士団の庶流・地頭代が、出自と考えられているが、詳細は不明である。安保氏は、本姓丹治氏または在原氏を称し、武蔵国賀美郡安保郷を本拠とする武蔵七党の丹党に属する安保氏の流れを汲むと言われる。しかし、武蔵国の安保氏と鹿角の安保氏が、どのような関係にあるか、それを伝える史料は、残っていない。ただ、安保信員の流れを汲む、安保行員・基員父子が、鹿角に所領を有していたことが、史料に残っている。安保氏は、南部氏とは敵対関係にあったらしく、常に反南部努力の中にその名がみられ、天正19年（1591）の九戸の乱で、没落してしまう。「鹿角郡由来記」では、「阿保氏」とあるが、鹿角地方では、安保であり、その呼び方は、「あんぼ」である。秋元氏は、天文15年（1546、一説には天文5年）に成ったと言われる「津軽郡中名字」に、「公任卿（藤原公任？）の末孫也」と記されているのみで、詳細は、不明である。成田氏についても、その出自等は、不明である。建武年間に、成田頼時が鹿角郡国代として大里桶に拠っていたという記録と、天正19年（1591）の九戸の乱の時、成

田氏の一族である長内氏の名が、九戸方の中にみられるのみで、他の成田氏の動静等については、不明である。奈良氏についても、その出自等の詳しいことは、不明であるが、永祿年間以降の動静について、当時の記録の中に、大湯氏・小枝指氏・小平氏等の名をみることができる。また、青森の大湯家に伝わるころによれば、大湯氏は、天正19年（1591）まで鹿角に居住しており、奈良氏を称していたとのこと。鹿角4氏について、その出自等に不明な点が多いとしたが、天正19年（1591）までに、その多くが没落・離散したと、鹿角周辺（正確には、旧南部領内）の鹿角4氏の子孫と称する家の系図には、天正19年（1591）以前の先祖のことについて記されたものは皆無であること等が、その理由として、考えられる。

註3 鹿角4氏系の館主から、南部氏系の館主への変遷。詳しくは、第20表参照。

註4 「安保信阿所領讓状案」・「成田基員所領讓状案」（「八坂神社文書」下・1887号・1888号）。

註5 註4に同じ。

註6 伊藤祐清「祐清私記一内山助右衛門奥北の館破却之事一」（『南部叢書』第3冊）。

註7 註6に同じ。

註8 註6に同じ。

註9 梅内祐訓「聞老遺事」（『南部叢書』）、「祐清私記」。

註10 「鹿角由来集」（延享5年（1748）写本）・「聞老遺事」。

註11 註6に同じ。

註12 「曾我貞光申状」（「遠野南部文書」・『岩手県中世文書』上巻・172号）。何故、安保氏の館に、成田頼時が拠っていたかは、不明である。

註13 註10に同じ。

註14 註9に同じ。

註15 註6に同じ。

註16 沼館愛三『津軽諸城の研究』（草稿）・（みちのく双書 第34集）・青森県文化財保護協会・1977年、P 281。

註17 註6に同じ。

註18 沼館愛三『南部諸城の研究』（草稿）・（みちのく双書 第33集）・青森県文化財保護協会・1978年、P 206～207。

註19 沼館愛三『南部諸城の研究』、P 206～207

註20 内藤調一『鹿角志』。

註21 註9に同じ。

註22 註9に同じ。

註23 江上波夫・関野雄・桜井清彦『館址一秋田県鹿角郡柴平村小枝指七館遺跡一』・P 7～51・東京大学出版会・1958年

註24 註10に同じ。

註25 『中世城館遺跡調査票』・『同（案）』・「芦名沢館」。

註26 註18に同じ。

第19表 4氏別の館・所領の分類 (第18表に準拠)

名 字	館	所 領
安 保	大里 (惣領) ・ 田山 ・ 三ヶ田 ・ 夏井 ・ 石鳥谷 ・ 松館 ・ 尾去 ・ 玉内 ・ 花輪 ・ 柴内 ・ 乳牛 ・ 中柴内 ・ 折加内	
秋 元	高瀬 (惣領) ・ 久保田 ・ 用ノ目 ・ 花軒田 ・ 松山 ・ 川原館) ・ 長牛 ・ 小豆沢 ・ 黒土 ・ 高屋 ・ 小坂 ・ 濁川 ・ 八幡館 (砂子沢) ・ 高梨	
成 田	毛馬内 (惣領) ・ 佐比内 ・ 湯瀬 ・ 長嶺 ・ 谷内 ・ 長内 ・ 高市 ・ 神田 ・ 大地 ・ 荒川 ・ 高清水 ・ 関神 (上)	
奈 良	大湯 (惣領) ・ 新斗米 ・ 小枝指 ・ 小平 ・ 瀬田石 ・ 芦名沢 ・ 草木 (寺坂 ・ 室田 ・ 丸館)	

第20表 「鹿角郡由来記」・「鹿角由来集」にみる館主の変遷 (鹿角4氏→南部氏系)  
(註1)

No.	旧 館 主	新 館 主	入 部 時 期	そ の 他 ・ 備 考
1	安 保	畠 山 三 郎	不 明	・ 二戸郡浄法寺の畠山一族と言われている。「鹿角由来集」には畑山三郎とある。 ・ 南部系の館主として入部したのかは不明である (註2)
3	成 田	湯瀬 (安倍) 刑部	永祿12年(1569)以後	安倍刑部が館主とあるが、実はその弟安倍(湯瀬)宮内が館主(註3)。
5	安 保	大光寺左衛門佐正親	天正18年(1590)頃	館主ではないが、花輪へ入部した時に知行。
6	成 田	一戸弾正左衛門	永祿年間 (1558~70) 以前	一戸南部氏、永祿年間の合戦の時、館主として一戸弾正左衛門の名がみえる。
7	秋 元	一戸撰津守義実	永祿年間以前	一戸南部氏、一戸義実は、長牛氏の祖であって館主ではない。永祿年間の合戦時の館主は長牛縫殿助友義(註4)。
8	安 保	大 光 寺 正 親	天正18年頃	館主ではないが、花輪へ入部した時に知行。
11	安 保	南部九郎正友 大 光 寺 正 親	永祿年間以前 天正18年頃	一戸南部氏(?), 鹿角の旗頭、永祿年間の合戦時に館主として名がみえる。 大光寺正親は館主ではないが、花輪へ入部した時に知行。
13	安 保	大 光 寺 正 親	天正18年頃	館主ではないが、花輪へ入部した時に知行。
17	安 保	大 光 寺 正 親	天正18年頃	臥牛館に拠ったとあるが花輪館(現花輪小)に拠ったとも言われている。入部時期について「鹿角郡由来記」には天正8年、「鹿角由来集」には天正9年とそれぞれ記されているが、当時の大光寺正親の動静より、天正18年頃が適当と思われる。
20	秋 元	佐 藤 近 江	天正10年(1582)頃	
27	奈 良	大 湯 五 兵 衛	天正19年(1591)以降	大湯五兵衛は、毛馬内靱負の従弟。小坂も領知。
31	成 田	武田靱負秀範(信継)	天文5年(1536) (一説には天文17年)	三戸南部氏22代政康5男、毛馬内氏祖(註5)
32	奈 良	毛馬内靱負秀範 毛馬内大学 月 館 隠 岐	天文5年(天文17年) 不 明 不 明	三者は、館主ではなく領主。月館隠岐は毛馬内大学の家来と言われる。
42	秋 元	奥 四 郎 左 衛 門 (高梨宮内)	明応元年(1492)3月 (ママ) (註6)	・ 文明年中(1469~87)に、糠部郡一戸(一説に三戸)より来て、初め川原館村に居ったと言われる。 ・ 高梨土佐の系統が絶えたため、高瀬周防の命により高梨館に拠ったとある。



註1 第18表準拠。主に鹿角4氏系の館主から、南部系の館主への変遷を中心として。

註2 「浄法寺畠山系図」

註3 「寺社由緒世代書上之事」・「大日堂故実傳記」

註4 「長牛系図」・「一戸南部系図」

註5 「毛馬内系図」・「三戸南部系図」

註6 明応は7月19日改元。

第21表 「鹿角郡由来記」・「鹿角由来集」と「曾我貞光申状」における館主の相違 (註1)

No.	「鹿角郡由来記」・「鹿角由来集」	「曾我貞光申状」	そ の 他 ・ 備 考
15	大里上総（安保氏惣領）	成田小二郎左衛門尉頼時 （鹿角郡国代）	「曾我貞光申状」には大里楯とある。「八戸南部家系図、師行の条」(註4)には大里壘とあり、成田頼時が拠っていたとある。

註1 「遠野南部文書」(岩手史学会編『岩手県中世文書』上巻 第172号、岩手県史学委員会

1960年3月

註2 鷲尾順敬編『南部家文書』吉野朝史蹟調査会・1939年。

第22表 「鹿角郡由来記」・「鹿角由来集」と「津軽郡中名字」との相違する事項、一致する事項 (註1)

No.	館（村）名		館（領）主	
	「鹿角郡由来記」・「鹿角由来集」	「津軽郡中名字」	「鹿角郡由来記」・「鹿角由来集」	「津軽郡中名字」

○館（村）名が同音異字で館主の相違するもの

5	三ヶ田	三介田	安保	成田
7	長牛	名越	秋元	成田
13	尾去	雄猿	安保	成田
17	花輪	鼻和	安保	阿部

○館主の相違するもの

8	夏井	夏井	安保	成田
9	長内	長内	成田	秋元
15	大里	大里	安保	阿部
21	柴内	柴内	安保	阿部
34	小坂	小坂	秋元	奈良

○館（村）名が同音異字であるが、館主の一致するもの

6	谷内	田内	成田	成田
28	小枝指	小江刺	奈良	奈良

○一致するもの

19	高 瀬	高 瀬 (タカセ)	秋 元	秋 元
27	大 湯	大 湯	奈 良	奈 良
29	小 平	小 平	奈 良	奈 良

○そ の 他

	な し	小 猿 辺	な し	秋 元
備 考	・阿部氏については、丹治氏とある。 ・秋元氏は「公任卿の末孫也」とある。 ・小猿辺は、小坂町の尾樽部（秋元氏の小坂館No.34）ではないかと思われる。			

註1 「津軽郡中名字」は青森県編纂（復刻）『青森県史』第1巻P 133～137・歴史図書社（1926年5月）1971年5月、P 136、『青森県叢書』第6編P 392～397、青森県叢書刊行会、19年、P 396～397、に記載されている。「津軽郡中名字」の成立は、文中に天文15年(1546)とあるが、『青森県史』では、天文5年(1536)としている。

(註1)  
第23表 鹿角地方の板碑

	西 暦 年 月 日	所 在 地	主 尊 (種 子)	寸法(高さcm×幅cm×厚さcm) ・材質等	銘文・特徴・その他
長牛 正安元年銘板碑	1299年 正安元年 8月11日	鹿角市八幡平宇下平24番地(現在地) 鹿角市八幡平宇林の外27番地(旧地, 長牛館内部)	金剛界大日如来 (バン)	76×34×19 凝灰岩質の青灰色自然石	彫り浅く, 判読不能。 県内最古の板碑。 幽儀平道園
小豆沢大日堂 正安二年銘板碑	1300年 正安2年 7月7日	鹿角市八幡平宇堂ノ上大日靈貴神社(大日堂)境内	正面 阿弥陀如来 (キリーク) 右 觀世音菩薩 (サ) 左 大勢至菩薩 (サク)	地上高80cmの不整5角柱状 輝石安山岩質自然石 碑面幅・正面22cm, 右20cm 左25cm	万延元年(1860)7月以降, 所在地が変わる。 藤原朝臣秀□ 同 秀有
谷内 正安二年銘板碑	1300年 正安2年 閏7月□日	鹿角市八幡平谷内天照皇御祖神社(神明社)境内	判 読 不 能	174×43～55×20 石英安山岩	涅槃・経文四句刻文 月輪径33cm
谷内 嘉元三年銘板碑 (註2)	1305年 嘉元3年 7月9日	鹿角市八幡平谷内天照皇御祖神社境内	金剛界大日如来 (バン)	116×41 輝石安山岩質柱状節理片	金剛般若波羅蜜多心経より四句抄刻, 径24cmの月輪の中に種子「バン」を刻む。
谷内 正和二年銘板碑	1313年 正和2年 5月30日	鹿角市八幡平谷内天照皇御祖神社境内	阿 弥 陀 如 来 (キリーク)	83×25 緑泥片岩	上部が三角形で, 直下に2条の切れ込みがある。
谷内 無紀年銘板碑	紀年銘なし	鹿角市八幡平谷内天照皇御祖神社境内	大 勢 至 菩 薩 (サク)	68×21 三角形断面で柱状の自然石	径16cmの月輪内に種子「サク」とのみ刻まれている。

田山 延文二年銘板碑	1357年 延文2年 5月2日	岩手県二戸郡安代町田山地蔵寺境内 万延元年(1860)10月に田山小山殿坂の山腹より移設		137×42.5×23~27	2重の線刻周縁内に次の刻文「南無阿弥陀佛具阿弥陀佛正覚位」。旧地は、田山古館(田山館の東方)の南側にあたる。
谷内 弥陀三尊磨崖碑	鎌倉末期以前 (推定) 月日不明	鹿角市八幡平谷内天照皇御祖神社境内	正面 阿弥陀如来 右 観世音菩薩 (サ) 左 大勢至菩薩 (サク)	600×700(露頭部) 石英安山岩	中央に阿弥陀如来の坐像左右に種子。 月輪径・中央約96.5cm、左右約45cm。

註1. 第23表は、磯村朝次郎「鹿角地方における中世石造遺物」(『秋田県立博物館研究報告』第3号 P15~24、秋田県立博物館・1978年3月)・安村二郎「八幡平地区石造遺物に関する二、三の考察」(『上津野』第2号 P19~27、鹿角市文化財保護協会、1977年3月)をもとに作成した。

註2. 「八幡平地区石造遺物に関する二、三の考察」では、その造立年を正応3年(1290)としている。

第24表 年表

西 暦	年 号	記 事
1180	治承4	8月 源頼朝挙兵。
1185	文治元	11月 守護・地頭を設置する。
1189	文治5	9月 平泉藤原氏滅亡。 奥羽合戦の勲功恩賞行われる。
1190	文治6	2月 大河兼任の乱。
1192	建久3	7月 頼朝、征夷大將軍に任ぜられる。
1213	建保元	5月 和田合戦。
1221	承久3	5月 承久の乱。
1222	貞応元	4月 守護・地頭制を強化する。
1247	宝治元	6月 宝治合戦。
1274	文永11	10月 文永の役。
1281	弘安4	5月 弘安の役。
1285	弘安8	11月 霜月騒動。
1299	正安元	8月 長牛正安元年銘板碑造立される。
1300	正安2	7月 小豆沢正安二年銘板碑造立される。 閏7月 谷内正安二年銘板碑造立される。
1305	嘉元3	7月 谷内嘉元三年銘板碑造立される。
1313	正和2	5月 谷内正和二年銘板碑造立される。

西 曆	年 号	記 事
1318	文保 2	12月 安修行員（信阿）、柴内村の所預を給与される（鹿角郡の初見）。
1320	元応 2	8月 蝦夷の乱が起こる（～嘉暦3年（1328））。
1325	正中 2	12月 安修行員（信阿）、鹿角郡田山郷他の所領を、嫡子（成田）基員に譲る。 （嘉暦3年（1328）8月に安堵される）。
1333	元弘 3 正慶 2	5月 鎌倉幕府滅亡。幕府滅亡以後、奥羽各地で、北条氏与党の抵抗続く。 8月 北島顕家・陸奥守、葉室光顕・出羽守兼秋田城介に、それぞれ補任される。
1334	建武元	1月 陸奥国府の体制整う。 3月 陸奥国府、南部師行に鹿角郡の闕所の充行の沙汰を行わせる。
1335	建武 2	12月 北島顕家、第1次長征に出陣する。
1336	延元元 建武 3	2月 足利尊氏、九州に走る。 8月 鹿角郡国代成田小二郎左衛門尉頼時（宮方）の抛る大里楯が、津軽の曾我・比内の浅利両氏等の連合軍（武家方）に攻撃される（鹿角地方の館の初見）。 11月 足利尊氏、室町幕府を開く。
1337	延元 2 建武 4	7月 曾我・浅利両氏等の連合軍によって、二藤次楯・當楯・大豆田の三ヶ所落城する（11日、所在地不明）。 大里楯攻撃される（同14日）。 □□□尾楯攻撃される（同30日、名称・所在地不明）。
1338	延元 3 暦応元	8月 北島顕家、第2次長征に出陣する。 5月 北島顕家、南部師行、和泉国で敗死する。奥州軍、壊滅する。
1339	延元 4 暦応 2	9月 成田基員、鹿角郡田山郷・大里太郎四郎在家他の所領を嫡子くす王に譲る。
1357	正平12 延文 2	5月 田山延文二年銘板碑造立される。
1392	元中 9 明德 3	10月 南北朝合体。
1403	応永10	8月 明船、永楽銭をもたらす。
1456	康正 2	8月 （桧山）安東盛季、鹿角へ侵攻する。
1460	長祿 4	安東盛季、鹿角へ侵攻し、鹿角の大半を勢力下に収める。 8月 安東師季（盛季？）、小豆沢大日堂に鐘楼・梵鐘を寄進する。
1467	応仁元	1月 応仁の乱（～77）。
1486	文明18	4月 南部政盛、小豆沢大日堂を修理し、人心収らんに努める（異説あり）。
1518	永正15	比内の浅利則頼、独鈷（十狐）城を築く。則頼、鹿角へ侵攻し、鹿角南部を領有する。

西 曆	年 号	記 事
		安東氏、浅利氏、しばしば交戦する。
1522	大永2	南部氏、浅利氏と戦い、鹿角支配権を回復する。
1536	天文5	秋田勢の備えとして、武田朝負秀範（三戸南部氏22代政康5男、毛馬内氏祖）、毛馬内に入部する（一説に、天文17年（1548））。
	天文末	安東氏、しばしば鹿角へ侵攻する。
1558	永祿元	6月 安東氏、浅利氏を介して、鹿角の諸士と比内猿田川近く中ノ平にて会見する。 安東方 — 名代大高筑前等四人 鹿角侍 — 大里豊前、花輪中務、柴内弥治郎、大湯四郎左衛門、小枝指小次郎、小平彦四郎
1562	永祿5	8月 安東愛季、浅利則祐を扇田長岡城に攻め、則祐敗死する。安東氏、比内を従属化させる。
1565	永祿8	7月 鹿角の諸士、安東方と南部方に分れる。 安東方 — 大里備中、花輪某、柴内相模守、安保（尾去）左衛門大夫、小平某、大湯某 南部方 — 長牛友義、石鳥谷（南部）正友、谷内弾正、毛馬内秀範、小枝指左馬助
1566	永祿9	9月 安東愛季、由理七騎・松前の蠣崎氏・阿仁の神成氏・比内勢・鹿角内応の諸氏と共に、長牛友義・石鳥谷正友等の拠る長牛城（館）・石鳥谷城（館）を攻める（石鳥谷城は落城する）。
1567	永祿10	2月 長牛籠城の南部方、利あらずして、長牛一族等多く討ち死にする。 長牛籠城軍、援軍を得て一時勢力を回復する。 10月 安東氏の臣大高主馬大将となり、秋田勢・鹿角内応の諸士を率いて、谷内城（館）・長牛城（館）を攻撃し、落城させる。 安東愛季、鹿角郡を領有する。
1569	永祿12	3月 南部信直（来満街道）・長牛友義（先陣）・九戸政実（鹿角街道・七時兩道）率いる南部軍、鹿角に於ける安東氏勢力を一掃する。 この時、小豆沢大日堂別当安倍刑部・弟安倍宮内、信直軍の先導を務める
1582	天正10	1月 田子信直、三戸南部家の家督を相続する。
1586	天正14	夏 南部信直、前田利家に使者を送る。
1588	天正16	大浦（津軽）為信、津軽地方を統一する。 南部氏、比内大館城を落とし、比内を領有する。南部軍に大湯四郎左衛門・

西 曆	年 号	記 事
1590	天正18	<p>湯瀬宮内等の鹿角の諸士も従軍する。</p> <p>4月 安東氏、大館城を回復する。</p> <p>6月 奥羽の大名、関東（小田原）へ参陣する。</p> <p>7月 奥羽仕置はじまる。</p> <p>大光寺左衛門佐正親、花輪へ入部し、尾去・石鳥谷・三ヶ田・夏井も知行する。</p>
1591	天正19	<p>1月 九戸一揆起こる（九戸政実の乱、～9月）。</p> <p>鹿角郡内では、大里修理親基（安保氏惣領）・大湯四郎左衛門昌次（奈良氏惣領）が、九戸方の大将となる。鹿角の諸士（鹿角四氏系）の多くも九戸方となる（円子一花輪氏一金五郎・同弟惣五郎・夏井久善・長内弥左衛門昌教・長内伝右衛門・長田庄兵衛等）。</p> <p>8月 九戸方の大湯四郎左衛門の拠る鹿倉城（館）が、南部方の大光寺正親の攻撃を受け、落城する（鹿角四十二館を舞台にした最後の合戦）。</p> <p>9月 九戸政実の乱終わる。九戸政実をはじめとし、大里親基・大湯昌次等が、誅される。多数の九戸方の落人が、鹿角・秋田・津軽方面に、潜伏する。</p> <p>乱後の処置として、南部領内の諸城破却が、行われる。鹿角郡内では、湯瀬・大里・谷内・長嶺・小豆沢・黒土の六館が、破却される。</p> <p>南部氏の鹿角支配権が、確定する。</p>

註 年表は、下記の文献・史料を参考に、作成する。

高柳光寿・竹内理三編、角川第二版『日本史辞典』付録年表・角川書店・1975年4月。

小林清治・大石直正編『中世奥羽の世界』附録奥羽略年表・東京大学出版会・1978年。

『秋田県史』第7巻・年表・秋田県公報協会・1966年。

『岩手県史』第12巻・年表・（1966年11月発行）・名著出版・1972年12月刊行。

鹿角のあゆみ編集委員会編『鹿角のあゆみ』年表・「鹿角のあゆみ」刊行会・1969年。

菊地悟郎編『南部史要』・九阜堂・1911年8月。

梅内祐訓「聞老遺事」（文政5年、『南部叢書』第2冊）。

伊藤祐清「祐清私記」（『南部叢書』第3冊）。

郷土史学習会編『鹿角由来集』（延享5年写本）・鹿角市立花輪図書館・1977年。

内藤十湾『鹿角志』（1907年3月）・明治文献・1975年。

「文保二年関東充行下知状」（「松本市安保文書」）。

「（正中二年）安保信阿所領讓状案」（「八坂神社文書」下・1887号）。

「(曆応二年)成田基員所領讓状案」(「八坂神社文書」下・1888号)。

「(建武元年)北畠顯家国宣」(「遠野南部文書」・『岩手県中世文書』上卷・113号)。

「(建武四年)曾我貞光申状」(「遠野南部文書」・『岩手県中世文書』上卷・172号)。

「寺社由緒世代書上之事」(延年2年)・「大日堂故実傳記」・(『大日堂舞樂』収載)。

# 上山田遺跡

遺跡番号	No. 3
所在地	鹿角市八幡平字上山田1番地2号他
調査期間	昭和54年9月5日～9月14日 11月5日～11月12日
発掘調査予定面積	3,636 m <sup>2</sup>
発掘調査面積	680 m <sup>2</sup>



## 1. 遺跡の概観

遺跡は、秋田県鹿角市八幡平字上山田1番地2他に所在する。奥羽山脈中の四角岳に源を發し西流する米代川は、湯瀬温泉を過ぎると風光明媚な溪谷を縫う。遺跡はこの溪谷左岸、すなわち国鉄湯瀬駅北西2km、米代川に沿って走る国道282号線の南側の八森(904m)の北麓にある。遺跡は北側と中央部で標高200m、南側で203mの緩傾斜の地形を呈する。国道282号線のすぐ北側は比高50mに及ぶ断崖で、はるか下を米代川が南流している。

遺跡は、かつて畑地であり、その後水田造成のためブルドーザーで削平されたが、調査時は背丈をこす萱や柳などが繁茂する荒地であった。

## 2. 調査の方法

遺跡は、東北縦貫自動車道笹の渡トンネルの北口に当たり、ここに設置されている上り車線を中心杭STA62+60とSTA62+80を結ぶ直線を基準線としてこれに直交する線を設け、5m×5mのグリッドを設定した。東西軸に算用数字で東から2～22、南北軸にアルファベットで北からB～Pを付し、グリッドの呼称はこの組合せによる。

## 3. 調査経過

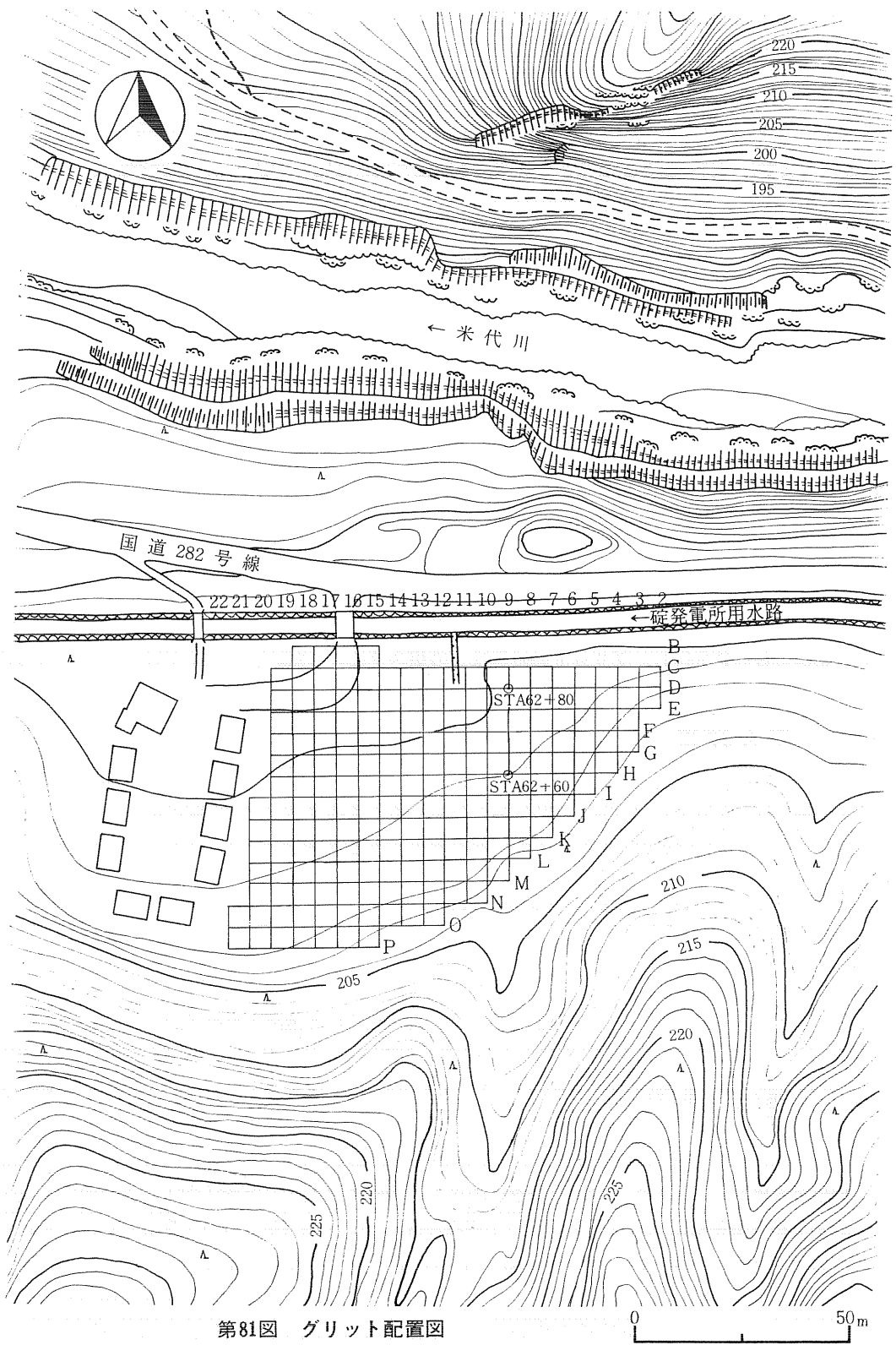
発掘調査は、9月5日～14日と11月5日～12日の前・後期2回にわたって実施した。

9月5日～14日の前期調査は、草木の刈り払い、排水溝づくりとグリッド設定をし、その後試掘を行った。その結果、遺跡はかなりの範囲で攪乱されていることが判明した。

11月5日～12日の後期調査においては、前期調査結果を考慮し、比較的攪乱をうけていないと思われる部分をグリッド発掘した。しかし、遺構は検出されず、土器片が攪乱層よりわずかに出土したにとどまった。以上の経過をもって、11月12日に本遺跡の発掘調査を終了した。

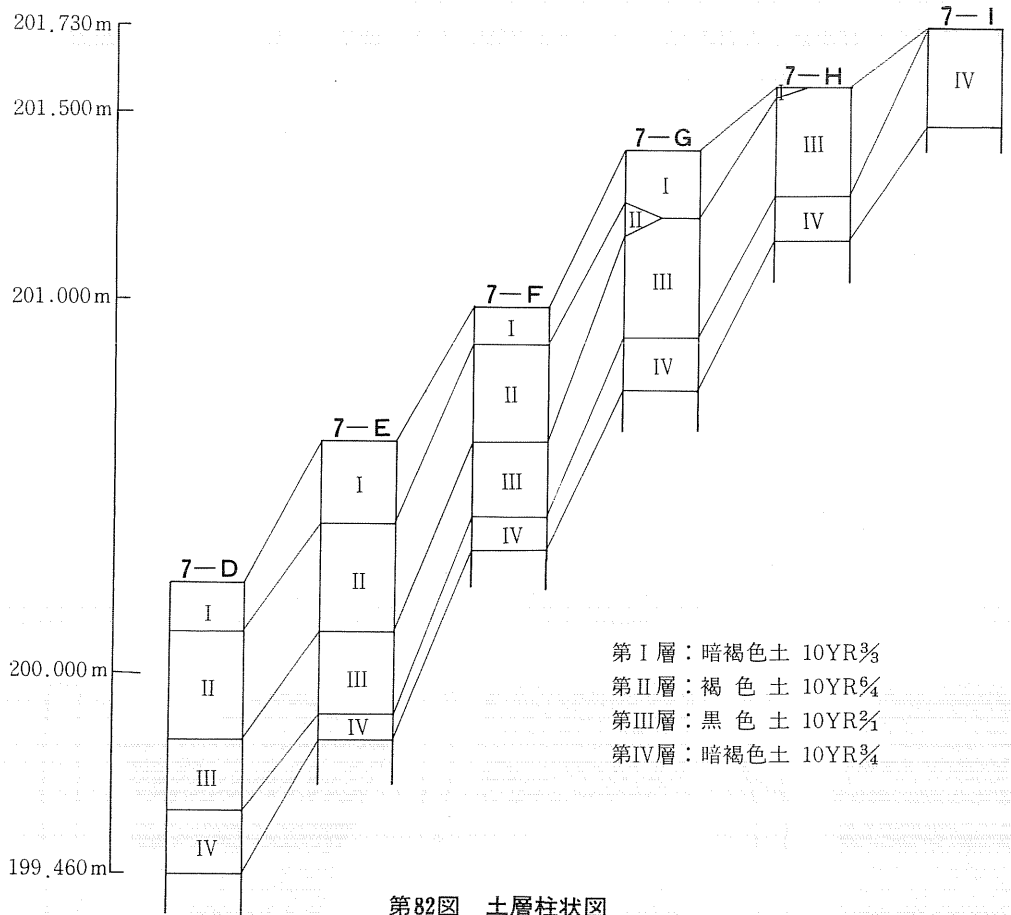
## 4. 遺跡の層位

遺跡の層位は、7ラインに入れた南北トレンチの東壁セクションを基本層としてIV層に分けた。第I層は暗褐色土(3～22cm)で、小砂礫が混入し、草木の根によって攪乱されている。第II層は褐色土(9～29cm)で、小砂礫と黄褐色粘土が入り組んだ攪乱層である。第III層は黒褐色土(20～32cm)で、小砂礫と褐色砂質土が混入する攪乱層である。第IV層は暗褐色土



第81図 グリッド配置図

(7~26cm)で、小礫を含む層である。この下は、黄褐色土で礫を多く含む層の地山である。



第82図 土層柱状図

## 5. 遺構と遺物

### (1) 遺構

遺構は検出されなかった。

### (2) 遺物

遺物は7-Gグリットの第III層上面から出土した7片の縄文土器のみで、文様により2類に分類した。

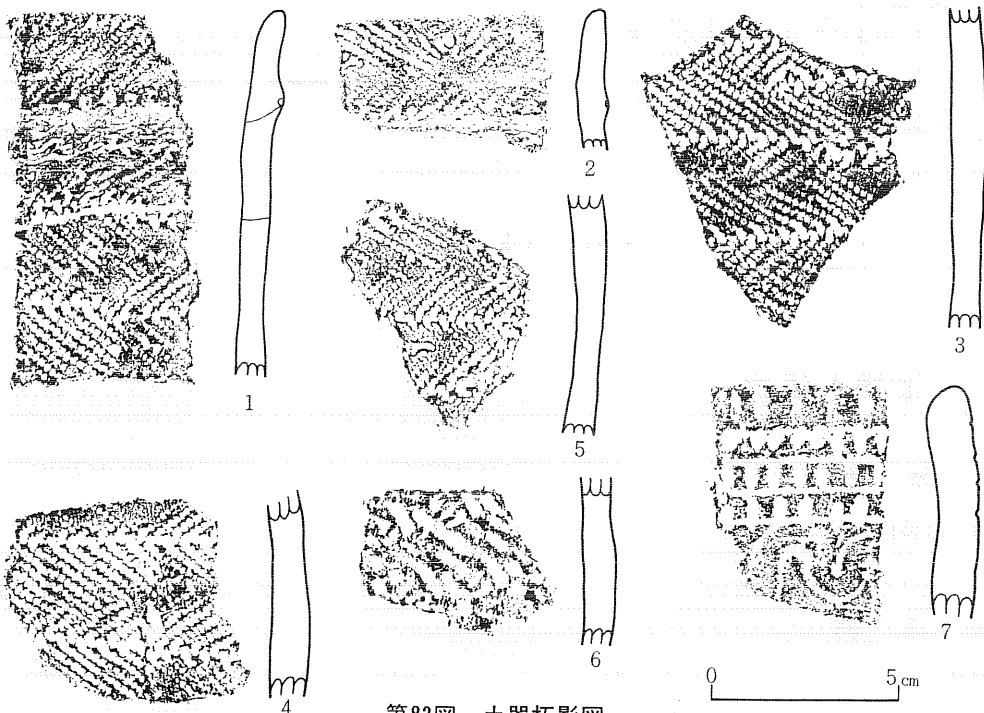
第1類土器 (第83図1~6 図版56)

羽状縄文が施文された土器である。1~5は同一個体であり、器形は口縁がいくぶん外反する円筒形を呈するものと思われる。文様は口縁部に幅2cmでLRとRLの原体が横位回転施文され、直下には刺突による列点がめぐり、その下部に3条の綾絡文が施されている。胴部にはLRとRLの結束の羽状縄文が施文されている。色調はにぶい橙色(7.5 YR 6/4)、焼成は良好、胎土には石英・雲母が含まれている。6はRLの原体による縄文が施文されているが外面の磨滅が著しく、又結束部以下が明らかでない。色調はにぶい橙色(7.5 YR 7/4)、焼成不良、胎土には石英・長石が含まれている。

第2類土器 (第83図7 図版56)

刻目と沈線が施文された土器である。やや内湾する口縁で、文様は口唇部と4条の平行沈線内に刻目が施され、直下には波状の沈線がある。色調はにぶい赤褐色(5 YR 4/4)、焼成は良好で、胎土には石英・長石・雲母が含まれている。

以上2分類したが、第1類土器は前期円筒下層d式のものと思われ、第2類土器は第1類土器とは異なるものであるが、第1類土器と伴出したので同時期のものと考えられる。



第83図 土器拓影図

## 6. まとめ

発掘調査の結果、遺跡はほぼ全域にわたって攪乱をうけていた。これは水田造成の際の削平のためと思われる。このためか遺構は検出されず、攪乱層から若干土器片が出土しただけであった。したがって、遺跡の性格を十分に把握することはできなかったが、出土土器片から、遺跡は縄文時代前期末葉のものと考えられる。

### 主要参考文献

- 山内清男編「縄文土器」『日本原始美術Ⅰ』講談社 1964年  
奈良修介・豊島 昂『秋田県の考古学』吉川弘文館 1968年  
江坂輝弥編『石神遺跡』ニューサイエンス社 1970年  
村越 潔『円筒土器文化』有山閣 1974年  
青森県教育委員会『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書  
第25集 1974年  
安保 彰『小坂のあけぼの 縄文期・弥生期』1975年

# 大地平遺跡

遺跡番号	No. 4
所在地	鹿角市八幡平字大地平9番地1号他
調査期間	昭和54年7月2日～8月30日
発掘調査予定面積	5,700 m <sup>2</sup>
発掘調査面積	5,525 m <sup>2</sup>

## 1. 遺跡の概観

大地平(おおちたい)遺跡は鹿角市八幡平字大地平9番地1号他に所在し、国鉄花輪線八幡平駅から南東方向の岩手県側へ約1.3kmの所にある。すなわち、鹿角市役所八幡平支所付近から湯瀬に至る旧街道の隘路を、眼下に米代川の急流を見ながら進むと、約1kmでグラウンドのある平坦地に出るが、この付近が大地平遺跡である。現状は山林で、標高205m前後、急峻な山々に囲まれており、遺跡地の南側及び西側の約40m下に米代川が曲折して流下し、東側は1,150mの五ノ宮獄へと連なる急斜面である。

## 2. 調査の方法

東北縦貫自動車道建設予定地道路中心杭S T A 64+00と、S T A 64+40を結ぶ直線及びその延長線をグリッドの基線とし、それに直交するラインを設定して、5m×5mのグリッドを組んだ。グリッドの呼称は東西軸をアラビア数字で西から1～29まで、南北軸はアルファベットでA～Iまでとし、両者の組合わせで呼んだ。後に西北側斜面を調査する際に東西軸に0～3を追加設定した。主として発掘区西側から調査を進め、土層堆積状態観察のため、6・12・18・24ラインとFラインを通して土層断面図を作成した。

## 3. 調査経過

遺跡の現状は山林であるため、7月2日から立木抜根の後始末を行い、同月11日からグリッドを設定、同月16日より調査を開始した。遺物の出土は少く、遺構も確認されないまま5,525㎡を調査し、8月30日に調査を終了した。

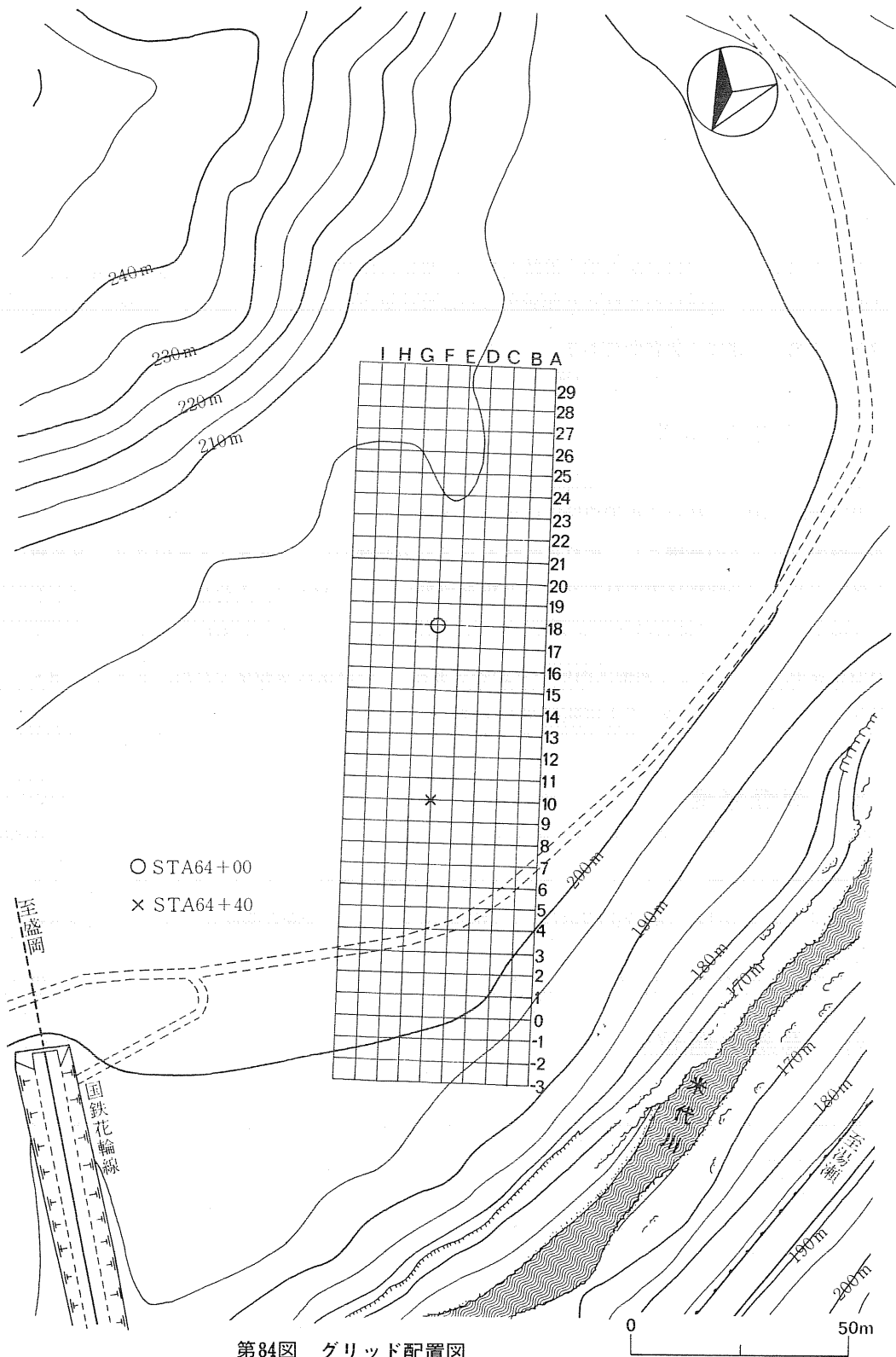
## 4. 遺跡の層位

本遺跡の土層は調査区全域に亘り、至って単純な様相を示し、上層から次の如くに分層された。(第85図)

I層：黒色土。表土で植物根が多く小礫が含まれる。一部に近世の攪乱が見られる。

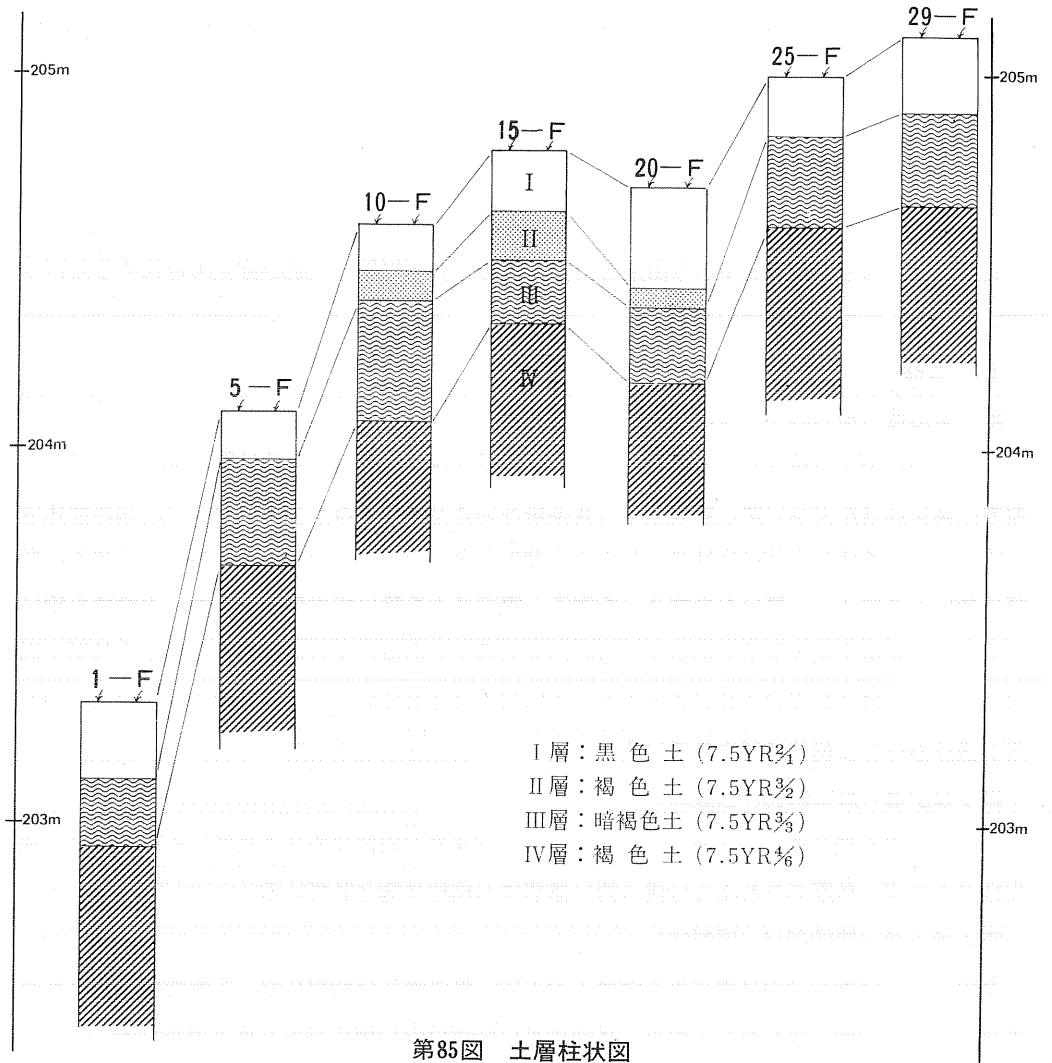
II層：褐色土。I・III層間に部分的に挟在し、発掘区域内に点状に分布する。浮石を多量に含んでいる。

III層：暗褐色土。遺跡地に普遍的に存在しており、若干の厚みの増減があるが、厚い所で



第84図 グリッド配置図





約40cmを測る。遺物包含層で、この層の上部から縄文時代晩期の土器及び弥生式土器を出土する。

IV層：褐色土で、拳大の礫を多量に含む地山である。

## 5. 遺構と遺物

### 〔1〕 遺構

発掘区域内には明確な遺構は検出されなかった。ただ、第III層中に第II層の浮石が多量に流

入し、かつ地山の盛り上がる凹地が幾つか見られたが、それらは自然の凹地あるいは風倒木痕と判断されたので、それらに関する記録は行わなかった。

## 〔2〕 遺物

遺物はほとんどが第Ⅲ層中より出土した資料である。時代的には縄文・弥生両時代にまたがっているが、その量は極めて少ない。

### I 土器

#### 第1類土器（第86図1～12、図版59）

内外両面に縄文が施されたものを一括した。口縁部は1片だけで、他は胴部破片であるため、器形の概要は詳かでないが、おおよそ口縁部が外反ぎみの鉢であろうと思われる。底部形状は不明である。焼成は全体に良好で、胎土に小礫を含み、色調は褐色ないし灰褐色を呈する。器厚は薄いもので4mm、厚いもので9mmを測る。縄文は1を除いて内外面とも同一の原体を用いており、LR縄文が大部分であるが、11のみRL縄文である。1の口縁部は原体が内外面で異なり、口唇部には外面の原体が外面と同一方向に施文されている。4、6の内面には浅い条痕文が横位あるいは斜位に付されている。

#### 第2類土器（第86図13、図版59）

外面には縄文施文後に、断面が丸みのある平行沈線文が斜位に施文されている。内面には縄文は見られず、外面のそれよりは浅く鋭い条痕文が横位に施されている。

#### 第3類土器（第87図14、図版60）

沈線による区画文の中に縄文を充填するもので、無文部には沈線に沿って粗雑な列点文が施されている。内面に段を有しており、外傾する口縁部付近の破片であろうと思われる。

#### 第4類土器（第87図15、図版60）

外傾する口縁部付近の破片で、浅鉢であろうと思われる。口縁の無文部には横位にミガキがなされ、縄文施文部には横走る平行沈線と、これを上下に連結する2条の直線と弧線が見られる。

#### 第5類土器（第89図47、図版61）

口縁部がほぼ直立する深鉢である。口径約290mmと推定され、右下りの長い入組文が横位に展開する。この入組文の上下とその間は無文研磨帯となって、入組文と共に口縁部文様帯を構成している。入組文の結節部には小さな瘤が貼付されている。口唇部は平坦である。

#### 第6類土器（第87図16～21、第89図48、図版60・61）

口縁部文様帯に入組文、三叉文の施されるものである。16・19はそれらが明確でないが、他

の類例からこの類に加えた。16は幾分胴上部の外傾する深鉢であろうか。口縁部上部から斜縄文を施し、横走する平行沈線と磨消手法を用いて無文帯を作出している。口縁部は山形状小突起を有するものと思われ、上部ほど肥厚している。48は口径が約205mmほどに推定される深鉢である。47の様な入組文がやや変化して、その結節部と末端部の沈線が深くえぐり込まれる様になり、三叉文となっている。文様帯の幅は40mmである。口縁部は肥厚して小波状を呈し、口唇部にもミガキが及んでいる。この類は胎土が精選され、19・20・48は胎土中に金雲母を含有する。48は焼成も極めて良好で光沢を有している。

**第7類土器** (第87図22、図版60)

頸部に横走する平行沈線、胴部に斜縄文の施された土器である。

**第8類土器** (第87図23、図版60)

浮彫的な雲形文の施されたものである。

**第9類土器** (第87図24、図版60)

頸部から口頸部が直立し、胴部が丸く張る壺形土器であろうと思われる。頸部の屈曲部に1条の沈線が施され、B形の瘤状突起が貼付されている。胴部には斜縄文が施されているが、沈線より上の口縁部には見られない様である。

**第10類土器** (第87図25~28・第89図49、図版60・61)

縄文のみのものである。25はRL縄文、26~28・49はLR縄文である。49は口径が約240mmと推定される深鉢である。

**第11類土器** (第88図29~32、図版60・61)

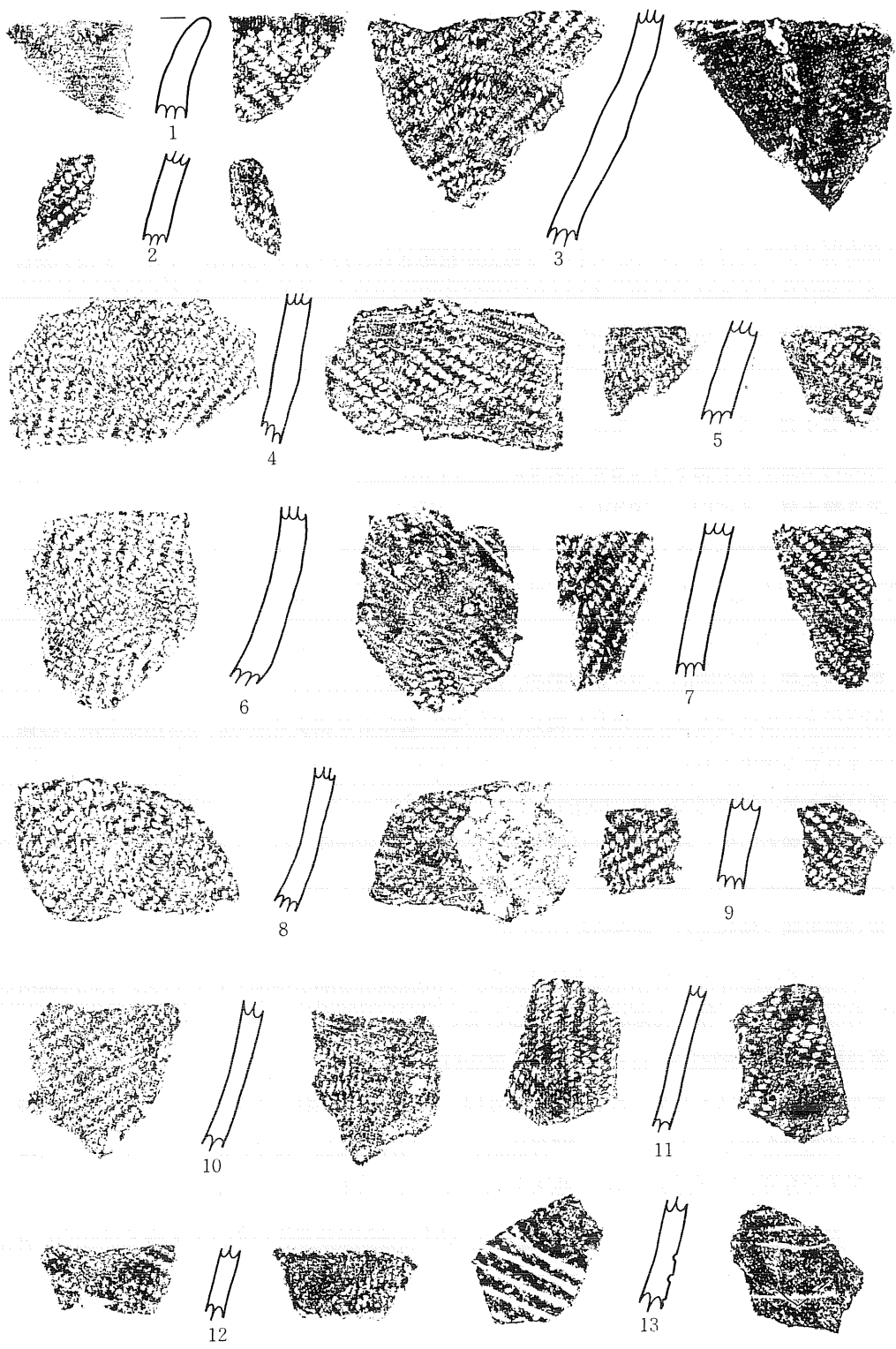
無文の土器を一括した。29・30は肥厚する大波状口縁で浅鉢、31は壺形土器であろうと思われる。32は両面及び口唇部が丁寧に研磨されており、これも浅鉢であろうと思われる。

**第12類土器** (第88図33、図版61)

波状を呈する口縁部である。外面には頸部と口縁に沿って浅い沈線が引かれている。内面にはこれらと異なり、深い沈線が平行に施される。

**第13類土器** (第88図34~45・第90図54、図版61)

撚糸文の施文された土器である。34~36は同一個体で横位羽状に施されている。42~45は幾分原体の太いものを用いており、42には横位、43・44には縦位の綾絡文が見られる。44・45は同一個体である。54は底部からやや膨みをもちながら立ち上がり、口縁部ではほぼ直立に近くなる深鉢である。口縁部と底部周縁には横位、胴部には斜位に帯状の撚糸文が施文されている。胎土は精選されて細かく、焼成も良好で堅い。色調は上半部外面に煤状物質が付着して黒褐色(5YR 2/4)を示すが、下半部は橙色(5YR 6/4)を呈す。口径180mm、底径58mm、器高227mmを測る。器厚は全体的に薄く、胴部で3mmに満たない部分もある。

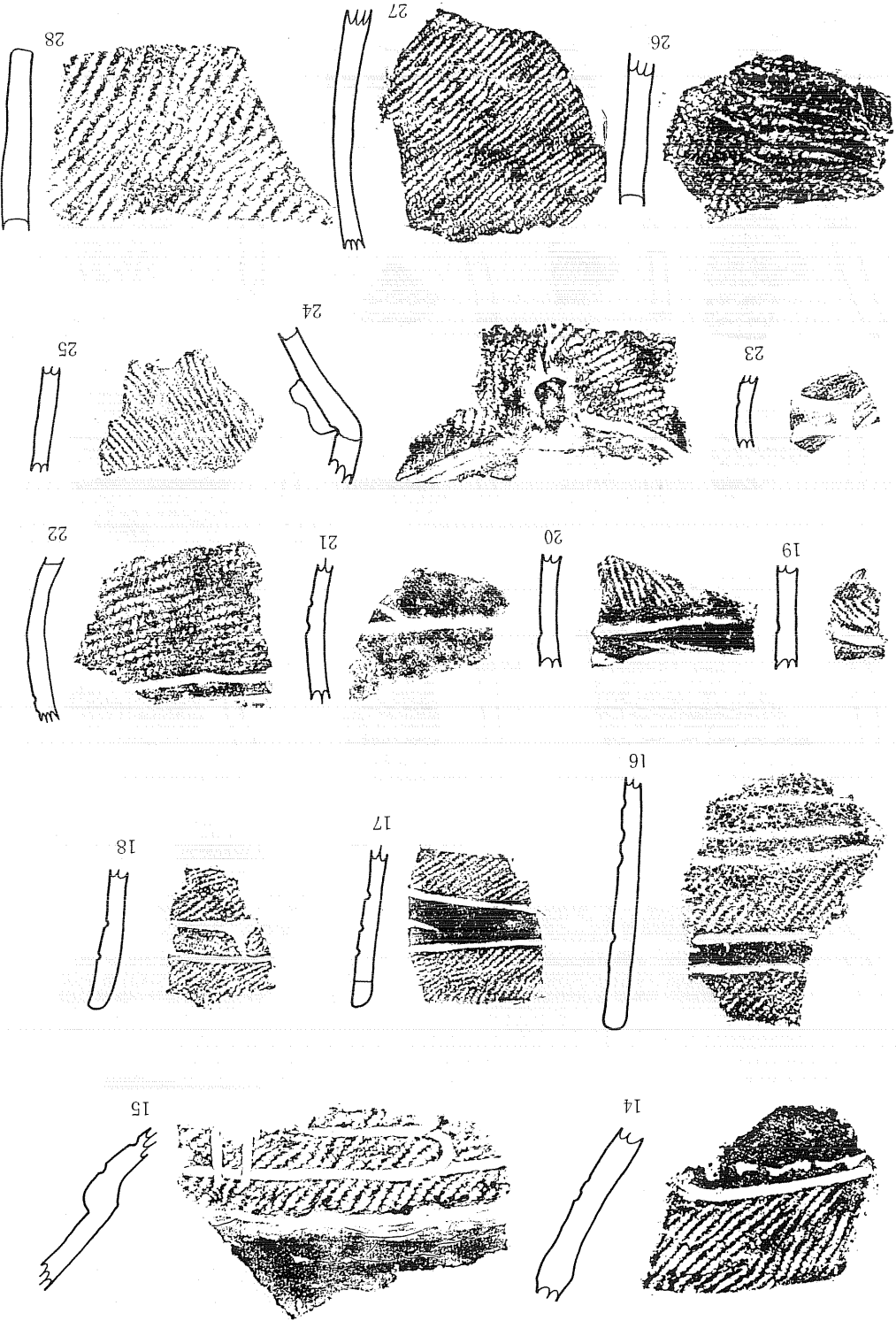


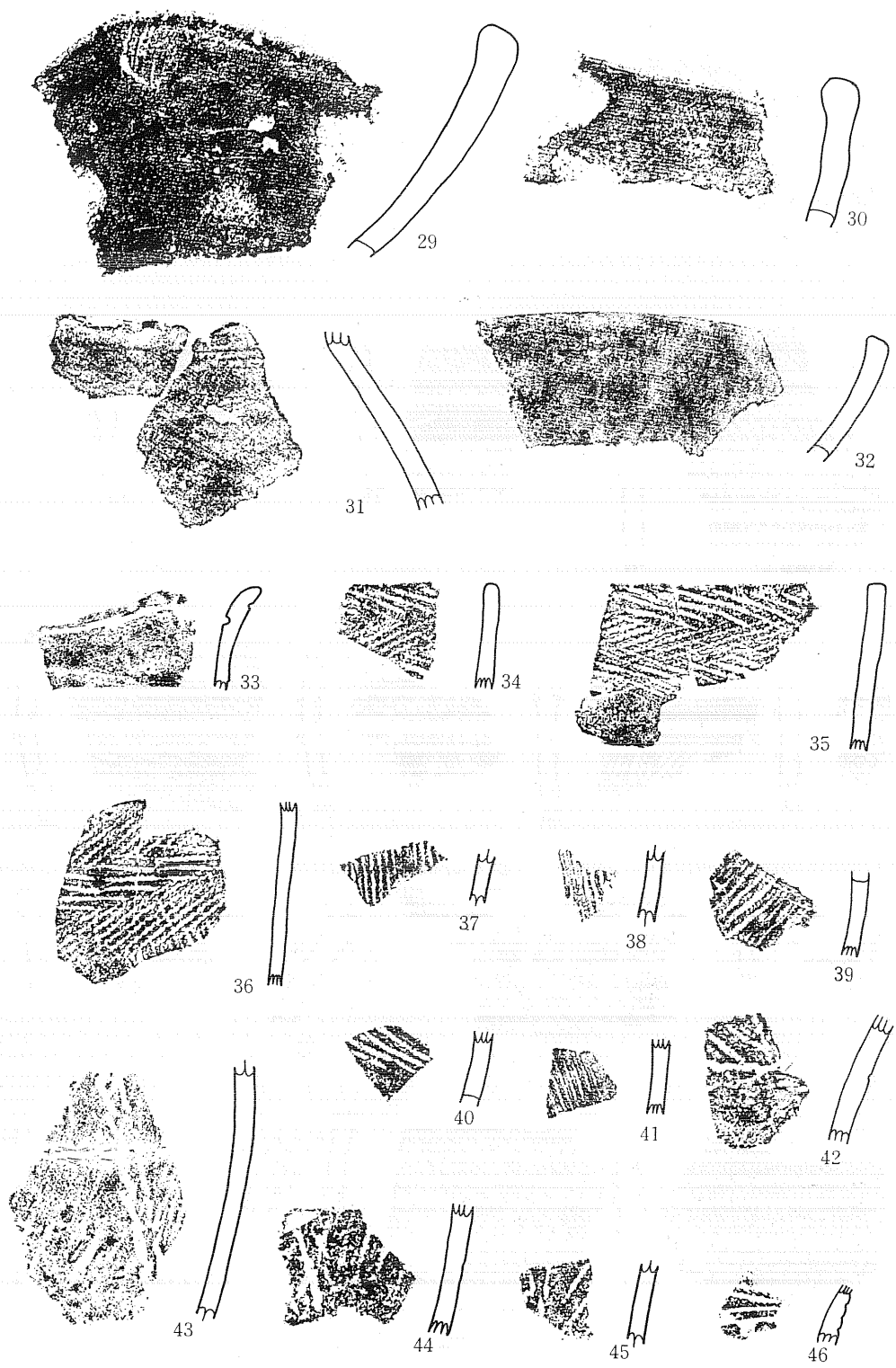
第86图 土器拓影(1)

0 10cm

第87图 石器拓影(2)

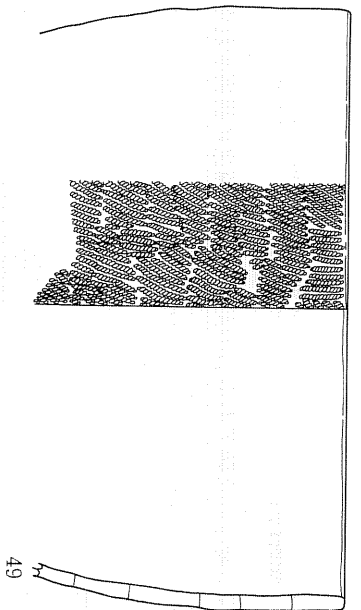
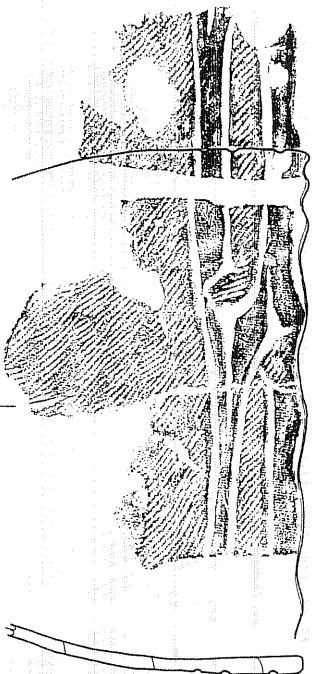
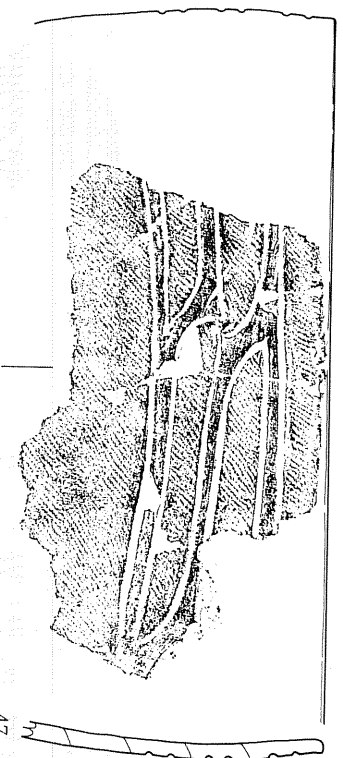
0 10cm





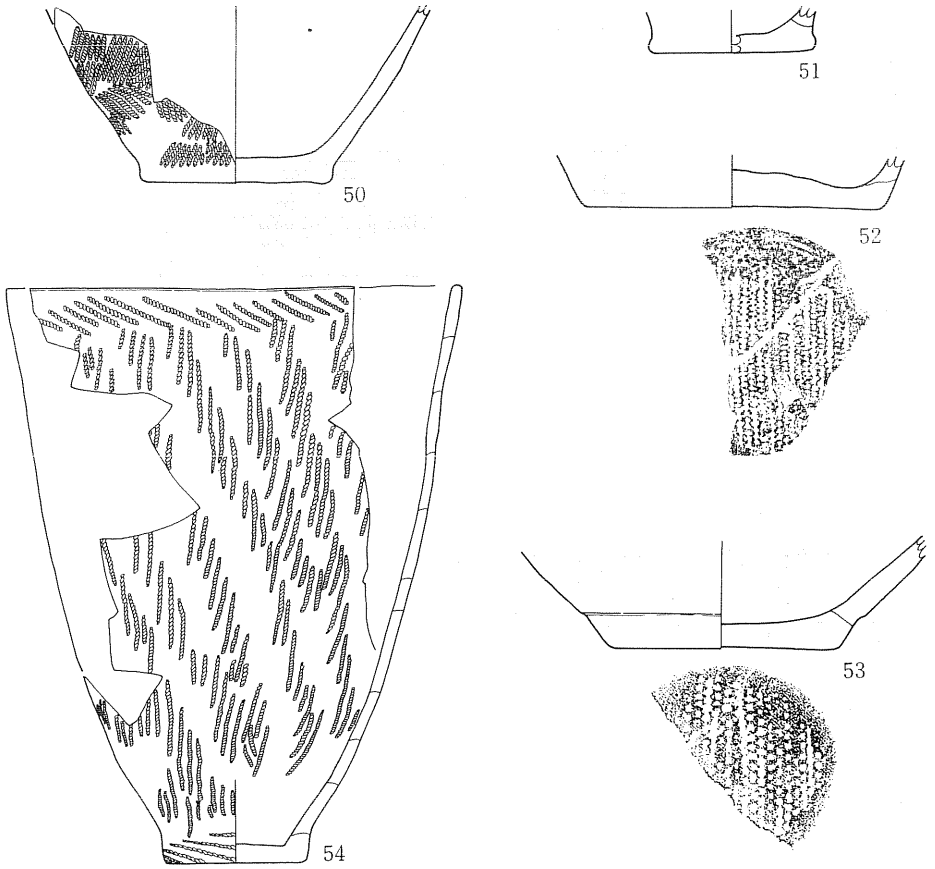
第88图 土器拓影(3)

0 10cm



第89图 土器実測图(1)

0 10cm



第90図 土器実測図(2)

0 10cm

第14類土器 (第88図46、図版61)

細い弧状文の見られるもので、おそらく重菱形文を構成するものと考えられる。

底 部 (第90図50~53、図版62)

50は底径7.5cm、L R縄文が施された鉢である。51は底部周縁が無文に研磨されている。52・53は底面に網代痕があるものである。

II 石 器

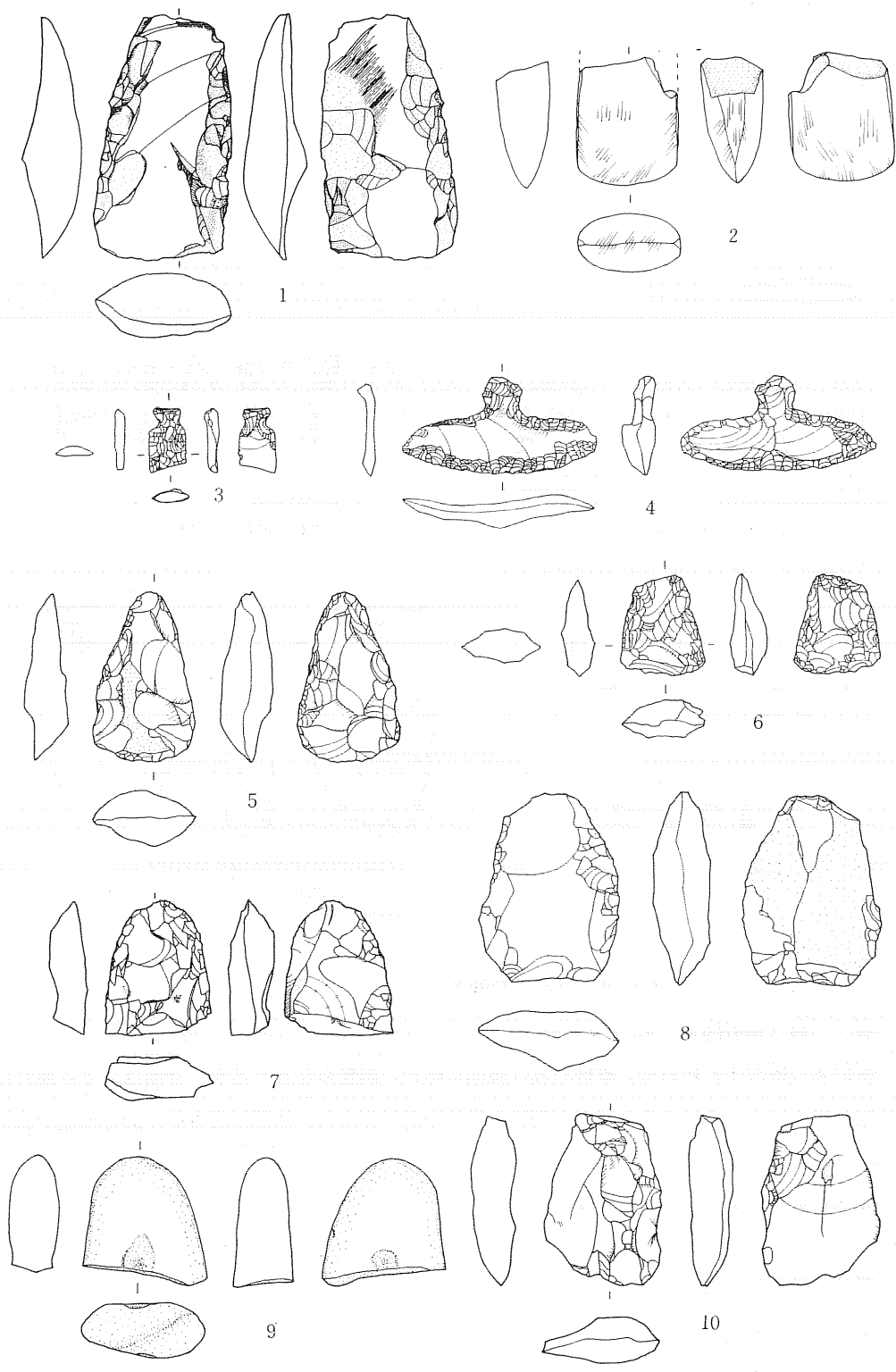
打製石斧 (第91図1、図版62)

側面に調整剥離が施されているが、刃部及び基端部には施されない。しかし刃部は背面に内湾して鋭い。

磨製石斧 (第91図2、図版62)

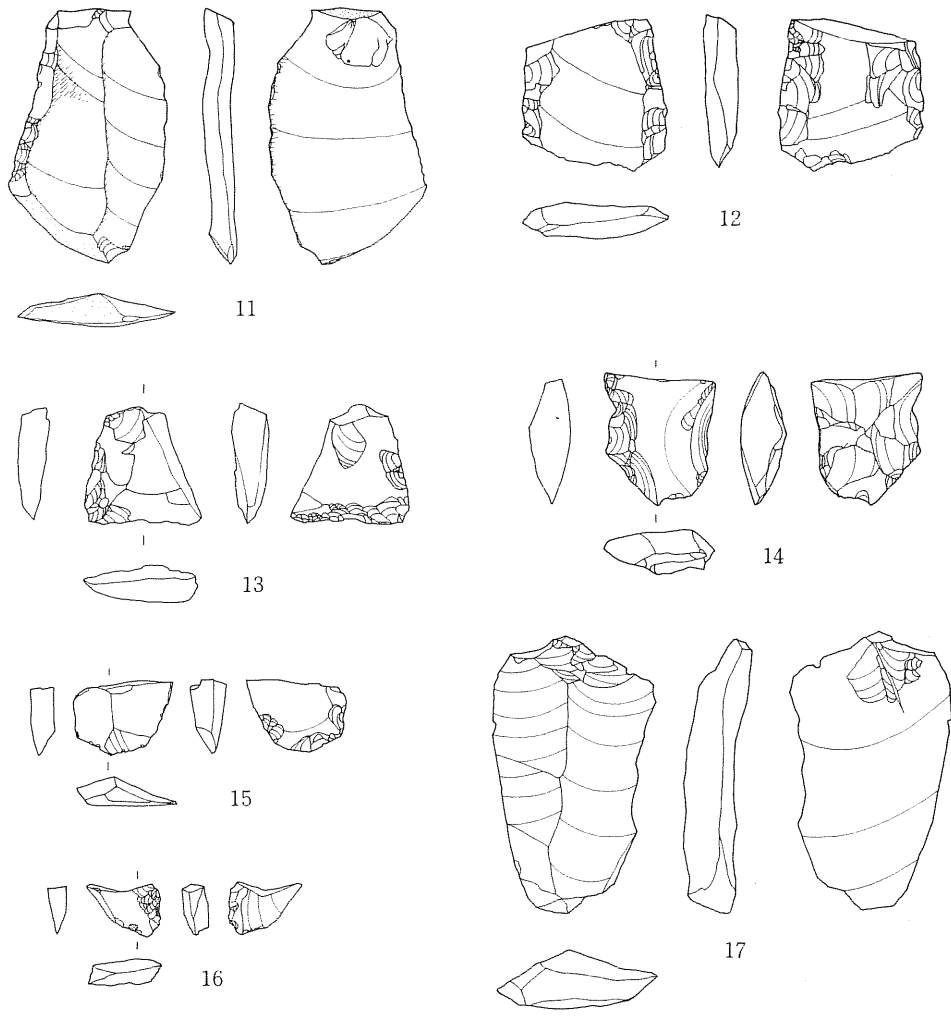
刃部付近のみであるが、よく研磨されており、幾分丸みのある刃部である。





第91图 石器实测图(1)

0 10cm



第92図 石器実測図(2)

0 ————— 10cm

石 匙 (第91図3・4、図版62)

縦形(3)と横形(4)とがある。縦形石匙は腹面に細かい調整がなされるが、背面はつまみ部だけに限られている。4はつまみ部が上側縁のほぼ中央に作られ、体部縁辺全体に調整剥離が施されている。

筥状石器 (第91図5～8、図版62・63)

5～7は全体に調整剥離がなされるが、8は大きく自然面を残している。5・6は刃部に近い部分に最も厚みがある。

凹 石 (第91図9、図版63)

ほぼ半欠しているが、両面に浅い皿状の凹みを有する。

### 不定形石器（第92図10～16、図版63）

形態に統一性がなく、石斧、篋状石器という様に限定しがたいものを一括した。自然面や1次剥離面を大きく残し、側縁などの一部に調整剥離がなされる。11は上部に打面、下部に自然面を有し、1側縁にのみ調整が施されている。12は左右側縁に調整がなされるが、他の1辺には1次剥離面を残している。

### 石核（第92図17、図版63）

上・下面と側面に自然面と打面を有し、調整剥離が全くない。明確な打面は単一であるが、他の打面が剥片剥離の過程で失われた石核であろうと思われる。

## 6. まとめ

既述の様に本調査では遺構の存在は確認されず、ごく少量の遺物が出土したにとどまった。遺物について若干の整理をすると、まず土器では第1・2類が赤御堂式、早稲田貝塚第4類土器に比定され、縄文時代早期後半に位置づけられる。第3類は縄文時代後期初頭ごろのものであろうか。第4類は十腰内Ⅱ式、第5類は縄文後期末葉ないしは晩期初頭の大洞B式、第7類も同じく晩期初頭ごろのものであろう。第8類は大洞C<sub>1</sub>式、第9類は晩期中葉ごろ、第10類は後・晩期、第11類は後期、第12類は弥生時代に入るものであろうか。第13～15類は弥生時代の小坂X式、鳥海山式に比定されよう。

石器は所属時期が定かでないが、3の石匙が第90図54の土器と伴出した。10～13の不定形石器、17の石核は、第1・2類土器と伴出しており、この時期の所産と考えられる。

### 主要参考文献

- 奥山 潤・安保 彰「十和田湖西南部（小坂鉦山）の弥生式文化とその後続形態（上・下）」  
『考古学雑誌』 第49巻第2・3号 1963年
- 奥山 潤「秋田県北半部の弥生文化終末後の土器序説」『秋田考古学』10周年記念特集号  
1964年
- 奈良修介・豊島 昂『秋田県の考古学』1968年
- 宮城県塩釜女子高等学校社会部『二月田貝塚』1970年
- 同 『二月田貝塚（Ⅱ）』1971年
- 和田吉之助・富樫泰時「神沢海岸遺跡」本荘市文化財調査報告書 第1集 1971年
- 後藤勝彦他「宮城県七ヶ浜町沢上貝塚の調査」『仙台湾』 創刊号 1971年
- 安保 彰 『小坂のあけぼの 縄文期・弥生期』 1975年
- 工藤竹久他『赤御堂遺跡発掘調査概要報告書』 八戸市教育委員会 1976年
- 青森県教育委員会『鳥海山遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第32集1977年
- 鈴木克彦「青森県の弥生時代終末期の土器」『考古風土記』 第3号 1978年
- 岩手県教育委員会・日本道路公団「大渡野遺跡」『東北縦貫道埋蔵文化財調査報告書—Ⅱ—』  
岩手県文化財調査報告書 第32集 1979年

第25表 土器観察表

挿 番 号	番 号	出 土 地 点	層 位	R P 番 号	部 位	外		内		器 厚 (mm)	胎	土	焼 成	備 考
						文 様	色 調	調 整	色 調					
第3図	1	10-F	Ⅲ		一括 口縁部		にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	L R 縄文縦位回転	褐灰色 7.5 Y R $\frac{4}{2}$	8	石英・長石	密	良好	外面スス付着
第3図	2	10-E	Ⅲ		一括 胴部	L R 縄文の横位回転。	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{3}{2}$	L R 縄文縦位回転	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	8	石英・長石	密	良好	
第3図	3	10-E	Ⅲ		一括 胴部	L R 縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	L R 縄文斜位回転	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	9	石英・長石	密	良好	
第3図	4	10-F	Ⅲ		一括 胴部	L R 縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	L R 縄文縦位回転	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	8	石英・長石・雲母	密	普通	内面スス付着
第3図	5	10-F	Ⅲ		一括 胴部	L R 縄文の横位回転。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	L R 縄文縦位回転	灰褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	8	石英・長石	密	普通	
第3図	6	10-F	Ⅲ		一括 胴部	L R 縄文の横位、斜位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	L R 縄文斜位回転	灰褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	8	石英・長石・雲母	密	良好	
第3図	7	10-F	Ⅲ		胴部	L R 縄文の横位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	L R 縄文縦位回転	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{4}{2}$	9	石英・長石・雲母	密	普通	外面スス付着
第3図	8	10-B	Ⅲ		一括 胴部	L R 縄文の横位回転。	明褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	L R 縄文縦位回転	明褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	6	石英・長石・雲母	密	普通	外面スス付着
第3図	9	9-F	Ⅲ		一括 胴部	L R 縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	L R 縄文縦位回転	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	8	石英・長石	密	普通	外面スス付着
第3図	10	11-H	Ⅲ		一括 胴部	L R 縄文の横位回転。	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{4}{2}$	L R 縄文斜位回転	灰黄褐色 10 Y R $\frac{4}{2}$	5	石英・長石 赤色粒	密	普通	
第3図	11	1-E	Ⅲ		一括 胴部	R L 縄文の斜位、縦位回転。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	R L 縄文斜位回転	灰褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	5	石英	密	良好	内面スス付着
第3図	12	11-H	Ⅲ		胴部	L R 縄文の縦位回転。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	L R 縄文横位回転	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	6	長石・雲母	密	不良	内面スス付着
第3図	13	6-F	Ⅲ		一括 胴部	L R 縄文の縦位回転。5条の沈線。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	横位条痕	褐色 7.5 Y R $\frac{4}{2}$	6	石英・長石・雲母	密	普通	
第4図	14	2-E	Ⅲ	6	胴部	沈線→L R 縄文、列点文。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	8	石英	密	普通	
第4図	15	1-E	Ⅲ		口縁部 胴部	L R 縄文→沈線文。	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{3}{2}$	横位	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{3}{2}$	11	石英 白色粒	密	良好	
第4図	16	9-G	Ⅲ		一括 口縁部	L R 縄文→磨消の平行沈線文。	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{4}{2}$	横位	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{4}{2}$	6	石英	粗	普通	
第4図	17	8-G	Ⅲ		一括 口縁部	L R 縄文→磨消、沈線文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	5		密	良好	
第4図	18	9-H	Ⅲ		一括 口縁部	R L 縄文→磨消、沈線文。	褐色 7.5 Y R $\frac{4}{2}$	横位	褐色 7.5 Y R $\frac{4}{2}$	6	石英 白色粒	密	普通	
第4図	19	9-F	Ⅲ		胴部	R L 縄文→磨消。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{4}{2}$	横位	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	7		密	良好	
第4図	20	9-F	Ⅲ		一括 胴部	R L 縄文→磨消、沈線文。	黒褐色 7.5 Y R $\frac{3}{2}$	斜位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{5}{2}$	5	石英・雲母	密	良好	外面スス付着

挿図 番号	番号	出土地 地点	層位	R P 番号	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考	
						文 様	色 調	調 整	色 調					
第4図	21	8-G	Ⅲ	一括	胴部	沈線、横位のミガキ。	黒褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{3}{8}$	5	石英 赤色粒	密	良好	
第4図	22	9-C	Ⅲ	一括	胴部	上半に一条の沈線、L R縄文の斜位回転	灰白色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	8	石英	粗	普通	外面スス附着
第4図	23	3-D	Ⅲ	一括	胴部		浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	黒褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6		密	良好	
第4図	24	18-B	Ⅲ	一括	胴部		にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位、斜位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英	粗	普通	
第4図	25	9-F	Ⅲ	一括	胴部	R L縄文の横位回転。	黒褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英	粗	普通	
第4図	26	16-D	Ⅲ	一括	胴部	L R縄文の横位・斜位回転。	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	不明	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	8	石英 赤色粒	粗	普通	
第4図	27	9-G	Ⅲ	一括	胴部	L R縄文の横位回転。	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	縦位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6		密	良好	内外面スス附着
第4図	28	1-E	Ⅲ	一括	胴部	L R縄文の横位回転。	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	8	長石・石英	粗	普通	
第5図	29	1-E	Ⅲ	一括	口縁部	無文、横位ミガキ。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	褐灰色 10 Y R $\frac{1}{2}$	8	石英・長石・雲母	密	普通	
第5図	30	2-E	Ⅲ	1	口縁部	無文、横位ミガキ。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	10	石英・長石	粗	良好	
第5図	31	2-E	Ⅲ	3	胴部	無文、横位ミガキ。	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	8	石英・長石・雲母 赤色粒	粗	普通	
第5図	32	1-E	Ⅲ	一括	口縁部	無文、横位ミガキ。	赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石・雲母	粗	良好	
第5図	33	9-C	Ⅲ	一括	口縁部	波状口縁、沈線、横位ミガキ。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	一条の沈線、横位	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石	粗	普通	内外面スス附着
第5図	34	2-E	Ⅲ	一括	口縁部	RとLの撚糸文。	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・雲母	密	普通	外面スス附着
第5図	35	2-E	Ⅲ	一括	口縁部	RとLの撚糸文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英・長石	密	普通	外面スス附着
第5図	36	2-E	Ⅲ	一括	口縁部	RとLの撚糸文。	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英・長石	密	普通	外面スス附着
第5図	37	3-D	Ⅲ	一括	口縁部	Rの撚糸文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$		にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	雲母	密	普通	外面スス附着
第5図	38	3-D	Ⅲ	一括	口縁部	Rの撚糸文。	黒褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$		にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5		密	普通	外面スス附着
第5図	39	2-E	Ⅲ	一括	口縁部	Rの撚糸文。	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	4	石英・長石	密	普通	外面スス附着
第5図	40	2-E	Ⅲ	一括	口縁部	Rの撚糸文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英	密	普通	外面スス附着
第5図	41	2-D	Ⅲ	一括	口縁部	Rの撚糸文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$		褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	雲母	密	普通	外面スス附着
第5図	42	3-D	Ⅲ	一括	口縁部	Rの撚糸文(末端に綾線文)	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	横位	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・長石・雲母	密	不良	

挿 番 号	番 号	出 土 点	層 位	R P 番 号	部 位	外 面		内 面		器 厚 (mm)	胎 土	焼 成	備 考
						文 様	色 調	調 整	色 調				
第5図	43	3-D	Ⅲ	一括	口縁部	Rの撚糸文と縦位の綾線文。	明赤褐色 5 Y R $\frac{5}{6}$	縦位	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{3}{4}$	7	石英・長石・雲母 粗	不良	外面スス付着, 輪積痕
第5図	44	3-D	Ⅲ	一括	口縁部	Rの撚糸文と縦位の綾線文。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	横位	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{3}{4}$	6	石英・雲母 粗	普通	外面スス付着
第5図	45	2-D	Ⅲ	一括	口縁部	Rの撚糸文。	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{5}{6}$	縦位	にぶい黄橙色 10 Y R $\frac{3}{4}$	5	石英・長石 粗	普通	
第5図	46	2-E	Ⅲ	一括	口縁部	沈線文。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{5}{6}$	横位	にぶい赤褐色 5 Y R $\frac{5}{6}$	6	石英・雲母 粗	不良	

第26表 石器観察表

石 斧

挿図番号	出土地区	層位	大きさ (mm)			重量 (g)	刃部角度		欠損方向	石質	備考
			長	幅	厚		$\alpha$	$\beta$			
第8図1	9-F	Ⅲ	107	57	27	159.0	159	39		凝灰岩	打製石斧
第8図2	4-C	Ⅲ	57	45	26	103.0	155	78	平面平行, 側面斜位	安山岩	磨製石斧

石 匙

挿図番号	出土地区	層位	大きさ (mm)			重量 (g)	刃部長さ (mm)			刃部角度			欠損状態	石質	備考
			長	幅	厚		e	f	g	$\alpha$	$\beta$	$\gamma$			
第8図3	26-H	Ⅲ	28	16	5	2.5	(18)	(14)	—	29	39	74	刃部欠損	安山岩	
第8図4	表採	Ⅲ	86	42	7	19.3	40	40	83	43	39	—	——	安山岩	

鏡状石器

挿図番号	出土地区	層位	大きさ (mm)			重量 (g)	刃部角度		欠損状態	石質	備考
			長	幅	厚		$\alpha$	$\beta$			
第8図5	8-F	Ⅲ	75	43	21	60.3	141	66	——	流紋岩	自然面を残す
第8図6	7-C	Ⅲ	43	37	15	24.6	170	94	刃部欠損	硬質頁岩	
第8図7	2-G	Ⅲ	58	46	18	53.1	130	58	刃部欠損	硬質頁岩	
第8図8	8-F	Ⅲ	85	61	26	122.0	127	54	——	硬質頁岩	

凹 石

挿図番号	出土地区	層位	大きさ (mm)			重量 (g)	凹の形態	凹数		欠損状態	石質	備考
			長	幅	厚			L	R			
第8図9	21-I	III	51	55	24	90.0	すり鉢状	1	1	約1/2欠損	安山岩	

不定形石器

挿図番号	出土地区	層位	大きさ (mm)			重量 (g)	刃部角度		欠損状態	石質	備考
			長	幅	厚		$\alpha$	$\beta$			
第8図10	9-F	III	73	50	18	74.0				硬質頁岩	
第9図11	9-F	III	100	60	10	69.0				硬質頁岩	
第9図12	6-E	III	59	57	13	49.5	130	45	基部欠損	硬質頁岩	
第9図13	11-G	III	45	45	14	27.8	194	72	刃部欠損	硬質頁岩	
第9図14	5-G	III	47	43	17	35.5				硬質頁岩	
第9図15	5-G	III	29	40	13	12.5				硬質頁岩	
第9図16	6-D	III	33	20	9	4.6				硬質頁岩	

石 核

挿図番号	出土地区	層位	大きさ (mm)			重量 (g)	石質	備考
			長	幅	厚			
第9図17	8-F	III	109	63	20	128.0	硬質頁岩	



# 堂の上遺跡

遺跡番号	No. 5
所在地	鹿角市八幡平字堂の上37番地2号他
調査期間	昭和54年7月2日～7月16日
発掘調査予定面積	1,042 m <sup>2</sup>
発掘調査面積	800 m <sup>2</sup>

## 1. 遺跡の概観

本遺跡は、鹿角市八幡平字堂の上37番地2号他に所在し、国鉄花輪線八幡平駅北東0.5km、五ノ宮嶽(1,150m)の西側斜面標高205～210mの所に位置する。遺跡は、北に沢が走る平坦部で、西側下方には大日堂舞楽(国指定重要無形文化財)で著名な大日靈貴神社があり、さらに米代川と熊沢川が合流して形成された扇状地が南北に広がる。調査区は、斜面を削平した畑地で、南東に杉の造成林を控えている。

## 2. 調査の方法

調査区は畑地と造成林からなる1,042㎡であるが、東側の地山露出部分を除く800㎡を対象とした。調査は、東北縦貫自動車道の幅を示す西側境界杭3本を結ぶ直線を基準として5m×5mのグリッドを設定し、その呼称は、南から北へアラビア数字で0～14まで、東から西へアルファベットでA～Dまでとし、両者の組合せによって1-Aグリッドのように示した。

## 3. 調査の経過

調査は、7月2日から開始し、当日仮小屋の設営と草刈りを行いグリッド設定をした。3日から調査区南側より粗掘りを始め、6日には、5・6-Aグリッドから浮石層の推積する落ち込みが検出された。7ライン以北で数ヶ所に落ち込みを確認したが、全て畑作による攪乱であった。土層図・平面図は1/20で、地形図は平板測量で1/300のものを作成し、調査は7月16日に終了した。

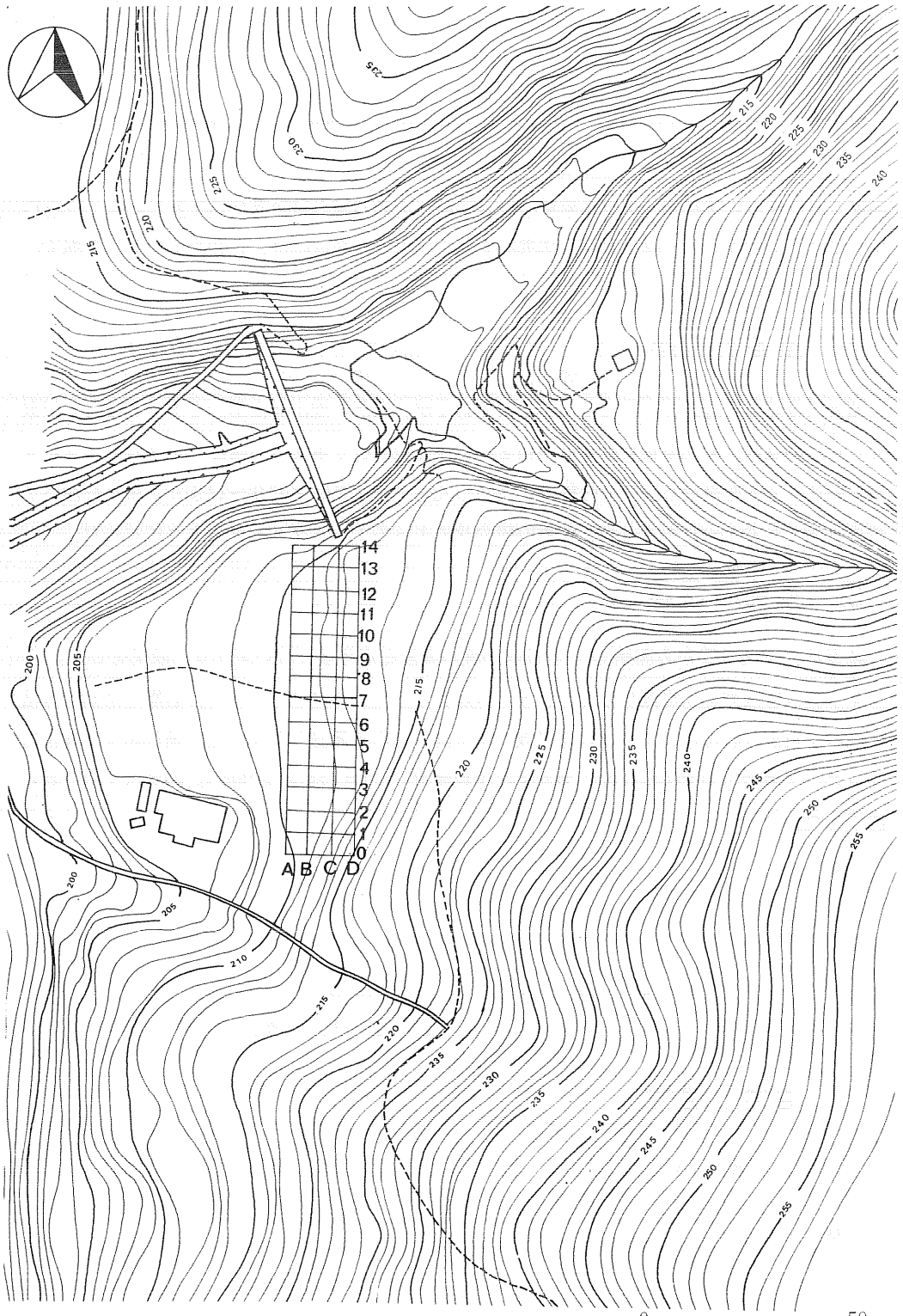
## 4. 遺跡の層位

遺跡を覆う堆積層は、地山までV層に分けられた。I層は、暗褐色土(耕作土)で、調査区全体に15～25cmの厚さで堆積する。II層黒色土、III層浮石層、IV層黒褐色土であるが、II～IV層は4ライン以南、7ライン以北では存在しない。V層は拳大の礫を含む褐色土の地山である。

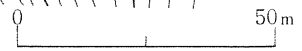
## 5. 遺構と遺物

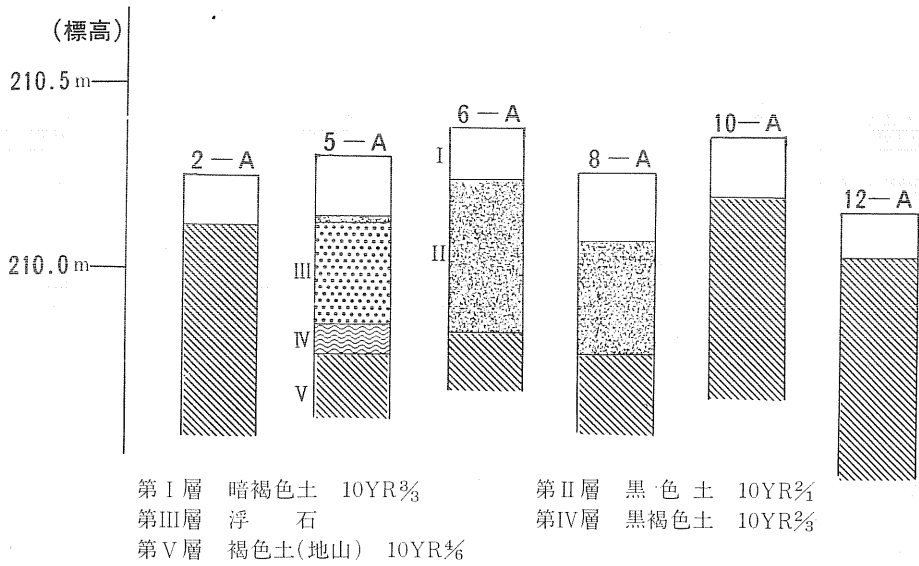
### 〔1〕 遺 構

遺構は検出されなかった。



第93図 グリッド配置図





第94図 土層柱状図

## 〔2〕 遺物

出土した遺物は、土器片35点、石器2点、フレイク3点である。

### I 土器

土器は全て破片で一層からの出土である。施文方法により8分類した。

#### 第1類 (第94図1・3)

付加条縄文の施文されたもの。

1は、撚の異なる付加条の結節羽状縄文であり、下半にはR撚糸文が施文されている。3は、2段のR  $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ と1段Lとの付加条縄文を縦位回転したものである。

#### 第2類 (第94図4)

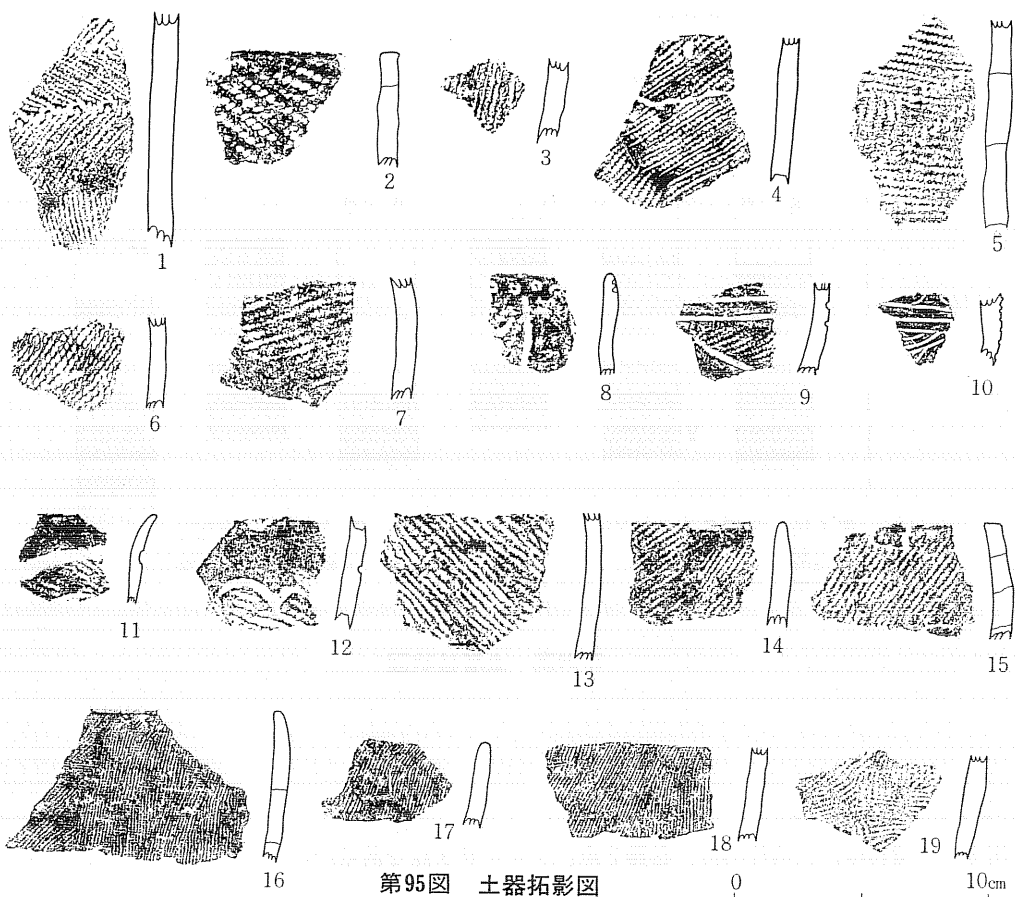
異条縄文の施文されたもの。

1点だけであるが、太さの異なる縄を撚り合せて横位回転したものである。

#### 第3類 (第94図2)

粗い縄文の施文されたもの。

口縁部が直立し、条間のある粗い縄文が施文されている。



第95図 土器拓影図

第4類 (第95図5・6・7・13・14・15・19)

縄文だけ施文されたもの。

口縁部では、直立するもの14、平縁で内湾するもの15などがある。縄文は横位回転施文されたものが多いが、横位→縦位→斜位回転と重ねて施文されたものもある。

第5類 (第95図8)

刺突文が施文されたもの。

直立ぎみの口縁で、文様帯は竹管状工具による刺突文があり、垂下する浅い沈線によって、すり消し手法による無文帯と縄文帯とに区別される。

第6類 (第95図9・11・12)

沈線で無文帯と文様帯が区画されたもの。

すり消し手法によって口縁部無文帯を作り出し、縄文帯とを区画する。9の明瞭な沈線に対して、11・12は浅くて太い沈線である。

第7類 (第95図10)

第27表 土器観察表

番号	出土地点	層位	RP番号	部位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考	
					文 様	色 調	調 整	色 調					
1	8-A	I	一括	胴部	L } <sub>R</sub> , R } <sub>L</sub> の結束による羽状縄文。 一部R捻糸文の横位回転。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	縦 位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	10	石英	良好		
2	8-A	I	一括	口縁部	L R縄文の縦位回転。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	橙色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	8	白色粒	粗	普通	
3	9-A	I	一括	胴部	R L + L付加糸縄文、縦位回転。	にぶい橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	斜 位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5		粗	良好	
4	6-A	I	4	胴部	R L縄文とL R縄文の異条縄文、横位回転。	橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	橙色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	白色粒	密	良好	
5	12-A	I	一括	胴部	L R縄文縦位回転→斜位回転。	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	縦 位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	10	石英・白色粒	密	良好	
6		I	一括	胴部	L R縄文の横位回転。	橙色 2.5 Y R $\frac{1}{2}$	不 明	橙色 2.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	石英・白色粒	密	不良	
7	6-A	I	一括	胴部	L R縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	8	長石	密	良好	
8	7-A	I	一括	口縁部	口縁部に刺突文。 沈線により、無文部と縄文部区画。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6		粗	不良	
9		I		胴部	L R縄文の横位回転→沈線。	褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	7	石英	粗	良好	内面スス付着
10		I		胴部	沈線文。	褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	褐色 5 Y R $\frac{1}{2}$	8	白色粒	密	良好	
11	5-B	I	一括	口縁部	L R縄文の横位回転→沈線。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	石英・長石 白色粒	密	普通	
12		I		胴部	L R縄文の横位回転→沈線。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	石英	粗	普通	
13	9-A	I	2	胴部	L R縄文の縦位回転。	灰白色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	縦 位	灰白色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	5	雲母・石英 赤色粒	粗	良好	
14	10-A	I	1	口縁部	L R縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	浅黄褐色 7.5 Y R $\frac{1}{4}$	7	石英	粗	普通	外面スス付着
15	10-A	I	一括	口縁部	L R縄文の横位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	8	石英	粗	不良	内外面スス付着
16	10-A	I	一括	口縁部	L R縄文の横位、斜位回転。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	にぶい黄褐色 10 Y R $\frac{1}{2}$	6	雲母・石英 赤色粒	密	良好	外面スス付着
17	10-A	I	一括	口縁部	L R縄文の斜位回転。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	明褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	6	雲母・石英	密	良好	外面スス付着
18	10-A	I	一括	胴部	L R縄文の斜位回転。	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	横 位	灰褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	7	雲母・石英	密	良好	外面スス付着
19	9-A	I	一括	胴部	L R縄文の縦、横、斜位回転。	にぶい褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	縦 位	褐色 7.5 Y R $\frac{1}{2}$	9	雲母・石英・長石	粗	普通	

沈線のみ施文されたもの。

細い平行線で文様が描かれている。モチーフは9と類似するものであろう。

### 第8類 (第95図16~18)

細かい縄文が施文されたもの。

細かいLR縄文の斜位回転の施文による。3点とも同一個体であらう。

以上出土土器を8分類したが、各類にはかなりの時間差がある。第1~3類とした土器は、付加条縄文、羽状縄文、撚糸文、異条縄文など前期円筒下層d式の特徴をもったものである。

第5~7類とした土器は、口縁部がすり消し手法による無文帯で胴部文様帯とは沈線で区画される。キャリパー形を呈する深鉢で大木9~10式に比定されるだろうし、第4類もこれに伴うものであろう。

## II 石器

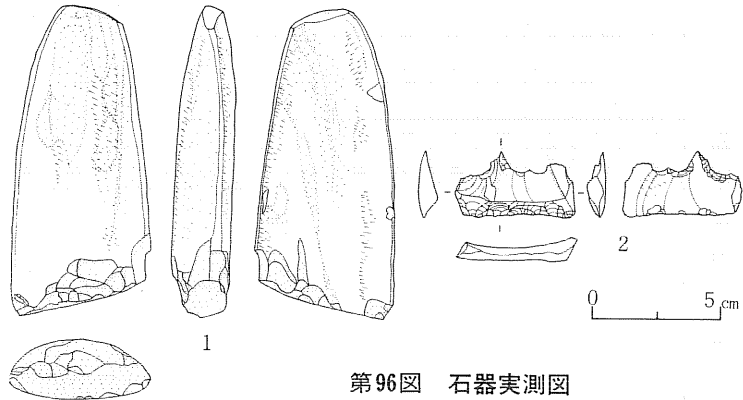
本遺跡より出土した土器は、磨製石斧1、不定形石器1、フレイク3の5点である。

### 磨製石斧 (第96図1)

8-Aグリッド、第V層上面より出土した。最大長121mm、最大幅54mm、最大厚29mm、重量204gである。石質は粘板岩である。敲打による成形後、研磨したもので中央部から基部にかけてはこの成形痕が残っている。刃部が欠損した後の再使用のための整形痕がみられる。擦痕は長軸に対して横に走る。

### 不定形石器 (第96図2)

10-Aグリッド、第V層上面より出土した。最大長25mm、最大幅47mm、最大厚29mm、重量8gである。石質は硬質頁岩である。刃部は背面の下側縁に押圧剥離で調整され、主要剥離面の上側縁には、押圧剥離を施すことにより鋭利な突起部を作り出しており、用途としては石匙、あるいは石錐と考えられる。



第96図 石器実測図

## 6. まとめ

本調査では、遺跡の西端を発掘したにすぎず、また調査区がすでに畑地造成のため包含層や遺構面が削平されていたことなどから、堂の上遺跡全体の内容を把握するまでには至らなかった。数少ない出土遺物ではあるが、土器から本遺跡が縄文前期末～晩期に営まれたことがうかがえる。

### 付、大湯浮石層について

5・6-Aグリッドにかかる落ち込みで、平面形が円形、断面形は凸レンズ状、厚さ33cmの浮石層の堆積が確認された。この浮石層はシルト質と粗砂質の2つに大別され、さらに浮石粒子の大きさと色調により5層に細別することができた。1層：黄褐色シルト質（粒子径0.002～0.02mm）、粒子は扁平な長方形を呈す。2層：オリーブイエロー粗砂質（粒子径0.02～0.2mm）、シルトを含み、粒子は丸みを帯びる。3層：オリーブ粗砂質（粒子径0.02～0.2mm）、若干の細砂・シルト、黒色細砂を含み粒子は丸みを帯びる。4層：オリーブイエロー粗砂質（粒子径0.2mm～2mm）。2層より明彩度が落ち、粒子は丸みを帯びる。5層：明黄褐色粗砂質（粒子径0.2～2mm）、2～9mmの浮石を含み、黒色細砂を3層より多く含む。粒子は丸みを帯びる。

このように下の層へ行くほど、浮石粒子がシルト質から粗砂へと大きくなり、淘別作用をうけたものと考えられる。このような現負は周辺遺跡の発掘調査においても確認されている。とくに「大湯浮石層」と命名されるきっかけとなった大湯環状列石では、上部中粒火山砂、下部含火山礫粗粒火山砂の2層に分けられている。さらに最近の調査で遺構内に堆積する浮石層の確認された遺跡が幾つかある。

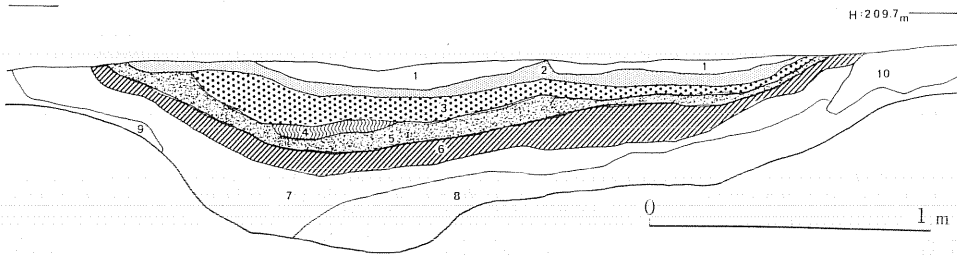
#### 1. 鳥野遺跡

鹿角市花輪字鳥野13番地に所在する。住居跡は表土下20cmで半円形の大湯浮石層の堆積下で確認された。覆土が8層認められ、大湯浮石層は、a：褐色土に浮石が入り込む、b：砂粒、黄白色、c：粗粒・白色の3層に細分されている。共伴遺物より、8世紀後半奈良時代のものとしている。

#### 2. 源田平遺跡

鹿角市花輪字源田平35番地に所在する。第2号住居跡において覆土が7層認められ、大湯浮石層は、a：褐色土に浮石が入り込む、b：砂粒・黄白色、c：粗粒・白色の3層に細分されている。共伴遺物より、10世紀後半から11世紀初めのものとしている。





- |  |   |
|--|---|
| 1. 黒褐色土 10YR $\frac{3}{2}$ 粗砂          | 2. 黄褐色土 2.5Y $\frac{3}{4}$ シルト質, 浮石層      |
| 3. オリーブイエロー色土 5Y $\frac{3}{4}$ 粗砂, 浮石層 | 4. オリーブ色土 5Y $\frac{3}{4}$ 粗砂, 浮石層        |
| 5. オリーブイエロー色土 5Y $\frac{3}{4}$ 粗砂, 浮石層 | 6. 明黄褐色土 10YR $\frac{3}{4}$ 粗砂, 浮石層       |
| 7. 黒褐色土 10YR $\frac{3}{2}$ 粗砂          | 8. 黒褐色土 10YR $\frac{3}{2}$ 粗砂, 7層より明彩度が高い |
| 9. 暗褐色土 10YR $\frac{3}{4}$ 粗砂          | 10. 黒色土 10YR $\frac{3}{4}$ 粗砂             |

第97図 浮石堆積図

### 3. 小平遺跡

鹿角市花輪字八幡平10番地に所在する。第4号住居跡においては覆土が3層認められ、大湯浮石層は2層に細分されている。共伴遺物より10世紀のものとしている。

いずれも浮石層下には1～3層の覆土が認められることから、浮石層より遺構が古いこととなる。さらに共伴遺物から、およそ8世紀後半から11世紀初めという年代が得られている。

このように遺跡において浮石層が確認されることは、黒土中の遺構の確認を容易にし、さらに遺跡の年代をある程度明確になし得る。今後、浮石層の堆積する遺跡の調査例が増加することによって、大湯浮石層の降下年代をさらに明確にすることができるであろう。調査においても留意すべき点である。

#### 主要参考文献

- 今井富士雄・磯崎正彦編『十腰内』 岩木山刊行会 1969年  
 江坂輝彌編『石神遺跡』 ニュー・サイエンス社 1970年  
 村越 潔『円筒土器文化』 雄山閣 1974年  
 青森県教育委員会『中の平遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第25集  
 1974年  
 富樫泰時「大湯浮石層と鹿角盆地の遺跡」『どるめん』第19号 1978年  
 秋田県教育委員会『鳥野遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書 第49集 1978年  
 秋田県教育委員会『館下I遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書 第62集 1979年  
 秋田県鹿角市教育委員会『小平遺跡発掘調査報告』 鹿角市文化財調査資料 第10号 1979年  
 秋田県教育委員会『塚の下遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書 第61集 1979年  
 山内清男『日本先史土器の縄紋』 先史考古学会 1979年

# 上 葛 岡 III 遺 跡

遺 跡 番 号	No.12
所 在 地	鹿角市八幡平字上葛岡301 番地他
調 査 期 間	昭和54年 9 月20日～10月31日
発掘調査予定面積	4,494 m <sup>2</sup>
発掘調査面積	5,383 m <sup>2</sup>

## 1. 遺跡の概観

遺跡は国鉄花輪線陸中大里駅北東約1 km、秋田県鹿角市八幡平字上葛岡301番地他に所在する。

大里駅周辺には水田が広がり、北東0.5 kmのところ急勾配をなす比高37 mの段丘がある。そこが、中世の鹿角を支配した四氏のうちの一氏、安保氏の大里館である。遺跡は、この大里館の北西を流れる沢の上流の北林（通称オシキ山804 m）の西麓に位置している。ここは、東北縦貫自動車道八幡平インター・チェンジの予定地で、標高は東側で224 m、西側は217 mである。南と北は沢に面しており、東側は急傾斜、西側は緩傾斜の地形を呈する。

遺跡は、小豆とタバコを中心とする畑地で、北西隅に松とアカシアの林が存在し、中央を大里部落から葛岡部落へ通じる市道大里・葛岡線が南北に縦走している。

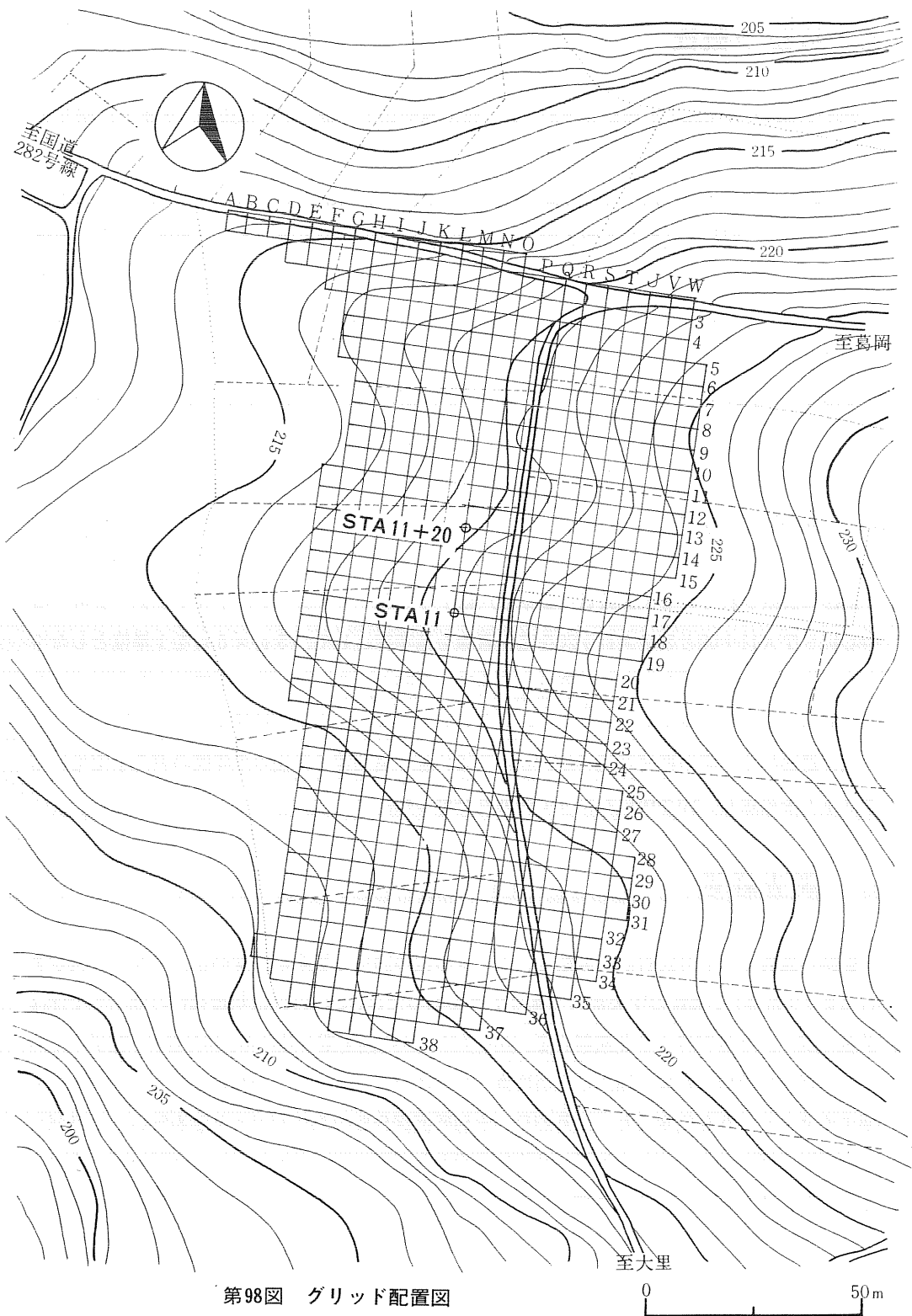
## 2. 調査の方法

遺跡に設置されている東北縦貫自動車道八幡平インター・チェンジ、下りランプ・ウエーの中心杭STA11+00とSTA11+20を結ぶ直線を基準線として、5 m×5 mを1単位としたグリッドを設定した。グリッドの呼称は、東西軸を西端よりアルファベットでA～Xまで、南北軸は算用数字で1～38までとして、その組合せで1-Aというように呼んだ。

又、遺跡は2ヶ年の継続調査であるため、市道大里・葛岡線の東側の来年度の調査予定地にもグリッドを設定し、83ヶ所にわたって坪掘りを行った。

## 3. 調査経過

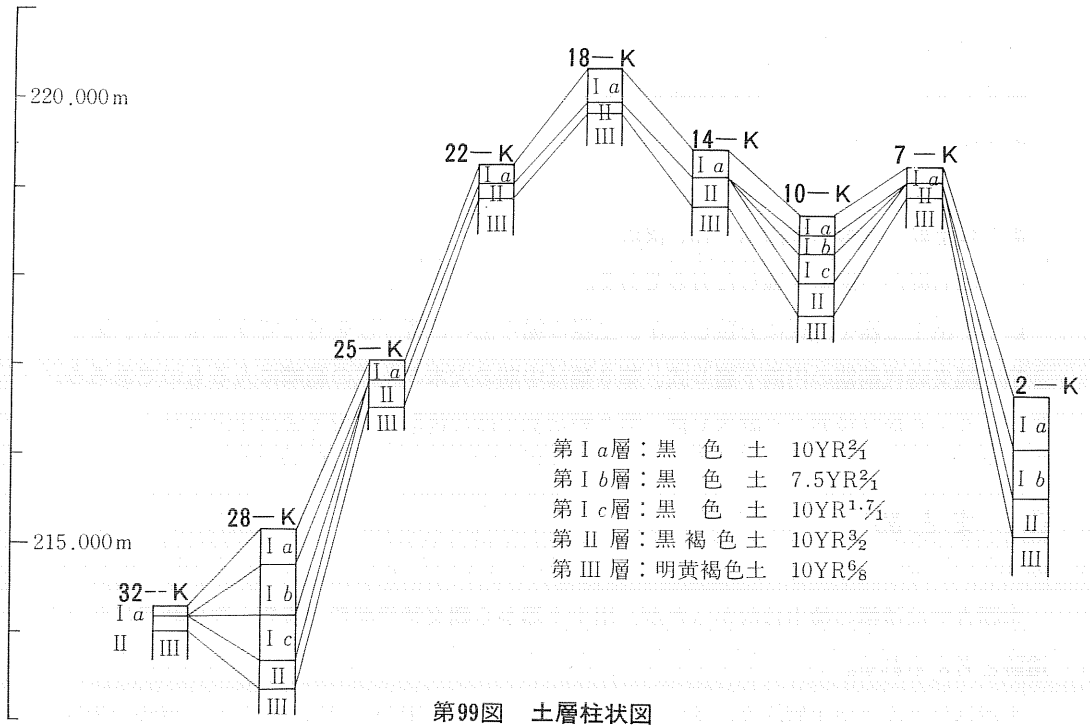
遺跡の調査は、9月20日から開始し、タバコの根の除去と雑木の伐採の後、グリッド設定を行った。9月25日、遺跡の中央部より掘り下げを始めたが、この付近は明黄褐色の地山まで25 cm前後と浅い。9月27日より北側斜面を、10月9日には南側を掘り始める。10月22日、鞍状になっている場所の遺構の有無の確認と土層観察のために、Kラインとその補足としてOラインの一部に南北トレンチを設定した。10月23日、土層断面図作成の為にレベル移動を行い、10月25日より実測を開始した。これと併行して来年度調査予定地の坪掘りを行った。10月31日、遺跡の全体写真を撮った後、撤収して調査を終えた。



第98図 グリッド配置図

#### 4. 遺跡の層位

遺跡の基本的層位は、Kラインに入れた南北トレンチ西壁のセクションから観察すると、次のように分層される。第I a層は黒色土(5~30cm)の耕作土で、第I b層は黒色土(10~28cm)で、まばらに明黄褐色土粒子と所々に小砂礫が混入している層であり、第I c層は黒色土(16~25cm)で、下部に褐色土粒子が微量に混入する層である。第II層は黒褐色土(6~21cm)で、黄褐色土粒子の混入割合が上部から下部へ漸移的に多くなっている層である。第III層は明黄褐色土で、粘土質の地山である。



#### 5. 遺構と遺物

##### (1) 遺 構

遺構は検出されなかった。

##### (2) 遺 物

発掘調査で出土した遺物は土器片のみで、縄文土器片が16点、弥生土器片が3点と少ない。大部分は小破片で、磨滅が著しいものもある。胴部や口縁部の文様・形態上の特徴から以下の7類に分類できる。

第1類土器 (第100図1、図版67)

太い撚糸文の施された土器である。器形は円筒形を呈すものと思われる。

第2類土器 (第100図2、図版67)

結節の羽状縄文の施された土器である。器形は円筒形を呈すものと思われる。

第3類土器 (第100図3、図版67)

粘土紐を渦巻状に貼付している。鉢形の土器で胴部上半の破片であろう。

第4類土器 (第100図4～8・10、図版67)

沈線と磨消縄文の見られるもので4・5はコブを貼付している。

第5類土器 (第100図9、図版67)

縄文を施さず、ミガキの後に沈線をめぐらすものである。

第6類土器 (第100図11～13、図版67)

縄文だけを施したものである。

第7類土器 (第100図14～16、図版67)

いずれも細かい撚糸を施したものである。

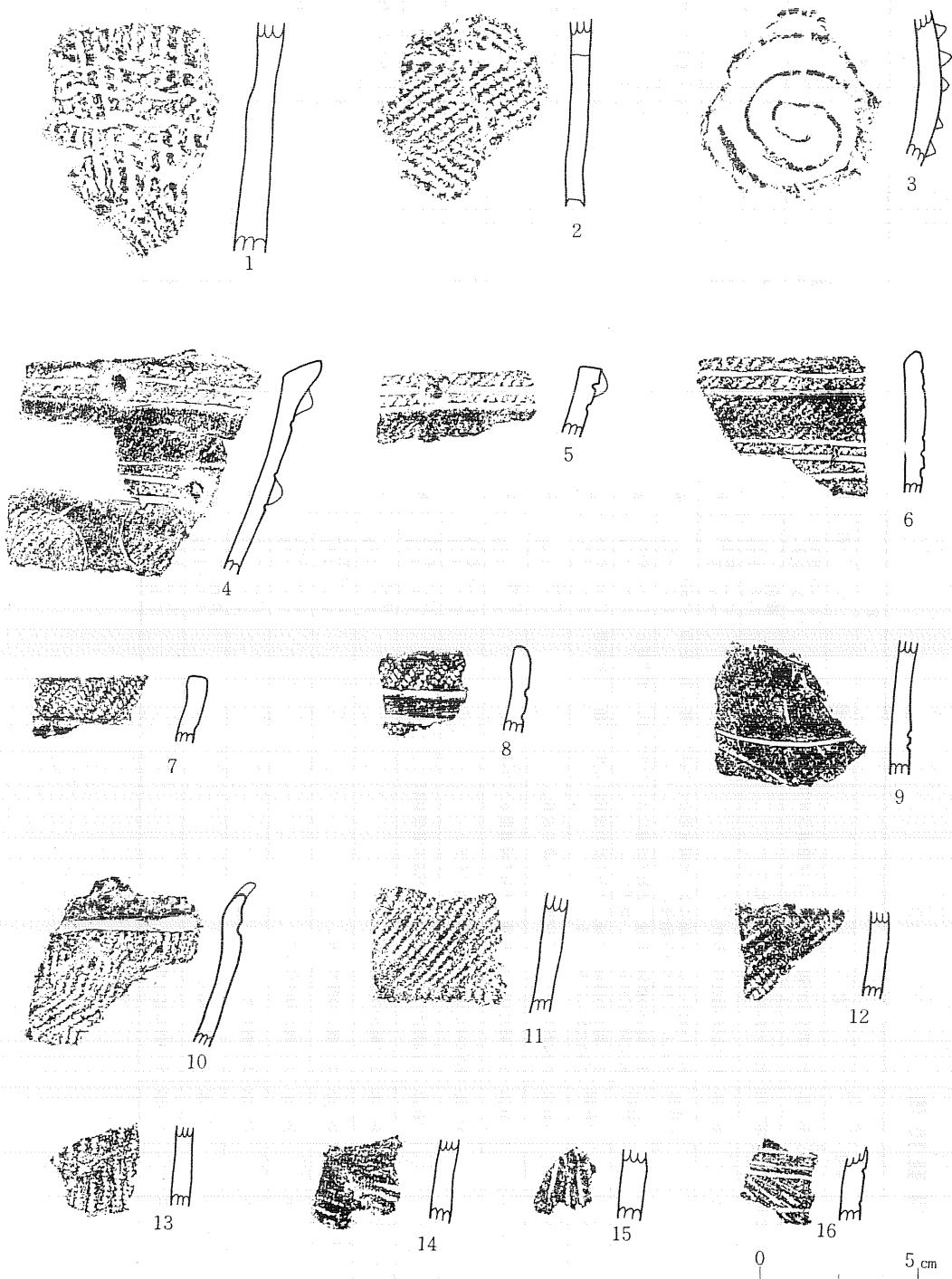
以上、出土土器を7類に分類したが、土器の編年上の位置づけを考えてみるならば、第1・2類は縄文時代前期の円筒下層b式、第3類は中期の大木8b式の範疇に入るものであろう。第4・5・6類は後期の十腰内V群、第7類は弥生時代後期の小坂X式に比定されよう。

## 6. まとめ

本調査では遺構の検出はなかったが、出土土器から縄文時代前期～後期と弥生時代にわたる遺跡と考えられる。

土器はほとんどが小破片で、3片を除いても表土中からの出土である。遺跡一帯は、かつて採草地であったのを、戦後整地して畑地にしたものであり、土器の出土状況や土層の堆積状態を考え合わせると、遺構は整地の際に破壊されたものと考えられる。

なお、来年度調査予定であった市道大里・葛岡線の東側をグリッドに沿って1m四方、83ヶ所にわたり調査したが、遺構・遺物は全く検出されなかったため、今回で発掘調査を打ち切り、来年度は調査を行わないことにした。



第100图 土器拓影图

第28表 土器観察表

番号	出土地点	層位	RP番号	部位	外面		内面		器厚 (mm)	胎土	焼成	備考
					文様	色調	調整	色調				
1		第1層		胴部	Rの捺糸文が縦位施文後、Lの捺糸文が3条横位に施される。	にふい橙色 7.5 Y R ¼		にふい橙色 7.5 Y R ¼	8	繊維 白色粒	粗	不良
2		第1層		胴部	R L + L Rの結節羽状縄文。	橙色 7.5 Y R ¾		橙色 7.5 Y R ¾	5	繊維	粗	不良
3	12-J	第3層		胴部	粘土紐を渦巻状に貼付。	にふい橙色 5 Y R ¾	横位	にふい橙色 5 Y R ¾	8	石英 赤色粒	密	良好
4	12-J	第3層		口縁部	波状口縁を呈し、沈線によって縄文帯とすり消し、無文帯に区画される。2個のコブ貼付。	灰褐色 7.5 Y R ½	横位	にふい橙色 7.5 Y R ¾	5		粗	普通 外面スス付着
5		第1層		口縁部	L R縄文の横位回転後、2条の沈線によってすり消し、無文帯と縄文帯に区画される。コブ貼付。	にふい橙色 7.5 Y R ¾	横位	にふい橙色 7.5 Y R ¾	6	石英	粗	普通
6	11-J	第1層		口縁部	L R縄文の横位回転後、2条1組の沈線によりすり消し、無文帯と縄文帯に区画される。	にふい橙色 7.5 Y R ¾	横位	にふい橙色 5 Y R ¾	6	石英	粗	普通
7		第1層		口縁部	口縁部L R縄文の横位回転、1条の沈線。	灰褐色 7.5 Y R ½	横位	灰褐色 7.5 Y R ½	6		密	良好 外面スス付着
8		第1層		口縁部	L R縄文の横位回転後、2条の沈線間をすり消す。	灰褐色 7.5 Y R ½	横位	灰褐色 7.5 Y R ½	6	白色粒	密	良好
9	12-J	第3層		胴部	縦位のミガキの後沈線をめぐらす。	にふい橙色 7.5 Y R ¼		にふい橙色 7.7 Y R ¼	5	石英 赤色粒	粗	普通
10	31-J	第1層		口縁部	口縁部に1条の沈線、R L縄文の斜位回転。	にふい橙色 7.5 Y R ¾	横位	にふい橙色 7.5 Y R ¾	6	石英	密	良好
11	11-J	第1層		胴部	L R縄文の横位回転。	灰褐色 7.5 Y R ½	斜位	灰褐色 7.5 Y R ½	6	石英 白色粒	粗	普通 外面スス付着
12		第1層		胴部	L R縄文の横位回転。	にふい橙色 7.5 Y R ¾		橙色 7.5 Y R ¾	6		密	良好
13		第1層		胴部	L R縄文の斜位回転。	にふい褐色 7.5 Y R ¾		にふい褐色 7.5 Y R ¾	6	石英 白色粒	密	普通 外面スス付着
14		第1層		胴部	Rの捺糸文。	にふい褐色 7.5 Y R ¾	横位	明赤褐色 5 Y R ¾	6		密	良好
15		第1層		胴部	Rの捺糸文。	橙色 2.5 Y R ¾	横位	橙色 2.5 Y R ¾	8	石英 白色粒	密	普通
16		第1層		胴部	Rの捺糸文と沈線。	にふい褐色 7.5 Y R ¾	横位	にふい褐色 7.5 Y R ¾	7	白色粒	密	普通



主要参考文献

- 奥山 潤・安保 彰「十和田湖西南部（小坂鉦山）の弥生式文化とその後続形態（上・下）『考古学雑誌』 第49巻第2・3号 1963年
- 奥山潤「秋田県北半部の弥生文化終末後の土器序説」『秋田考古学』 10周年記念特集号  
1964年
- 十腰内遺跡調査団『青森県弘前市十腰内縄文式遺跡調査予報 十腰内』 1969年
- 江坂輝弥編『石神遺跡』 ニューサイエンス社 1970年
- 村越 潔『円筒土器文化』 雄山閣 1974年
- 安保 彰『小坂のあけぼの 縄文期・弥生期』 1975年
- 鈴木克彦「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」『北奥古代文化』 第8号  
1976年

图

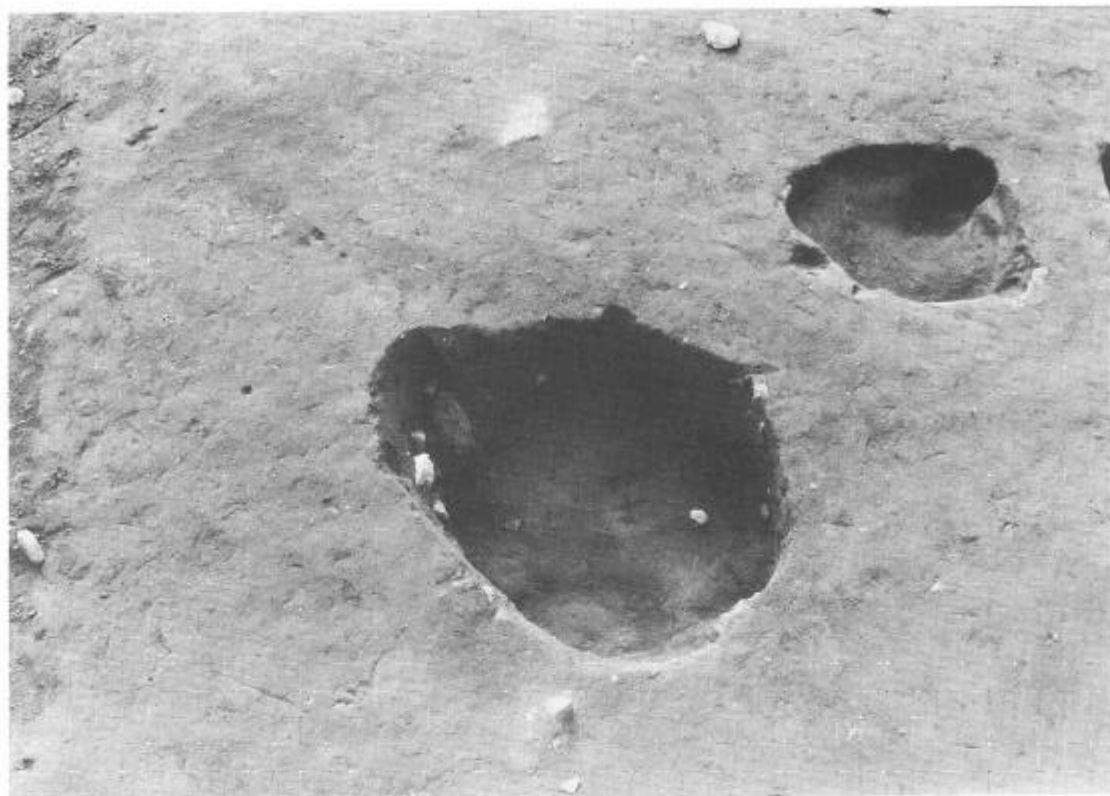
版



図版1 居熊井遺跡遠景 (上)北東▶南西 (下)南東▶北西



図版 2 SI 001住居跡



図版3 SK 001~003土坑 (上) SK 001・002(西▶東) (下) SK 003(西▶東)

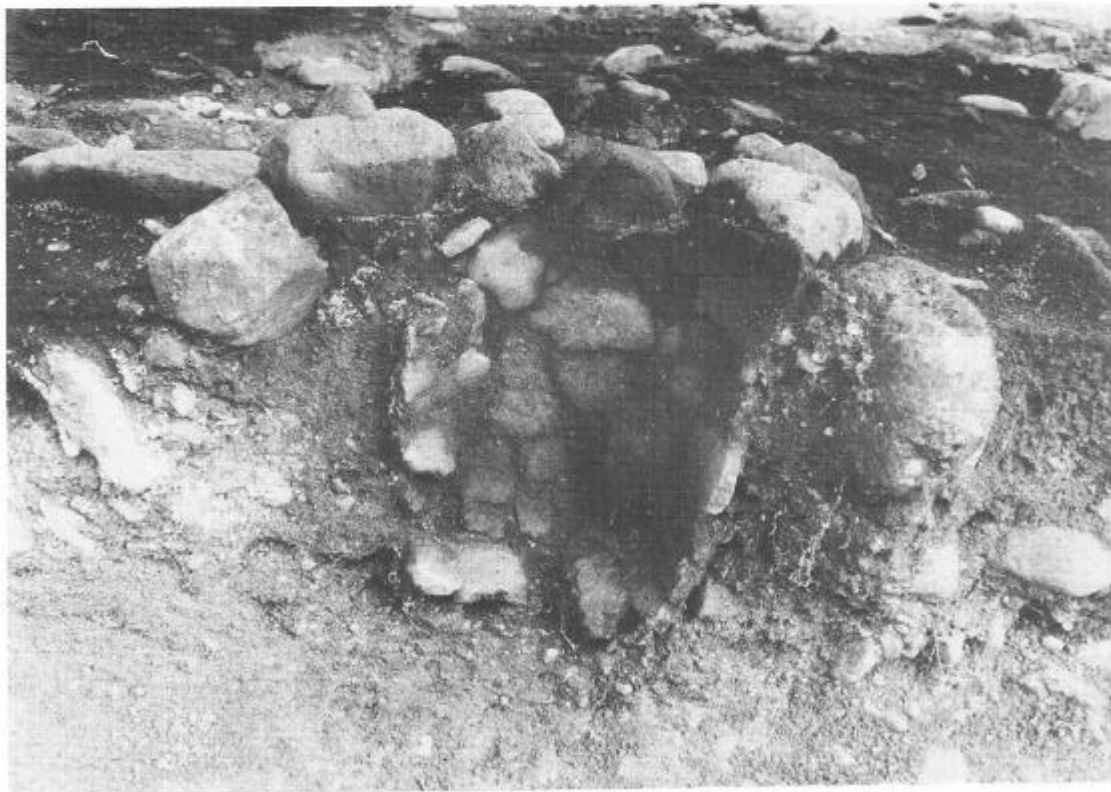


図版4 SK 004・005土坑 (上) SK 004(南▶北) (下) SK 005(西▶東)





図版5 SK 006・007土壇 (上) SK 006(西▶東) (下) SK 007(西▶東)



図版 6 SX(U) 001土器埋設遺構 (上) 検出状況 (下) 断面





図版7 (上) SX(R) 001捨場サブトレンチ設定状況 (下) SX(R) 001捨場遺物出土状態



図版8 SX(R)001捨場5-Aグリッド遺物出土状態

居熊井遺跡

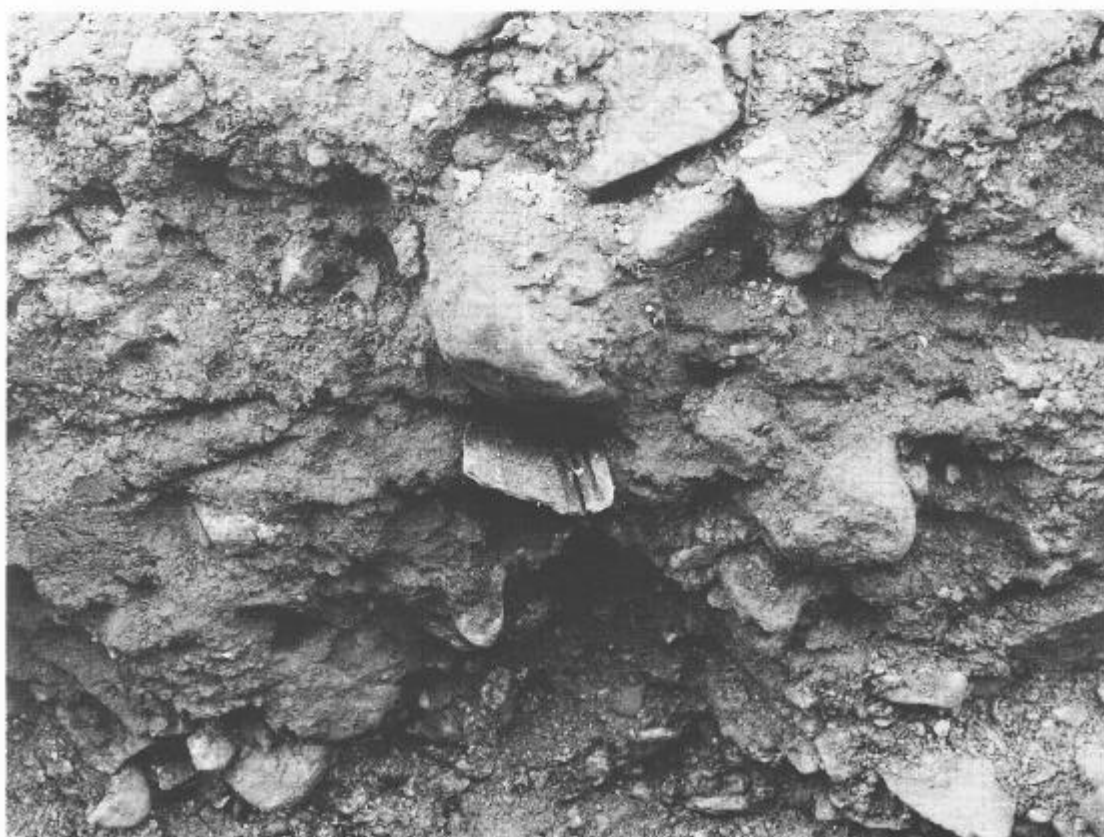


図版9 SX(R)001捨場出土状態 (左上) 耳飾 (右上) ミニチュア土器 (下) 小形磨製石斧

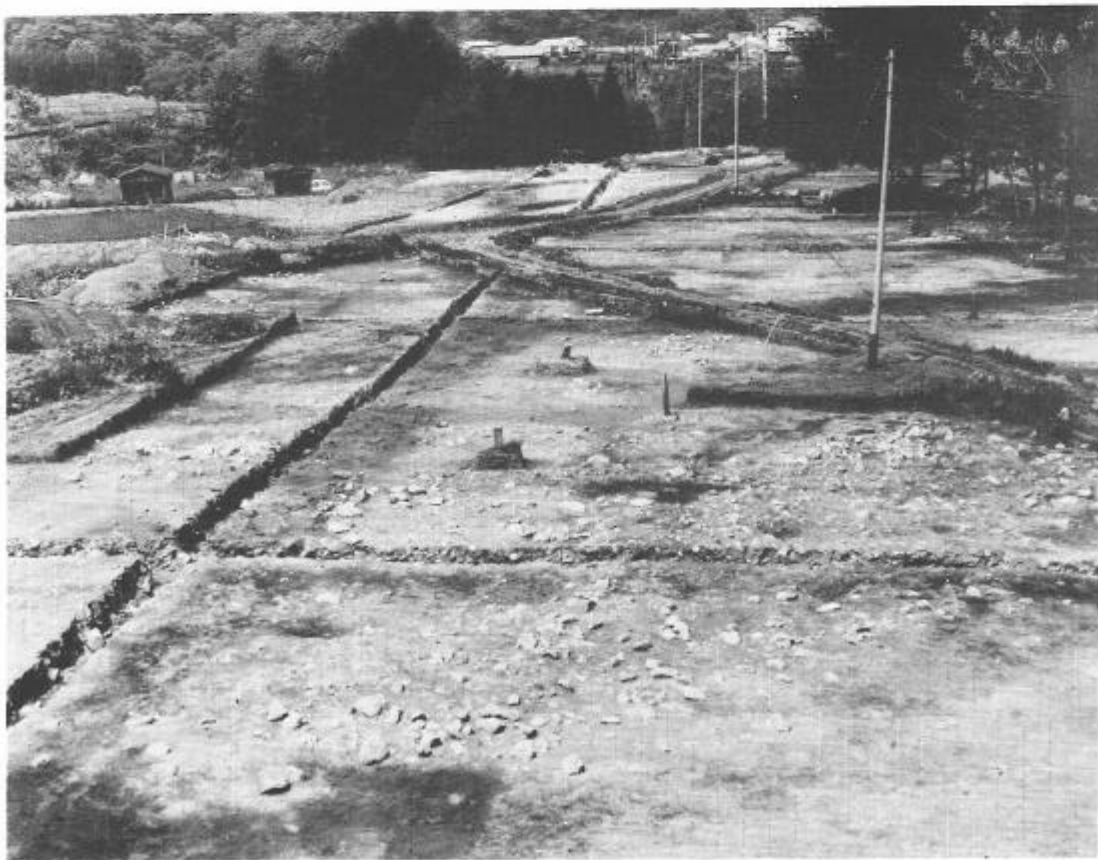
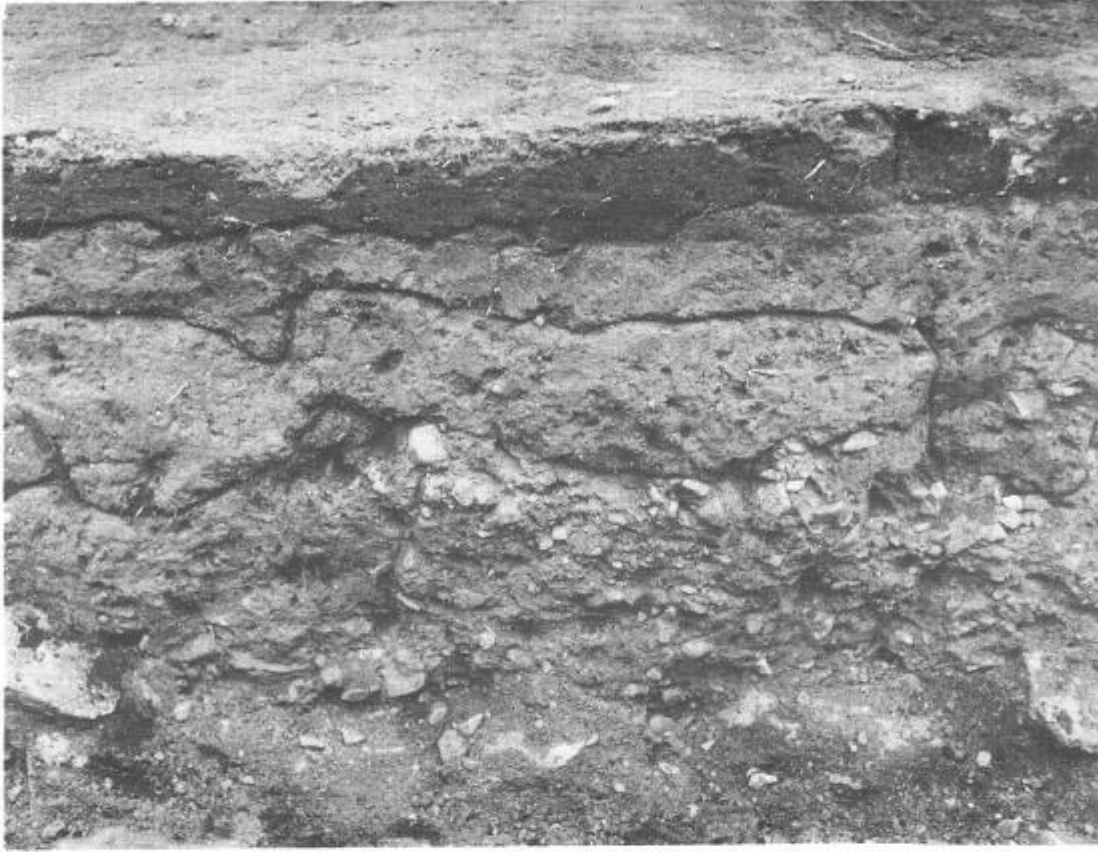


図版10 SX(R)001捨場全景 (上) 遺物取り上げ前 (下) 取り上げ後

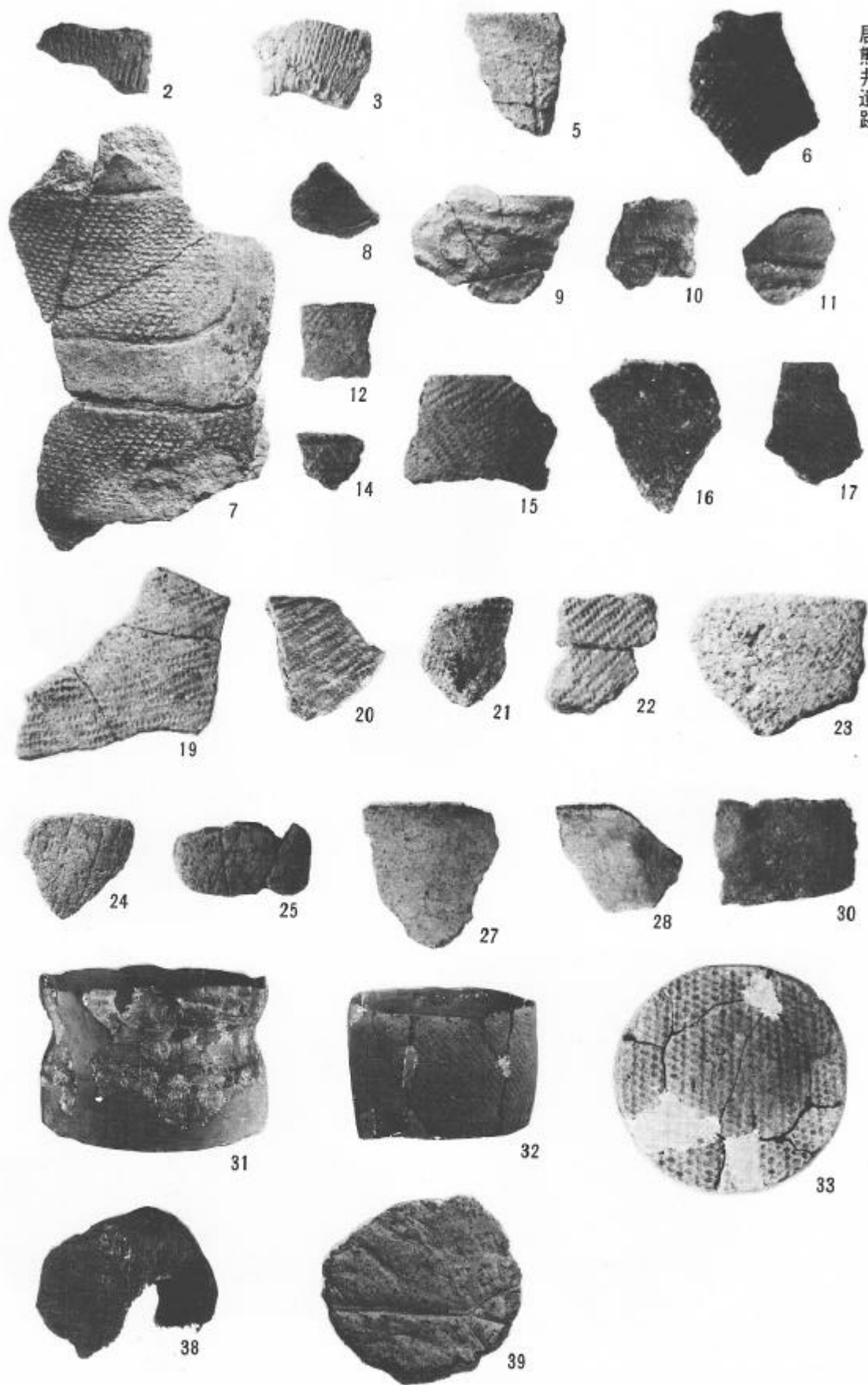




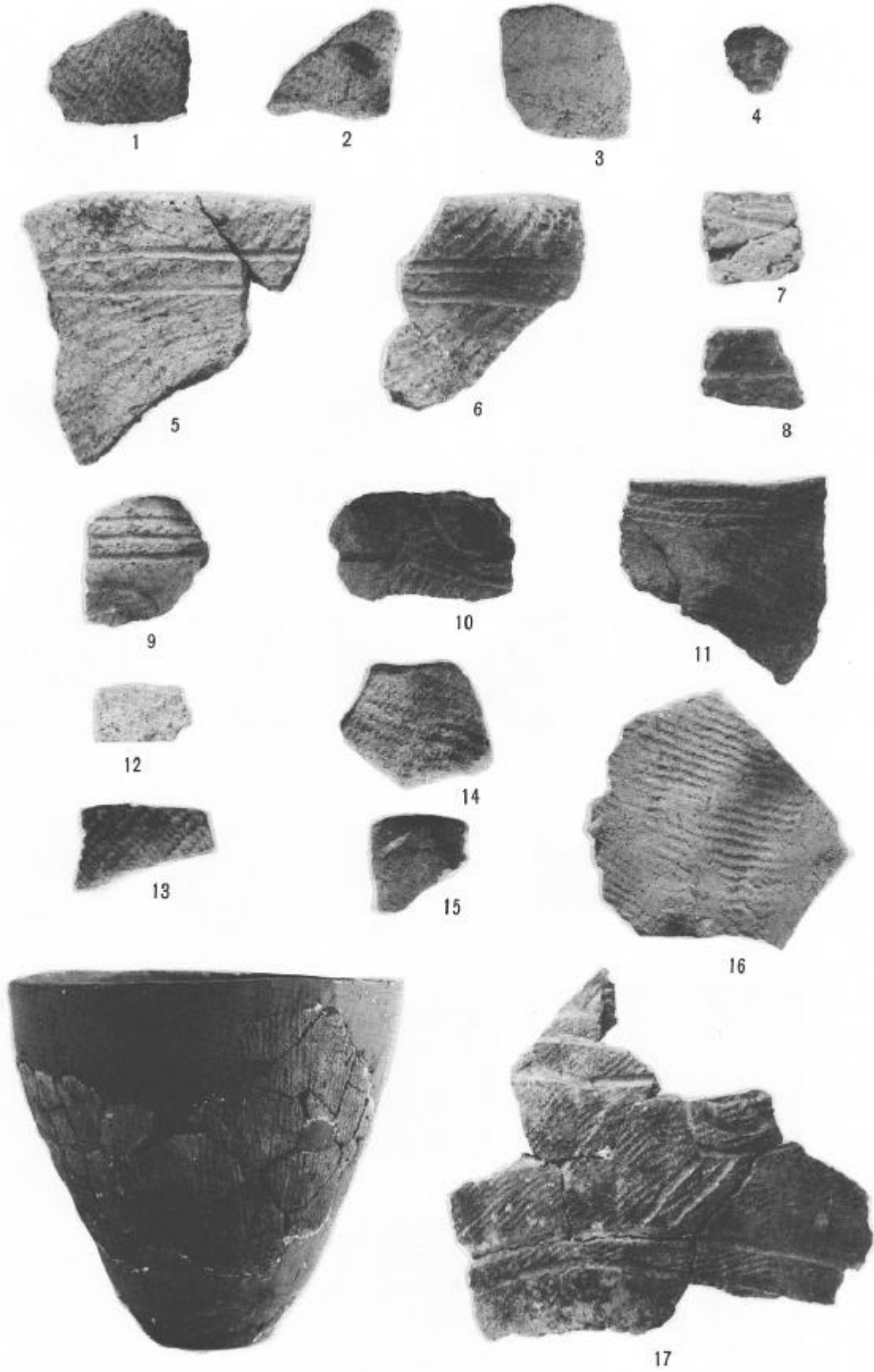
図版11 遺物出土状態 (上) 石皿出土状態 (下) 8-CグリッドV層内土器出土状態



図版12 (上) 12-Dグリッド土層断面 (下) 遺跡全景(東▶西)

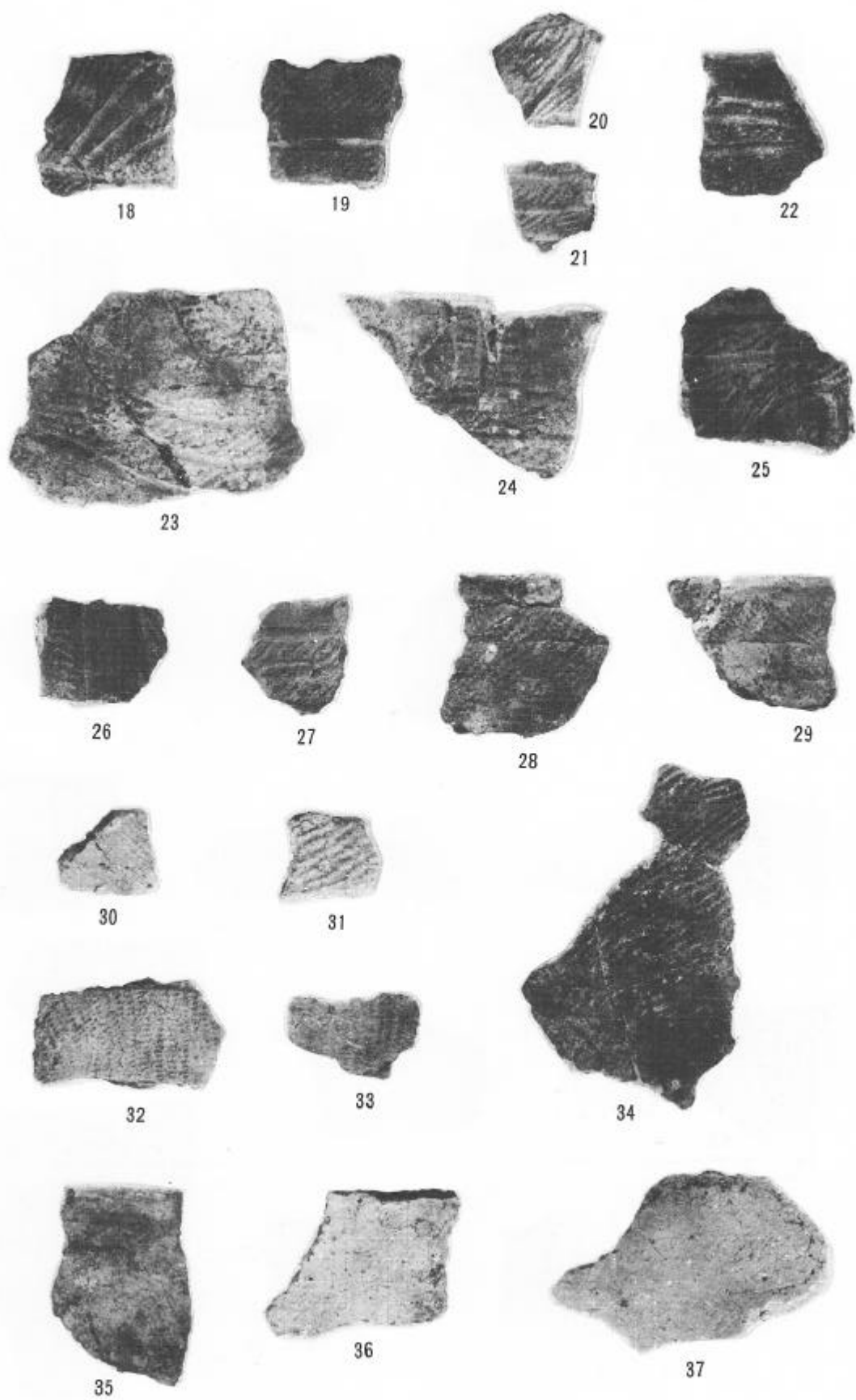


図版13 SI 001住居跡出土土器

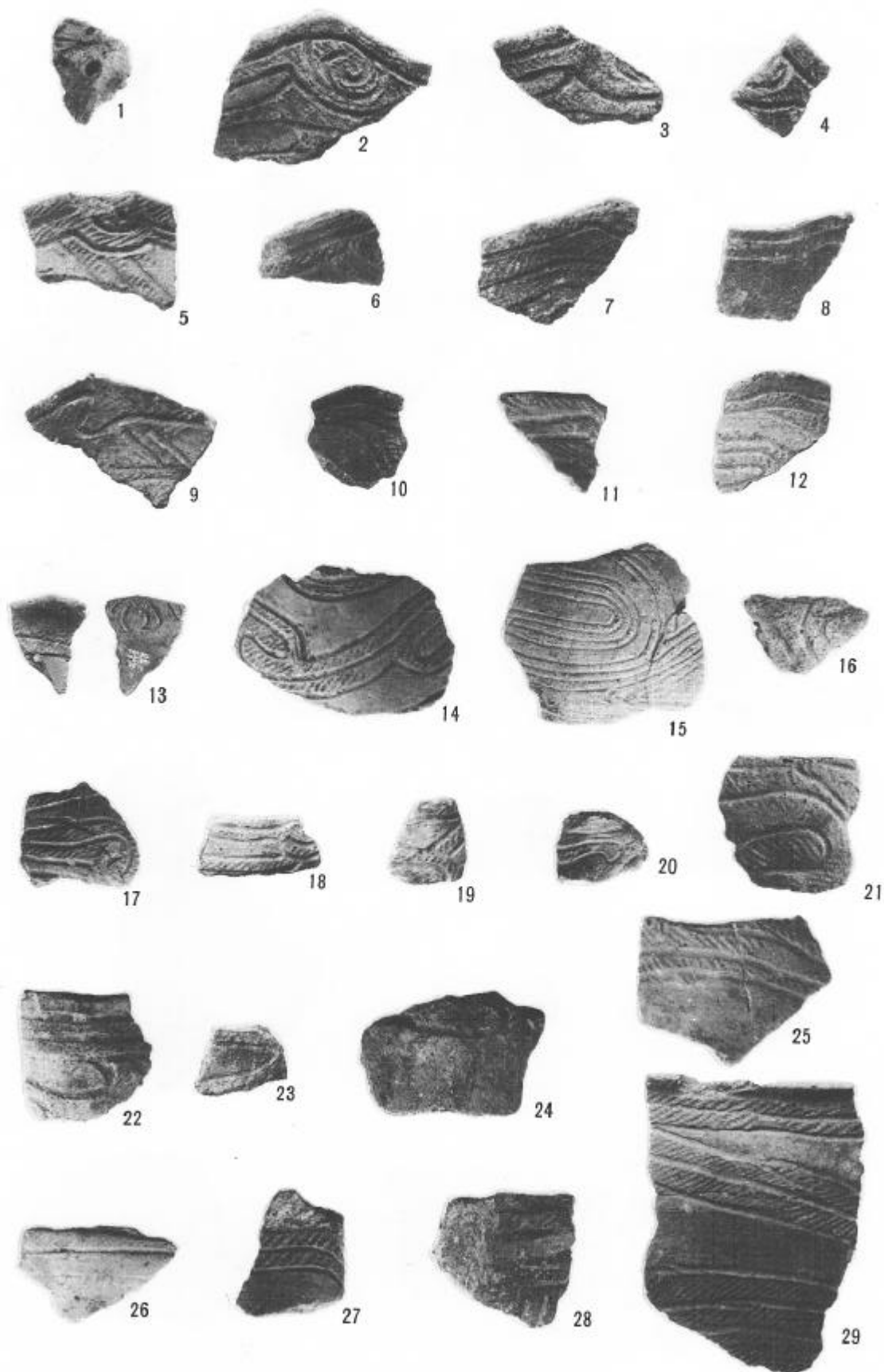


図版14 土壙出土土器(1), 土器埋設遺構出土土器

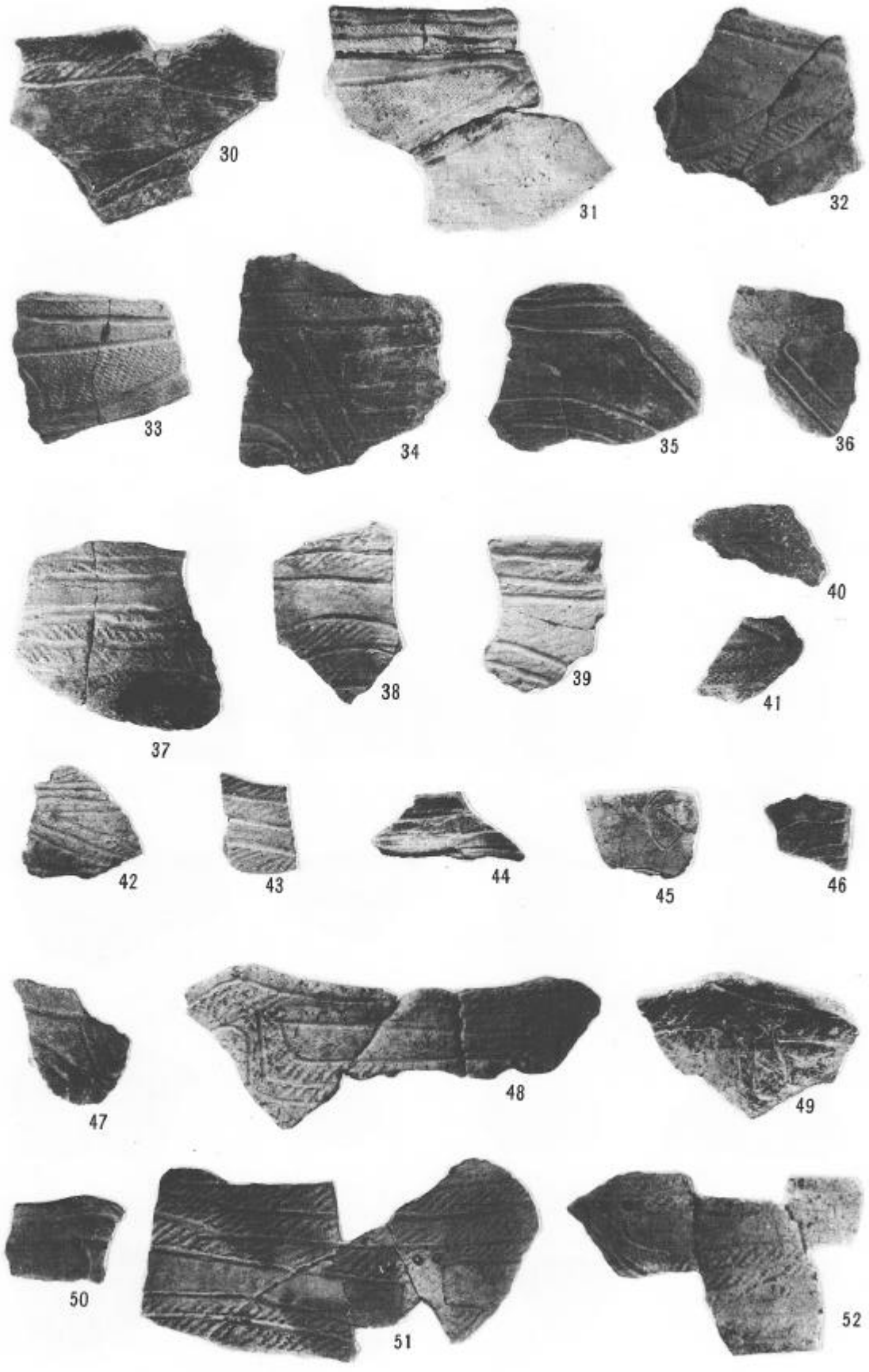




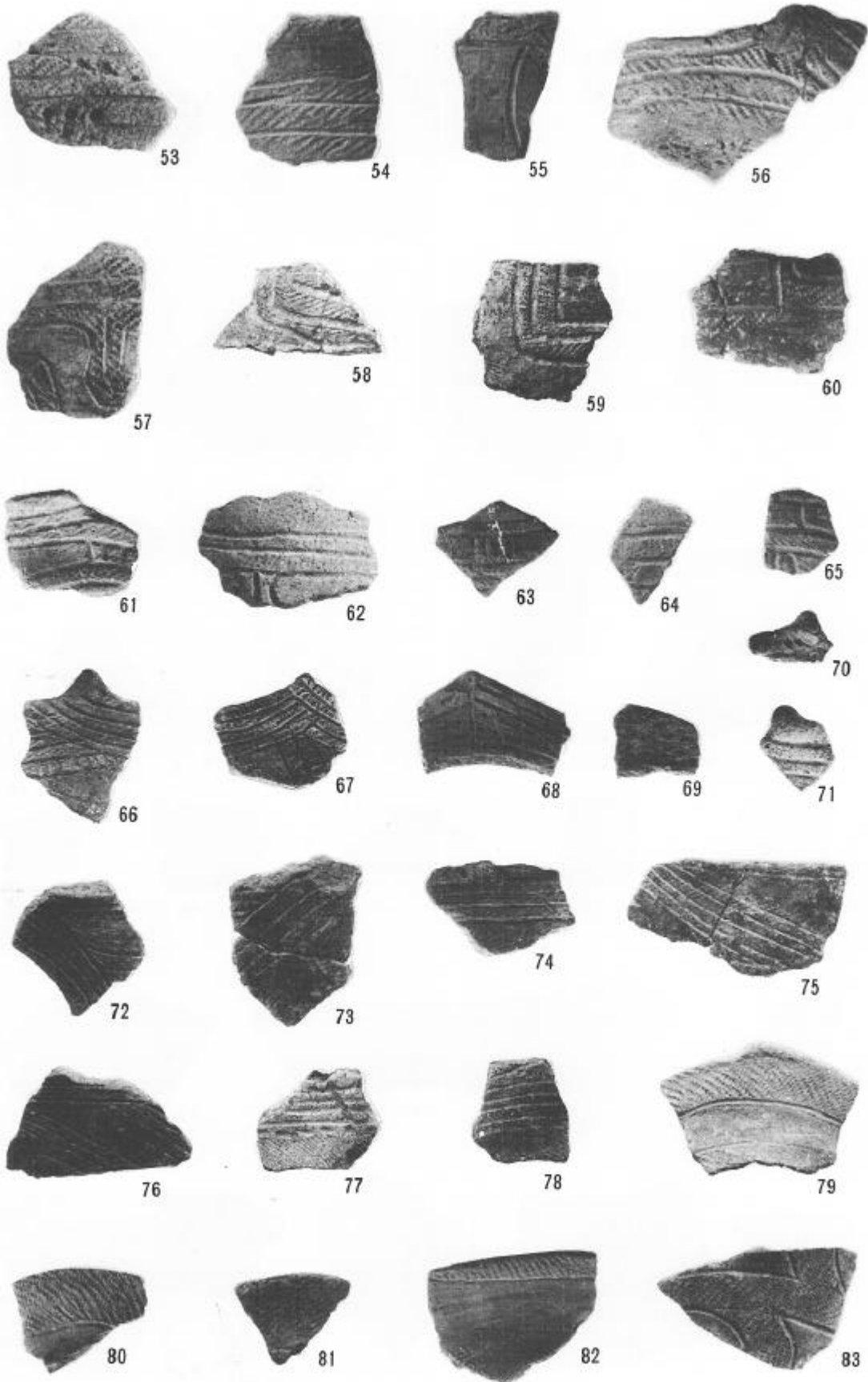
圖版15 土壙出土土器(2)



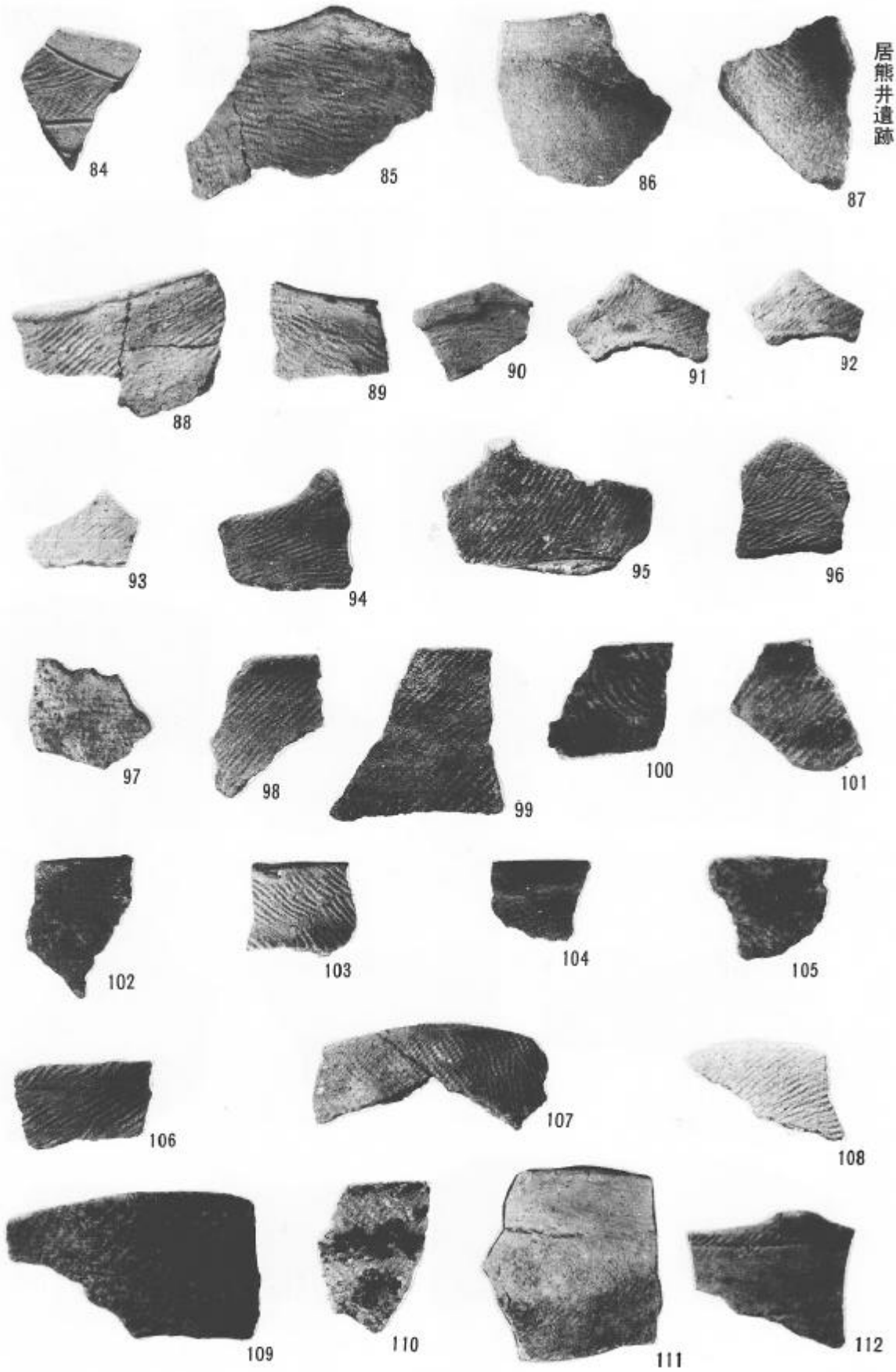
図版16 SX(R) 001捨場出土土器(1)



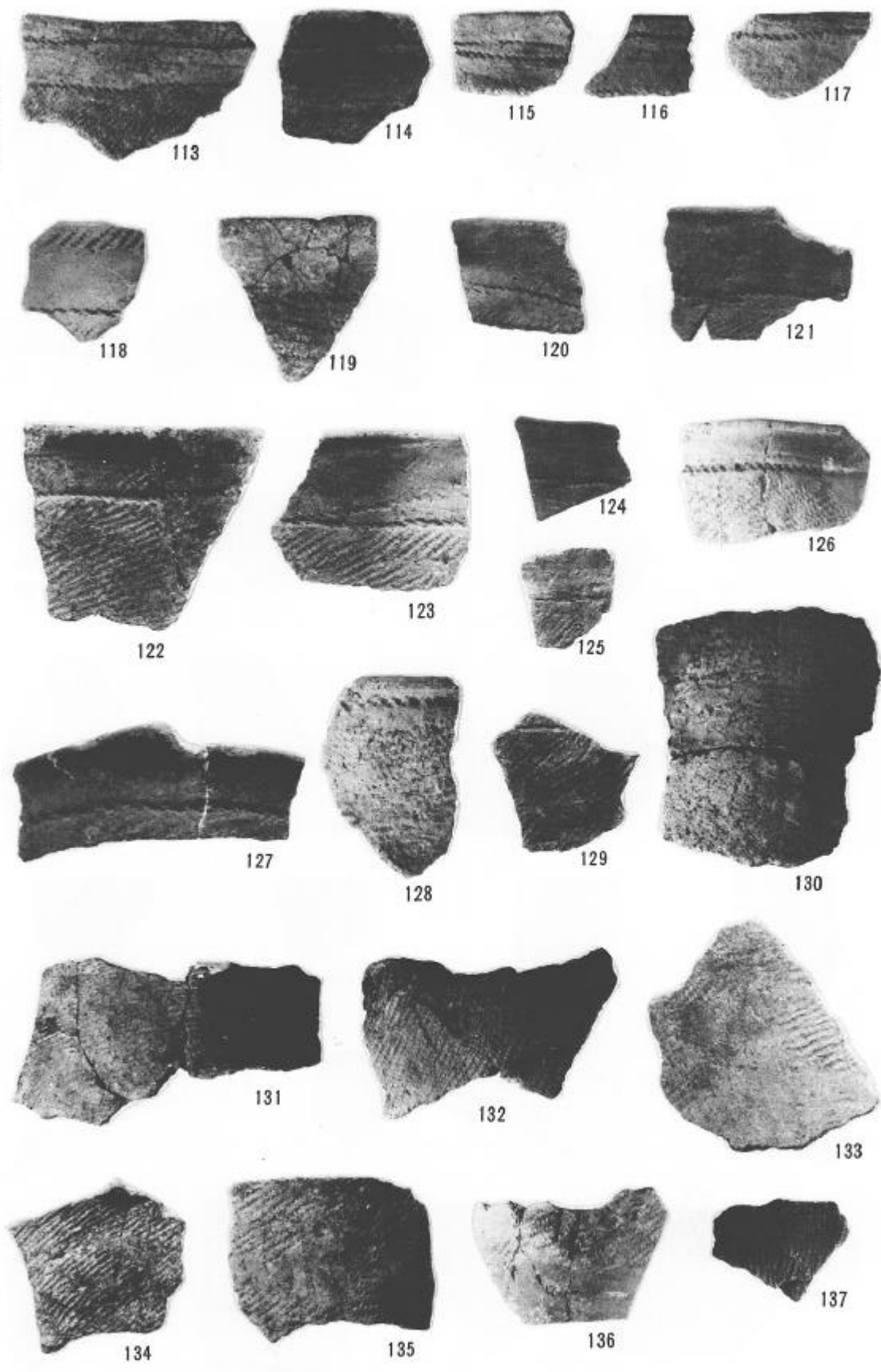
図版17 SX(R) 001捨場出土土器(2)



図版18 SX(R) 001捨場出土土器(3)



図版19 SX(R) 001拾場出土土器(4)



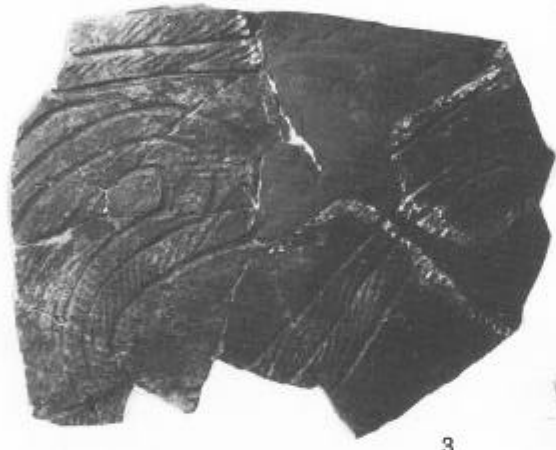
図版20 SX(R) 001捨場出土土器(5)



1



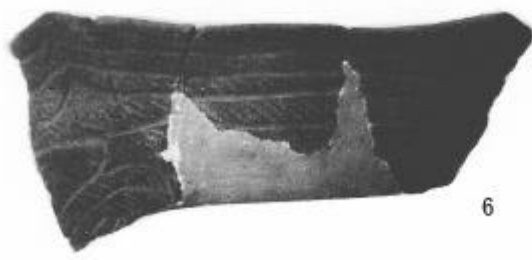
2



3



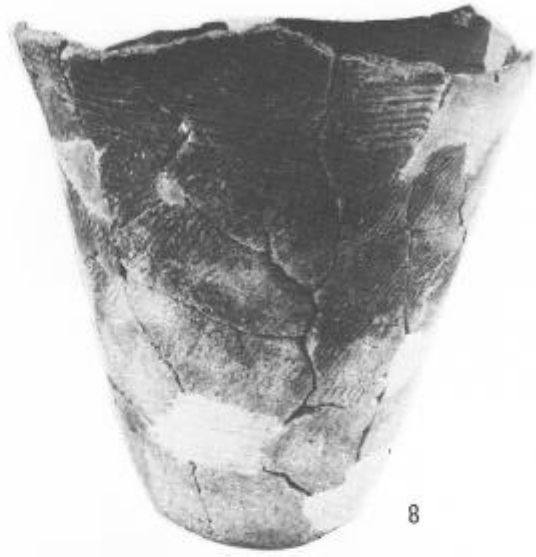
4



6

図版21 SX(R) 001捨場出土土器(6)

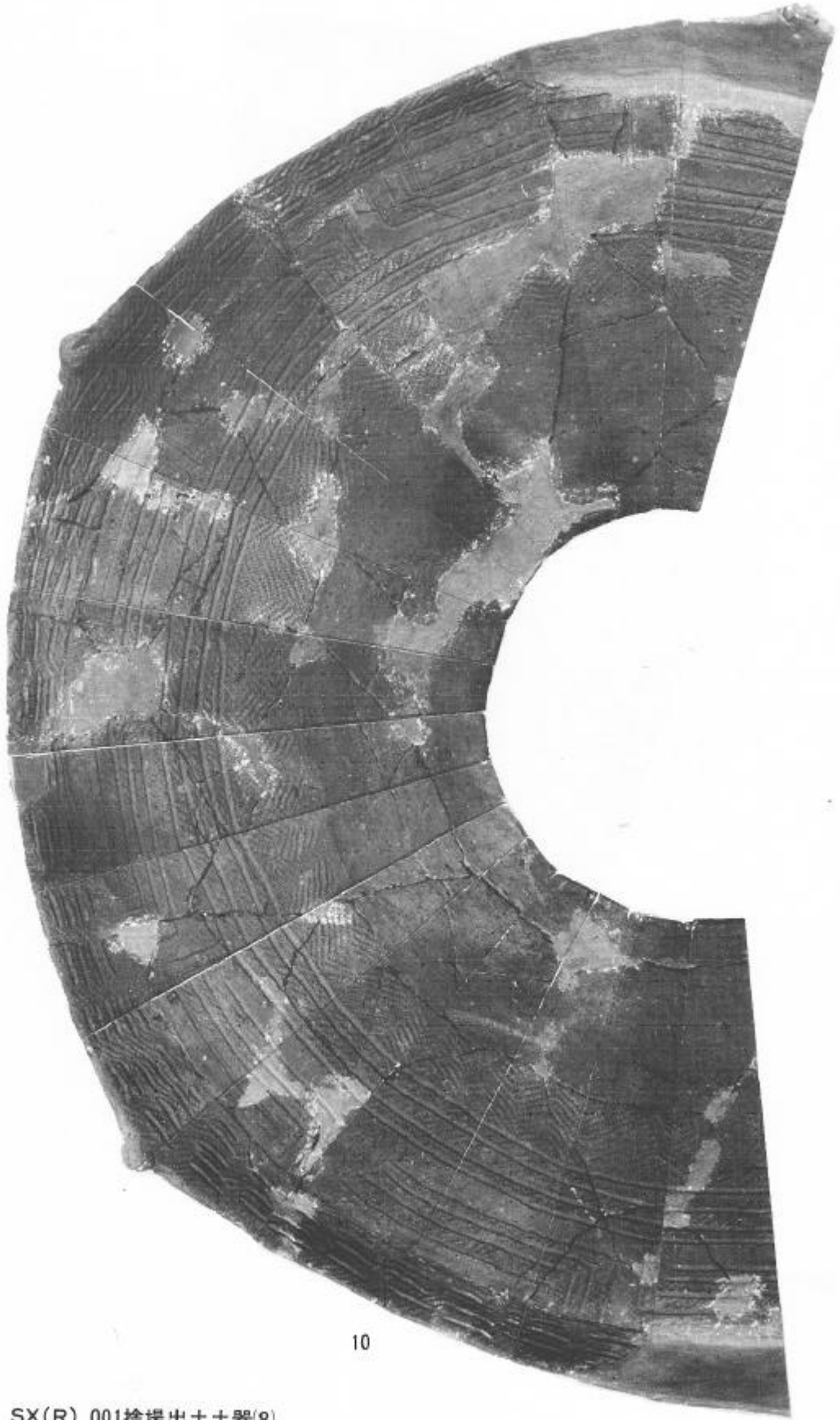
居熊井遺跡



図版22 SX(R) 001捨場出土土器(7)



居熊井遺跡



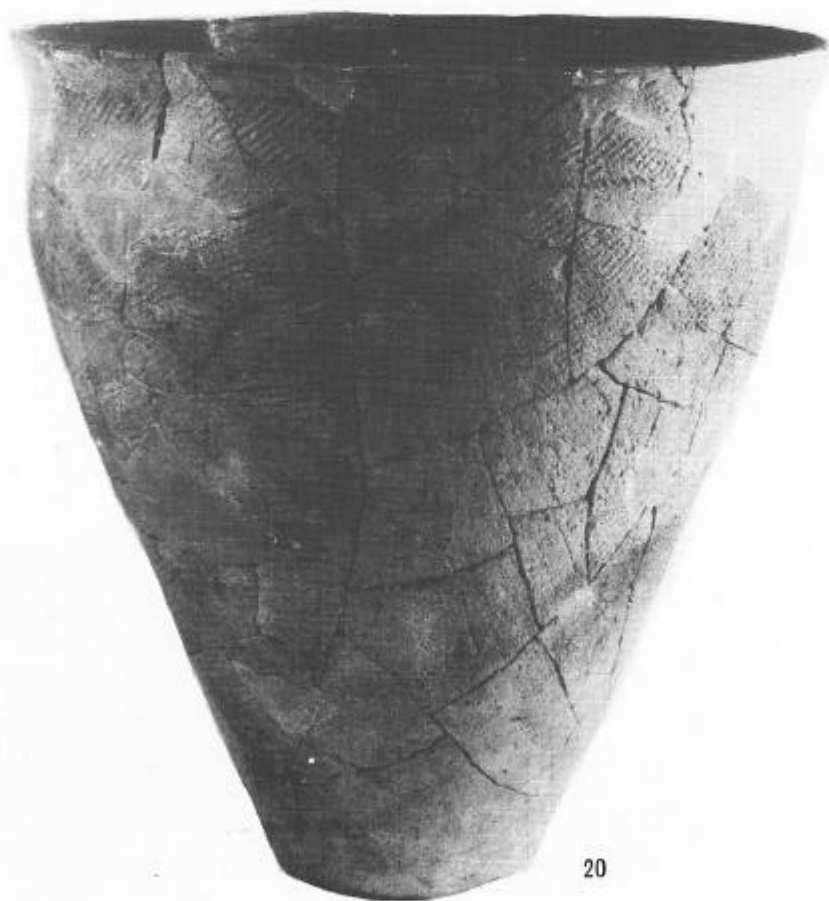
10

図版23 SX(R) 001捨場出土土器(8)

居熊井遺跡



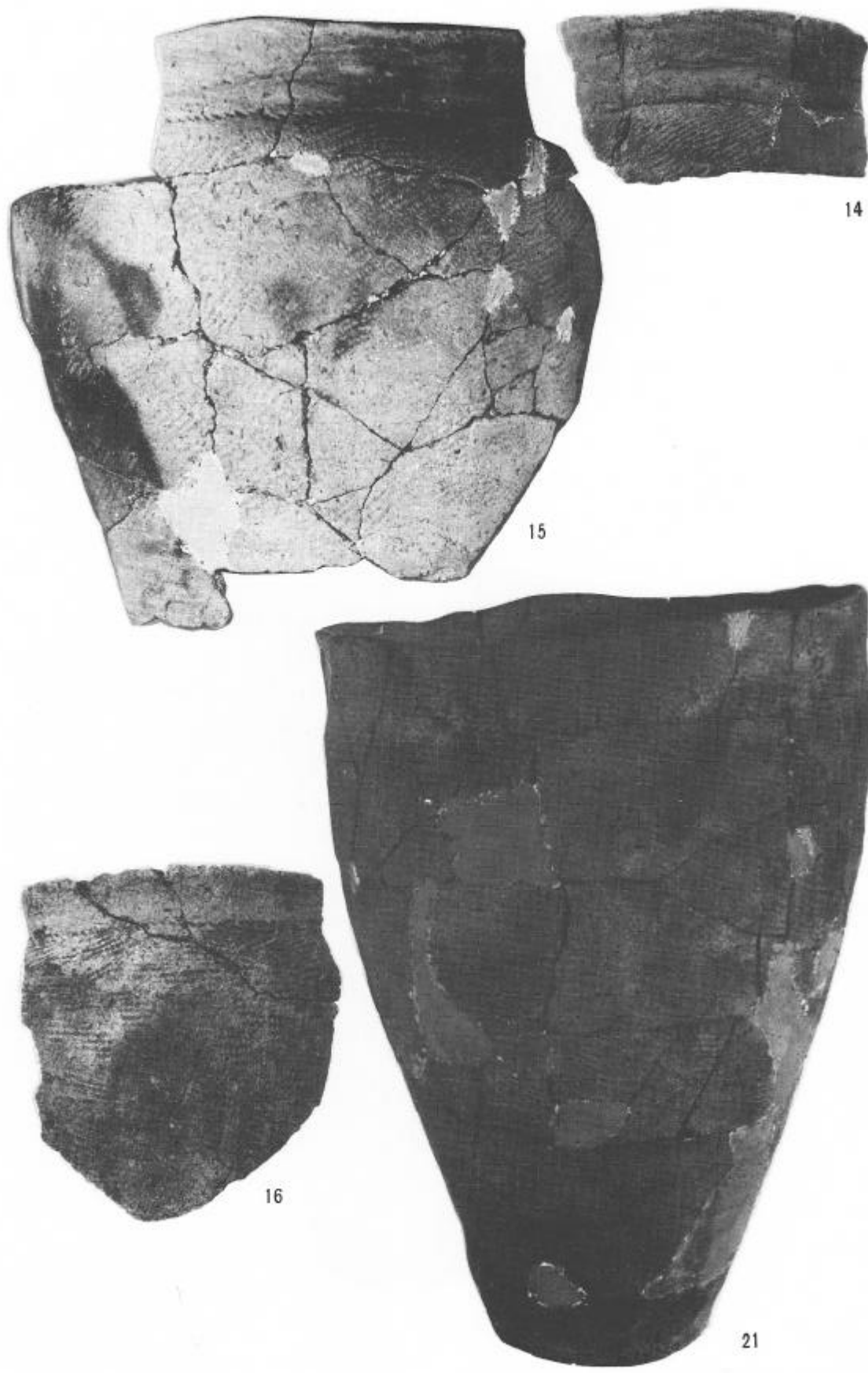
12



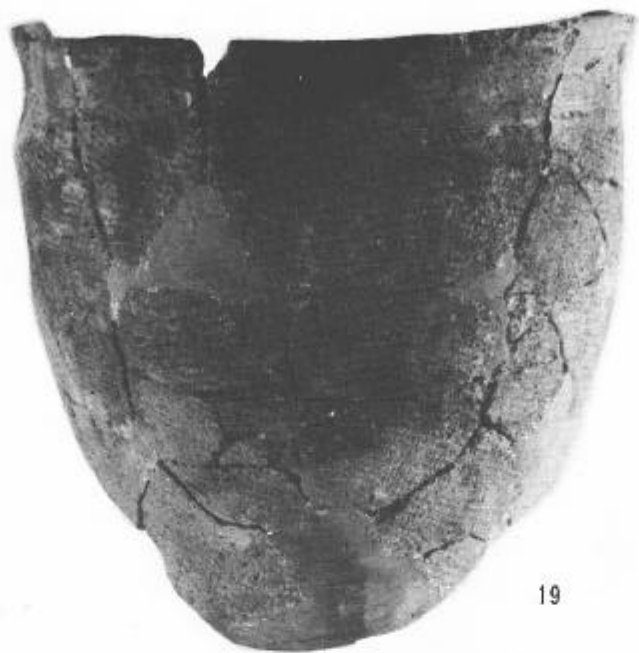
20

図版24 SX(R) 001捨場出土土器(9)

居熊井遺跡



図版25 SX(R) 001捨場出土土器(10)



19



18

図版26 SX(R) 001捨場出土土器(1)



15



23

図版27 SX(R) 001捨場出土土器(2)



図版28 SX(R) 001捨場出土土器(13)



24



28



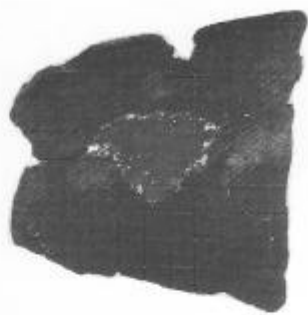
26

図版29 SX(R) 001捨場出土土器(4)

居熊井遺跡



27



29



30



35



31



32

図版30 SX(R) 001捨場出土土器(5)

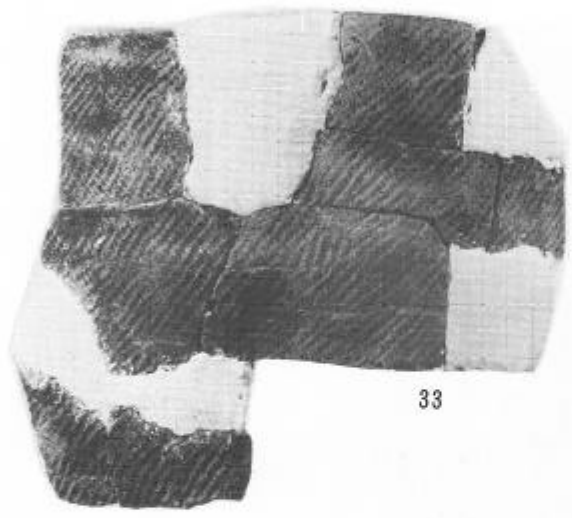




40



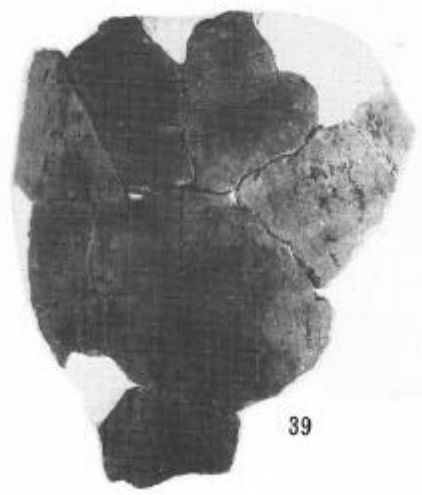
34



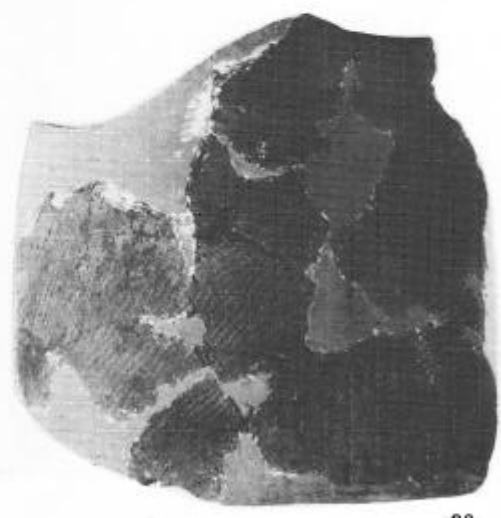
33



36



39



38

図版31 SX(R) 001捨場出土土器(16)



45



44

図版32 SX(R) 001捨場出土土器(17)



42

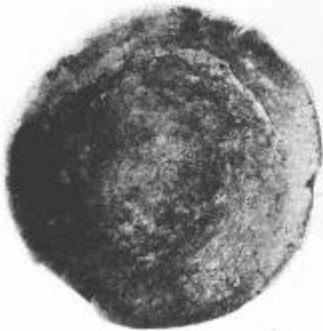
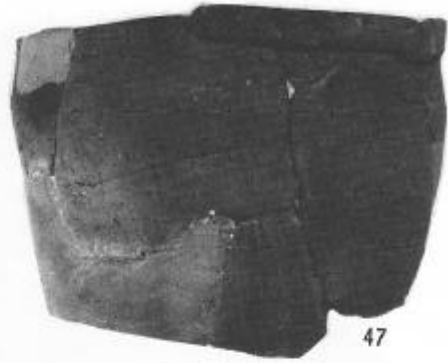


43

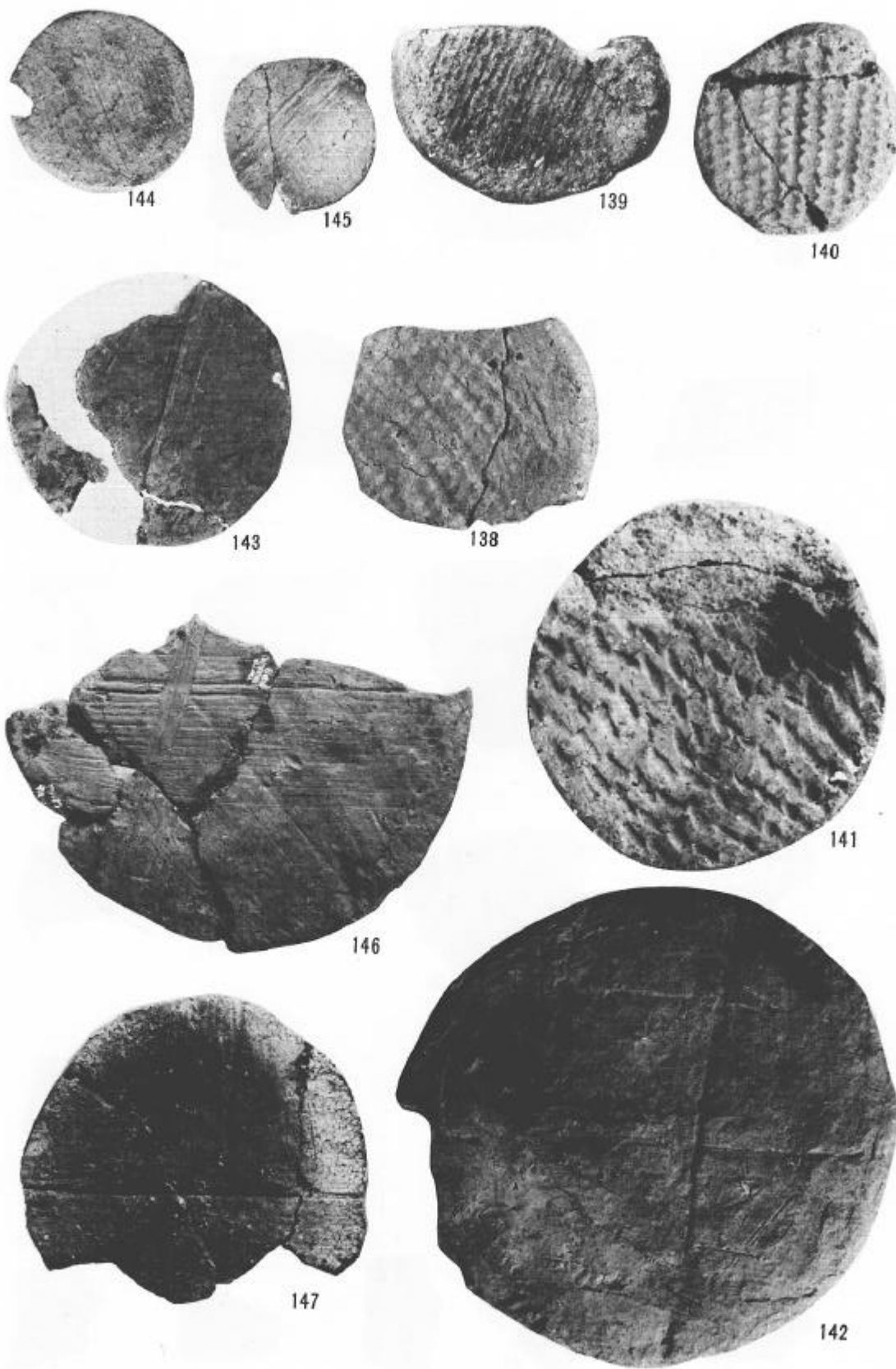


41

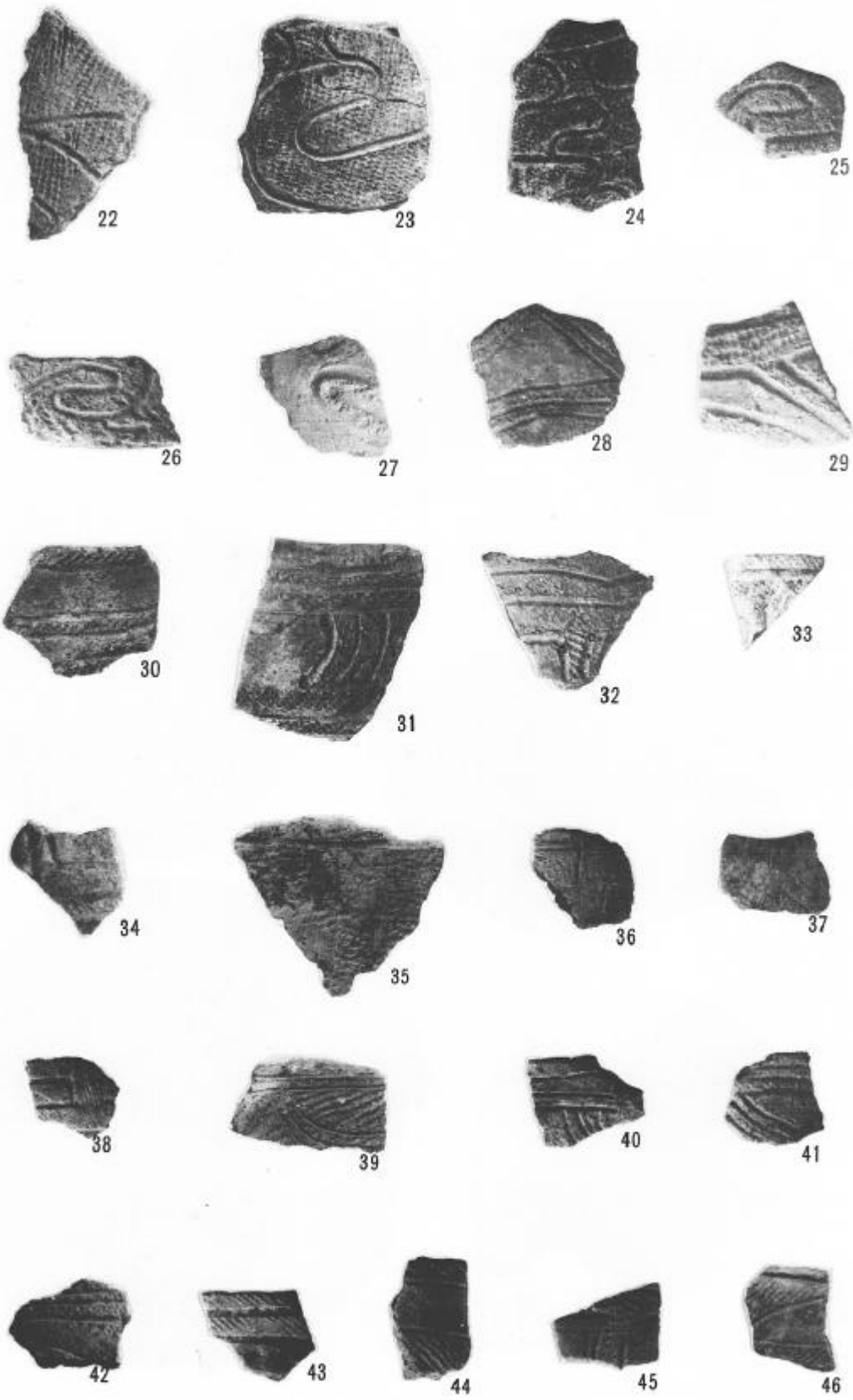
図版33 SX(R) 001捨場出土土器(18)



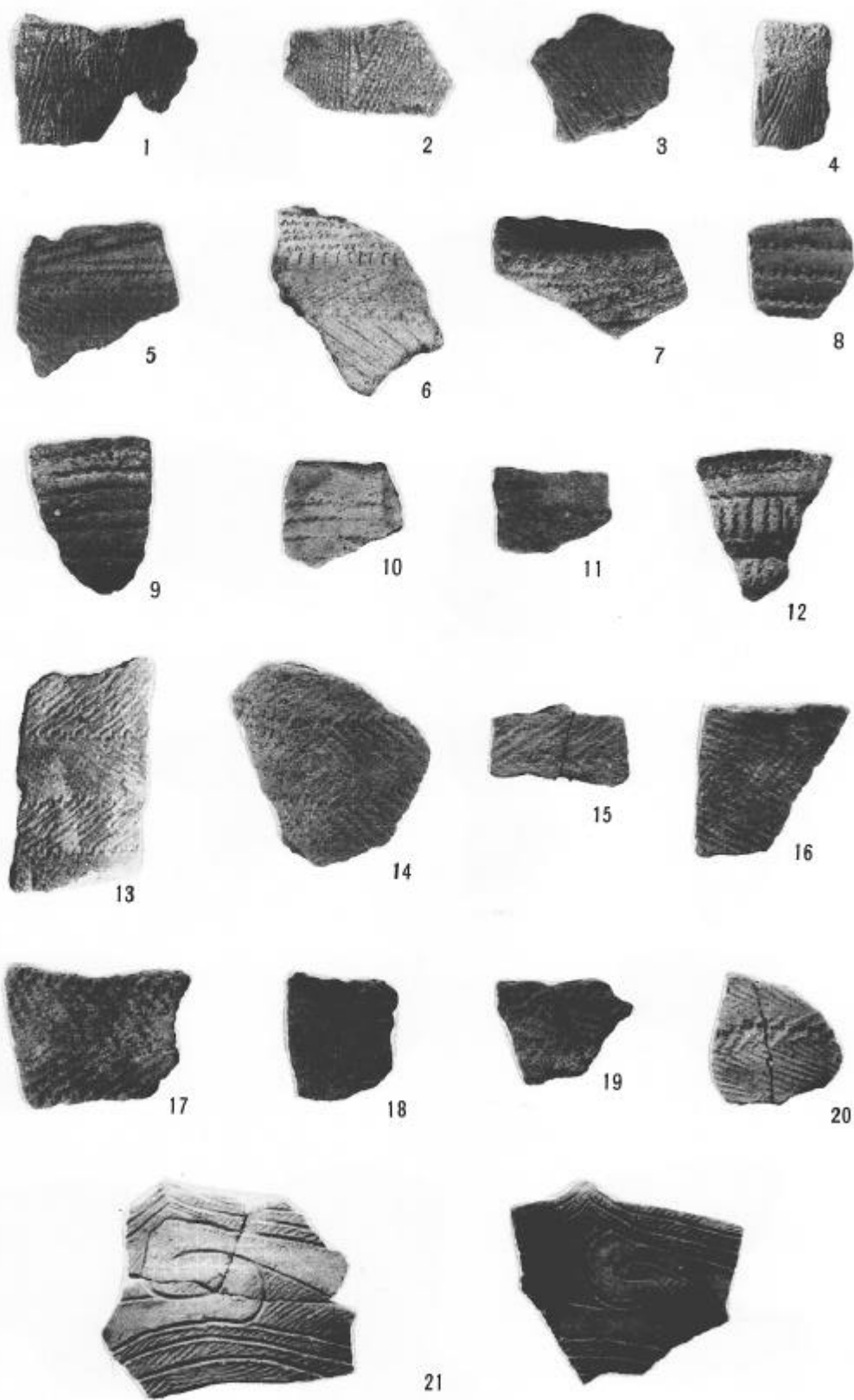
図版34 SX(R) 001捨場出土土器(19) 耳飾



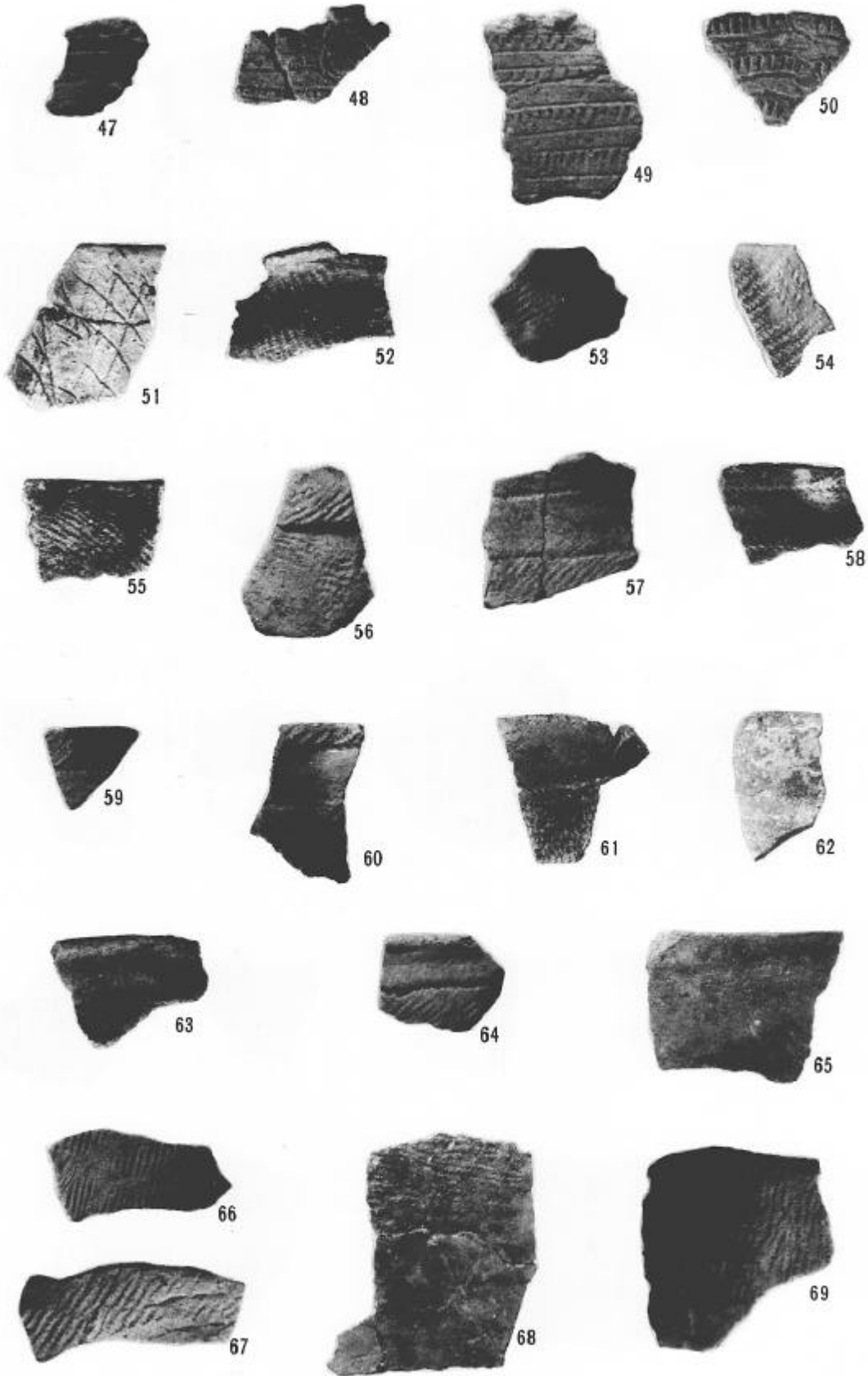
图版35 SX(R) 001捨場出土土器20



図版36 遺構外出土土器(1)



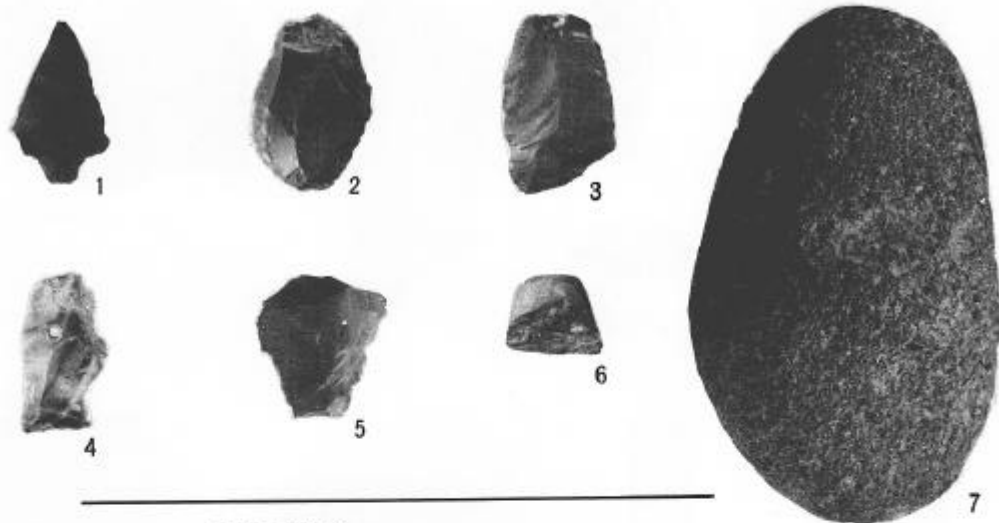
図版37 遺構外出土土器(2)



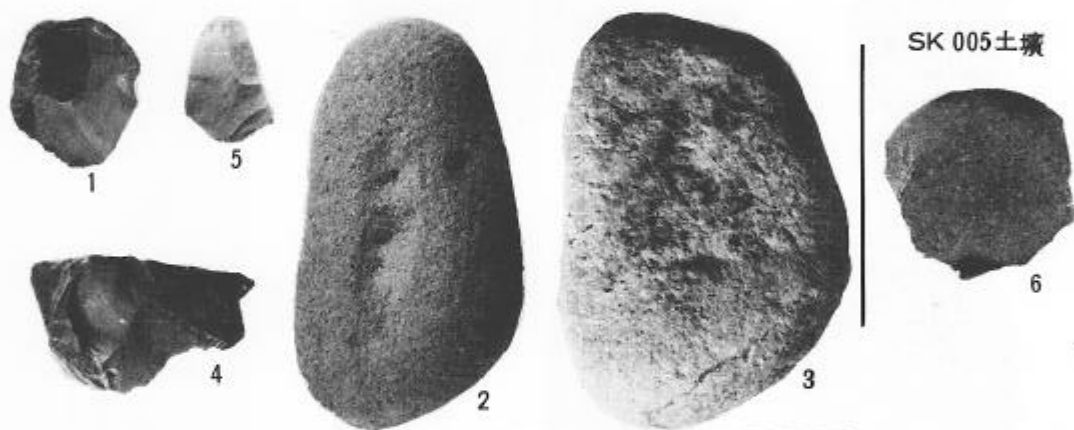
図版38 遺構外出土土器(3)



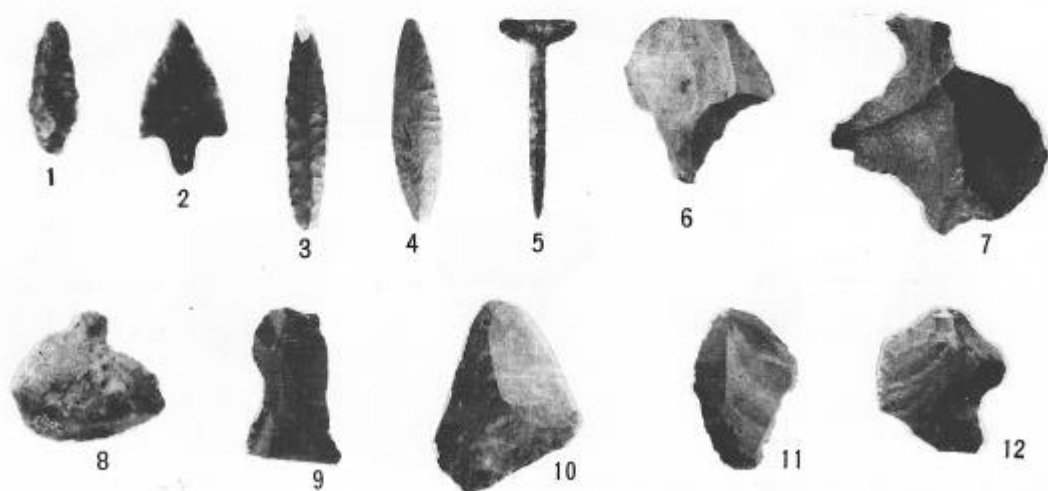
SI 001住居跡



SK 004土壙

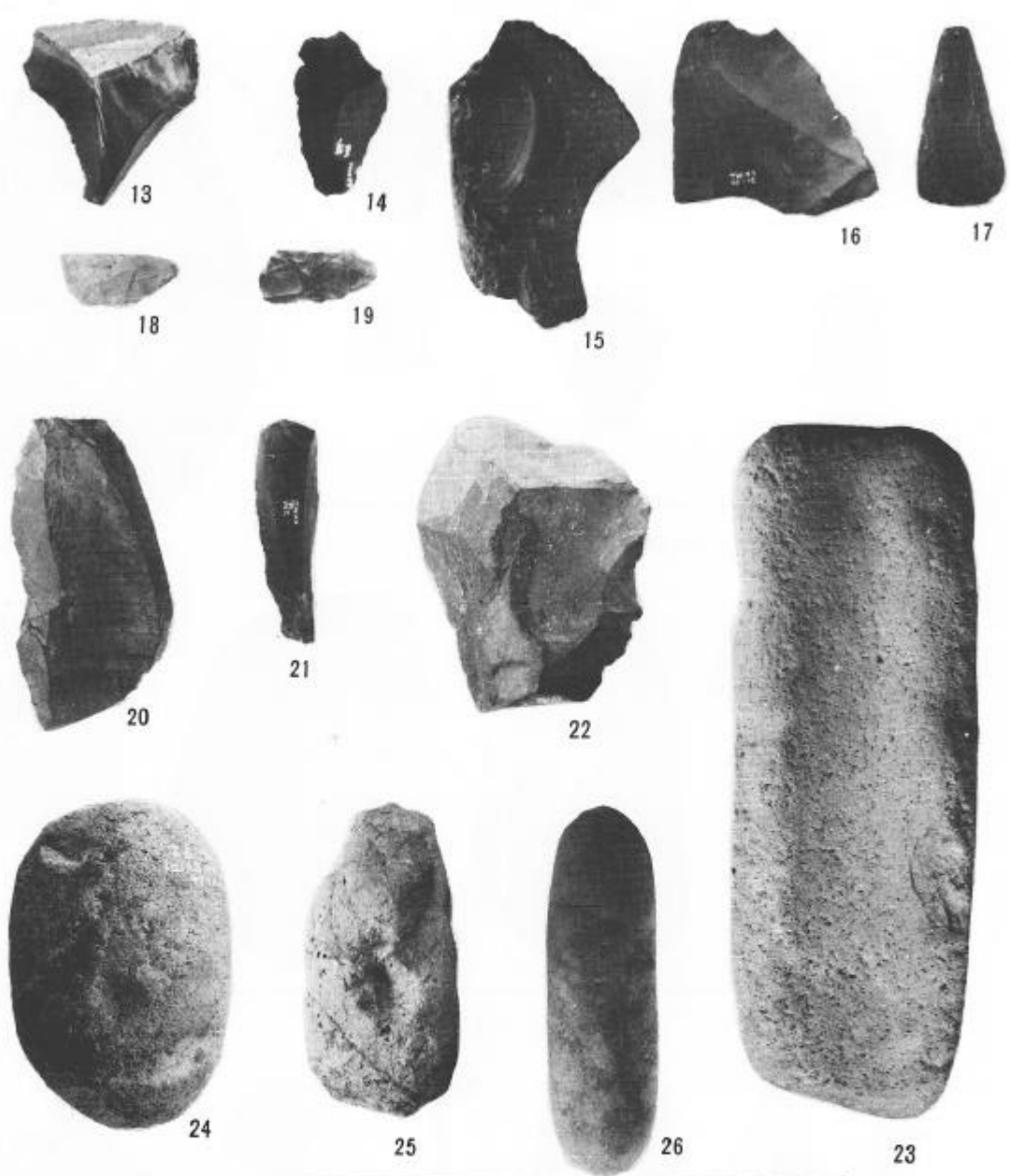


SX(R) 001捨場



図版39 SI 001住居跡・SK 004、5土壙・SX(R) 001捨場出土石器

居熊井遺跡

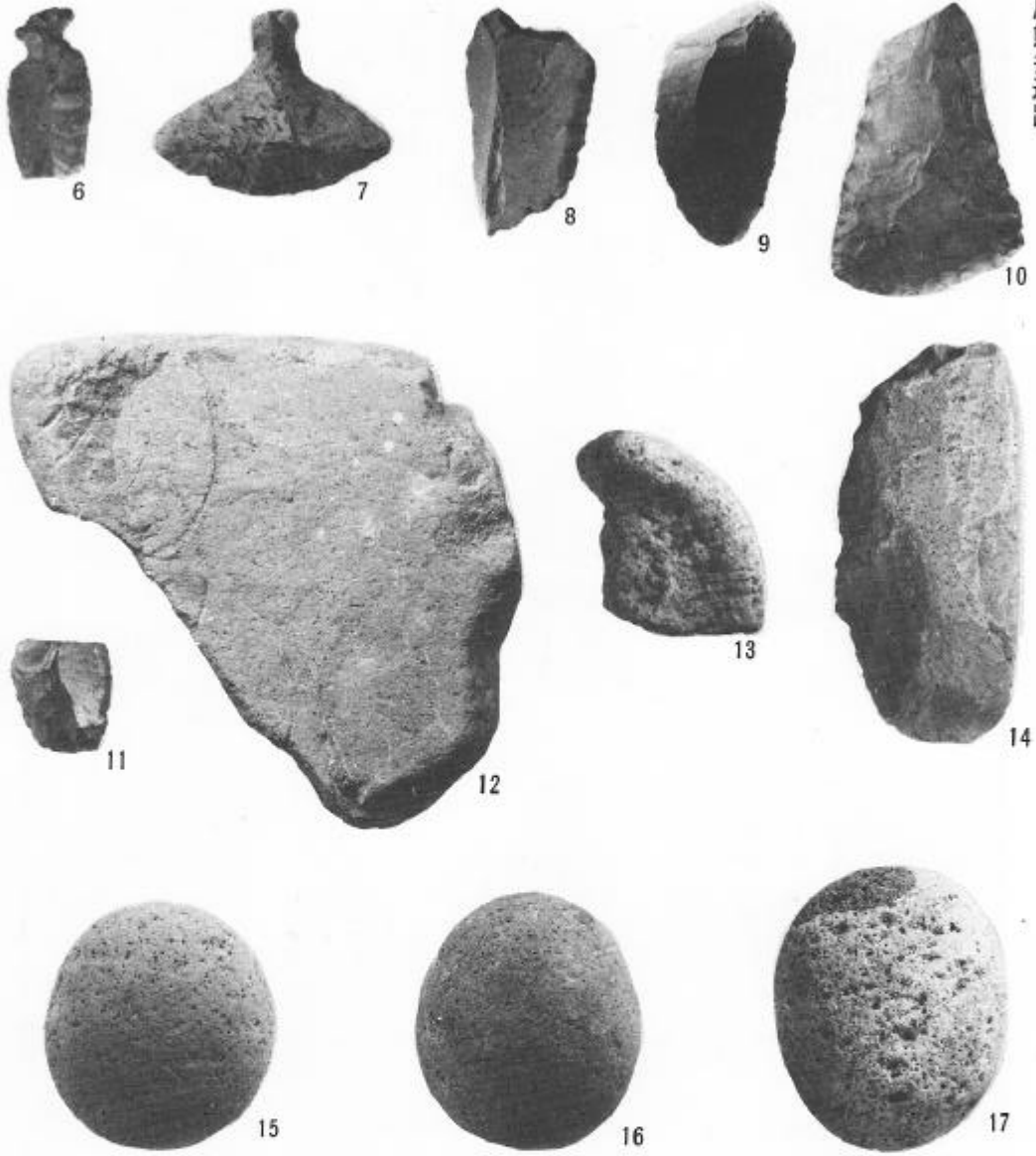


遺構外



図版40 SX(R) 001捨場・遺構外出土石器

居熊井遺跡



圖版41 遺構外出土石器



図版42 湯瀬館遺跡全景



図版43 館口全景 (上) 調査前 (下) 調査終了時

湯瀨館遺跡



図版44 館口全景



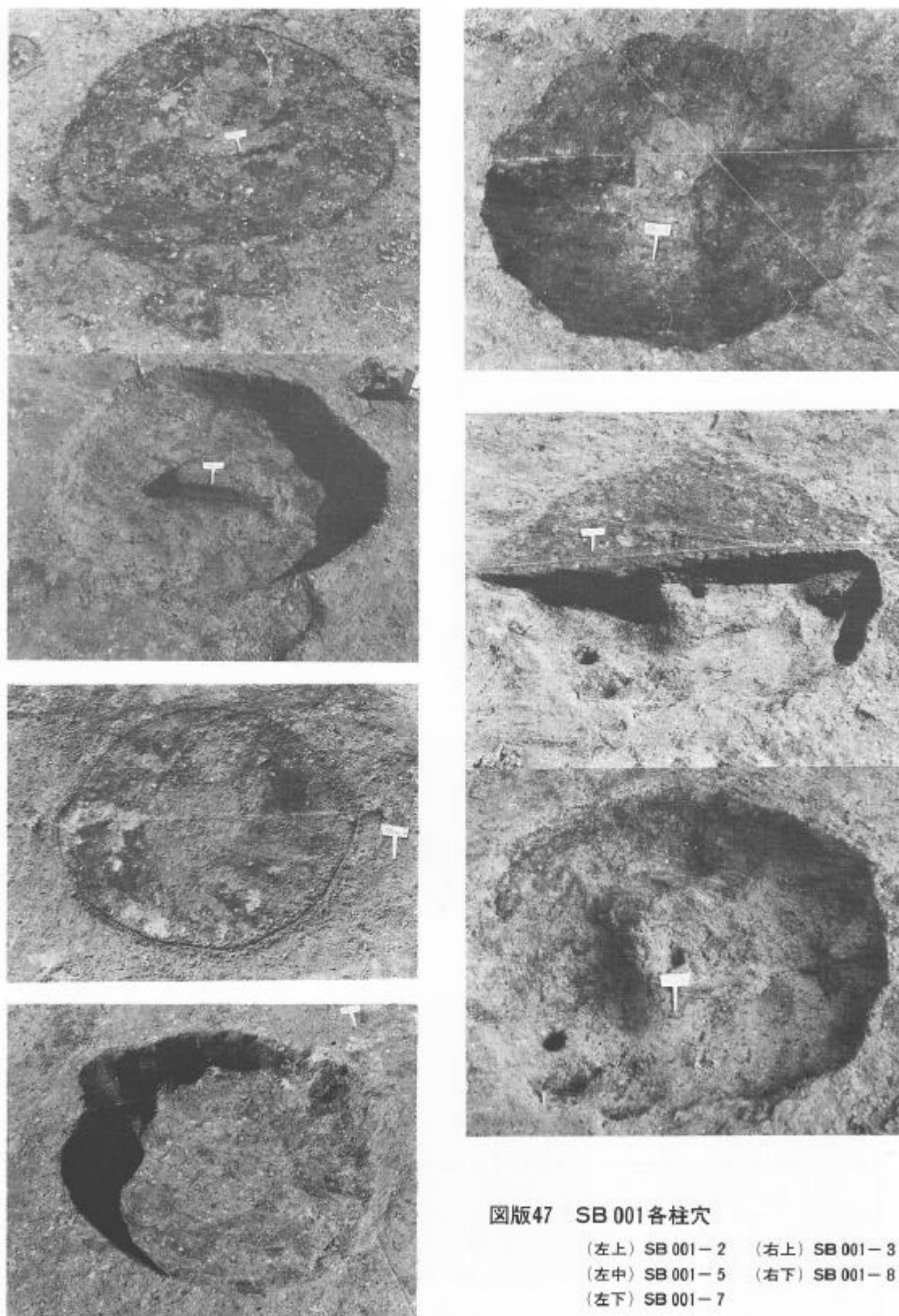


図版45 館口調査風景



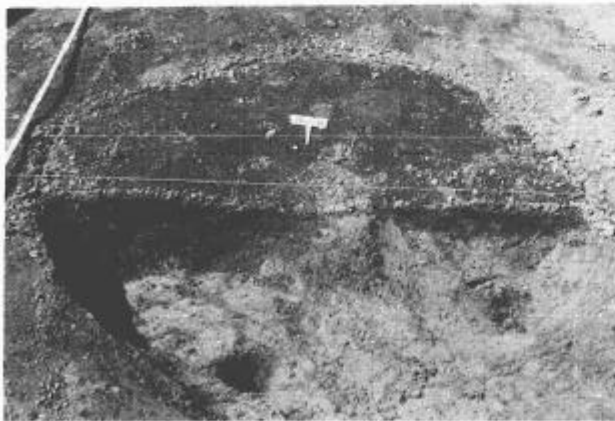
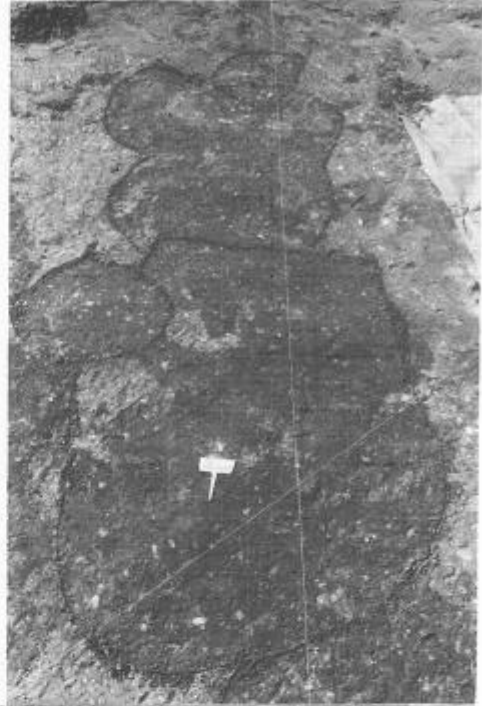
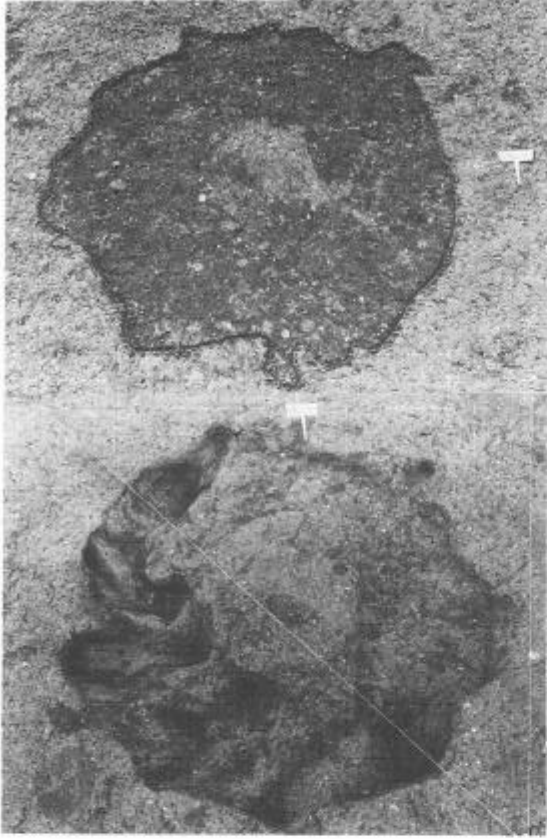
図版64 (上) 堂の上遺跡全景 (下) 浮石層



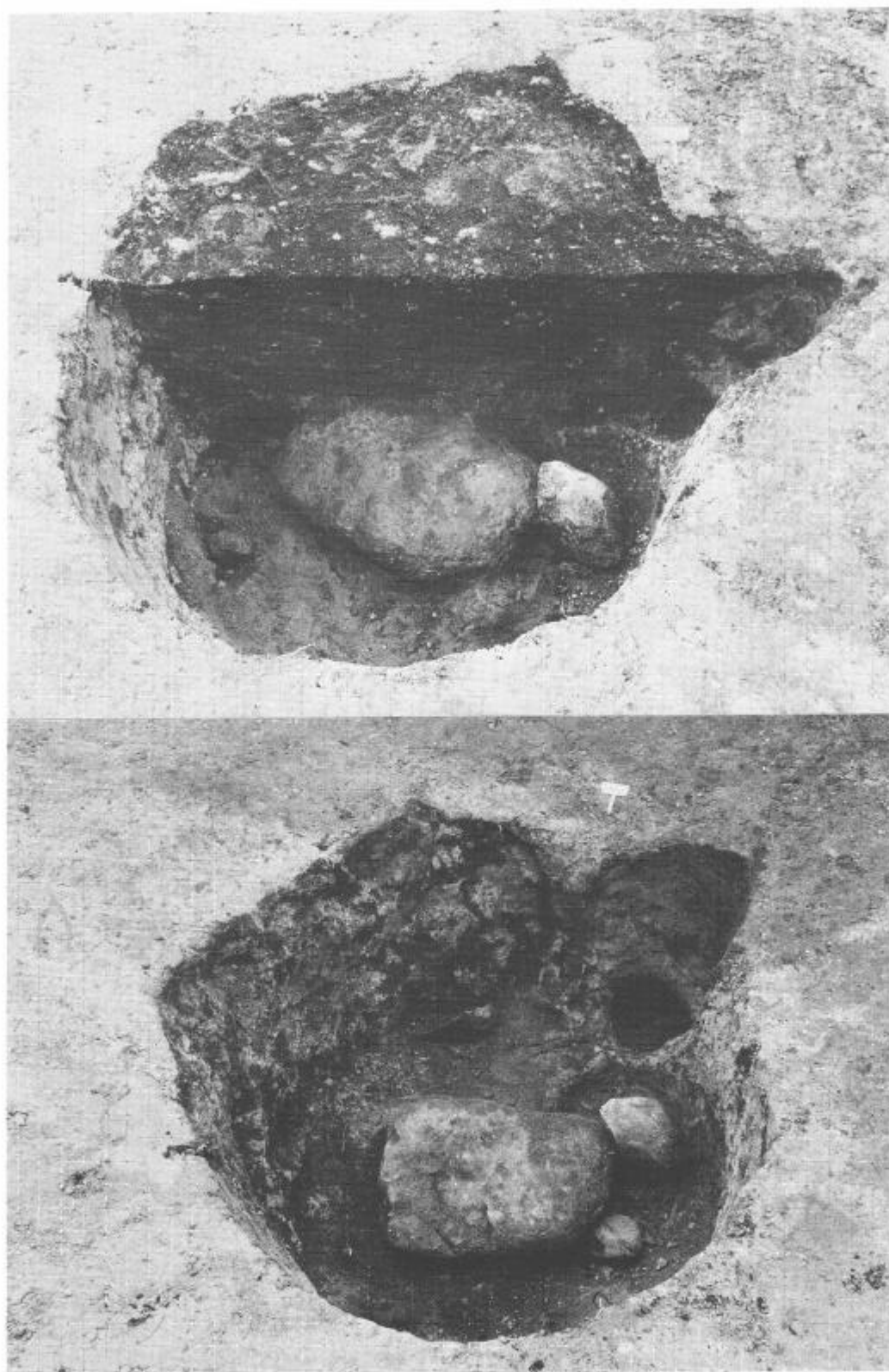


図版47 SB 001各柱穴

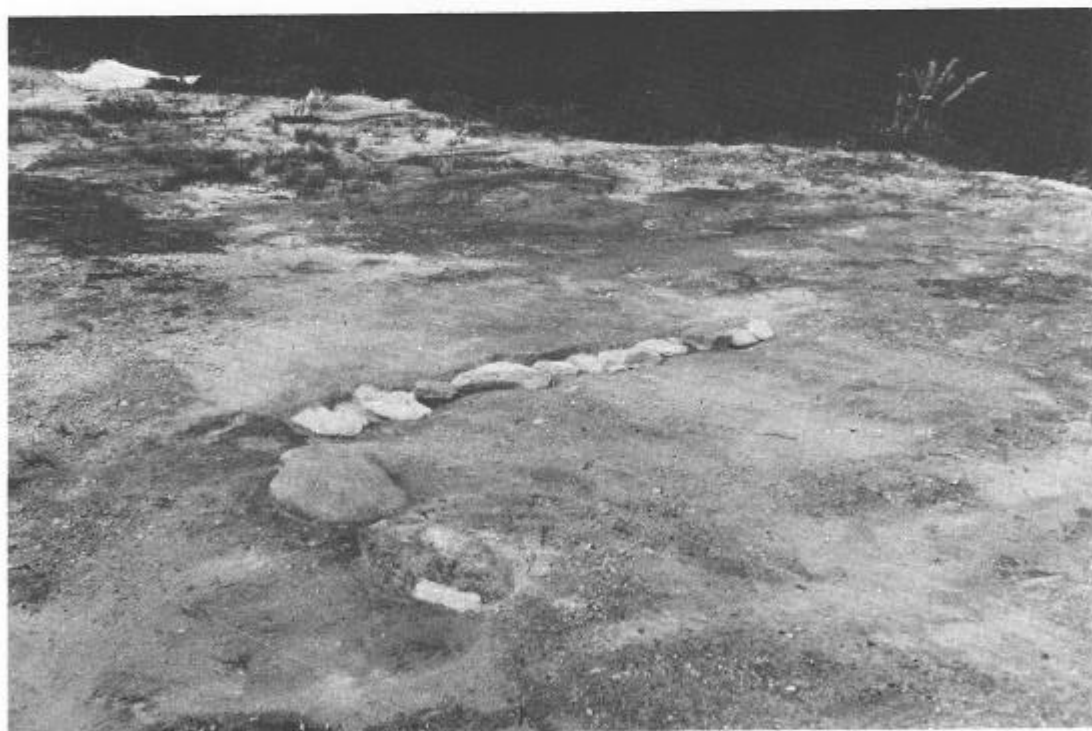
- (左上) SB 001-2 (右上) SB 001-3  
(左中) SB 001-5 (右下) SB 001-8  
(左下) SB 001-7



図版48 SB 001各柱穴  
(左上) SB 001-9  
(左下) SB 001-12  
(右) SB 001-10

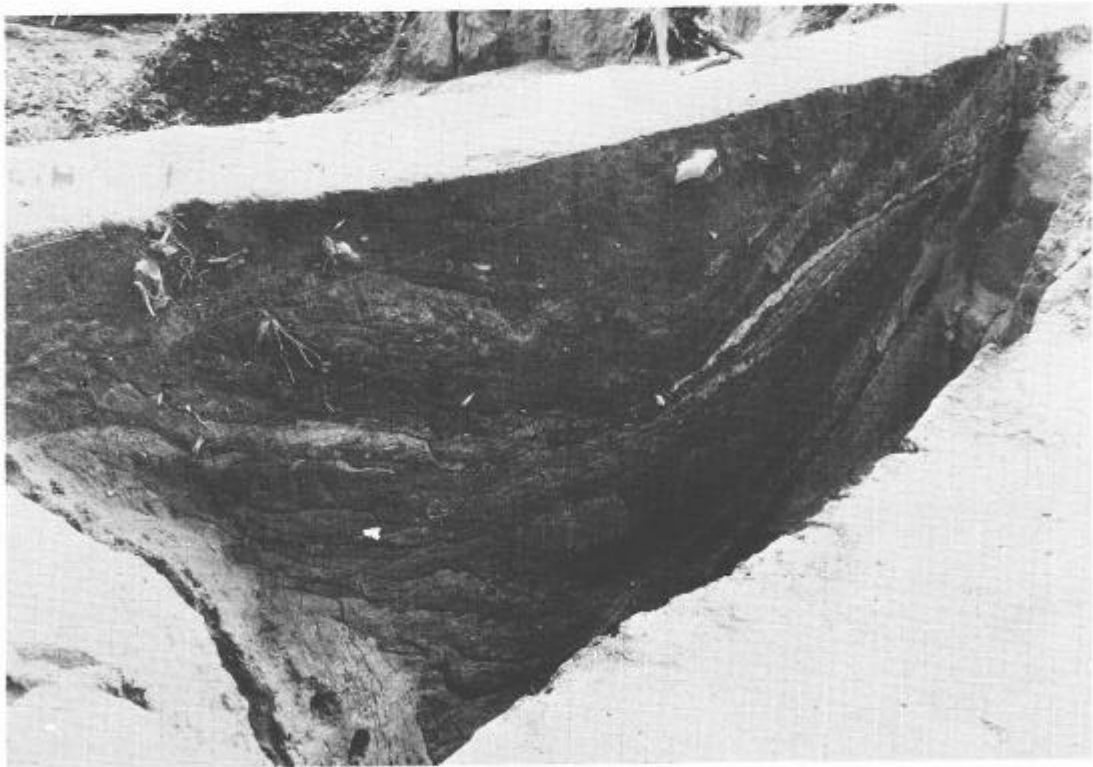
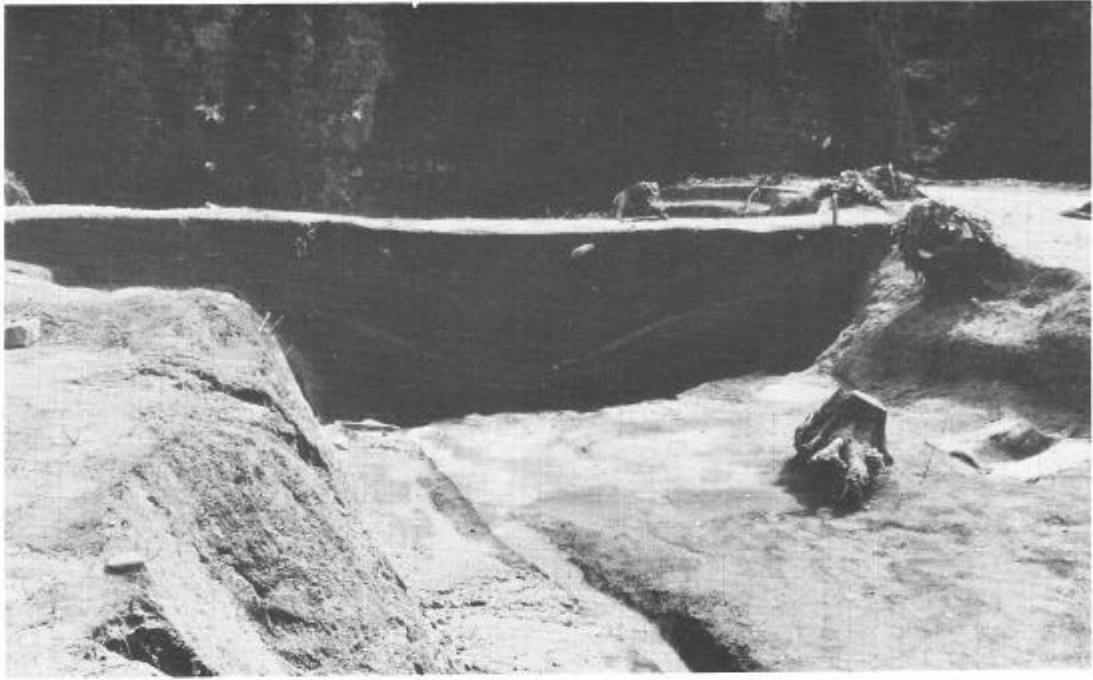


図版49 上面空堀内 SK(P)081

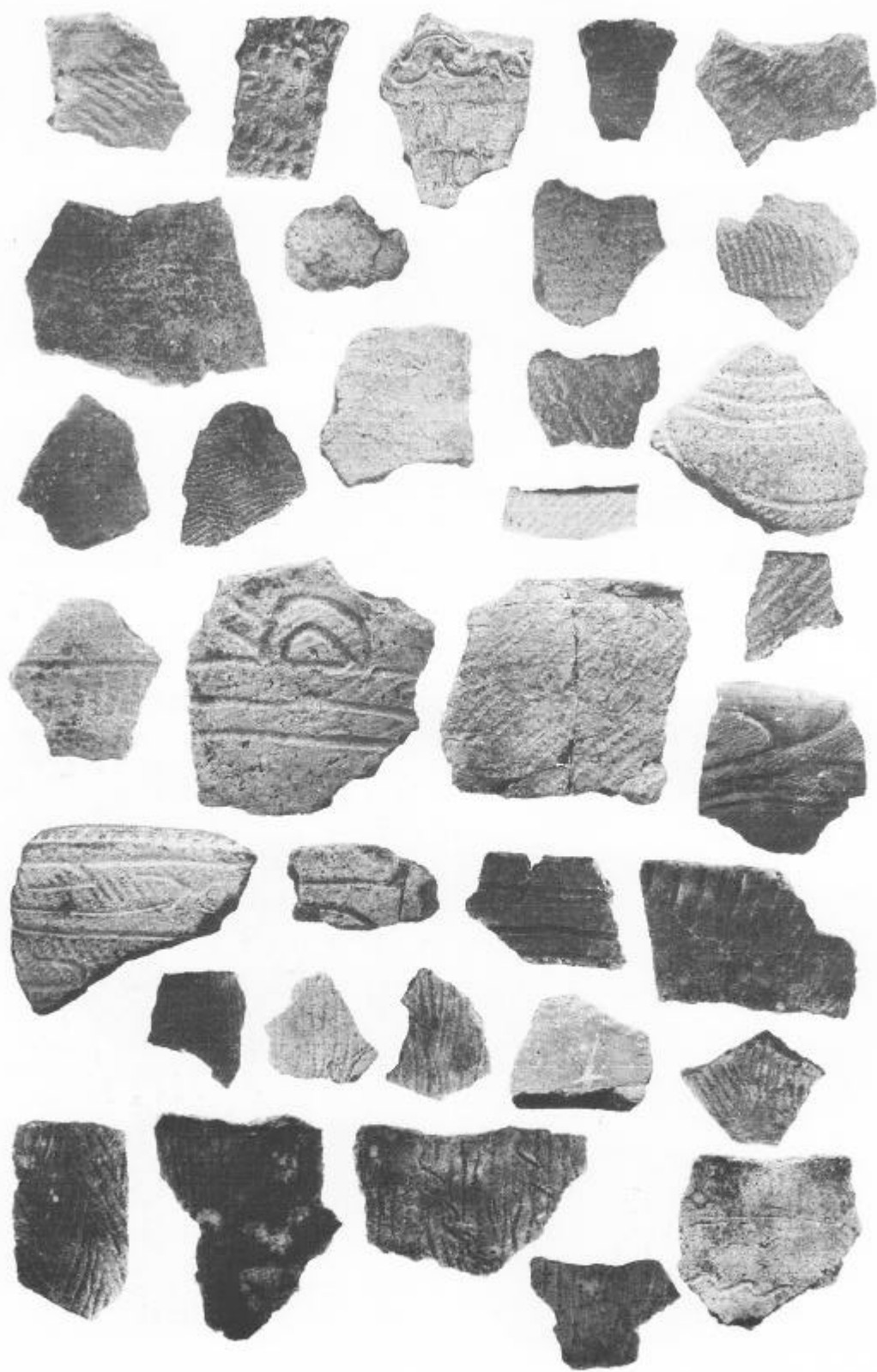


図版50 礎石配列建物跡

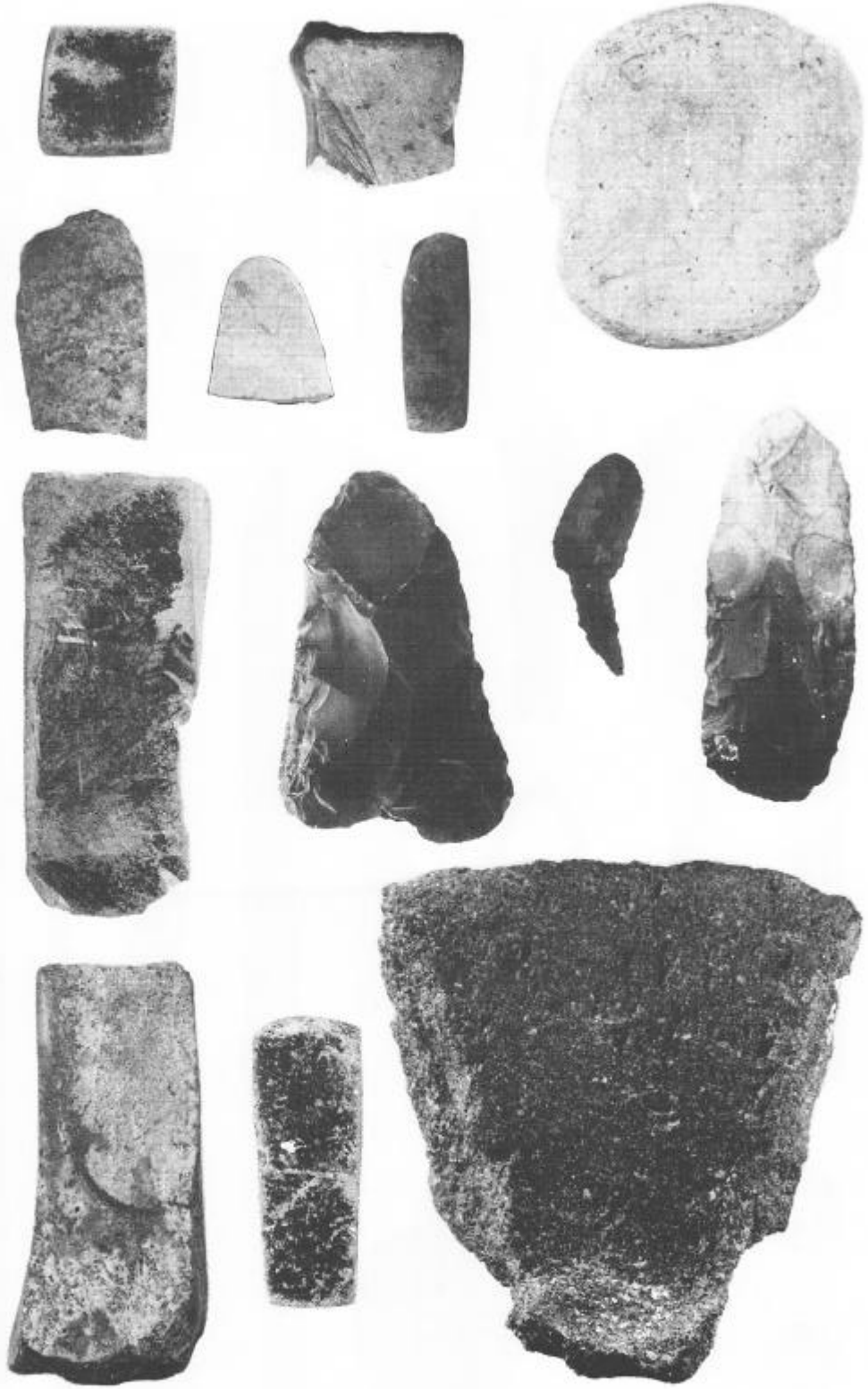




図版51 上面空掘土層堆積状態



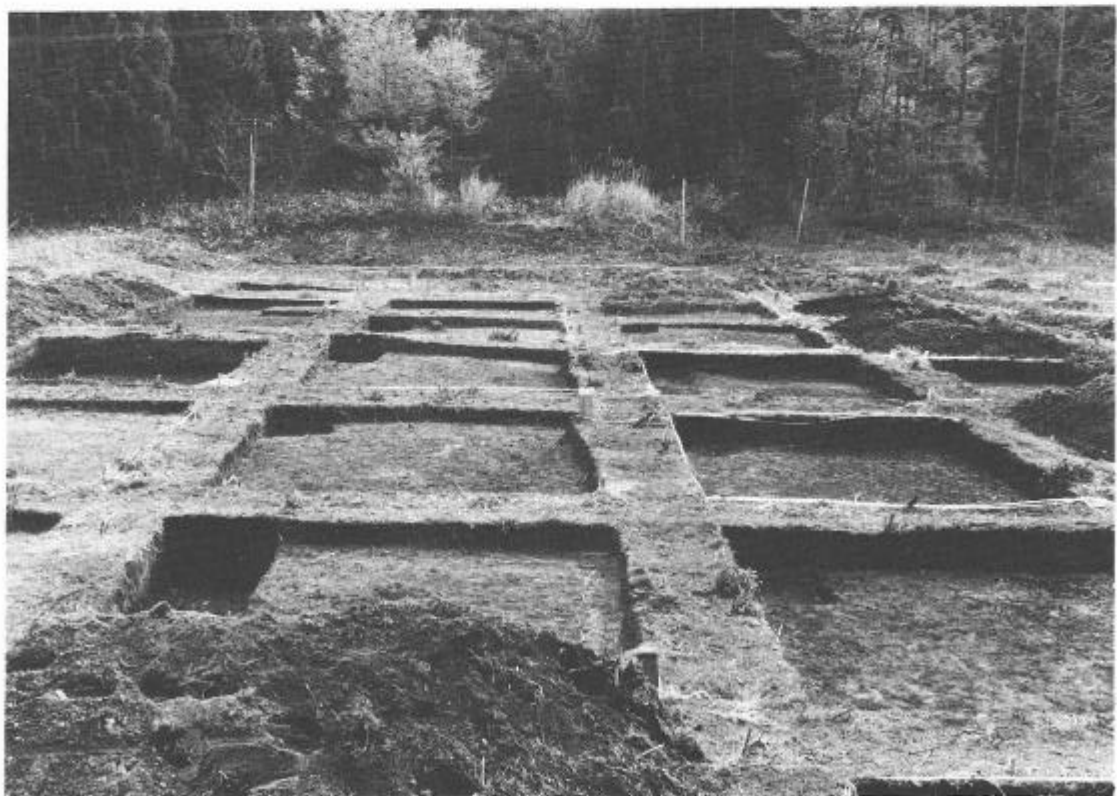
図版52 土 器



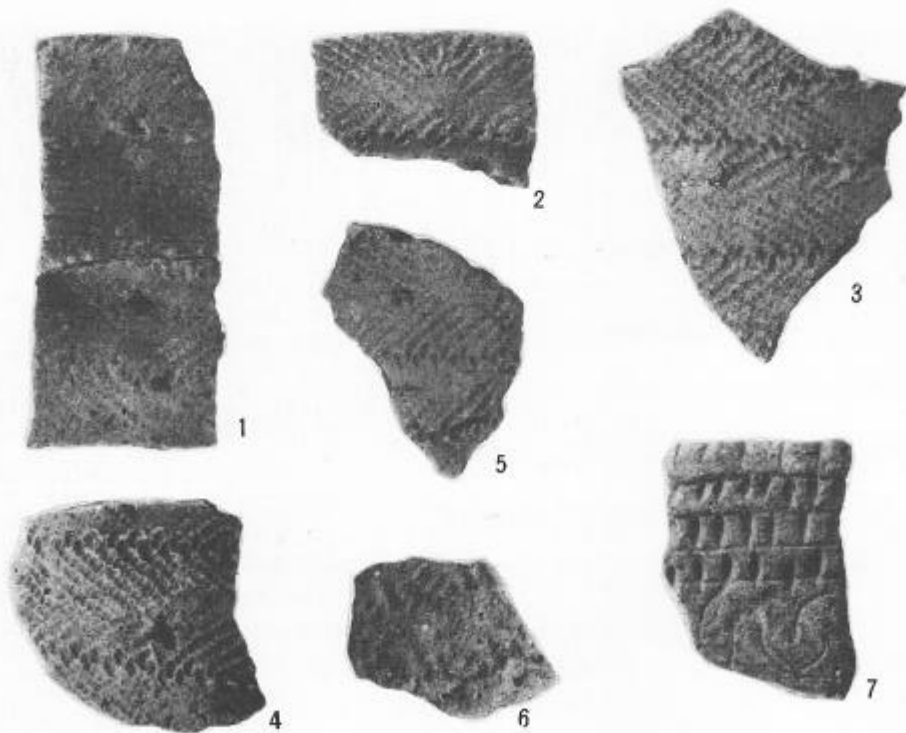
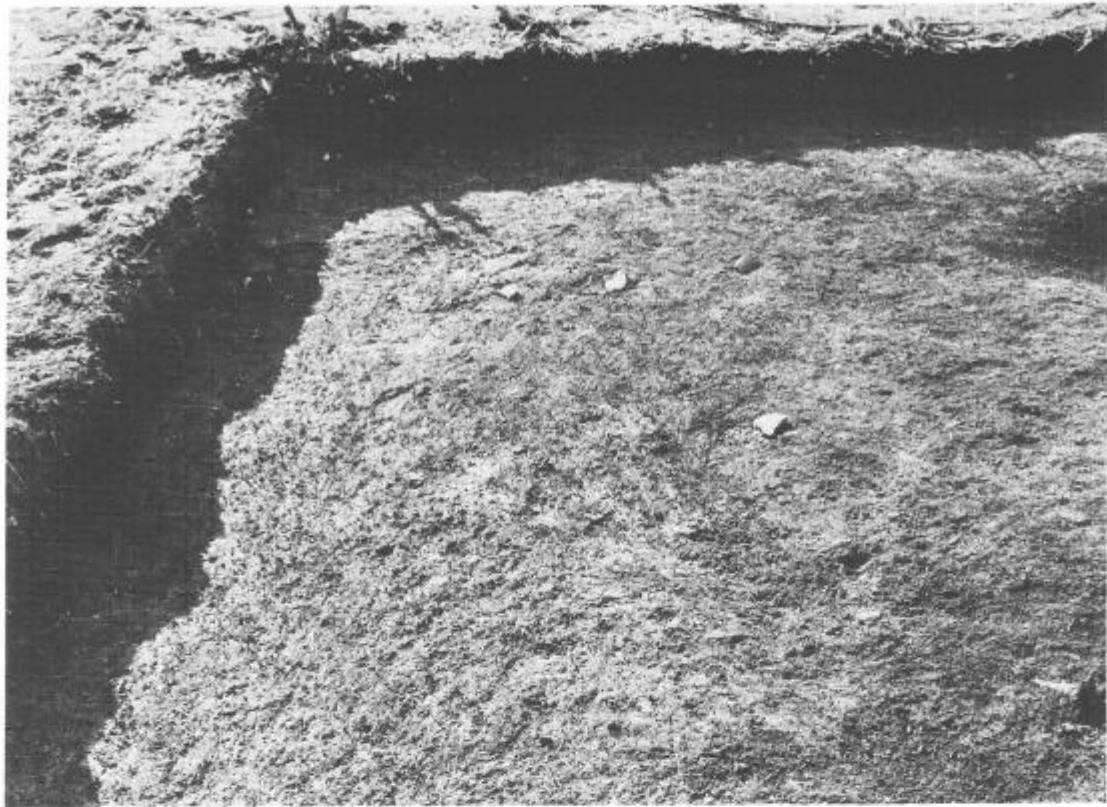
図版53 石製品



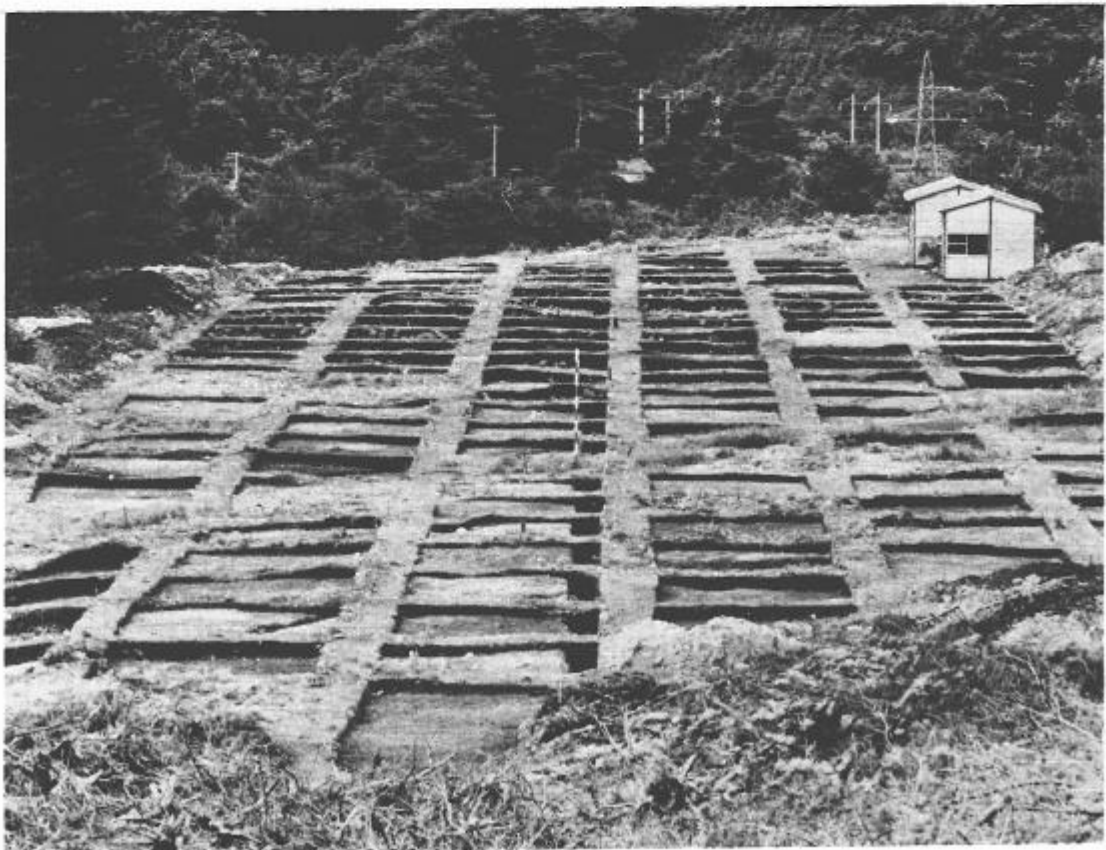




図版55 (上) 上山田遺跡遠景(西▶東) (下) 遺跡発掘状況(北▶南)



図版56 (上) 遺物出土状態(北▶南) (下) 土器

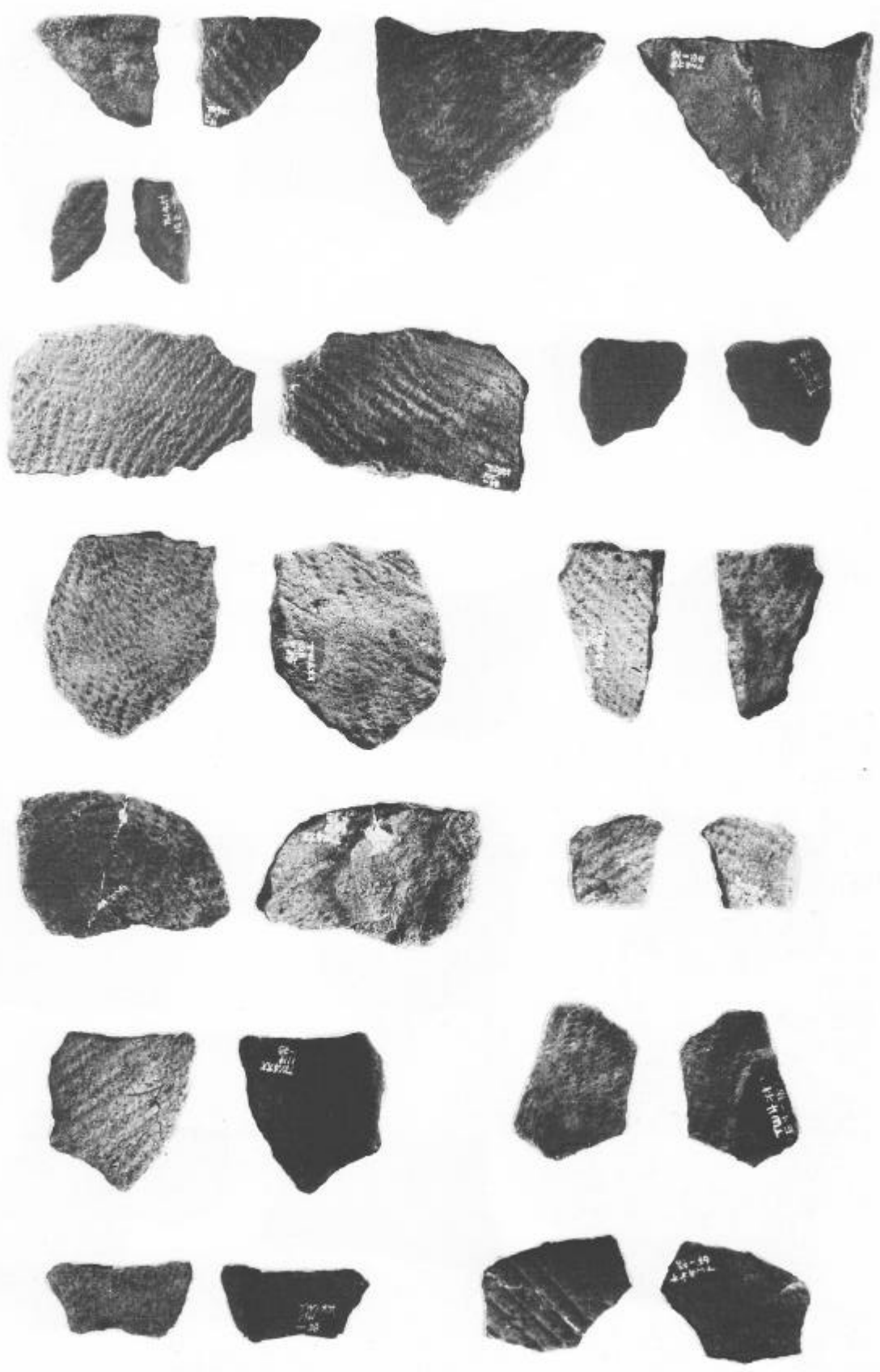


図版57 (上) 大地平遺跡遠景(南▶北) (下) 平坦面調査状況



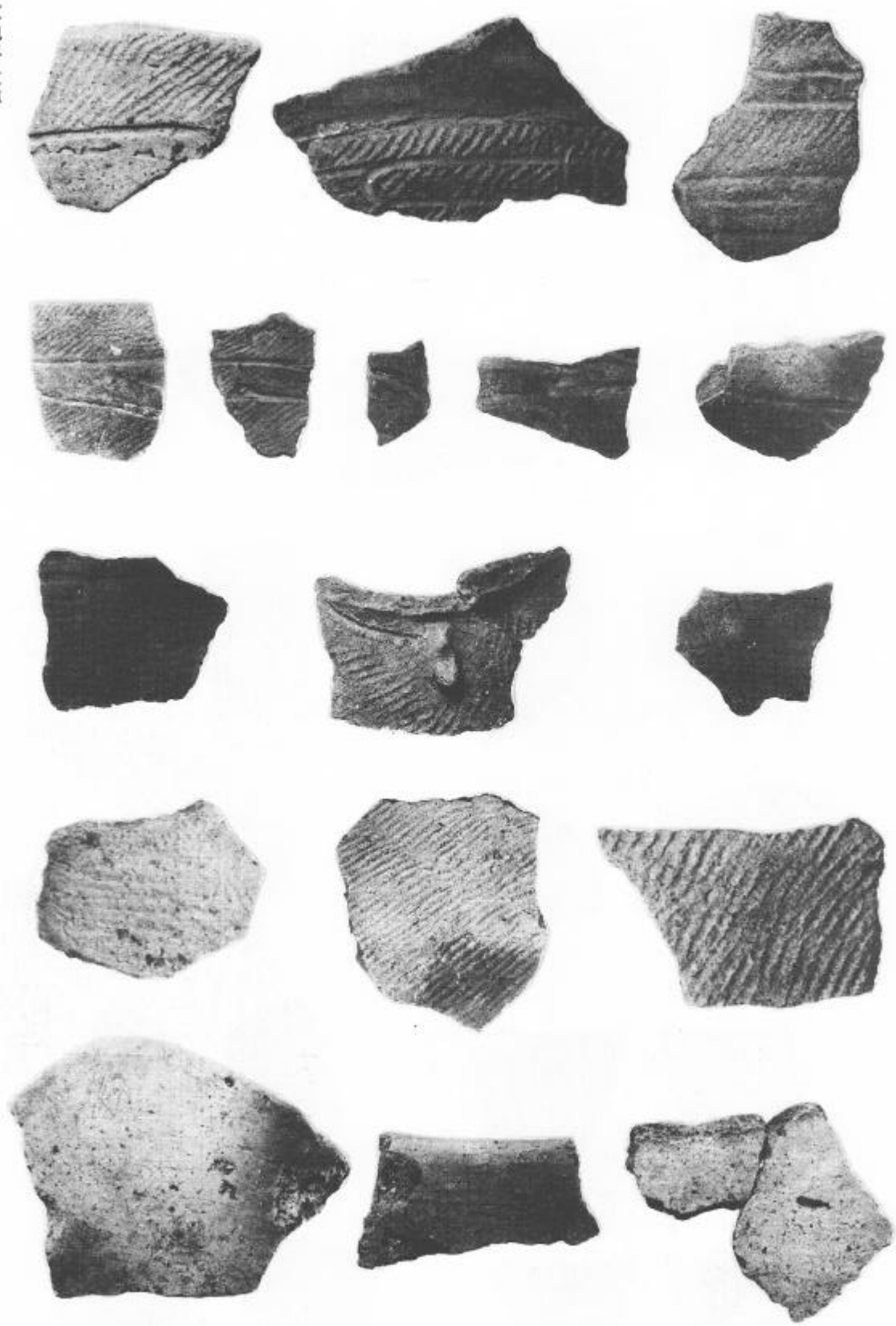
図版58 (上) 斜面調査状況 (下) 遺物出土状態



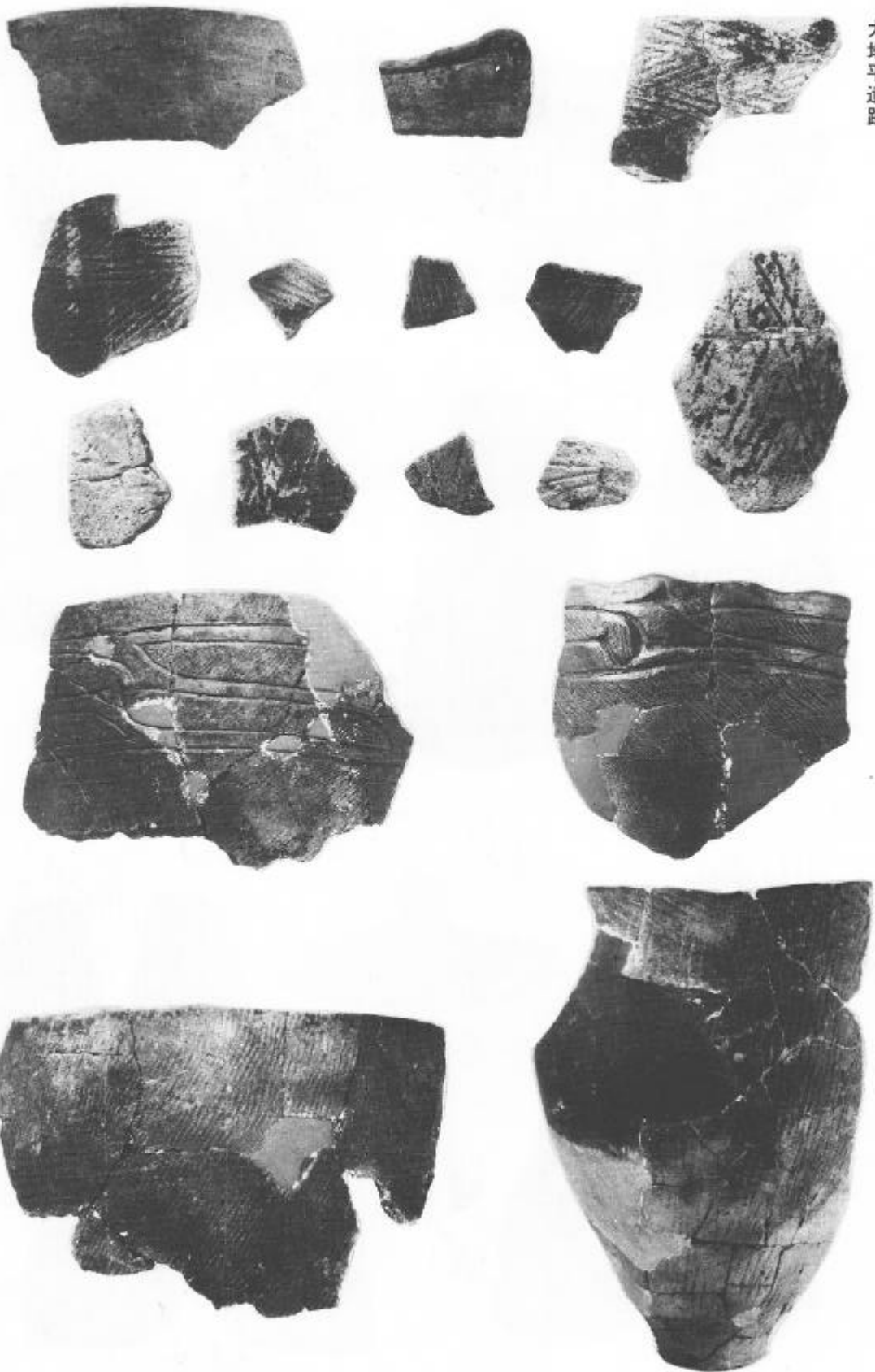


図版59 土器 (1)

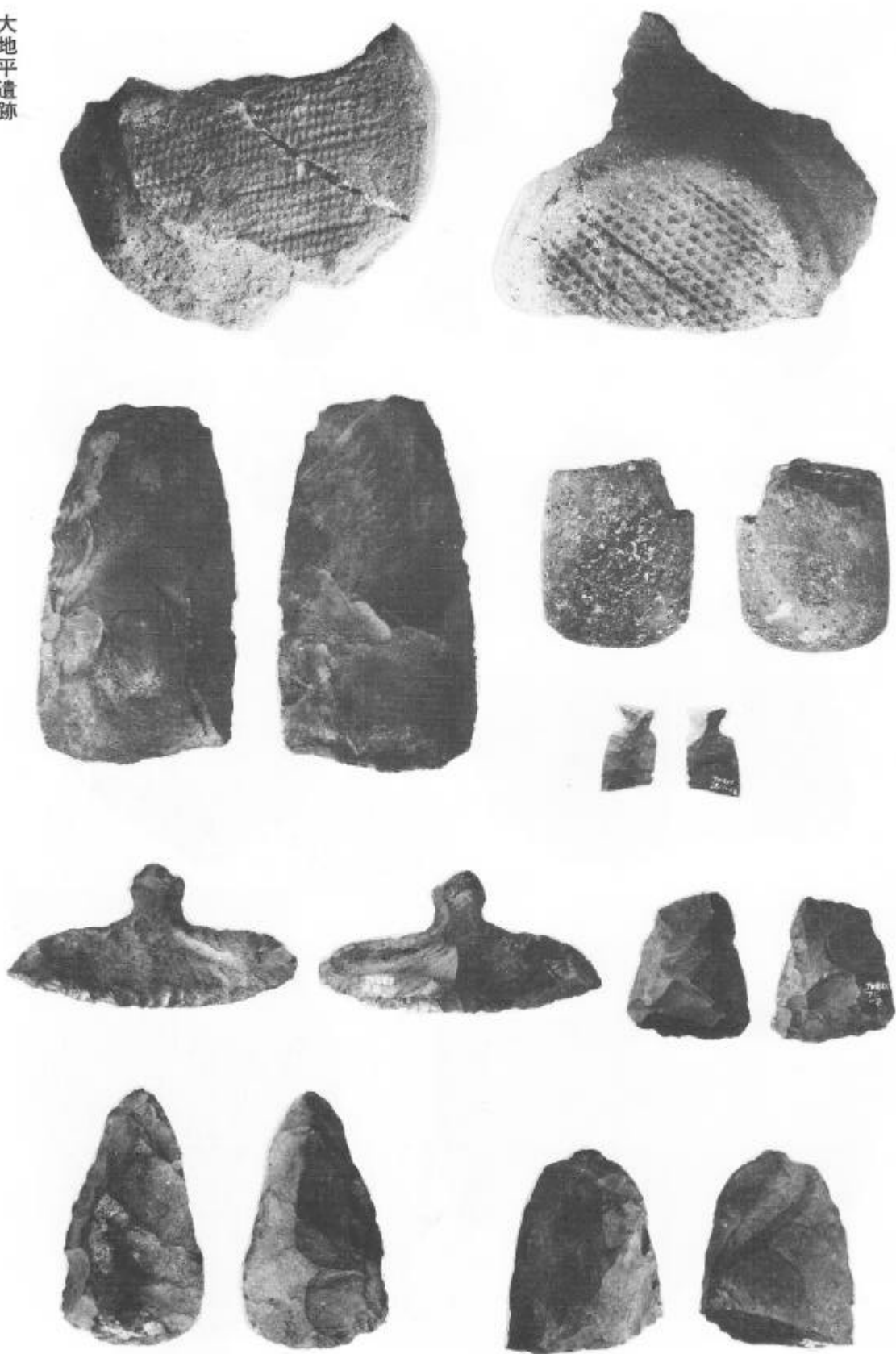
大地平遺跡



図版60 土器 (2)

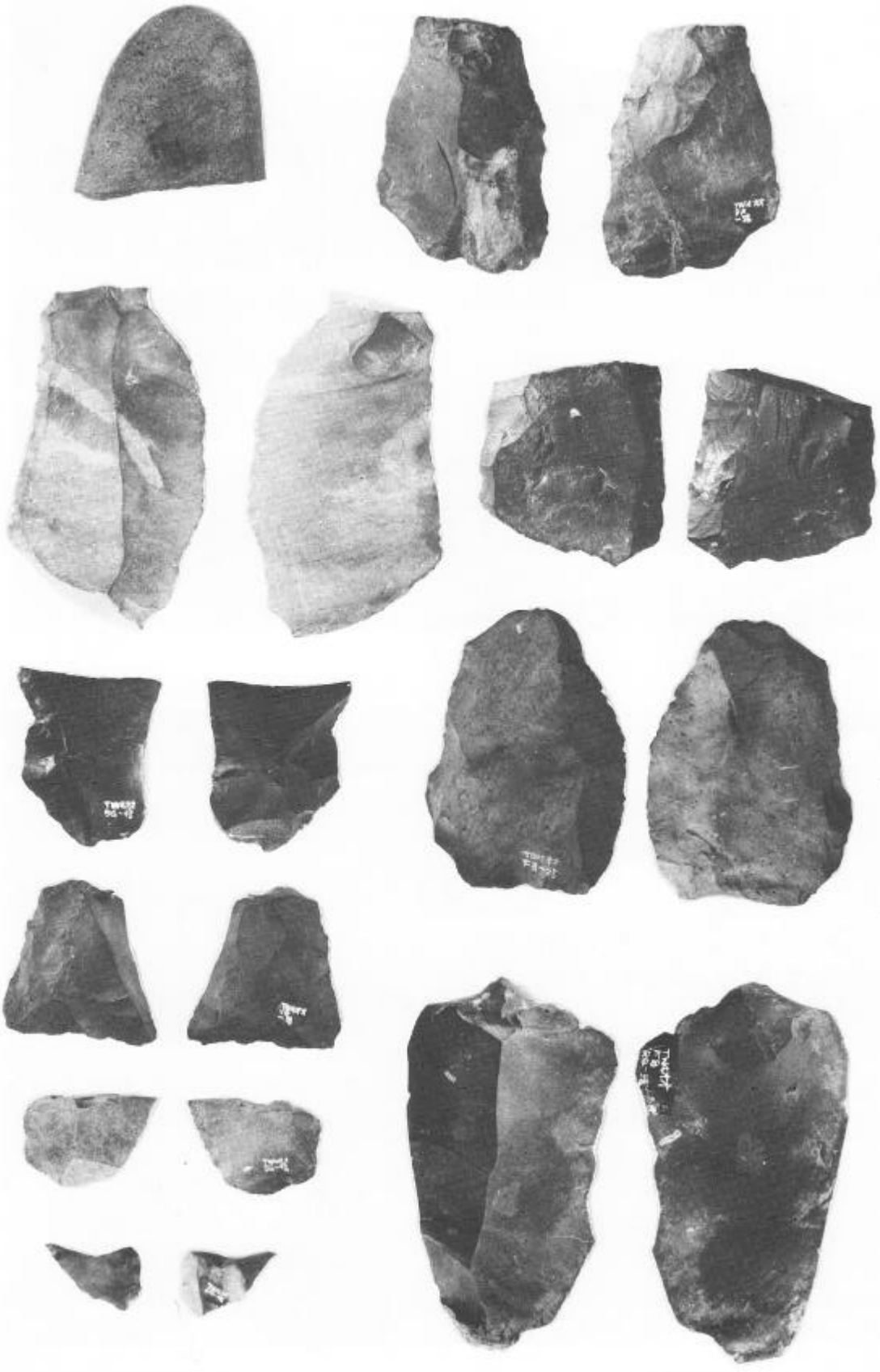


圖版61 土 器 (3)

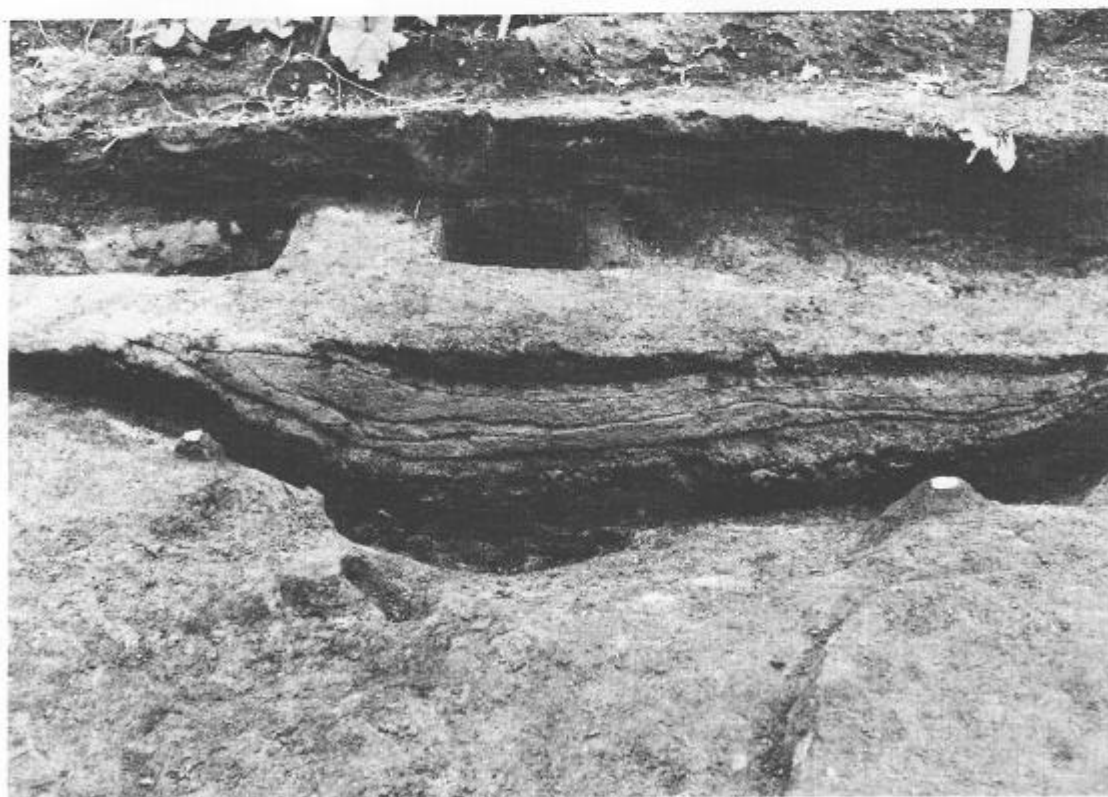
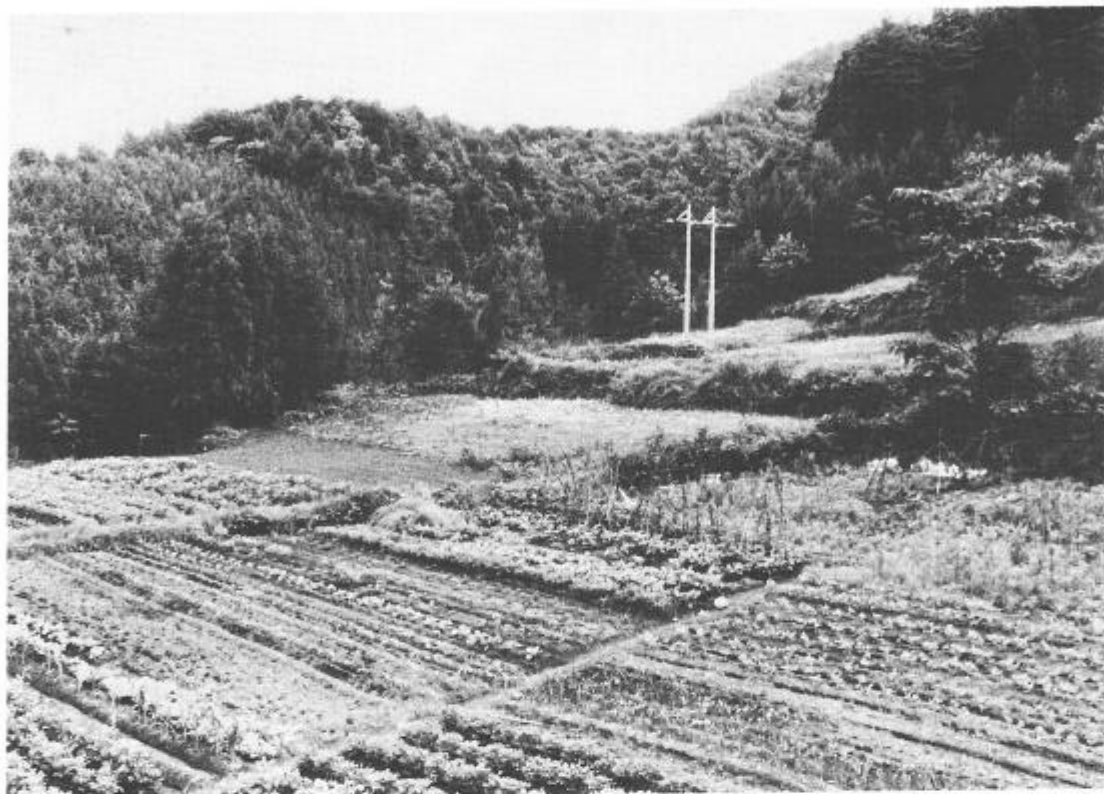


圖版62 土器(4)・石器(1)

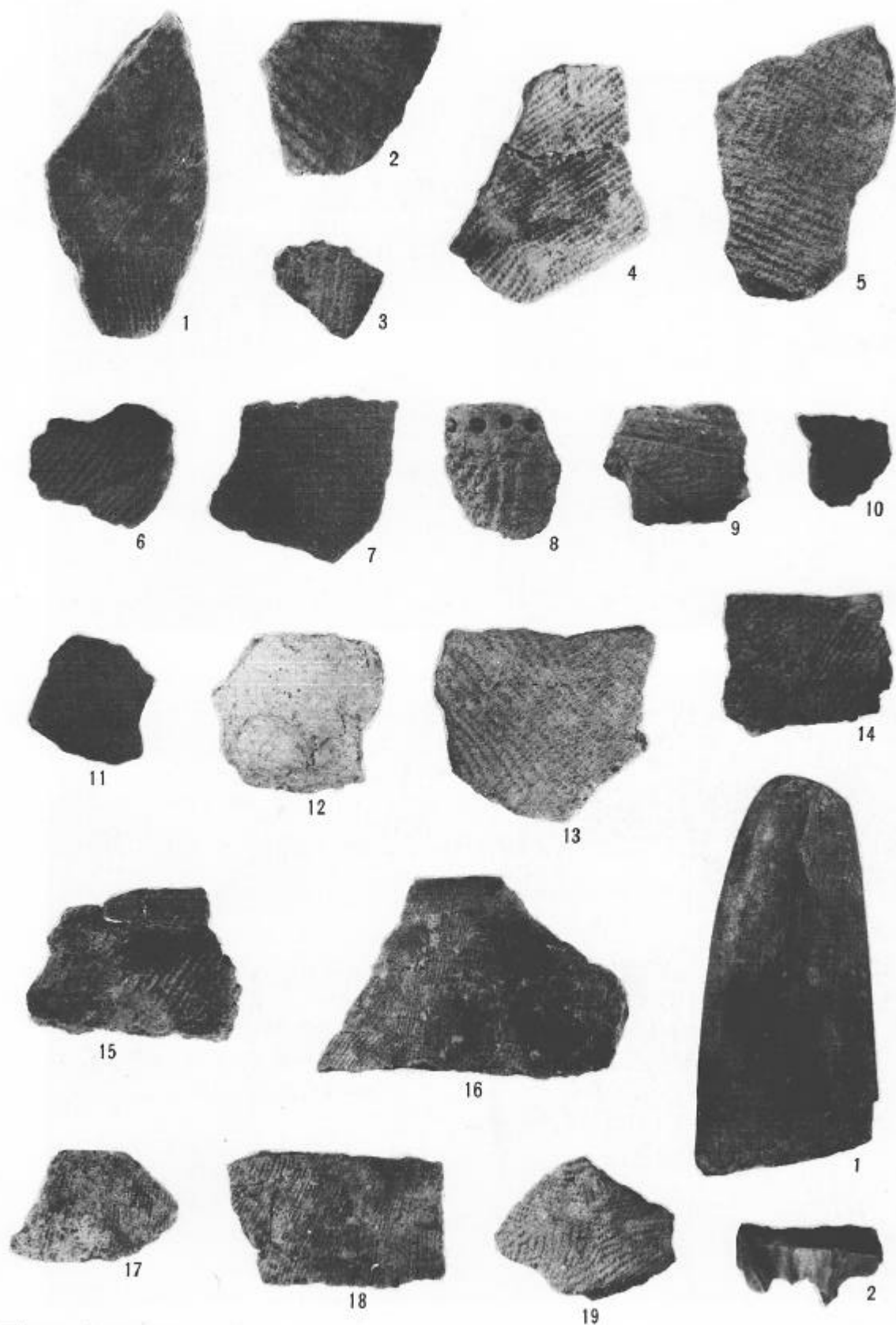




圖版63 石 器 (2)



図版64 (上) 堂の上遺跡全景  
(下) 浮石層



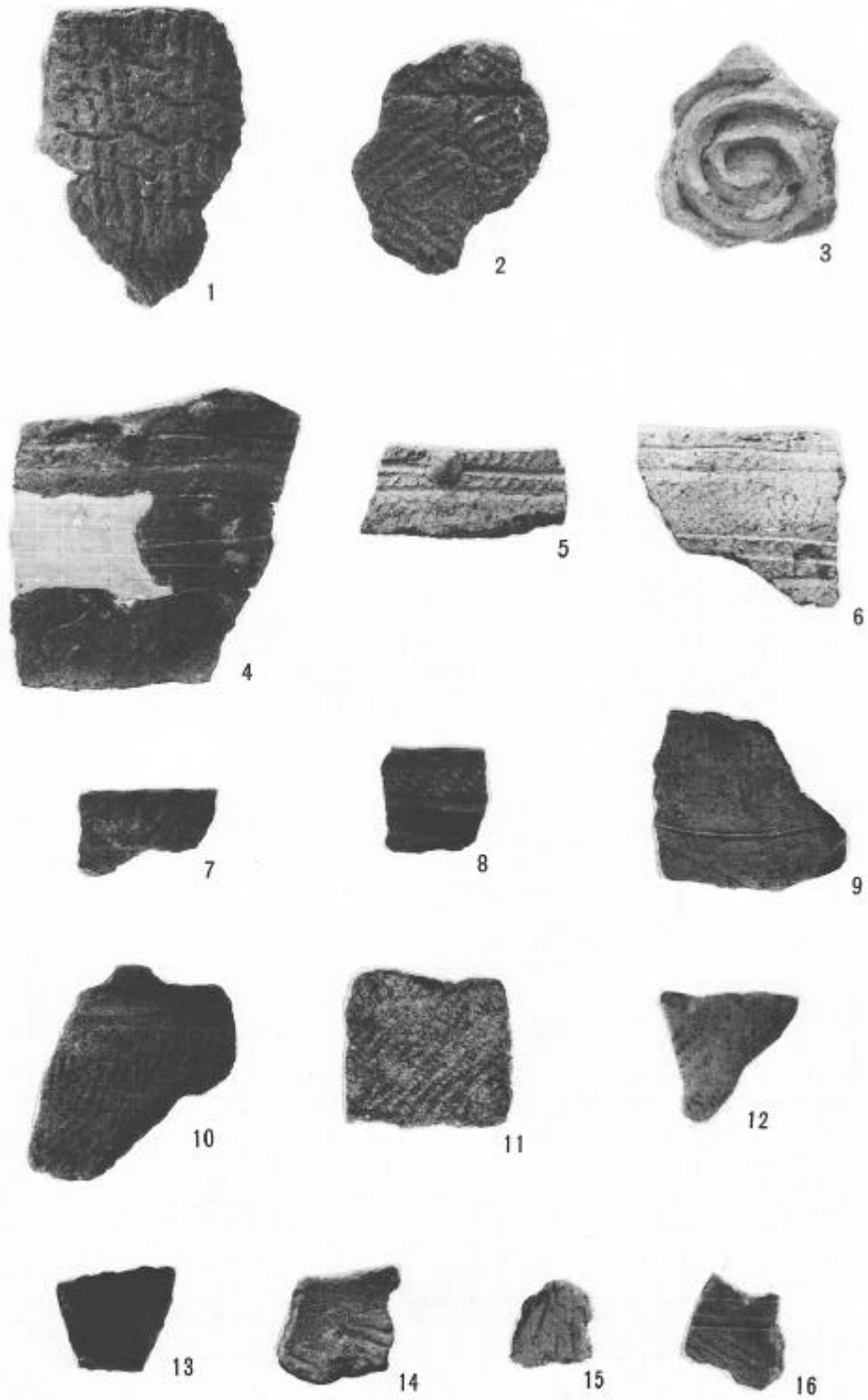
図版65 土器・石器



上葛岡川遺跡



図版66 上葛岡川遺跡全景 (上) 調査前 (下) 調査終了時



圖版67 土 器







